玉句年鑑

2008 RENKU NENKAN

[redacted] 連句協会 [redacted]

連句年鑑

平成二十年版

連句年鑑（平成二十年版）目次

「第二十七回連句協会総会・全国大会の記」……8

「第二十二回国民文化祭　とくしま二〇〇七文芸祭連句大会を顧みて」……9

評論エッセイ

文考の付合理論に学ぶ――「執中（しっちゅう）の法」と「空撓（そらだめ）」を中心に……永田英理……13

蕪村連句のおもしろさ……小池正博……24

連句パフォーマンス（序）……近藤蕉肝……33

回顧

平成十九年の連句界……宮下太郎……41

〈カット・丹下尤子〉

〈表紙題字・今泉宇涯〉

作品

ああノ会
「氷山の崩壊」……47
会津の会
「今朝の冬」……48
青葉連句会
「囀　り」……49
茜連句会
「番　外　地」……50
「明治おんな」……51
あした日比谷連句会
「新　緑　に」……52
「啓　蟄　や」……53
あした連句会
「水　陽　炎」……54
「鬼やんま」……55
「どんど火の」……56
「神輿もむ」……57
「捨　子　花」……58
「嶺澄みぬ」……59
「踏み入るや」……60
天の川連句会
「去年今年」……61
「煮　魚　の」……62
伊賀連句会
「電飾の街」……63
「筏　の　音」……64
石手寺連句会
「名　刹　の」……65
一粋会
「霜　月　や」……66
市川俳諧教室
「納　め　雛」……67
「辛夷の実」……68
「凌霄花」……69
「黄砂降る」……70
伊豆芭蕉堂連句会
「走らす艀」……71
「初凪や」……72
いなみ連句の会
「春雷や」……73
「鳶　と　る」……74
WEBめぎつね座
「たのしい三句たち」……75
NHK文化センター青山
「初時雨」……77
「冬落暉」……78
桜花学園大学連句研究会
「秋桜祭」……79
丘の上連句会
「夏も瓢」……80
「爽やか」……81
桶川連句会
「虫の劇場」……82
「新治かけて」……83
おたくさの会
「考へる葦」……84
おぼろ連句会
「天守閣」……85
海市の会
「就養百周年」……86
解纜
「旧時花」……87
蛙の会
「清水の」……88
「微笑みと」……89
梶の葉連句会
「種井戸や」……90
桂の会
「春の雨」……91
「春　泥」……92
河童連句会
「連句のレシピ」……93
かびれ
「嬰歌の泉」……95
「丸太小屋」……96
「山笑ふ」……97
「夏座敷」……98
歌林連句会
「ひとむかし」……99
神田義仲寺連句会
「寒牡丹」……100
きさらぎ連句会
「才　蔵」……101
其角座
「初日の出」……102
くさくき
「鶴来る（その一）」……103
「鶴来る（その二）」……104
「鶴来る（その三）」……105
「江戸の夜」……106
「大　館」……107
「歳時記」……108
「寂かなる連句に」……109
「汐の香」……110
「寒の雨」……111
くさくき川口支部
「山茶花は」……112
くさくき北九州支部
「心の張り」……113
「蕎麦掻きや」……114
「望郷譜」……115
「曼珠沙華」……116
くさくき堺
「飯蛸に」……117
「春立ちて」……118
「鎮もれる」……119
くすのき連句会
「夜神楽」……120
栗の木連句会
「青空へ」……121

「わが胸へ」……122
興聖寺連句会
「町に貌」……123
ころも連句会
「鷹渡る」……124
「月の宴」……125
「作業着のランチ」……126
柴庵
「川柳」……127
「鍋祭」……128
「夏暖簾」……129
栄連句サロン
「エンデバー」……130
さくら草連句会
「春耕や」……131
「姫辛夷」……132
「朝寝がち」……133
佐久良連句会
「蒲の穂」……134
「白梅」……135
さつき会
「狛犬」……136
三尺童
「オルガンの雲」……137
「梅雨の雷」……138
慈眼舎連句会
「石蕗は黄に」……139
獅子門
「はるのゆき」……140
「初蟬」……141
獅子門蕉杖社
「しぐるゝや」……142
「不破の関」……143
獅子門麗水社
「置火燵」……144
「寒鯉」……145
下町連句会
「鼎談熱き」……146
四宮会
「冬うらら」……147
「青鷺と」……148
「月の海」……149
紫薇の会
「冬ざれ」……150
樹氷連句会
「笛太鼓」……151
湘南吟社
「山茶花」……152
「俳諧之連歌」……153
「抱虚庵九世百韻」……154
脇起海内付合
白河連句会
「歌声空に」……157
泗落連句会
「師の筆あと」……158
深大寺連句会
「楽隊は」……159
「牧水のごと」……160
「啄木鳥来る」……161
粋酔連句会
「春待つ庭」……162
成城連句会
「雀の子」……163
清流連句会
「秋日傘」……164
せんだい座
「敗戦忌」……165
「新米」……166
草門会
「夏至の空耳」……167
啐啄会
「炬燵」……168
「臘梅を」……169
大智院連句会
「安曇野や」……170
多摩連句会
「聖母像」……171
遅刻坂連句会
「あらぶるや」……172
「地に返す」……173
「胡差のバラード」……174
中央連句会
「寒梅」……175
「薬研堀」……176
「流氷の」……177
千代の会
「こころの眼」……178
「浮かるるや」……179
土筆・有楽帖三吟会
「かの折に」……180
筑波連句会
「喜寿の薔薇」……181
「赤い羽根」……182
「雑炊」……183
つばさ連句会
「神隠し」……184
津幡連句クラブ
「早蕨」……186
「能登上布」……187
「夏来る讃歌」……188
「一徹に」……189
つらつら吟社
「御裳濯川」……190
天神連句会
「天神に」……191
「げんげ田の」……192
東京かびれ
「緑蔭」……193
「新涼」……194
「野の匂ひ」……195
刀水の宴連句会
「時告ぐる」……196

「牡蠣の店」……197
徳島連句懇話会
「浜千鳥」……198
都心連句会
「七種粥」……199
「抱虚庵九世襲号記念
海内付廻百韻」……200
「道継ぐや」……203
富山県連句協会
「夏蕨」……205
「茅花流し」……206
渚の会
「氷面鏡」……207
南草連句会
「月の小屋」……208
「一茶忌や」……209
拈華連句会
「冬紅葉」……210
「黄金芋」……211
俳諧工房
「繊月」……212
俳諧文芸考究会
「かはほりの」……213
芭蕉記念館連句会
「朝東風や」……214
「津軽じょんがら」……215
巴世里連句会
「眉目よき月」……216
「すだち大事」……217
羽曳野連句会
「雁行や」……218
浜風
「花散らしの雨」……219
「飛鳥美人」……220
祓川
「鼻眼鏡」……221
B面
「水匂ふ」……222
美々っと連句会
「立夏かな」……223
「河原鶸」……224
ひよどり連句会
「臘梅に」……225
「絵タイル」……226
「芍薬」……227
「紫苑盛り」……228
「布袋の臍」……229
「母の日」……230
「日本海」……231
ひょんの会
「青棗」……232
富士裾野ひよこ連句会
「翼張る鷹」……233
「今朝の秋」……234
ふらくたる
「沖の船」……235
「海峡の」……236
北杜連句塾
「かわたれの」……237
北杜連句塾襲
「時間差の影」……238
ほほほ連
「鯉幟」……239
「月の舟」……240
松山連句教室
「もの枯れても」……241
「窓」連句会
「年深し」……242
丸亀連句会
「蝉氷」……243
三重県連句協会
「三島大社千句奉納俳諧之連歌
時雨忌」……244
水無月会
「柿若葉」……247
「僧の鉦」……248
「燕来る」……249
美晴連句会
「ローランサンの少女」……250
宮城県連句協会
「炎帝や」……251
「もん」の会
「涙の睫毛」……252
邪馬溪連句の会
「揚げ雲雀」……253
瑶沙連句会
「冬終る」……254
「明日香の春」……255
横浜ベイサイド連句会
「小幟」……256
読売文化センター川口
「緋鯉群るる」……257
ラピロス連句会
「梛の花」……258
竜神連句会
「白梅や」……259
藜杖社源氏の会
「道元忌」……260
連句会ひらめき
「星祭」……261
「日曜はダメよ」……262
連句会未恋座
「赤煉瓦」……263
連句会「遊」
「紫蘇の実」……264
連句会遊子座
「雪の節分」……265
「梅の香り」……266
「雛飾る」……267
「享保雛」……268
連句研究会
「枯野道」……269

連句ななの会
「花六輪」……272
「雲の峰」……273
若笹連句会
「陵涼し」……274
全国連句グループ概況……3
連句協会会員名簿……26
〈編集後記〉……今村　苗／白根順子

第二十七回連句協会総会・全国大会の記

平成二十年四月六日（日）連句協会第二十七回総会、全国大会が日本青年館に於て開催された。神宮外苑は満開の桜が映える花日和の中、百二十六名が参集した。

午前十一時開会。司会は島村暁己常任理事、中尾青宵副会長の開会のことばについで磯直道会長は全国大会三十年に向けて何かやりたい旨アイデアを寄せて欲しいと挨拶。続いて宮下太郎理事長の事業報告、臼杵游児常任理事の決算報告、そして新年度計画案予算案も承認された。次に各地より、二十年度国民文化祭開催地茨城県筑西市代表より参加要請、来年度静岡県から文化祭の説明、平成連句競詠、浪速芭蕉祭、全国連句新庄大会、徳島県大会の御礼、俳口連句大会、京都連句協会等の案内。午後は二十五卓に分かれ形式自由の実作会。三時半、大会初めての試みで伊藤稜志常任理事の進行により半歌仙、順候式十八韻、二十韻、短歌行、二十八宿、歌仙の順で実作披講が行なわれた。鮮やかな捌とまた大学生の付け句に拍手や笑いが起り新鮮であった。引地冬樹副会長の閉会のことばで第一部を締めくくる。第二部懇親会のあと連句協会の更なる発展を願い和やかに散会。

（伊藤貴子）

第二十二回　国民文化祭　とくしま二〇〇七
文芸祭連句大会
「おどる国文祭」を顧みて

二〇〇七年一一月二日～三日、阿波徳島を舞台にして、文芸祭連句大会が開催された。テーマは、「藍の国とくしまから広がるふれあいの詩（うた）連句の輪」であった。

応募歌仙五八三巻、応募者数二八三二名（重複あり）、吟行会・交流会、そして実作会には三〇〇名に余る熱心な連句子の、全国からのご参加をいただき、盛況裡に幕を閉じることができた。これもひとえに連句協会をはじめ、連句愛好の皆様のお蔭と感謝する次第である。

ここに、その経過を振り返ってみたい。

プレ大会

いざ国文祭を迎えるに当たって、私たちのいちばんの心配は、いかに準備し、どう運営するかということであった。組織は、この国文祭を視野に入れて、二〇〇一年に徳島連句懇話会（後に徳島県連句協会と改名）を立ち上げ、

実作会にも力を入れてきた。しかし、これまで全国的な大会に参加した者はごく限られていたし、会の運営については全くの未経験者ばかりであった。どうしても、プレ大会を持つことで予行演習をする必要に迫られたのである。

国文祭の前年、一〇月二九日徳島市渭東コミュニティセンターにおいてプレ大会を実施。開会の挨拶に続いて、アトラクション「阿波木偶箱廻し」。講演は宮下太郎氏（連句協会理事長）の実作を織り混ぜての講義、付け合いの良し悪しを楽しく解らせていただいて勉強になった。昼食をはさんで実作は一三テーブル、六二名の参加であった。この体験を経て、手応えを確信し、本大会へ向かう心準備を整えることが出来たのであった。

応募吟

半歌仙の募集が多いなか、徳島では歌仙の形式を採ることにした。なんといっても、連句の中心は歌仙という形式だからである。一方では歌仙にすると、応募数が少なくなるのではないかという危惧もないではなかったが、結果としては五八三巻の応募を頂いた。その分、選者の方々にはご苦労をお掛けすることと相成ったが、嬉しい悲鳴とも言えようか。二月～四月の募集期間、七月下旬までに第一次審査を終え、八月四日、選者の方々に日本青年館にお集まりいただいて最終選考会を開いた。文部科学大臣賞「蝶の風信」の巻以下、一五の作品の大賞を決定した。

作品集

大賞一五巻、入選一九八巻を作品集にまとめ、二五八ページにわたる力作集が出来上がったわけである。

それ以外にもう一冊、全国からいらっしゃるお客さまへのお土産として、連句集の発刊を計画した。

徳島の組織結成以来、実作に力を入れ、応募を通じて賞を頂いた作品も少なくなかったので、この機会にそれらを全国の士に見ていただこうということになったのである。収録作品五三巻、一七一ページの『鏡奩帖』がそれである。

吟行会

吟行会については紆余曲折があった。最初の案は、東急

インで受付、その前からのバス乗車の計画であった。ところが、当日徳島恒例の狸まつりが催されと雑するということを失念していた。東急イン付近のバス駐車はまかりならぬという警察からのご沙汰に、あれやこれやの議論を重ねた挙句（こんなところに連句用語が生きていた）阿波踊り会館前受付、ロープウェイで眉山山頂へ登ってのバス乗車とした。足の不自由な方、歩くのが苦手な方にはご迷惑をお掛けすることになったし、バス乗車にも多少の混乱を引き起こしたが、お蔭で大過なく運んだことはラッキーであった。

コースは、眉山から吉野添いに第十の堰を眺め、四国八八か所一番札所の霊山寺を経由して、鳴門千畳敷へと回るため、慌ただしい四時間余の行程である。欲ばった計画のできるだけ多くの吟行となったが、徳島の立場としては、ものを見ていただきたいという気持ち故だったのである。

交流会

吟行会から帰って息をつく間もなく、交流会はその交友にさらに親密の度を深める。大いに盛り上がったところで、最後はご当地水玉連の阿波踊に加えて、有志諸氏の躍りぶりが特別の思い出となった。浴衣の端折りも頼もしく、磯、臼杵、小林、土屋、蛭海諸氏の男性陣、ピンクの蹴出しも艶っぽい、赤田、浅沼、伊藤、今村、坂本、式田、鈴木、横山、春日諸氏の女性陣。本当に有り難うございました。

実作会

翌三日はメインの大会。欲迎アトラクション、開会式・表彰式に続いて、記念講演は、詩人高橋睦郎氏の「連句の可能性」であった。個性尊重が行き詰まった現在、共同して作品世界を作る連句の素晴らしさに触れ、命がけの対話の詩であると結んだ。

実作は、四六テーブル、半歌仙が巻かれた。前日の吟行会でものにした発句を基に、それぞれのグループで付け句が競われ、力作が生まれた。また、別室では、小学生の三テーブル（一六名）が楽しい連想を展開し、さらに中学生

一テーブル（七名）高校生一テーブル（六名）が、磯会長、宮下理事長の直々のご指導をいただいて半歌仙を巻き終えたことは、これからの連句界の発展を考える時、貴重な体験であると言えよう。

これらの作品は、作品集として一冊（一四〇ページ）にまとめられた。

祭のあと

この国文祭連句大会が一過性のものであってはいけない。これを機に、新たな連句の輪を徳島の地に定着させ、全国に発信して行かなければならないと思う。そうはいっても簡単にことは進まないであろう。連句人口の高齢化、経済的な問題、文芸としての受け手側の認知、新鮮さを持ち続けるための改革等々、問題は山積している。しかし、先ずは、とりあえず、この徳島大会の熱気を出来る限り燃やし続けていくことであろうかと考える。この大会を終えた後、しばらくの充電期間を経て、再び徳島の地での連句会を持ち得るよう努めて行きたいと思う。その際には、全国の方々のお力をお借りしたいと願っている。（東條士郎）

支考の付合理論に学ぶ

―「執中（しっちゅう）の法」と「空撓（そらだめ）」を中心に―

永田英理

はじめに

学会や仕事先などでの自己紹介の際、連句を研究対象にしているということを告げると、必ずと言っていいほど毎回返ってくる反応が、

「では、実作の方もなさるんですか？」

という質問である。じつは大学時代から母校の私的な連句会には一座させていただいているのだが、自分には詩人としてのセンスがないことは、永年にわたって自覚し続けている。そのうえ、〝連句研究者〟などという立場になってからは、句を付ける速度が輪をかけて遅くなってしまった。芭蕉の弟子である支考（しこう）が唱えた付合理論などを研究するようになってからというもの、方法論ばかりが頭のなかで先行してしまい、すっかり頭でっかちになってしまったからである。

蕉風俳諧を全国的に広めるために、支考は初心者にもわかりやすく付合の「変化」について説明するための方法として、「七名八体（しちみょうはったい）」説（前句からどのように「趣向」を立てて案ずるかを説く有心（うしん）・向付（むかいづけ）・起情（きじょう）・会釈（あしらい）・拍子・色立（いろだて）・遁句（にげく）の七名と、その付句の「句作（くづくり）」のねらいどころを説く其人（そのひと）・其場（そのば）・時節・時分・天相・時宜（じぎ）・観相・面影の八体によって、具体的な付け方を示す理論。別図参照）を体系化したのであるが、私のような理論先行型の初心者にとっては、むしろ逆効果なのではないかと思ったことも、過去にはしばしばあった。『三冊子（さんぞうし）（白）』（元禄十五年〈一七〇二〉成）に、芭蕉が蕉門の式目作法書を積極的に残そうとしなかったというエピソードがあるが、もしかしたらその理由のなかには、このように作法に縛られる連衆が現れる弊害を見越していたことも含まれていたのかもしれない。

文芸の創作活動において、指南書や作法書の類がもたらす功罪というのは、たしかに存在する。創作方法についての手がかりが何もなければ、独りよがりの世界に陥ってしまうし（本人に卓抜した才能がある場合は別であるが）、マニュアルに頼り過ぎてしまうと、その型から抜け出せなくなって独自性を失ってしまう。こうした連句における「七名八体」説の功罪については、拙著『蕉風俳論の付合文芸史的研究』（ぺりかん社、平成十九年）のなかでも少しだけ触れたことがあるのだが、今回は、このような付合理論が講じられた真の目的について、支考の説いた「執中の法」と「空撓（そらだめ）」という「七名八体」説のなかに体系化されていない（厳密には、「空撓」は「員外（いんがい）」として位置づけられているが）二つの付合手法を通して、改めて考えてみることにしたい。

〈七名八体説・別図〉

蕉門の秘法とされる「執中の法」

さて、支考がさまざまな付合理論を構築した真意について考えてゆくうえで、支考自らが「我家の秘法」として位置付けている「執中の法」の存在を見過ごすことができない。

「執中の法」の「執中」とは、「中を執（と）る」――すなわち、物事の中心となる部分を掴むことを意味する語である。『俳文学大辞典』（角川学芸出版）によれば、「執中の法」とは「付句を案ずる場合、前句に含まれるさまざまの気分・情調の中で、最も中心となるべき点を、一字から三字程度の単語に思い定め、その単語を中心に趣向を案じてゆく」方法として定義されている。俳諧研究においては、村田昇氏の「近世文芸の宗教的史観（四）芭蕉の美学―執中の法―」（『国文学研究』第五号、梅光女学院大学国語国文学会、昭和四十四年十一月）以降、取り上げられて論じられることはほとんどないが、むしろ実作の分野において評価されてきた方法であるといえるだろう。たとえば『獅子吼』（第五百九号、昭和五十六年九月）には、國島十雨氏が便利な

手法としてときどき応用していたことを述べており、また最近では、五十嵐譲介氏たちによる『連句―理解・鑑賞・実作―』（おうふう、平成十一年）のシリーズや、大野鵠士氏の「連句のすすめ」の連載（其の⑮）においても紹介されている（『俳壇』平成二十年三月号）。

支考は句を付ける方法について、前句からどのような構想を立てるか、その「趣向」を定める作業と、実際に句案を言葉として仕立てる「句作」という作業とに分類しており、自著のなかでは「趣向」を見定める方法について、以下のように解説している。

○趣向を定る事

附句は趣向をさだむべし。其趣向といふは、一字二字三字には過べからず。是を執中の法といふなり。人よく此法を工夫せば、天下の政　明らかに、物、其中を取て前後を見る時は、百千の数有ても前後は近し。人ははじめより案じて、終を尋る故に、其中隔りてかならず暗し。口伝、『源氏物がたり』の事。

されば表八句の趣向

はつ桜　塗笠　暖簾　村雨

鶯　手習子　月　新酒

如此趣向を定置て、あるひは作にも或不作にも、あるひは和かに、黒白青黄のすがたは作るに、皆只句作のてづまなり。此法をしらざれば、人のはい諧に驚く事あり。最二字三字の趣向より、変化のすがたも明らかに見ゆる故に、最うちこしの好悪を速くしる故に、此法をしらざる人は、我句を作りて後に、うちこしもよからず、変化もおもしろからねど、今までの骨折に心残て、其句を崩す事かたし。二字三字の趣向をかゆる事は、曽ておしむべき骨折にてもなし。**此法は第一に、変化のためなりと心得べし。**

（中略）此「執中」の二字を指て、我家の秘法といふべし。人よく此法を工夫せば、天下の政　明らかに、人間明くれの働をもしるべし。

（『二十五条』享保二十一年〈一七三六〉刊）

先の『俳文学大辞典』の記述は、これによるものであろう。付句を案ずる際には、まず「趣向」というものを一～三字で定めることが肝要であると説かれている。「表八句の趣向」として挙げられた「はつ桜」から「新酒」までの八つの語は、百韻の表八句それぞれの句の「趣向」につい

て並べたものである（実際の作品については不明）。作・不作、かたく・和らかく、……などというのは、次の「句作」の行程で、自由自在に句の姿を作り変えることができることを述べたものであろう。まずは「趣向」をしっかり見定めたうえで、「句作」に取りかかるべきであるというのである。引用本文の後半部についてはまた後述することにして、支考が「我家の秘法」とした「執中」（中を執る）という行為についての解説を、もう一例挙げておく。

定ル趣向ヲ法　白馬ノ条目に此名を執中ノ法といふは、『書経』に「執レ厥ノ中ヲ」のこころ也。儒書も仏経も詩哥も書画も、まして人間の世をわたる思案もその中をとりてあと先を見れば、十里を五里の中にたちて前後は近く見やすき故なり。聞ずや釈尊の五千巻も花厳経を中にとりて阿含の花を前後にくばり、見ずや源氏の六十帖も須磨ノ巻を中にはじめて桐壺・雲隠を前後につくる。爰に趣向は先にして句作は後なる事をしるべしとぞ。（下略）

（『十論為弁抄』享保十年〈一七二五〉刊）

「執中の法」とは、『書経』「大禹謨」の「厥の中を執れ」という記述から取られた語であり、支考のいう「執中」の「中」とは、決してぶれることのない物事の中核、中心となる部分のことを指すのであろう。物事を最初から最後まで見通そうとするよりも、その「中」を執ってその前後を見渡せば、全体像は把握できるものであると述べられているように、前句の中心となる部分を押さえることによって、句の背後に表現された世界全体を掴むことが可能になると考えたのである。なお、「初・中・後」のなかでは「中」が最も重要であり、物事は「中」に当たる部分から着手すべきであるということを強調するために、支考は『河海抄』（四辻善成著、貞治年間〈一三六二～一三六八〉頃成）などの『源氏物語』の古注釈書にみえる、『源氏物語』の「須磨」「明石」起筆説まで引き合いに出してきている。

「執中の法」のもたらす効果

「執中の法」を用いた付合の具体例としては、後年の俳論書であるが、『附合小鏡』（蓼太編、安永四年〈一七七五〉刊）において、

糊強き袴に秋を打うらみ

鬢の白髪を今朝見付たり

附は「老」の一字

という付合例が挙げられているのが参考になる。例句の出典は、『堅田集』収録の「やす〳〵と」歌仙（元禄四年〈一六九一〉）の十五、十六句目で、付句の作者は芭蕉である。前句は、糊がききすぎてごわごわした袴が身にそぐわない侘びしさを、訪れた秋の寂しさに寄せて恨みに思う心情を詠んだものである。おそらく芭蕉は、糊の強すぎる衣が身にそぐわないことを不愉快に思うのは、我が身にも「秋」が訪れた人物ではないかと見定めて、前句の「中」に「老」の気配を感じ取ったのであろう。今朝、思いがけず鬢の白髪を発見してしまった人物の姿を句作し、仕官の苦労ゆえか、我が身に忍び寄る老いというものを実感した男の様子を詠んだ付合となっている。

このように、前句の「中」を執って「趣向」を見定め、それをいわば「題」として付句を考えることによって、初期俳諧の好んだ「物付」（寄合や詞の縁による付け）や「心付」「親句」付」（句意付け）による、前句とべったり付いた前句と付句との関係性もまた新たに変わってくる。これまでの俳諧とは一線を画した付合の趣向の立て方を打ち出す意味でも、「執中の法」は大変画期的な方法であったといえよう。

そして何よりも、支考が句を付ける過程を「趣向」と「句作」に分けて説いた目的が、先掲の『二十五条』に「此法は第一に、変化のためなりと心得べし」と述べられている点にあることを忘れてはならない。先に引用した『二十五条』の後半部分――「最二字三字の趣向より」以下でたとえば、思いついた句をさんざん説かれているように、なかなか定型に整えた末に、打越・前句・付句の三句の渡りを見渡して我が句の拙さに気づいたところで、また一から作り直すのは骨折りであるから、結局改めて付句を練り直すことが難しくなってしまう。だが「執中の法」を使えば、仮に打越・前句の付合からの展開が思わしくなかったとしても、付合の趣向として考えた二、三字の言葉を直す程度で済むので、それを改めて考えることはまったく苦にならない。『十論為弁抄』にも「趣向は先にして句作は後」として説かれているように、「趣向」が決まった後に「句作」に取り組めば、無駄な時間を使うこともないので

ある。「趣向」と「句作」とを分ける付合術は、支考が最も重んじた「一座の変化」を追究してゆくうえで、極めて理に叶った方法であったといえよう。

「執中の法」――前句の「中」を執る方法によって考えてゆけば、前句との付合だけでなく、より広い視野に立って打越・前句からの付合や、ひいては一巻全体の展開までをも見渡す余裕が生まれてくるのである。つまり、支考がさまざまな付合理論を考案したのも、すべては連句一巻における変化をもっとも重視するという理念に基づいたものであったのだ。

「空撓」という手法

ところで、「七名八体」説が「員外」として「空撓」という手法を設けていることについて、私はかつて「〈七名八体〉説ではカバーしきれない、こうした手法を支考が用意しているということは、〈七名八体〉という理論体系そのものの未完結性を意味しているのであった」（前掲拙著）と述べたことがあった。しかし、いま改めて考えてみると、この「空撓」こそが、詩人（俳人）たちの自由な発想、天性のひらめきに通ずる案じ方なのではないかと思えるのである。

支考自身は「空撓」について、自著『俳諧古今抄』（享保十四年〈一七二九〉序）のなかで具体的な付合例をあげながら、次のように説いている。

> 障子に影の夕日ちらつく
> 聟殿はどれぞと老の目を拭ひ
>
> 夕日に照らし出された何かの影が、障子にちらちらと映っているさまを詠んだ前句から、老人の視覚のおぼつかなさを連想して、「聟殿はどちらじゃ?」と眼を拭う年老いた人物の様子を付けたものであろうか。その付合の方法については、
>
> ひたすら日をふさぎ吟じ返すに、ふと其姿の浮びたる
> 無心所着の躰なれば、人に教るに道なふして、例の
> 公式に定がたし。
>
> と説かれており、ひたすら前句を吟じ返しているうちに突如ひらめいて付ける手法であることから、人に教える術もなく、また「七名八体」のなかにも体系化できないとする。

直感によるひらめきは、詩人の命ともいうべきものであろう。そして実際の連句の場においても、じつはほとんど誰もが直感的に付けている場合が多いのではないか（國島十雨氏もまた、先掲の論文において同様のことを述べている）。蕉門きっての論客である支考は、詩人のインスピレーションによる付け方というものを十分に考慮したうえで、それを「空撓」というかたちで「員外」に位置付けていたのであった。すなわち、いかなる方法論にも縛られることのない感性の働きによる付け方について、支考がはっきりと積極的に評価すべきであったのだ。

さらに加えて、支考はこのように「空撓」を位置付けて認識していたことの証として、「空撓」という手法をもっと強調しておきたい。

『七部婆心録』の「空撓」

幕末の注釈書に、この「空撓」という案じ方について何とか説明を施そうと試みた『七部婆心録』（曲斎著、万延元年〈一八六〇〉奥）という書がある。『婆心録』の冒頭によれば、「空撓」という手法の定義について、「普通の付け方は前句の見立に従って趣向をとるが、これは趣向のなかばからまた一転の趣向を求める方法」（引用は、雲英末

趣向を案ずるために二字三字の言葉を立てる「執中の法」にも、「七名八体」説にも依らない「空撓」という方法は、その時、その句でなければならぬものであり、文章では説明することができないのだとする。このような付け方の方法がなければ、俳諧は理屈のみで語り尽くすことができてしまい、「不伝の妙所」というものがなくなってしまうのだとさえ述べているのである。たしかに支考はさまざまな付合手法を提唱したが、彼自身は決してそれらの方法論にとらわれることなく、自由な発想によって連句に変化をもたらそうと考えていたのだということを、ここに改めて強調しておきたい。

『七部婆心録』の「空撓」

幕末の注釈書に、この「空撓」という案じ方について何とか説明を施そうと試みた『七部婆心録』（曲斎著、万延元年〈一八六〇〉奥）という書がある。『婆心録』の冒頭によれば、「空撓」という手法の定義について、「普通の付け方は前句の見立に従って趣向をとるが、これは趣向のなかばからまた一転の趣向を求める方法」（引用は、雲英末

雄編『芭蕉連句古注集　猿蓑篇』〈汲古書院、昭和六十二年〉による）であると解説されていることから、支考自身の定義とは異なった方法として認識されていることがわかる。その解釈の是非はともかく、前句からどのようにして付句の「趣向」を定めるかという一連の流れを説明したものとして興味深いので、『猿蓑』の「市中は」歌仙の付合を注釈した本文を、その一例として挙げておく。

僧や、さむく寺にかへるか　芭蕉
さる引の猿と世を経る秋の月

前句一旦出家セシ僧ノ抖擻モセズ、や、寒く寺へ帰るかなト云詞ト見立、街道の観想を付たり。コハ往来しげき大道ならむ。出家たる身の寺へ帰るは、寺務にさへられて本行を修せざるならむと見る向より、猿引の猿負来るを見て、ア、猿引の猿と世をふるも、僧の寺へ帰るも、人皆の世渡る綱にほだされて、一生を空しくする有為の世の習かと、秋の月の光隈なき悟道徹底の智識の観ずる様也。先註

離たる付、異物並たる対付、互にしたる付ト云ハ、頂門上に此一隻眼を開ざる故也。

注釈本文中に㈠から㈥までの数字が付されているが、これは付句作者が前句からの「趣向」を見出してゆく過程を、順番に再現して付けた番号であるとみてよい。著者である曲斎は、「空撓」の解説をめぐって「予、つばらに（詳しく）説くといへども尚、初心には得がたからむ」と述べているが、そもそも『七部婆心録』自体が、小説のような筋書きを勝手に考えて付合の展開を解説する傾向のある注釈書である。そのことをふまえると、この注釈にもまた曲斎による創作が多分に入り込んでいる可能性はあるのだが、以下に詳しく見てゆくことにしたい。

曲斎の注釈によれば、前句の「や、さむく寺にかへるか」を、「一旦出家した僧が斗藪（身心を修練して欲望を払いのける修行）もせずに、肌寒いなかをまた寺へ帰るこだなあ」と、観想した言葉として見立てたうえで、付句の作者である芭蕉は、次のような思考の過程を経たとしている。㈠ここは人の往来の多い大通りなのであろう→㈡出家した僧侶が寺へと帰ってゆくが、寺院のつとめに妨げられてなかなか修行ができないのだろう→㈢すると向こうから、猿引が猿を背負ってやってくるのが見える→㈣ああ、

猿引が猿と世を渡ってゆくのも、僧が寺へ帰ってゆくのも人の世の有様だ→㈤こうして人々が皆、それぞれに日々の生業に絆されているうちに一生を終わるというのは、有為の世の習いなのであろうか→㈥秋の月の隈なき光――すなわち真如の月のごとき、大悟徹底の高僧が、こうして人の世を観じているさまとする。つまり曲斎は、寺へ帰る孤僧や猿引のように、世事に取り紛れて一生を終えてしまう人間の性を、真如の月に照らされた高僧が観ずる付合であると解釈しているのである。

ところが現在では、これは前句の人物に対して、別の人物を向かわせた「向付」という手法による付けであるとみるのが通説となっている。猿とともにしがない渡世を送る猿引と、世を捨て出家した僧との互いに孤独な境遇が、秋の月のあまねき光の下に照らし出されているのだが、両者は決して同一の場に居合わせているわけではない。それぞれに論理的な繋がりのない独立した句であり、僧侶と猿引とを対照させることによって、浮世を渡る人間たちの「あはれ」が匂い合う付合として評価されているのである。

一方『婆心録』は、○先註という項目を立てて、現在採用されている「二句別に立たる格（二句は二人の人物を別々に仕立てた付合である）」（『三冊子（赤）』）という解釈をはじめ、「離たる付（前句と付句は離れているが、その中に風情を付けた付合）」（『猿みのさかし抄』文政十二年〈一八二九〉刊）、「異物並たる対付（それぞれに異なるものを並べている対句のような付け）」（『俳諧古集之弁』寛政五年〈一七九三〉序）、「互にしたる付（僧も寺に帰り、猿引も家に帰る、という互いの行動を対にした付合）」（『芭蕉翁附合集評註』文化十二年〈一八一五〉刊）という諸注の説をことごとく批判している。たしかに論理的に繋がっていない付合であるという点においては、「空撓」による付けと判断できるのかもしれないが、『婆心録』の施した小説の展開のような注釈は、現在ではまったく支持されていないのである。

『婆心録』の解釈の是非はともかく、支考自身が「空撓」の証例としてあげた先掲の『俳諧古今抄』の付合が、「心付」のような付けになっていたことを考えると、直感的な方法による付けについても、作者の思考回路を辿ろうとする試みは、あるいはまったく不可能ではないのかもしれな

い。だが、どこからともなく降ってきた直感的な感性の働きについては、やはり常に小説の筋書きのように論理的に説明できるものとは限らないであろう。

むすびに

句会に臨む際の心得について、支考は『俳諧十論』「第九、変化の論」（享保四年〈一七一九〉跋）のなかでこのように説いている。

さて其席にのぞむ時は、衣食に一日の機嫌をとゝなへて、身は泰山の雲おさまり、心は流水の風しづかに、附合の三法をかむがふるにも及ばず。五躰・十躰の細注にもかゝはらず、例に無分別の所より、初念の趣向にたゞよふべからず。

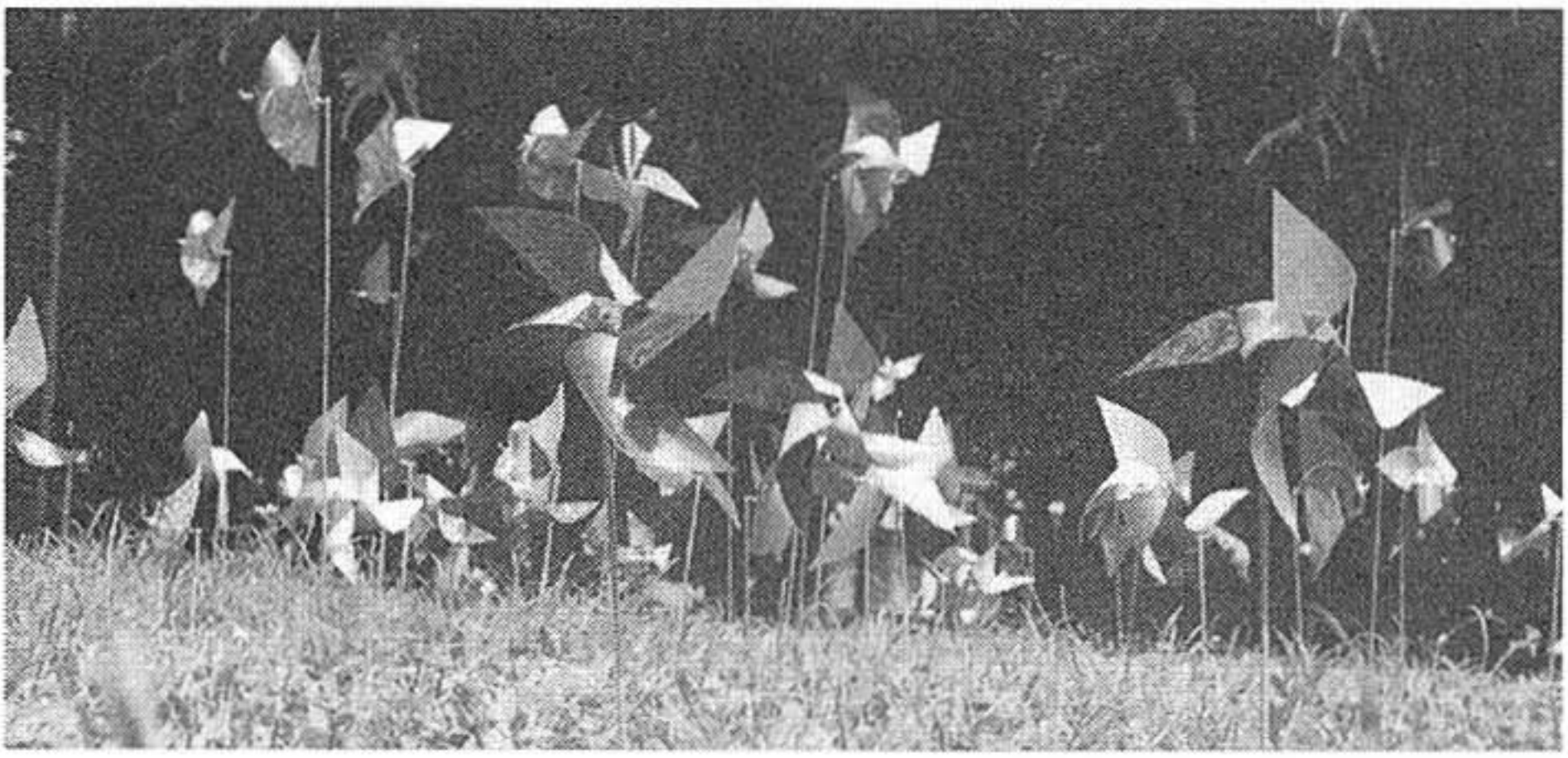
連句会に臨む当日は、衣食を正して気分を調え、身はゆったりと心は静かに……という解説がなされた後、傍線部において、まずは「七名八体」説の三法を考えるには及ばないので、五体・十体などという注にも拘ることなく、何物にもとらわれない境地で句を詠むべきであり、また最初に思いついた趣向のみにいつまでもとらわれてはならない、と説かれている。

私はここ数年間、「七名八体」説の付合文芸史における展開について検証し続けてきたが、研究に没頭するあまり、この手法を駆使すれば、誰でもたちどころに優れた句になると思い込んでいた時期があった。ところが、実際に自分が句を付けようとするときに用いると、「七名」と「八体」とが脳内をぐるぐる回り出し、十何通りもの付け方を前にして混乱状態に陥ってしまうのである。連句を楽しんでいる他の連衆を前に、私は理論を実践に移すことの難しさを痛感しながら、一人で悶々として結局のところ、また直感に頼っていたのであった。そして連句を楽しむことにしたのによって、連句を楽しむことにしたのである。

ところが、ある日のことであった。一座する連衆たちから似たような発想の付句しか出てこなくなり、皆が付けあぐねている場面に遭遇したのである。そこで、私はふと「七名八体」説を思い出し、「会釈」の手法（前句の人物にまつわるものや、その場の様子などで軽く付ける方法）を使ってみようと思い立ったのだ。すると、今まで固定化して

いた発想の枠からするりと抜け出して、簡単に思いがけない方向へと付合を転ずることができたのであった。そしてそのときに、支考の「七名八体」説とは、連句に変化をもたらすための方法であるということを、実作の場において初めて実感したのである。もっとも、実作者の方々にとってはすでに当たり前のことなのかもしれないが……。それは頭でっかちな私にとって、支考による「俳諧はそも何の為なるや、法式はそも何の故なるや」（『俳諧十論』「第十、法式の論」）ということを考えよ、という教えを、まさしく身をもって実感することのできた瞬間だったのである。

〈日本学術振興会特別研究員博士（学術）〉



蕪村連句のおもしろさ

小池正博

正岡子規著『俳諧大要』の「俳諧連歌」の章には、連句の実例として蕪村一門の作品が引用されている。

「俳諧連歌における各句の接続は多く不即不離の間にあり、密着せる句多くは佳ならず、一見無関係なるが如き句必ずしも悪しからず。切なる関係なしとは見えながらまた前句と連続せざるにもあらざる処に多く妙味を存するなり。初学のために一例を挙げて解釈すべし」とあって、「冬ごもり五車の反古のあるじかな」（召波）を発句とする半歌仙が紹介されているのである。蕪村七部集のひとつ『五車反古』（天明三年）には春夏秋冬の歌仙または半歌仙が収められているが、それらがすべて召波の句を発句とする脇起しになっているのは、召波十三回忌の追善集だからである。「五車反古」とは五台の車に積むほどの反古の山という意味で、その主となって冬ごもりするというのだ。これを取り上げるのは、いかにも獺祭書屋の主人らしい選択眼ではないだろうか。子規の『俳人蕪村』はよく知られているが、子規は発句においてだけでなく、連句においても蕪村派だったわけである。

従来、蕪村連句については、あまり語られることがなかった。藤田真一氏の『蕪村』（岩波新書）でも、「あとがき」に次のように述べられている。

「たとえば、連句や俳文については、ほとんどふれることができなかった。じつは、蕪村じしん、連句にはかなりの自負をもっていたふしがあり、実際読んでみると、ひとをうならせるだけのものがある」

蕪村連句についての資料や注釈も少なく、以前は、『古典俳文学大系』（集英社）の「蕪村集」くらいしかなかった。ところが『蕪村全集』（講談社、以下『全集』と略記）の「連句編」（二〇〇一年九月）が刊行されて以来、蕪村連句を俎上に載せることが容易になってきた。本稿では

『全集』を基にして、蕪村連句の特質について考えてみたい。

一　その師系

『夜半楽』（安永六年）には「春風馬堤曲」「澱河歌」などの問題作が収録されていて、蕪村の青春時代や故郷を回顧する気分が漂っている。(注一)この集にはまた、「歳旦をしたり顔なる俳諧師」を発句とする歳旦歌仙が収められているが、歌仙に添えられている次の前書は比較的よく知られているものであろう。

祇園会のはやしものは　　雪尾
不協秋風音律　　宰鳥
蕉門のさびしおりは　　宋阿
可避春興盛席
さればこの日の俳諧は
わかわかしき吾妻の人の
口質にならはんとて

「吾妻の人の口質」とは江戸座の俳風のことだろう。若き蕪村は江戸座の俳諧に親しみ、この時期を蕪村の関東遊歴時代と呼んでいる。『全集』では蕪村が最初に参加した連句の現存作品として、元文三年の百韻「面白の」の巻（宰町の号を用いている）が収録されている。次に挙げるのは、元文四年『俳諧桃桜』に所収の「染る間の」の巻である。

染る間の椿はおそし霜時雨　　雪尾
汐引く形りに芦は枯れ臥す　　宰鳥
稽古矢の十三歳をかしらにて　　宋阿

この宰鳥（宰町）が若き蕪村なのだった。元文三年、二十二歳のときに蕪村は夜半亭巴人（宋阿）に入門していた。蕪村は江戸を去り宝暦元年、三十六歳で上洛するまで、関東各地を遊歴したのであった。蕪村の号を用いたのは、延享元年の白撰歳旦帖の「古庭に鶯啼きぬ日もすがら　蕪村」からだと言われている。この句は芭蕉の「古池や」を連想させるので、比較して取り上げられることもある。(注二)老年が人を回顧的にさせ、過ぎ去った青春時代の意味を問いたくなるのは自然なことかも知れない。

啼ながら川越す蝉の日影哉　宋阿居士
行人少にところてん見世　蕪村
衝立に談林風の発句ありて　斗文

安永三年六月、宋阿三十三回忌の追善集『むかしを今』から、歌仙「啼きながら」の巻である。

発句は夏で、宋阿が亡くなった六月六日にちなんでいる。この句、本来は写生句だったかも知れないが、それを追善歌仙の発句にすることで、別の意味が生まれてくる。「蝉」は亡師の象徴となり、三途の川を越えていったというのであろう。

脇に何をつけるか。「行人」は芭蕉の「此道や行人なしに秋の暮」を連想させるが、芭蕉の場合は「我ひとり行く」という孤独感があるのに対して、この脇句では少数ではあっても行く人はいるのであって、師の俳諧の継承ということが意識されているはずである。

問題は「ところてん」である。『全集』の注では「心太は宋阿の好物であったか」とあるが、そんなこともあったかも知れない。蕪村の心太の句「ところてん逆しまに銀河三千丈」も連想させる。蕪村書簡（安永三年五月十日・几董宛）を読むと、この句の初案のひとつに「行人絶て石に昼かほ」とある。「昼顔」が「ところてん」に化けたようだ。

第三は、ところてんの店に談林風の衝立があるという景色である。途中は省略して、名残の裏の最後の三句に移る。

鴻に夕日の斜也けり　我則
宋阿仏匂ひのこりて花の雲　几董
桃さくらてふ集編る後　子曳

蕪村の師である宋阿は其角・嵐雪の三十三回忌の追善に『桃桜』を出している。挙句はこのことを踏まえたもので、蕪村の師系は《芭蕉→其角・嵐雪→宋阿→蕪村》ということになる。

ところで、「啼ながら」を発句とする別の歌仙が存在する。発句は宋阿の同じ句だが、脇句が蕪村ではなくて几董になっている。

啼ながら川越す蝉の日影哉
　蚋に香たく艸の上風

また、名残の裏の花の座と挙句は次の通りである。

　雲に花晋化玄峰に宋阿居士
　　春やむかしの一夜松集

晋化は晋子其角、玄峰は玄峰堂嵐雪である。また、『一夜松集』は宋阿編の句集で、蕪村はその続集を計画していたようだ。宋阿の同じ句を発句としながら、途中違った展開を見せ、花の座で再び宋阿追悼の気持ちを述べるという、二つの歌仙の興味深い関係がここにはある。

では、宋阿とはどういう人だったのだろうか。

早野巴人は下野国の生まれで、江戸に出て其角・嵐雪に俳諧を学んでいる。享保十二年に京へ移り、几圭・宋屋などの門人を育てた。やがて江戸に戻った彼は日本橋石町に夜半亭を営み、宋阿と号した。宋阿は市中の閑静に満足し、俳諧を語って、世上の道理に合わないことなどに対しては聞こえないふりをするなど、高潔な人物であった。ある夜、宋阿は正座して蕪村に次のように語ったという。

「夫、俳諧のみちや、かならず師の句法に泥むべからず。時に変じ時に化し、忽く有べし」（『むかしを今』序）

俳諧の道は師の句法をそのまま踏襲すべきではないといって蕪村は俳諧の自在を悟り、師の宋阿の磊落な俳風に従わず、芭蕉のさび・しをりに帰ろうとする。師系の批判的継承関係がここにはある。

さて、さきほどの歌仙「啼ながら」に話を戻すと、二つの歌仙の花の座には、それぞれ「花の雲」「雲に花」という言葉が使われていた。次に挙げる三つの追悼句を御覧いただきたい。

　晋化去りぬ匂ひのこりて花の雲　　嵐雪
　玄峯居士にほひのこりて花の雲　　宋阿
　花の雲三たびかさねて雲の峯　　蕪村

最初の句は其角が亡くなった時の嵐雪の追悼句。二番目

は『桃桜』所収の宋阿独吟歌仙における名残の花の句。最後は宋阿三十三回忌追善集『つかのかげ』所収の百韻「花の雲」における蕪村の発句。

俳諧の師系、その伝統の継承とは、このようなものであるはずだ。「師の句法に泥むべからず」とは、実に含蓄のある言葉ではないだろうか。

二　その句会

蕪村連句が生まれる背景として、ある日の夜半亭句会の様子を想像してみるのは楽しい。安永三年八月十日の夜半亭月次句会では、次のような句が詠まれている。(注三)

兄　梅が香にのつと日の出る山路哉　翁
弟　梅が香に夕暮早き桀哉　蕪村
兄　鳶の羽もかいつくろひぬ初時雨　去来
弟　片羽のぬれぬ鳶あり初時雨　白笑
兄　木の下は汁も膾も桜かな　翁
弟　花に寐て楊枝に遣ふ桜かな　几董

句会の題には兼題と席題がある。蕪村の句会では、初期は兼題が中心で、明和五年十二月までは兼題が五題ずつ出ていたようだが、その後多少の変化があり、明和七年七月以降は、兼題二、探題一の形に落ち着いたようだ。「探題」というのは、句会の席で多くの題のうちから一つを引き当て、当たった題に従って作句するというものである。題には普通の題もあるが、蕪村の句会ではいろいろ工夫されていて、先の例では『芭蕉七部集』の巻頭句を題としている。それを兄に見たてて、弟の句を作ろうというのである。このような句兄弟という方法は其角を踏襲したものである。

翌年七月二十二日には、「当座　探題　百人一首歌」として、百人一首の探題が出されている。

めぐり逢ひて見しやそれとも　下略　几董
我涙に月さへくらきわかれかな　翁

夕されば門田の稲葉　下略
かけ稲に鼠鳴なる門田かな

蕪村

雑俳の一首に「小倉付」があり、百人一首の最初の五音を上五に据えて、一句を作る遊びである。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」に対して、「秋来ぬと目にさや豆のふとりかな」（大江丸）「秋来ぬと合点させたる嘘かな」（蕪村）があるのは、短歌のパロディという点では、小倉付の方法と同じである。蕪村の句会の場合は、小倉付ではなく、百人一首全体を題として、それを発句に作り変える作業である。句兄弟にせよ、百人一首の探題にせよ、前提となる何か（連句における前句に相当するもの）があるということになる。先行作品を踏まえているので、「反転の法」とも呼ばれている。(注四)

三　その付味と美学

本稿の冒頭で少し触れた『五車反古』には「曲水や江家の作者誰〳〵ぞ」（召波）を発句とする脇起し歌仙が収録されている。曲水は曲水の宴、江家は大江匡房などの文章博士を輩出した大江家である。この歌仙は蕪村連句の特徴を明瞭に示していて、たとえば次のような付句がある。

かへり花ひらき梢のにほふらん　田福
小春の月の雨暗き夜に　蕪村
亡妻の子を懐に通ひ来し　蕪村

前句「雨暗き夜に」という時分の付けに対して、蕪村は自ら亡妻の霊を付けている。蕪村の怪奇趣味であるが、背後に何か物語的な雰囲気を醸し出している。(注五)ひとつの付句がその句によって単独に表現されている意味だけではなくて、背後に別の「世界」を背負っているのではないかと感じさせる、それが蕪村俳諧の二重性である。

発句に関しては、蕪村句に絵画性と物語性の二重構造があることがしばしば指摘されてきた。たとえば、次の句の場合はどうだろう。

山吹や井手を流れる鉋屑

春、山吹の花が咲いている中、川を鉋屑が流れていく情景であるが、その背後にひとつの故事が隠されている。むかし、藤原節信が能因法師に対面したとき、能因は長柄の橋の鉋屑、節信は井手の蛙の乾物を見せあったという。どちらも本物かどうか疑わしいのだけれど、二人とも互いの風流に感心して別れたという、『袋草紙』にあるエピソードである。

蕪村は書簡（天明三年八月十四日、嘯風・一兄宛）で自らこの句が故事に基づくものであることを述べたあと、「右のおもしろき故事を下心にふみてしたる句也」と述べている。漢詩でも叙景と故事の二重の理解をすることが多くあり、俳諧でもあることである。故事に基づいた句作は、一句に趣向を求めることになり、叙景は趣向のあしらいとして必要である。それによって句は平板になることから救われると蕪村は考えていたようだ。

蕪村の発句に見られるこの二重性は、連句の場においてもまた発揮されるはずである。ただ、発句の場合は一句独立であるが、連句の場合は前句と付句の関係性、あるいは三句の渡りによって、さらに世界が重層化することになる。

別の例を挙げてみよう。

紀行の模様一歩一変　　嵐山
貫之が娘おさなき頃なれや　　樗良
半蔀おもく雨のふれれば　　蕪村

（歌仙「薄見つ」）

蕪村連句には『土佐日記』を踏まえた付句がいくつか見られる。これは歌仙「薄見つ」の巻の一節だが、古典に登場する貫之の娘は、二人いるということだ。樗良の句は『土佐日記』で貫之が土佐で幼女を亡くしたことをふまえているが、続く蕪村の付句は、貫之のもう一人の娘、「鶯宿梅」の話に転じている。

朝風に主水も烏帽子を着たりけり　　几董
日記も扇に書てことたる　　竹護

（歌仙「欠けくて」の巻）

蕪村が直接句を付けているわけではないが、几董の句は『土佐日記』一月一日の条を踏まえていると思われる。付

句の竹護は嵐山の前号で、「日記」だけでは『土佐日記』とは限らないが、前句とともに読むと『土佐日記』の面影であると知れるのである。

次に『徒然草』の例を挙げてみよう。(注六)

柿の木に鳥も舎らぬ秋なれや
　芋にかへ置く百貫の銭

（歌仙「イば」）

　蕪村
　榜良

榜良の付句は『徒然草』六十段の盛親僧都のエピソードを踏まえている。僧都は遺産の銭三百貫をすべていもがしら（里芋）に変えて食べてしまったというのである。

あと、いちいち例は挙げないが、蕪村連句には『平家物語』『雨月物語』などの古典に基づく付句が現れる。

このように見てくると、蕪村連句では、古典を踏まえる場合、人名をはっきり出す場合と、それとなく面影を付ける場合との二種類があったことがわかる。人名の場合でも、歴史上の人物ではなく、いかにも古典に出てきそうな人物でありながら、典拠が特定できないような場合もある。

さかづきさせば逃る県女　　嵐山
若き日の常陸介に補せられて　　蕪村

（歌仙「薄見つ」）

二の尼の近き霞にかくれ住　　蕪村
春なつかしく畳(でふし)帋とり出て　　蕪村

（歌仙「冬木だち」）

以上に見てきたように、蕪村連句には王朝趣味、怪奇趣味、中国趣味などの特徴がみられるが、これらは蕪村の俳諧によるものである。俗を離れるために、雅の世界に遊ぼうとしたのだと思われる。俳諧には俗の世界が不可欠であり、蕪村連句にも世俗的世界の表現がバランスよく配置されているのは勿論だが、雅俗のうちの雅の世界の方に蕪村の特質があったことは事実であろう。

『も、すも、』の儿董による草稿（譲状）によると、関東遊歴時代に蕪村は芭蕉の『虚栗』『冬の日』の行き方にならおうとしたが、世間の人はその佳境を知らず、世人から仇敵のように扱われたということだ。そこで、ある人の忠告に従い、麦林・支考を尊ぶところでは支麦の句法に、其角・嵐雪を好むところでは其嵐の風韻に従って作句して

いたが、心中では俗俳を軽視していたと語っている。俳諧歴五十年にしていまだ自得の俳諧をしていないというのだ。蕪村の言葉でいうと次のようになる。

「我俳諧に遊ぶ事、凡五十有余年、今齢七旬になんなんとす、いまだ自得のはいかいをせず」(注七)

蕪村は一座する相手によってその連句傾向が変化している。内輪の夜半亭の連衆と巻いた作品には、蕪村の特質が表れているとも言われる。(注八)

蕪村は最終的に「自得の俳諧」を実現できたのだろうか。この問に答えるためには蕪村連句のさらなる味読が必要となるだろうが、二十代に憧れた『虚栗』『冬の日』の世界、江戸座の俳風、さまざまな他派と一座した連句、それらを経た上で、蕪村連句は独自の世界を生み出していると言えるのではないだろうか。

注一　「『夜半楽』版行を思立った六十二翁蕪村の胸中には、彼が俳人としての初一歩をしるした日の師と同齢に達した感慨がつよく働いている」(安東次男『与謝蕪村』)

注二　山下一海「蕪村の出発」(『文学』昭和五五年三月号)

注三　「月並発句帖」(『蕪村全集』第三巻、三七六頁)

注四　藤田真一「蕪村反転の法—または句兄弟について—」(『連歌俳諧研究』六三)

注五　大磯義雄「蕪村俳諧における雨月物語の影響について」(『連歌俳諧研究』六)

注六　谷地快一「蕪村における『徒然草』受容の考察」(『俳文芸』二二)

注七　『蕪村全集』第七巻、二五四頁

注八　「自門のみで他派を交えない撰集になると、蕪村の志向が強く押し出され、若き日の闊達な江戸座調にたち返り、軽妙な言葉遊びなども存分に楽しんでいる。自門と他派、内と外との二面性を鮮やかに使い分けているところがおもしろい」(丸山一彦『蕪村全集』第三巻・解説)

〈連句協会理事〉

エッセイ

連句パフォーマンス（序）

近藤蕉肝

はじめに

漱石の『吾輩は猫である』（岩波文庫では二三七～八）に、寒月君が「俳劇」というものを説明するくだりがあります。虚子の「行水の女に惚れる烏かな」という句を舞台のパフォーマンスにするアイデアです。実験好きの寒月君が考えそうなことです。連句パフォーマンスにしたらも芽生えたばかりの実験ですので、今もまだ試行錯誤の過程です。

例えば、芭蕉の「狂句こがらし」の巻を、舞台の上で音楽とダンスと演劇などの総合的なパフォーマンスにしたらどんなに楽しいだろう。「文台引き下ろせば反故」と芭蕉は言いましたが、それに再び命を吹き込んで、舞台の上で躍らせてみるのも面白いことではないだろうか。そうすれば、俳諧を知らないもしろさに直接触れることが出来る。もともと連歌と能は良基と世阿弥の仲。文字だけの籠に閉じ込められて、歌を忘れたカナリアになっている現代連句を、舞台の上に解き放ったらどうだろうかを発展させてきたのでまでやってきたことの至った経過を自伝風に描くことにします。

落柿舎の出会い

運命の歯車が動き始めたのは学生運動の季節だった。バンカラ風だった私は、学園封鎖を尻目に、R・H・ブライス教授の俳句の本を抱えて嵐山や嵯峨野あたりを下駄履きで散策する日が多かった。渡月橋のお茶屋で休んだり、大河内山荘でお茶を飲んだりして、バイリンガルの俳句の本を読んだ。俳句のほかによく読んだ本は眠狂四郎だった。

そんな一月のある日の夕方、落柿舎に入った。小倉山の日

陰になって早々と日が陰る庭は静かで、すでに冴え冴えとした夜気に包まれていた。私は狂四郎のように音も無く庭に入って、無遠慮に板縁に上って、縁締め切った雪見障子を背にして正座し、置いてあった火鉢をひざに寄せて嵐山を見上げた。しばらくすると後ろの障子が開いて、狂四郎の小説によく出てきそうな品のいい老人が、お茶菓子を乗せた丸い盆を置いて、「おあがり」とだけ言って障子を閉めた。狂四郎は軽く礼をして、菓子をほおばりお茶を飲む。その間も眼は凩の渡る大竹藪の風景を味わっていた。お茶を飲み終わるとまた障子が開いて、「お入り」という言葉だけで中に招き入れられた。

驚いたことに中には三人の老人がいた。締め切った雪見障子の中で三人は伊賀忍者のように気配を消していたのだ。未熟な狂四郎は自分が三人の清閑を破った闖入者だったことに初めて気付いた。ゲバ棒を持った学生が横行した時代だったから、汚い学生がいきなり縁側に上がりこんで雪見障子の風景を遮ったときは、三人はさぞ驚かれたことだろう。落柿舎十一世庵主の工藤芝蘭子宗匠、東北大学名誉教授の飯野哲二氏、そして九十歳を越えた岡田蘆村翁だった。飯野教授が先ず私の持っている本に気付いた。「それはブライスさんの本ですね」と手にとって、「麦くひしに入って、無遠慮に板縁に上って、縁締め切った雪見障子を背にして正座し、置いてあった火鉢をひざに寄せて嵐山を見上げた。しばらくすると後ろの障子が開いて、狂四郎の小説によく出てきそうな品のいい老人が、お茶菓子を乗せた丸い盆を置いて、「おあがり」とだけ言って障子を閉めた。狂四郎は軽く礼をして、菓子をほおばりお茶を飲む。その間も眼は凩の渡る大竹藪の風景を味わっていた。お茶を飲み終わるとまた障子が開いて、「お入り」という言葉だけで中に招き入れられた。

驚いたことに中には三人の老人がいた。締め切った雪見障子の中で三人は伊賀忍者のように気配を消していたのだ。未熟な狂四郎は自分が三人の清閑を破った闖入者だったことに初めて気付いた。ゲバ棒を持った学生が横行した時代だったから、汚い学生がいきなり縁側に上がりこんで雪見障子の風景を遮ったときは、三人はさぞ驚かれたことだろう。落柿舎十一世庵主の工藤芝蘭子宗匠、東北大学名誉教授の飯野哲二氏、そして九十歳を越えた岡田蘆村翁だった。飯野教授が先ず私の持っている本に気付いた。「それはブライスさんの本ですね」と手にとって、「麦くひし雁とおもへど別れかな。野水ですね。」と蕪村の俳諧三十六歌仙を表紙にした『俳句の歴史』を懐かしそうに撫でた。「ブライスさんとは学習院でよく会いましたよ。」「ご存知なんですか！」日の前の老人が著者を知っているということに私は驚いた。「よく冗談を言う人でね。飯野先生、芭蕉のことで質問があればいつでもいいですよ、なんてね。」本に魂が入った瞬間だった。

「今君は何しとんのや」と聞いたのは、宗匠だった。学園封鎖で、空手と俳句の日々だった。ハワイ大学が東西文化研究センターを作ったと聞いていたので、そこへ俳句の研究に行ってみたいと思っていた。「外国へ行く前に、日本でやっておくことがあるやろ」と、ご尤もなコメント。返す言葉が無かった。私は大学で英語学科にいた。俳句は独学で、しかも始めたばかりだった。実際は五里霧中だったはずだが、世界中から光が差してくるように感じていた。それはブライスの本の所為だったのかもしれない。

ブライスはイギリス人で日本には禅の研究にやってき

た。鈴木大拙の親友で、鎌倉の東慶寺の墓地には二人の墓が並んでいる。終戦後の天皇の人間宣言文はブライスとヘンダーソンの二人の合作だ。戦後ブライスは学習院大学の教授となり、多くの俳句研究を出版して、俳句の国際化に計り知れない貢献をした。私が落柿舎を訪ねたとき読んでいたのは『俳句の歴史、第二巻』だが、その中で既にブライスは俳句が近い将来に世界中で作られるようになることを予言していた。一方、ヘンダーソンは戦後コロンビア大学の教授となった。一九六八年にアメリカ俳句協会を設立して、現在のアメリカ俳句の基礎を作った。天皇の人間宣言の草稿を合作した二人が、戦後そろって俳句の国際化に貢献したことに、世界史の風を感じないわけにはいかない。

俳諧普遍文法

縁あって私は落柿舎の住人となり、そこから大学に通った。大学では言語学を勉強していた。言語学のテーマは大きく分けると、言語の発生と変化の二つになる。発生は神授説と自然発生説の二つに分かれる。変化は歴史であり、理論的には三〇〇万年前の人類の発生まで遡る。当時どの先生もやりたがったのは変形文法だった。変形文法というのはマサチューセッツ工科大学のノーム・チョムスキー教授が一九五〇年代に始めて提案し、年を追うごとに進化を続けていた新しい言語学で、生成文法とも呼ばれる。これはデカルトの言語理論にルーツがあった。デカルトの時代は現代の文法理論の黎明期でもあった。デカルトは人間の言語能力を自動言語装置（オートマトン）であるとした。この説を機械的だと批判する向きもあるが、それは公平ではない。当時の科学はまだ神から独立したばかりだったから、神様と人間の対比を忘れるべきではない。それは科学の語源にも残っている。神の全知を英語ではオムニシエンス（omniscience）というが、それは全を意味するオニム（omni）と知を意味するシエンス（science）の合成語である。人間の科学は神の全知から全を引いたものに過ぎない。つまり、オートマトン説は人間には神の力ではなく独自で言語をつむぎだす能力があると言いたいわけだ。言語の自然発生説に属する理論だ。

チョムスキー教授は人類が生まれながらに持っている言

語習得能力に注目した。生れたばかりのとき はまだどんな特定の言語にも染まっていない。幼児期をからそこの言語を学習する。それは音声言語だけに限らず、聾唖の母親に育てられた赤ちゃんは、母親のサイン言語を習得する。要するに一般的な記号を学習する能力を持って生れてくることが人類に共通している。言語的なものだが、何語を学習するかは経験的に決まる。

一方、言語を話すときの心の中をのぞいてみると、言葉が見えない暗い深部から、言葉がつむぎだされるプロセスが見えてくる。例えば、普通に話している日本語を表層構造という。そして、普通は意識することはだが、表層構造になるまでの意識下の部分を深層構造という。チョムスキー教授は、心の深部で語彙が生まれて、変形しながら文としてつむぎ上げられて表層構造になるまでの過程に法則性があることを発見した。これが変形文法と名づけられた理由だ。人間はその変形原理を使って無限の表層構造（文構造）を作り出すことが出来るので、この文法は生成文法とも呼ばれた。それだけではない。同時にそれは全ての人類の言語に共通する性質であるとして、普遍文法とも呼ばれた。

ある日私は東京へ出かけて、何気なく赤門前の本屋に入った。そこで偶然、山田孝雄著『俳諧文法概論』という本が眼にとまった。六千円だったが、ためらわずに買った。そこに「かやうな句形の構造は普通の文法学では未だ曾て説明したものを見ない……俳諧の文法といふ、この特別の研究がわが学問界に存在すべきであり……」という主張を読んだ時、私の頭はショートして、山田俳諧文法とチョムスキー普遍文法が融合してしまった。そして生まれたのが、「俳諧普遍文法」だった。実際はまだ生まれたわけではなく、思いついただけに過ぎなかった。簡単に言えば、俳諧が人類共通の文化ならば、言語の違いを超えた普遍的な俳諧文法理論が存在するはずだという仮説である。この仮説の研究をするためには外国へ行く以外に無いだろうと思い込み、その思い込みの魔法が解けなくなった。

日本の大学の修士課程が終わったらすぐ渡米した。しかし俳諧普遍文法の研究は簡単にはいかなア大学に行ったが、ヘンダーソン教授は私の渡米と同時に亡くなっていた。私は相変わらず言語学をやっていたが、相談する相手はいなかった。言語学の分野の人は俳句を知らず、俳句を知っている人は私が俳諧普遍文法という言葉を口にするだけで逃げ出した。俳諧普遍文法の実りは無かった。五年後私は空しく日本に帰国して大学の仕事に就いた。

帰国して二年目の夏、大学セミナーに参加した。講師はカリフォルニア大学バークレー校のジョージ・レイコフ教授と、英国ランカスター大学のジョフリー・リーチ教授だった。私は変形文法に見切りをつけていた時だったので、レイコフの認知言語学に特に興味を持った。レイコフは元チョムスキーの学生だったが、変形文法から離れて認知言語学という一派を開きつつあった。レイコフは、言語学・哲学・人類学・数学などの分野の専門家によって構成されている、スタンフォード大学の認知科学研究プロジェクトから生み出された最新の成果を披露した。それはカントのイマジネーションを言語学的なアプローチで実証しようとする新しい方法だった。カントは人類には経験に基づいて自ら知識を生み出す能力が備わっているとして、イマジネーションをその重要な要素として位置づけた。認知言語学は、知識を生み出すメカニズムの深層とも言うべきイマジネーションの構造を言語表現の観察を通して実証的に明らかにしようというのだ。私は、イマジネーションの海の中に俳諧普遍文法の尾鰭が見えたような気がした。私の探究心に再び火がついた。

次に私は留学先としてアメリカではなく英国を選んだ。アメリカはまだ変形文法が力を持っていた。現代の言語学は一九三〇年代に出されたチャールズ・モリスの理論によって三つの分野に分かれて進められていた。すなわち、言語構造に関する統語論と、意味論と、言語運用のルールに関する語用論である。変形文法の研究は主に統語論の分野を軸足としており、それに対してランカスター大学のリーチ教授は語用論の分野を進んでいた。当時リーチ教授は丁

寧表現の研究をしていた。私はブリティッシュ・カウンスルの奨学金を受けて、ランカスター大学の言語学部に籍を置いた。

幸いにランカスター大学の雰囲気が新しい道への扉を開いてくれた。それはブリティッシュ・カウンスルの計らいだったのだが、私は自由に好きな授業を受ける権利を認められていた。だから言語学部のほかに哲学部や宗教学部やシステム工学部などのクラスを覗くことが出来た。もう一つの良かった点は、レポートを提出する必要が無かったことだった。レポート提出が必要な場合は、一つのテーマに絞る必要があり、広い視野に遊ぶ余裕を失う可能性がある。私は学問のパラダイスのような環境で、自由に発想の翼を遊ばせることが出来たのである。哲学部で受けた授業がヒントになって、私が捜し求めていた俳諧普遍文法は実は哲学部に属する研究であることに気がついた。私はアメリカの南イリノイ大学哲学部のマーク・ジョンソン教授はスタンフォード大学の認知科学プロジェクトでレイコフ教授とチームを組んでいた哲学者で、カントの専門家である。ジョン

ソン教授から哲学部に入学を許可するという返事が来た。

記号学：パースと空海

南イリノイ大学はアメリカにおけるプラグマティズムの研究拠点となっていた。プラグマティズムを代表する哲学者で、日本でよく知られている人は、ウイリアム・ジェイムズとジョン・デューイだが、その二人の本家とも言うべき哲学者がチャールズ・S・パースである。南イリノイ大学哲学部にはプラグマティズムの専門家が数人集まっていた。パースの著作を読むクラスを三つほど取ったときに、俳諧普遍文法への手ごたえを感じた。パースのプラグマティズムの中核は記号学であり、パース自身がプラグマティズムは記号学であるとしている。実はパースはカントを徹底的に研究しており、その記号学は、アリストテレスからカントまで変わらなかった論理学を高度に発展させたものである。プラグマティズムの語根であるプラグマタは、実はカントが使った言葉であった。

パースの記号学では、宇宙の全ての存在は一次性・二次性・三次性の三つのカテゴリーで説明できるとする。一次

性は可能性の存在モード。それは心理的とか経験的ではなくて、論理的なモードである。例えば地震というものは、実際発生しなくても可能性として存在する。その可能性は感覚で感じるものではなく論理で分かるものであり、それが実在するからこそ保険も存在するのだ。二次性は現象のモードで、すべての現象が一回きりしか起きることが無い。同じようなことが何度も繰り返し起きると感じるのは、人間がそのように理解するからであり、その法則性が三次性である。法則性を見つけることによって、同じ状況で起こりうる未来の現象を予測することが可能になる。

物事の存在モードをこのように三つのカテゴリーで説明するのは、ちょうど金剛界曼荼羅に似ている。私は空海の論文を調べてみた。最初の留学でコロンビア大学に初めて行った時、高野山大学から来ておられた羽毛田吉人教授に偶然廊下で出会って、入学に際して有難いご指導を受けたことがある。その羽毛田教授が英訳した空海論文集を私は手元に持っていた。英訳された八つの論文の中に「声字実相義」がある。しょうじじっそうぎ、と読むのだが、それだけでは意味が分かりにくい。しかし英訳にすると分かりやすいのだ。それは英語では「The Meanings of Sound, Word, and Reality」となっている。つまりこの論文は、音声と文字と実在の三つのカテゴリーの関係を説いた、密教的記号論なのだ。声は音声から宇宙の波動までを含み、字は言語記号から眼耳鼻舌身意の対象すべてに渡る。それは宇宙全体を記号の海と見る考えだ。パースと空海の記号の範囲は見事に一致している。真言密教によると、宇宙の真理は、神の言葉である陀羅尼と同じように人間の言葉によっても表現可能であるとする。真言と俗言に真理を表現する共通性を認めたところに空海の理論の独自性がある。これによって和歌陀羅尼論が生まれた。すなわち、人間の言葉で作る和歌も陀羅尼と同じように真理を表現することが出来るという、論理的根拠となった。この血脈は心敬僧都によって連歌にも繋がれた。

連句パフォーマンスのことを書くつもりでしたが、俳諧普遍文法の端緒にたどり着いたところで紙数が尽きました。今回は河内音頭のように前置きだけで終わることになりました。後半は、そこが本論なのですが、またの機会に譲ることにさせていただきます。今年六月にイタリアで連句

パフォーマンスの話をする予定ですから、次の機会があればその報告も入れさせていただきたいと思います。

（成蹊大学教授）

平成十九年の連句界

宮下太郎

連句の心は「風」、連句の付け合いは「風交」とも言われてきたがこれは風の持つ特性が心と似ているということでもあろうか。思いつくままに並べてみても風雅、風流、風水、風土、風景、風物、風光、風合、風化、風格、風狂、風月、風采、風信、風騒といろいろあるが、風はどうやら昔から人の心を運ぶものととらえられていたようである。連句は心のやりとりとも言え、連歌の時代から我国独自の座の文芸として、個の成果よりも共同の成果を重んじてきたところでもある。今日、人と人とのコミュニケーションの大切さが言われるとき、その原点とも言うべきものが連句のやりとりにあるのではないか。自分を離れて他者の心をも思う、共生の文芸ともいうべき連句がようやく世に認知されかかっているような気がする。

連句グループは年鑑に登録されているだけで二百八十あまり、それぞれに規模の大小があり、当然のことだが式目もそれぞれである。そうした連句グループの垣根を越えての「付け合い」が国民文化祭のような大規模なものを始め各地でオープンに行われることが多くなり「風交」を交わす機会も多くなった。そこには横に流れる風のように働く心の交流の場が出来るということでもある。一座には捌きのタクトが必要なのだが、連衆同士もまたそこで共生の心を楽しみ、新しい連句の縁が生まれるというのはうれしいことではないか。

さて、今回もまた連句協会報の、主として「俳海往来」の記事を参考に、一年を振り返ってみることにしよう。

まず、二月刊の協会報の巻頭、磯直道氏の「国民文化祭・連句大会」の中学生の実作と題する文章にもあるように、このところ各地の大会に高校生を主とする参加が見られるようになった。この傾向は三月総会での大学生、十一月の茨城プレ大会に於ける高校生の参加に見られるように今後も続いていくものと思われる。富山県においても「井

波高校連句教室ノート」が刊行された。

三月二十五日、日本青年館に於いて第二十六回、連句協会総会ならびに連句大会を開催、二十五席の連句の座。

町田市文学館ではこの一月から三月にかけて連句入門講座を開講、前年に開催した連句シンポジウムに続くもの。

宇咲冬男氏は「俳句朝日」三月号に「連句入門・・俳句の基礎は俳諧を知ること」と題して文章を執筆。

四月二十九日、愛媛「俵口全国連句大会」が、同日館林連句大会がそれぞれ開催された。

五月四日、伊勢原市洞昌院に於いて「第十一回心敬忌」が行われ法要後、八席に分かれて連句会。

同十三日、赤坂島根インに於いて式田和子さん三回忌の連句会が開かれ十席の座で故人を偲んだ。

六月一日国島十雨氏が逝去された。岐阜県に根拠を置く獅子門道統を長く務められた。連句協会副会長のち顧問。享年九十三。

六月三日、筑西市スピカで第四回茨城県連句大会が開催された。全十席、下館一高の生徒の参加もあった。

六月十七日、浅草伝法院大書院に於いて第十九回青時雨忌が開催された。正式俳諧の後、八席で連句興行。

この六月、改定版「芭蕉語彙」が刊行された。宇田零雨著、東浦佳子編著。一五九八ページの労作。

「くさくき歳時記」初版がこの六月刊行された。

別所真紀子さんは「数ならぬ身となな思いそ」を新人物往来社より上梓。若き日の芭蕉と寿貞を描く。

品川鈴子さんは「鈴子の鈴語り」を神戸新聞出版センターより上梓。「グロッケ」に連載したエッセイが中心。

俳句と連句を両輪とする「筑波」はこの七月、十周年記念号を刊行。引地冬樹氏の俳話特集など百ページ。

「八千草」はこの夏「創刊十周年記念特集号」を刊行。主宰の山元志津香さんは俳句と連句の両輪を続けてこられた。

九月七日、新庄市市民プラザに於いて第十九回全国連句新庄大会が開催された。募吟入賞作品表彰後、連句会。

九月二十四日、江東区芭蕉記念館に於いて抱虚庵襲号記念披露の会と連句会が開催された。土屋実郎氏から和田忠勝氏が継承されたもの。

この秋、平成十九年版「連句年鑑」が刊行された。昭和

五十七年の創刊から本年で二十六巻目となる。

連句誌「れぎおん」はこの秋で通巻五十五号を迎えた。神戸の前田圭衛子さん編集発行。連歌にもページを割く。

十月十二日、伊賀市俳聖殿に於いて第六十一回、芭蕉祭が開催された。連句部門の表彰もあり前日は市内で連句会。

第十九回「さきたま連句大会」が十月十四日、川口そごうダリヤルームにて開催された。募吟入選作品の表彰後、十一の席で歌仙を巻きすすめた。

「第七回とよたキャンパス連句祭り」が十月二十七日、桜花学園大学で開催された。全国高校付け句コンクールに一万五千を超える応募があった。矢崎　藍さんの選。

十一月三日「国民文化祭連句大会」が徳島市東急インにおいて開催された。募吟表彰に続き高橋睦郎氏の講演、ついで四十九席に分かれて連句を楽しんだ。小学生、中学生、高校生の席も設けられた。

十一月十八日、茨城県筑西市コミュニティプラザに於いて国民文化祭プレ大会が開催された。約百名が参集、講演のあと十九席に分かれ連句を楽しんだ。

平成連句競詠二〇〇七年「連句文芸賞」発表連句会が、十一月二十四日、亀戸アンフェリシオンで開催された。

十一月二十五日、防府市毛利本邸にて「第一回山口県総合芸術文化祭・連句大会」が開催され、十一席で連句を楽しんだ。前年の連句大会を引き継いだイベント。

十二月九日、東京文化会館ホールにて第三十四回「俳諧時雨忌」が開催された。八席に分かれ翁の句を発句に連句を楽しんだ。連句大会としては最も歴史のある会。

年の暮、三省堂より「十七季」第二版が刊行された。

平成十九年　連句行事一覧表

月	日	協会行事	諸行事
1	27	常任理事会（日本青年館）	
2	1	「協会報」154号発行	
3	3	理事会（日本青年館）	
	25	第26回総会全国大会	
4	1	「協会報」155号発行	4／29　俵口連句大会（松山） 4／29　館林連句大会
5	12	理事会（日本青年館）	5／4　伊勢原心敬忌連句大会
	23	国民文化祭説明会（文化庁）	
6	1	「協会報」156号発行	6／3　筑西連句大会 6／17　青時雨忌連句大会
7	7	常任理事会（日本青年館）	
8	1	「協会報」157号発行	
9	1	常任理事会（日本青年館）	9／7　全国新庄連句大会（新庄） 9／24　抱虚庵襲号記念連句大会
	25	平成19年版「連句年鑑」発行	
10	1	「協会報」158号発行	10／12　芭蕉祭（伊賀上野） 10／14　さきたま連句大会
11	3	国民文化祭「徳島」連句大会	11／24　平成連句競詠発表連句会 11／25　やまぐち連句大会（防府） 11／27　とよた連句まつり
	17	理事会（日本青年館）	
	18	国民文化祭「茨城」プレ大会	
12	1	「協会報」159号発行	12／9　俳諧時雨忌連句大会（上野）

作品

—連句グループ五十音順

歌仙『氷山の崩壊』

寒風や気づけば我も怒涛なる　川野蓼艸捌
プラットフォームに満つる歳晩　篠見那智
白鳥の一点となり消え果てて　瀬間文乃
思索の末の行きつ戻りつ　川野蓼艸
月見酒動かぬままの古時計　志治美世子
菊枕して過ごす屋根裏　市川千年
ウサーカスのテントに木の実降り積もり　千年乃
夢の女人は人知れずこそ　智乃
草原に小面をつけ待ち伏せる　瀬間文乃
壁の向かうに抜ける打釘　川野蓼艸
氷山の崩壊青を散らしつつ　志治美世子
廃墟の街に住みて幾年　市川千年
夏の月顔に目鼻のなき者の来　千年乃
キリスト像に金雀枝をかけ　智乃
遥かなる国より戦火飛びきたる　瀬間文乃
各駅停車まだ発たぬなり　川野蓼艸
花吹雪吾が幻の宴消す　志治美世子
猟師の腰の雉の揺れつつ　市川千年
寝ころびし遍路二人はかく語りき　千年乃
憂鬱を抱き目借時買ふ　智乃
ため息をついてもまだ他国　瀬間文乃
書を捨てて会ふ姉の裸身よ　川野蓼艸
草隠れ仏性もてる蛇の愛　志治美世子
黒髪閉ざす夏の館を　市川千年
OH！と口広げてヴィデオ終了し　千年乃
外反拇趾が朝市に行く　〃智
亡骸を砂丘の雪に埋めるなり　〃子
恙なしや古の人　千年乃
淀川と淡海を照らす望の月　智乃
べつたら市の賑ひをゆく　瀬間文乃
秋草の散る小紋なり躙口　川野蓼艸
高々と声あげて施頭歌　志治美世子
足ごとに寄せる波をば消してけり　千年乃
海亀ゆるり返す未来へ　智乃
狂ふことのみの残りし花万朶　瀬間文乃
指文字ばかりで過ごす永き日　川野蓼艸

平成十九年十二月二十三日首尾
（於・西荻窪「遊空間」）

歌仙『今朝の冬』

遠富士に茜さしたる今朝の冬　引地冬樹
　とりわけ高き大根干す棚　田中雅子
保育所の子らの散歩は賑やかに　大内善一
　新しき靴揃う玄関　鈴木光枝
月の夜に太鼓の稽古切りもなき　渡部春水
　敬老日とて孫の声聞く　山崎捷子
ウひらり来て胸に刺さるる赤い羽根　磯直道
　若くて逝きし妻の面影　田中雅子
野に出でて君の待たるる夢を見て　大内善一
　磐越線を歩く羚羊　鈴木光枝
気象図に雨雲ゆると流れきて　渡部春水
　きれいに削るBの鉛筆　山崎捷子
一夜づけ蚊遣の匂い宿題し　磯直道
　火蛾が飛び込むゴキブリが這う　田中雅子
行水の月にさらせる刀きず　大内善一
　昔のことは決して語らぬ　鈴木光枝
皇居指す楠公像に花吹雪　渡部春水
　信号を待つ遠足の列　山崎捷子
ナオいつの間に寺の廂に小鳥の巣　磯直道
　子等の稽古の竹刀しなりて　田中雅子
足と手に絆創膏の白いこと　大内善一
　飯盒囲む一家団欒　鈴木光枝
星三つ六人乗りのエコカーに　渡部春水
　ほろ市で買うう筈はたきと　山崎捷子
雪吊りの匠の技の見事なる　磯直道
　角刈り似合う粋な青年　田中雅子
密会のことは誰にも知られずに　大内善一
　札束重き選挙活動　鈴木光枝
敗軍の将が影引く盆の月　渡部春水
　林檎の里に立つ磨崖仏　山崎捷子
ナウ爽やかに草原走る馬の群　磯直道
　父母に友にと絵手紙を出し　田中雅子
はじめてのモンマルトルの坂の道　大内善一
　北窓開く丘の教会　鈴木光枝
花影の映れるダムに歌ひびき　渡部春水
　後立山笑い昼酒　山崎捷子

付廻し

平成十八年十二月十八日首
平成十九年十月十四日尾　（文音）

注「会津の会」は福島や会津に関係する方々の超結社の会です。関連ある方々のご参加をお待ちしております。（問合せ先　磯　直道）

半歌仙　『囀り』

八島美枝子捌

囀りの毬かがるごと移りゆく　　故有馬籌子
うから車座頒つ草餅　　八島美枝子
春障子ひと日静もる家居にて　　長谷部みつ子
いつもの刻にピアノレッスン　　内山英子
月仰ぐ語る人なき句三昧　　会沢宏子
幾何模様なる刈田拡がり　　丸尾智恵
赤とんぼ予定を記す級会　　石元政子
とつさに浮かぶあの人の顔　　宏子
気に入りの代官山のブティックへ　　美枝子
昼かと紛ふ若者の街　　みつ子
神官の祓ひの幣に肩並べ　　みつ子
そば屋の暖簾もるる民謡　　英子
屋形船七橋くぐる夏の月　　宏子
驟雨に濡れし赤松の幹　　政子
一病のいつか遠退き身の軽し　　英子
シルバー族へ旅の誘ひ　　美枝子
隧道を抜けて忽ち飛花落花　　智恵
廻る月日に軒燕来て　　みつ子

平成十九年二月二日首
平成十九年五月十日尾

（於・八島美枝子宅）

短歌行　『番外地』

山元志津香捌

葭切や隠沼といふ番外地　山元志津香
　坐りごちよき南風の切株　中野英歩
名教授カイゼル髭をなで上げて　芦川まり
　袖机にはココアあつあつ　桑原泰子
ウ天平の甍を照らす寒の月　真木早苗
　卑弥呼はもしや雪女郎かも　山元志津香
うかつにも友の名を呼ぶ妻の声　花島みゆき
　慕ふ心をゆるす十字架　歩
フォークダンスの輪に秋のゆく　り
ナウ帽深く大正ロマン神谷ＢＡＲ　苗
　ぱらぱらめくる皮の歳時記　泰
繚乱の花を映して湖閑か　き
　魁夷の「道」は遥かかぎろい　香

ナオ汕頭（スワトウ）のランチョンマット麗かに　香
　蛸どこにあるたこ焼の味　苗
どうなるの自由・民主の一騎打　泰
　氏神在す注連の古びし　り
思ひ出は父に抱かれ乗りし馬　き
　つまくれなゐで染めし唇もと　苗
待宵の少女はおんな匂はせて　泰
　フォークダンスの輪に秋のゆく　歩
ナウ帽深く大正ロマン神谷ＢＡＲ　香
　ぱらぱらめくる皮の歳時記　り
繚乱の花を映して湖閑か　歩
　魁夷の「道」は遥かかぎろい　香

平成十九年八月一日首尾
（於・豊島区立産業プラザ）

半歌仙　『明治おんな』

芦川まり捌

木炭画の明治おんなや秋の翳　芦川まり
運河に良夜めでる曳船　山元志津香
デパ地下で松茸おこわ買いもして　花島みゆき
震度四など知らぬ存ぜぬ　真木早苗
息災の白寿の笑みのころころと　山下升子
華やぎし夢たたむ凍蝶　中野英歩
ウペチカ燃え揺籃の嬰めざめおり　桑原泰子
外貨コインの溜まる空壜　香歩
付ききりの看護も終り後釜に　升子
ちらつかせてる鹿の子の襦袢　苗
朝な夕な口づけだけのお義理です　升香
レトロの都電ゆらりゆらりと　香歩
教会の窓いっぱいに冬満月　り
師走の第九おばさんばかり　き
独り酒われパソコンと会話中　苗
去勢の雄に媚をうる猫　升
造幣局花の大賞まなかいに　香
新入社員ポロのネクタイ　歩
き　苗

平成十九年十月二十日首尾
（於・豊島区立産業プラザ）

『新緑に』

順候式
歌仙

(オ)起 新緑に圧倒されし静寂かな　佐々木彩女捌
　ひたすら歩く蟻の行列　佐々木彩女
　抜きん出た才覚を持ち学長に　宇咲冬男
　ひらりひらりと人混みをゆく　渡部春水
　おのずから今宵の月は格のあり　寺田順
　オカリナめける渓の秋川　次山和子
(ウ)承 巡礼を果してほっと冬隣　宮脇美智子
　机の上に源氏千年　戸田徳子
　筆選び紙選びては文を書く　竹本いくこ
　髪のほつれにきぬぎぬの情　彩女
　いつしかに解けゆくものの軒つらら　順男
　寒月に浮くマッターホルン　冬水
　物憂げなベルリオーズの弦響き　美智子
　庭のベンチはペンキ塗り立て　春子
　五つ子の呼び名間違いいて苦笑　和子
　いってもどってまた元の位置　い
　繚乱の花の真下に酔いつぶれ　順
　百囀りの午後の眩しさ　春
(ナオ)転 不可思議なことのひとつに昼気楼　和
　理数科ダメな今の学生　美
　平成に名前負けする体たらく　春
　禊の川に埋もる流木　彩
　氏素姓調べもせずに好きになり　春
　潰れんばかり胸しだかれて　徳
　熱帯夜性の転換すんなりと　彩
　金魚鉢にはグッピーの群れ　美
　下町の職人すでに七代目　美
　狂いを見せぬ城の石垣　順
　有明の月に名残りの寝台車　徳
　零余子ごはんに母想い出し　い
(ナウ)結 小径来て爽やかに聞く滝の音　冬
　二十四色キャンバスに乗せ　和
　リフォームにリビング拡げ悠々と　〃
　商店街の急に賑やか　春
　子取ろ唄かすかに聞こゆ帰り花　順
　野山はるかに雪の寒晴れ　彩
　平成十九年五月九日首　冬
　平成十九年六月十三日尾
　（於・東京内幸町日本記者クラブサロン）

十八韻順候式雪月花　『啓　蟄　や』

渡部春水捌

(オ)起　啓蟄や改訂を待つ季語辞典　　渡部春水
　剪定すみし庭の清々　　次山和子
　快活な若者あふる街に出て　　戸田徳子
　身をひるがえすエンゼルフィッシュ　　寺田順
(ウ)承　雲切れし嶺に雪渓姿見せ　　宮脇美智子
　想い描きしヨーデルの主　　徳
　網タイツワインの酔いにからませり　　和
　性転換のできるこの頃　　美
　名刹で口をすすぎて合掌す　　順
　萩のこぼるる坂の生垣　　順
(ナオ)転　月仰ぐ朔太郎の詩諳じつつ　　和
　格差社会を正す術なし　　和
　大枯野四輪駆動疾走す　　春
　のっぺい汁に楽し車座　　和
　しりとりは幼き子等に歯がたたず　　徳
　尻尾を振ってまといつく犬　　和
(ナウ)結　花守は村一番のお年寄　　順
　おぼろおぼろにおちこちの鐘　　美

平成二十年五月十四日首尾
（於・東京内幸町日本記者クラブサロン）

順候式
歌仙　『水陽炎』

宇咲冬男捌

起(オ)水陽炎音なくすべるゴンドラへ　宇咲冬男
　春興ともにあの日永遠し　白石かずこ
アトリエに紅梅どさと活けられて　山司英子
　うつらうつらと眠る三毛猫　川上綾子
夏の月野をゆくかぎり照り続け　金田叡豊
　アロハのシャツのまこと鮮やか　菱沼真彦
承(ウ)何もかも終ってみれば秋隣　後藤典雄
　ロボコン競技きりもなかりし　豊
颯爽とマニキュアをしてペディキュア　綾
　つのる思いを見て見ぬふりす　かおる
ふたりして出雲大社の護符を持ち　冬男
　波の鎮もる白兎海岸　典
児の好きな絵本読みやり涼新た　豊
　ハープの調べ誘う月の出　綾
芒原北斎の筆走りおり　英子
　詩作のときにソウル入り込み　真彦
日覚めれば生きて在りしよ帰り花　かおる
　ひねもす羽根を打ちて楽しき　典
転(オ)大雪にまみれまみれて泣き笑い　豊
　ころがって行く荒川の土手　綾
宗匠の地球一周旅にでる　真彦
　番所の跡は古美術館に　英子
人魚姫さも濡れるよな腰の揺れ　かおる
　抱き寄せて遂ぐ白蝶の夢　典
酒ほろと口移し飲み月おぼろ　冬男
　ドンキホーテの風車廻れよ　かおる
千体の稚子地蔵の崖に立ち　英子
　ローン苦しと善良な人　真彦
光圀のいっ喝葵紋どころ　綾
　日本国中蝉が席捲　豊
結(ウ)全天の星きらめけるパリー祭　かおる
　けん玉遊びヨーヨー遊び　典
小津映画お手本にして作ります　英子
　世界にキッスサラエボの美女　かおる
満目に秋を展げる花紅葉　冬男
　笑う門には名残狂言　豊

執筆

平成十九年九月三十日首尾
（於・上野・東京文化会館）

十八韻順候式雪月花　『鬼やんま』

角田双柿捌

(オ)起　青春の日々めくるめく鬼やんま　角田双柿
掬いてこぼす手作りの胡麻　桜井つばな
荒磯の巌に波の高鳴りて　新井正子
手際よく剥く牡蠣鍋の牡蠣　今泉房枝
(ウ)承　宿の灯に迷い込みたるはぐれ雪　つ
酔うて危うしタンゴのリズム　房
目覚めれば左の指にあるダイヤ　正
子育て支援頼る若妻　つ
郊外のアウトレットの超人気　房
苗木を植えてほっと一息　正
(ナオ)転　遍路杖引き来し嶺に月かかり　つ
スポット雑誌開かれしまま　房
夏風邪の喉に氷のひと欠片　正
四川の地震トップニュースに　つ
整然とリレー待たるる聖火の炎　房
平和に見ゆる里は無医村　正
(ナウ)結　さいはての天と交差す大花野　双
湧いてはめぐる鳥雲の渦　執筆

平成二十年五月二十二日首尾
（於・さいたま市立常盤公民館）

歌仙『どんど火の』

白根順子捌

(オ)起 どんど火の果つや太古の星の数　白根順子
　犬が尾を振る松過ぎの浜　次山和子
　ラジオより第一体操聞こえきて　野口きみ子
　長寿の国となりし日本　三澤律乃
　良夜なるルーペの下の文字おどり　篠崎ゆき
(ウ)承 爽やかにオープンイタリア料理店　律
　シロガネーゼのセレブ集まる　順
　社長より画家より外科医狙い撃ち　ゆ
　ＤＮＡがぴったりですの　和
　寝室の香港フラワー色褪せて　律
　ピアノぽろんとケセラセラ弾く　律
　夏の月欅大樹の見え隠れ　順
　吊橋渡り目指す雪渓　和
　竹筒の地酒とくとく持てなさる　律
　まっすぐ行くと仁和寺の塔　ゆ
　ぬかずけば肩に背に降る花の屑　き
　風船売りが飛ばす風船　ゆ
(ナオ)転 清明の朝に駅伝スタートし　き
　新商品のドリンク各種　ゃ
　いまどきは女子高生がモニターで　和
　筋肉質に彼をしてやる　律
　なんとまあマスクはずして口づけし　和
　注射効かないインフルエンザ　律
　掲示板じっと食い入る死亡記事　ゆ
　政治に欲しい勘助の知恵　和
　イギリスへ新型列車輸出とか　き
　夢を追いゆくことのたのしさ　律
　きらきらと月の雫に濡るる原　和
　邯鄲の鳴く人工の町　ゆ
(ナウ)結 柔道着干されし竿に木の実落つ　ゃ
　千本鳥居くぐる幼児　和
　雨の日はアロマオイルを燻らせて　ゆ
　春の灯に白画像を描く　和
　花の虹大荒川の滔滔と　律
　暮れかねている遠き山やま　き

平成二十年一月十三日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『神輿もむ』

三枝正子捌

(起)神輿もむは女や江戸のどまんなか　三枝正子
　(オ)軒に顔出し啼ける子燕　中野稔子
夢のせて轆轤ゆるゆる廻るらん　竹本いくこ
　一等賞は俵一俵　栗原英甫
月の夜は森の妖精笛を吹く　新井世紫
　瓢大きな影を落せり　正
(ウ)承酒蔵に積上げらるる新走り　稔
　傘寿を祝う眼うるわし　稔
初恋の老いと逢いたる旅の宿　い
　さばさばと飲むブラックコーヒー　英
ボヘミアンネクタイのひと振り向かず　正
　汽笛がひとつ船の出航　世
見上ぐれば不覚の風邪に月淡く　世
　ピアフの歌のしみじみと冴ゆ　い
着々とデジタル化するテレビジョン　正
　いにしえ求め未来を求め　英
旅ゆけば万葉古道花吹雪　稔
　寝坊の墓はやっと目覚める　い
(ナオ)転逃げ水を追いて追いゆくフェアレディ　世
　(ナウ)結稲架かけの穂先重たき幸せよ　い
クリーム色のフリル前掛　英
　パテシエのさらさら振うメリケン粉　稔
ひばりの声の結ぶあめつち　い
　吉原の五人吉三の花の土手　正
蛇の目くるくるまわす惜春　英

平成十九年九月三十日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『捨子花』

高尾秀四郎捌

(起)捨子花赤さは弱さかも知れぬ　高尾秀四郎
(オ)九十九折より仄と夕月　江森京香
地芝居の稽古に熱をいれすぎて　渡部春水
坊主頭をつるりてんてん　矢倉澄子
一徹を貫き通し枯岬　関根雪子
古き友より寒見舞来し　秀京
(承)(ウ)リビングに玩具散らかる大家族　〃澄
靴下の穴そっと隠せる　澄春
中吉のおみくじ深くたたみこみ　春秀
ほくろの誘う恥じらいの肌　秀京
遅咲きのこよなき縁ぴったりと　京澄
波にさらわる鳥のあし跡　澄雪
金魚玉斜めに月の差し込めり　雪澄
檜の風呂で冷酒たしなむ　澄春
晩成の二代目首相群馬から　春京
樽を叩いて盛り上がる宴　京秀
天守より栄華を偲ぶ梅の城　秀春
過疎の盆地に霞たなびく　春京
(転)(オ)鶴帰る苛め虐待なき国へ　京春
涙をさそう厚き包帯　春秀
起き上がり小法師幾たび転びても　秀澄
路地の奥より爪弾きの音　澄京
狸汁人を化かしてみるもよし　京雪
木の葉髪にも降りし艶聞　雪京
道ならぬ恋の残り香ある部屋に　京春
仏の指の欠けし暗闇　春澄
MLB大和魂奮い立ち　澄京
血液型はみんな〇型　京雪
名月をぐるりと「かぐや」偵察す　雪春
文士の墓で鳴くは蟋蟀　春澄
(結)(ナウ)対岸は浅草の灯よ夜業果つ　澄澄
オペラの主役若やぎし声　京京
青春は気の持ちようと思いたく　秀秀
鶯餅を山盛りにして　雪雪
何となく思いの深き里の花　澄澄
櫂の雫も揃うレガッタ　春春

平成十九年九月三十日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『嶺澄みぬ』

高橋たかえ捌

(オ)起 隼の翔くれば秩父の嶺澄みぬ　高橋たかえ
　冬芽ふくらむ寛ぎの道　樋田初子
　ハイカーの色とりどりに装いて　宮本艶子
　話上手が苑に集合　宮脇美智子
(ウ)承 煌きのなかに翳ある望の月　初
　野川さらさら流れ爽やか　松澤晴美
　クレーンで大鍋据えし芋煮会　艶
　包丁さばく逞しき腕　晴
　細帯をこじゃれた男結びにし　初
　小さき黒子の忘れられない　美
　庭稲荷祀るふるさと遠くせり　美
　民営となる郵政事業　艶
　夏の霜コロボックルの出でし頃　晴
　北の耕地に西瓜ごろごろ　晴
　新薬の先ずは胃薬買い求め　初
　SL走るカメラスポット　美
　咲くもよし散るも又よし花の雲　美
　影やわらかき春のともし灯　艶
(ナオ)転 鐘供養玉三郎の艶姿　晴
　吐息まじりに酌み交わす美酒　美
　自販機にあまたタバコを揃え置き　初
　コイン占いわけしりの仲　艶
　絨毯に寒さを落とすイヤリング　た
　雪しんしんと刻の降り積む　美
　選ばれて世界遺産となりし間歩　艶
　祖母の形見の銀の簪　艶
　戯れの壁のらくがき消しかねて　初
　ゴスペルソングもるる教会　美
　丸き窓立待月の匂やかに　艶
　佇む鹿のみごとなる角　た
(ナウ)結 ブランドのシャツも哀れげ捨案山子　艶
　あれやこれやと村のイベント　初
　ぽつぽつと路地を濡らせる通り雨　美
　夜の厨に浅蜊舌出す　美
　トンネルをぬけて万朶の花に逢う　た
　岬のどかに巡り来る船　艶

平成十九年十一月一日首尾
（於・上野・東京文化会館）

十八韻順候式雪月花　『踏み入るや』

川岸富貴捌

(起)踏み入るや田鳧は谷地に声残し　川岸富貴
(オ)根張りたしかな冬草の青　高橋たかえ
駄菓子屋は児等のたまり場にぎやかに　伊藤稜志
しゃぼん玉吹く頬のふくらみ　山司英子
(承)(ウ)淡雪の雲影をのせ滲みたる　白根順子
粋な蛇の目をさしかける女　関根雪子
演じてるつもりが肌を許し合い　栗原英甫
ミステリアスな心中を解く　江森京香
外交の一翼担うパンダいて　稜志
「夜来香」の歌の涼やか　英子
(転)(ナオ)月の出に神輿の前で酌むお酒　京子
親ばなれする時を窺い　順子
自画像にメタボを隠し美術展　稜志
コスモスの束風をたっぷり　雪子
ひと振りで逆転サヨナラホームラン　甫
思うようにはならぬ人生　たかえ
(結)(ナウ)海やまの色に染まらず返り花　冨貴
大和万歳みんな喝采　順

平成二十年二月一日首尾
（於・熊谷市障害者福祉センター）

歌仙『去年今年』

芹田恵子捌

無事ゆゑの代り映え無き去年今年　厚子
　窓開け放ち仰ぐ初空　似智子
観光船青き水面を滑るらん　朱鷺子
　恩師を囲む華やかな声　正行
春月に語りつきない深夜まで　泰子
　まどろむ園児顔ののどらかさ　宏
ウさまざまな梅咲きほこる小田原城　道代
　俳句仲間じゃだめだっあの女(ひと)　穂
戯れがいつか本気の深い仲　義
　風の吹くままハンモック揺れ　宏
政敵の国替へ決まり髪洗ふ　桂子
　一喜一憂婆の行く末　一輝
姿よき大樹の枝に月留まり　多加子
　またたび嗅がせ猫じゃらす奴　厚子
秋めくも素直になれぬ温暖化　似智子
　勧め上手に酔ったふりして　朱鷺子
爛漫の花に明るし社務所裏　恵子
　夢の如くに現れし蝶々　ナオ(一)
斉にとばす風船散らす色　恵子
　イージス艦は命守れぬ　良子
文房で読書三昧日の暮れて　正行
　腕立て伏せの記録更新　泰子
その技は大人顔負け寒稽古　輝子
　石油高騰出番湯タンポ　宏子
古財布空になれども捨て難く　多加子
　気がつけば居る糟糠の妻　桂子
愛し方ここに至るも疑はれ　〃
　トレンディドラマ熱心に見る　明子
くり返しエチュード流れ小望月　よ
　洋皿に盛る庭の富有柿　代
ナウ運動会組体操は総崩れ　初沢弘文
　ふくれっ面もシャッターチャンス　瑞
スニーカー防犯見廻りきびきびと　岩田爾瑠
　骨董店で値切る信楽　朱恵
築山の花に遊べる鳩の群れ　清川みゆき
　幽かにひびくお遍路の鈴

平成二十年一月三十一日首
平成二十年四月五日尾　（文音）

歌仙『煮魚の』

篠原正行捌

煮魚の生薑多目に入梅かな　篠原正行
　あやめしつとり濡れる軒下　大谷似智子
読書会愛読の書を持ち寄りて　橘朱鷺子
　世界にひびくバリトンの声　浜口泰子
灯消し窓ごしに愛づ寝待月　酒匂道代
　里のはづれに捨案山子あり　清川みゆき
ウハリケーンもう来ないでと怯える児　内山良子
　西部の男乗り廻す馬　朱
一豊の妻になりたいひとりごと　似
　まさかまさかで射止められたる　良
大儲けしたが失くした人間味　泰
　ブルーに染まるサポーター席　道
空つ風月もかけ足旅の道　み
　のれんくぐりて先づは熱燗　似
剣玉は俺のおはこと主言ひ　朱
　住職さんは読書三昧　良
濃く薄く花の並木は夕暮れて　泰
　春のスカーフ肩になびかせ　厚
ナオ息を飲む殿様蛙田の畦に　良
　引越好きの画家の労作　朱
そちこちのお国訛りの面白さ　厚子
　日本丸の舵取りは誰　吉浜ます子
鉄を打つ音朗然と朝涼し　奈良岡瑞穂
　汗水流し句碑の拓本　本間昭雄
どこやらか昼餉のカレー芳しく　中川アイ
　燃える思ひの本音明かさず　本間泰義
手を貸して塩瀬の帯を結ぶ宿　加藤文子
　テポドン二号ニュース相つぐ　吉谷義次
バザールの上に清月掛かりをり　関口博美
　追へばまたくるる憎き溢蚊　厚
ナウ青年が晴れ技競ふ村芝居　泰
　鎮守の杜に戻る静寂　道
丘の上アートの堂宇出来るらし　み
　夢が叶ひて側に公園　似
花のもと粋な着こなしたをやかに　行
　紫煙ゆるりと縁はうららか　ま

平成十九年六月十三日首
平成十九年七月二十六日尾　（ナオ三より文音）
（於・大和市中央林間連合自治会館）

歌仙『電飾の街』

山村としお捌

街々に電飾流行る師走かな　山村としお
　舞う風花を手にすくう子ら　片山妙子
カフェテラス馴染みの顔がそろい来て　町野とし子
　機械任せのサッカーくじ買う　奥田雅生
二代目のかぐや姫ゆく月の許　杉本従子
　いろあでやかな濃紅葉の山　としこ
黒幕で生涯閉ざす暮れの秋　雅
　会社狂わす妻のおねだり　従
小銭入れ出してちらちらどけち振り　妙
　仲人口で出世株だと　〃
清水の大舞台から飛ぶ覚悟　従
　使いこなさぬ携帯電話　〃
明けの月蚊遣火こもる山の小屋　妙
　頃合もよし串で焼く鮎　雅
碁も酒も自称大物ばかりいて　妙
　偽装発覚平身低頭　従
落慶の甍にかかる朧月　〃
　春を燈して大路華やぐ　妙
八朔を剥きて溢るる香にむせて　〃
　しこりの残る原産地名　山村勝子
チベットの五千米列車ゆく　としお
　衒を返す若人の歌　妙
口へらぬ良き仲間らの福笑い　としお
　第二就職願う初絵馬　勝
メタボリック箒に乗れぬ魔女とやら　妙
　つれないそぶり負げず認む　勝
共枕慣れぬ朝の眩しくて　としお
　博士課程にオタク席置く　妙
煌きの主都遠くして月の美し　としお
　名残の茶事に入れし野菊　妙
身にしむる首相引退支えなく　勝
　シニアは貰えぬゴールド免許　としお
甦る源氏絵巻の豪華版　妙
　何も語らず流る宇治川　としお
舞う風車万朶の花を車窓に見　勝
　雲一つ無く遊ぶ雲雀野　妙

平成十九年　九月　十日首
平成十九年十二月十八日尾
（於・上野西部公民館）

歌仙『筏の音』

高台の筏（おさ）の音涼し通し土間　　片山妙子捌
　葭戸越しなる里の山垣　　片山妙子
めずらしく分厚い便り寄越し来て　　村田圭子
　ついに赤道横切るときめき　　中森恵子
だみ声でお国自慢を月の下　　恵
　ブランド米の豊作の年　　圭
茸（ウ）狩りの幹事はやばや決まりしと　　山村としお
　はやる期待はバスの隣席　　圭
イケメンの身振り手振りに笑いこけ　　妙
　恋に溺れりや親離れする　　恵
ハネムーン無くて還暦徒遍路　　恵
　床几に出さる番茶一入　　妙
月蒼くむささび長く滑空す　　妙
　襟巻くるり華やげる頸　　圭
買物の好きな旧友訪ね来て　　圭
　開けた土産はわが町の産　　恵
卒業の記念植樹の花仰ぎ　　恵
高き城垣四方夕霞（ナオ）咳と洟治らぬ子等と知恵詣　　妙
　純情話泣いてすっきり　　圭
でんと置く亀山モデルというテレビ　　恵
　夢を育てる料理番組　　妙
山小屋に入る輩（ともがら）の汗臭き　　圭
　ガラスに貼りし柄のハンカチ　　恵
道とへば土地の訛のはんなりと　　圭
　昔歌垣今は合コン　　妙
格差婚ぽんぽんと事運び　　恵
　十三人とう子福長者へ　　妙
望の月かぐやは何処にいるのかな　　と
　虫の音あふる露の畷（なわて）に　　圭
塩（ナウ）きかす酒の肴の炒り零（ぬか）余子（ご）　　妙
　接待づけに少し麻痺気味　　恵
巨匠さへ駒打つ筋をまちがえて　　圭
　マリアの頬にえくぼくっきり　　妙
移りゆく花は伊賀への峠越え　　と
　谷遡る囀を聞く　　恵

平成十九年七月十五日首
平成十九年八月三十日尾

（於・幸吟舎）

歌仙『名刹の』

名刹の塔も古りたり木の芽雨　岡本　眸捌
　粛々として彼岸会の茶事　岡本　眸
永き日を軽音楽に親しみて　井ノ口力子
　友から届くメールあれこれ　高木じゅん
メルヘンの国も照らすや今日の月　眸
　銀の雫をこぼす穂薄　じ
「皿屋敷」拍手喝采村芝居　力
　あなた次第で浮くか沈むか　じ
LOVEという言葉上手に使い分け　眸
　からくり時計休む暇なく　〃
隠し事防衛省の得意技　眸
　海を見たくて旅支度する　加藤祐子
端居して母と思い出語り合い　紀伊郁子
　夕立上り昇る三日月　山崎悦子
遠つ嶺を借景にして露天風呂　宇都宮國子
　誰が吹くやらオカリナの曲　郁子
いつしかに花散りゆきて人もなく　祐
　うつらうつらと日借時なる　眸
油断して引いてしまった春の風邪（ナオ）　郁
　傘寿を祝い贈る座蒲団　國
「くいだおれ太郎」は何処へ行くのやら　悦
　民は不在のねじれ国会　眸
穴に入る熊になりたい時もあり　祐
　茶碗なみなみ呷る熱燗　郁
のっそりとのっぺらぼうが顔を出し　國
　さもインポートらしきTシャツ　西本加代
移り香を愛しと枕かき抱き　悦
　命預けて鍵も預けて　眸
魚跳ねて月を砕ける池の面　加
　千草の種も神の賜物　國
そぞろ（ナウ）寒綾とり遊び孫膝に　悦
　到来ものの金沢の菓子　加
玄関の額に大きく夢の文字　眸
　無人探査機フェニックス発ち　國
待ちかねし花うす紅に咲き満ちて　悦
　初虹くぐり輪をえがく鳶　加

平成二十年三月二十七日首
平成二十年五月二十八日尾
（於・石手寺　安養閣）

歌仙『霜月や』

霜月や友の訃報の多かりき　大久保風子捌

水涸る岸に一陣の風　土肥暢子

まほらなる二七の市は賑わいて　大城里水

いつもの仲間散歩早足　田中安芸

真夜中の月に星降る操作場　中澤念魚

酒あたためて銀杏を焼く　大久保風子

地芝居の赤い隈取りそとまでも　魚

揺れて渡れぬ恋のつり橋　芸

頂きに面影ふっとかき消えて　水

庄内おばこの小節あざやか　〃

古都ありて語る種々七色に　暢

露地の奥なる心療内科　芸

飯を炊き月明かりにて河鹿鳴き　魚

8の文字に茅の輪くぐって　風

どこからかこんがらがった糸の端　風

夜をつぐ窯に期待ふくらむ　暢

全山の花守るがに山かずら　水

今立ち上がる馬の子の眼よ　風

水底に春をおどりし柿田川　芸

朝日の中を満たすさえずり　暢

とりこわす中学校舎なつかしく　水

模擬裁判の被告やらされ　風

情報は明らかなりしヒトゲノム　芸

手打ち自慢のつけ汁うどん　魚

年越しのカウントダウンキスを待ち　風

抱かれて竦む紅の佗助　芸

雪しまく闇をふたりして薄衾　杉崎華

谿を浄める大無量寿経　水

杉の戸を機織足よおいでませ　芸

座敷童子の仰ぐ有明　水

大褒嘯む路端売りアーリアン　華

魔法のランプ拭くセーム皮　芸

額の絵をとりかえてみる応接間　風

東国原知事の似顔か　華

夢を植え日本海まで花街道　芸

笑みつぎつぎにのぼる陽炎　水

平成十八年十二月六日首
平成十九年十二月六日尾

（於・麹町秋葉庵）

歌仙『納め雛』

平成十九年三月八日首
平成十九年六月二十六日尾
（於・千葉市若松公民館）

伊藤貴子捌

一つずつほほえみ返し納め雛　伊藤貴子
　風も静かに椿満開　木暮佳右
ドライブの地図をペンにてなぞるらん　松岡世喜女
　旅の行程できてくる頃　篠崎初枝
月に雲腕のV字の中よぎり　佳
　子守り姉やへ蓑虫の鳴く　相良知子
ウ熱飯のお代わりをするとろろ汁　広島泰老
　頑張りなさいテレビ体操　初
オカリナをあなたのために吹きたいわ　喜
　出船の合図胸のうるうる　知
これきりというまで燃えて乱れ髪　泰
　ワインをそそぐガレのグラスに　〃
噴水と月の箱根の美術館　喜
　夏うぐいすの声のおちこち　初
思い出に浸るアルバムひもとけば　泰
　トテ馬車でゆくトトロの里へ　佳
母の忌に初花ぽっと咲きにけり　喜
　受験入学犬も喜ぶ　初

ナオ踏青の上州武尊右に見え　喜
　義理人情は廃れさせまじ　泰
居酒屋の縄の暖簾が呼んでいる　貴
　噂の記者が常連にいて　佳
大夕立ホテルに送る手の早さ　泰
　蛇の蛻（もぬけ）に思う阿部定　初
玉櫛笥うずめの宮に奉納し　佳
　目出度めでたの舞を囲んで　泰
乗車券ゆめ牧場のトラクター　知
　もったいないを世に広めよう　〃
魚はねて月光こぼす崩れ簗　泰
　秋祭には太巻きの寿司　〃
ナウさやけくて書店でめくるベストセラー　喜
　帰宅を急かす着信メロディー　知
いつよりか独り住まいのおばあさん　初
　軽きお布施となりし年々　貴
花簪深井出でますす橋がかり　〃
　廃分校に惜しむぶらんこ　執筆

歌仙『辛夷の実』

斉藤一灯捌

辛夷の実拳ひらきて禽を待つ　斉藤一灯
昼月あわき放牧の丘　伊藤貴子
美術展特選作に人群れて　大内善一
額縁だけが肩越しに見ゆ　佐藤昌子
お稽古の謡にひびく拍子盤　貴
老刀自さまがひそと炭継ぐ　岡田十足
ウ闇汁の箸を逃げたるもののあり　善
バイク飛ばして軟派橋まで　貴灯
両岸のプリマドンナが睨み合い　〃
赤い啖呵で脱ぐ玉の肌　貴
後朝の家に戻れば二児の母　昌
ミニ鯉のぼり泳ぐベランダ　善
米ねだる故郷ありて月涼し　善
まぶたに浮かぶ段々畑　貴灯
インド洋若き宰相沈没す　貴
背のなき木椅子濡れて汚れて　武
密教の秘史を尋ねて巡る花　丹羽武正
田楽と酒コンビニで買い　足
穴を出し蜥蜴の光る奥会津　貴
古伝歌舞伎の烏帽子りりしく　足
白樺の長柄の鎌を研ぎ上げる　武
からむし織りの綿入温袍　善
布団干す野口雨情の磯御殿　貴
鮮魚市場に弾む囉ごえ　灯
豊満な乳房と臀部すれ違い　足
ソープランドでビール一気に　善
抱きしめる胸にくっきり水着跡　貴
やや衰えしJリーグ熱　武
数式を月の明りに解き明かし　足
糸瓜の水の溜まるフラスコ　灯
ナウ遠望の国後島にそぞろ寒む　武
社会保障で送る余生か　善
四五人のマラソン連が公園を　貴
うらうらうらと千の風吹く　足
直立のレッサーパンダ花の山　灯
留守引き受けて春惜しむ主婦　武

平成十九年九月五日首
平成十九年九月十九日尾　（ナオ後半文音）
（於・今泉ビル市川俳諧教室）

歌仙『凌霄花』

平成十九年七月二十六日首
平成十九年十一月十三日尾
（於・千葉市若松公民館）

凌霄花振袖火事の火のしづく　伊藤貴子捌
　資料館にて覗く起し絵　松岡世喜女
水切りの石を遠くに投げ合いて　木暮佳右
　自転車が来て誰か呼ばれし　広島泰老
月そそぐ窓辺に鳴りしオルゴール　佳
　柿毬栗を竹籠に活け　相良知子
街（ウ）なかのおむすび山に小鳥くる　貴
　今がチャンスとモンローウォーク　知
嬌態がバックミラーに写りおり　〃
　料金二倍もらってやるか　篠崎初枝
くれないの夢さめ早も半世紀　泰
　捨てがたきもの捨てて引越す　初
西安の城壁高し月の凍つ　喜
　暗き看板もろに木枯し　〃
ティータイムピアノ演奏聞きながら　〃
　頑張らないをすることにして　知
青空に湧いては消えて花吹雪　泰
お遊戯などで楽し遠足（ナオ）　喜

執筆

歌仙『黄砂降る』

音もなく首振るクレーン黄砂降る　斉藤一灯捌

あれは麒麟と遠足の児等　一灯
春スキー新幹線を乗りつぎて　沢木小雪
杉玉の寂びの由々しき月明り　伊藤貴子
色なき風の透ける蔵町　丹羽武正
かりそめの写経の窓に小鳥来る　大内善一
体験入居せし養老園　貴子
オルガンの小学唱歌なつかしき　雪
君が居るから心弾んで　武正
さりげなく廊下で渡す恋の詩　貴子
今日の終りの焚火消す僧　善一
月寒く誰も試さぬ力石　雪
操舵室出て捜査大詰め　貴子
エコ袋には特選の紙オムツ　武正
万歩計つけ蓬摘む土手　雪
咲き盛る花に囲まれ無縁墓　貴子
進級祝電子広辞苑　善一

ナオ書記長はしどろもどろに答弁し　佐藤昌子
飴玉いつもポケットの中　雪
粛々と聖火リレーの始まりぬ　武正
されどトイレの水の心配　貴子
路地奥の銭湯今は温泉に　雪
白きうなじを狙うドラキュラ　〃
震えつつ浴衣の君をひしと抱き　昌子
京の疎水に流す麻の葉　雪
なむあんだ一遍上人仏吐く　貴子
額の裏から落ちしへそくり　昌子
とほとほと月に濡れゆくホームレス　足立
山椒子の実を賞でつつ酒酌む　貴子
ナウダブリンの談論カフェつづれさせ　雪
クチ数少な友病みあがり　足立
いくつもの未来夢みて旅鞄　昌子
岬のベンチで篠笛を吹く　武正
深呼吸して雨上がる花の朝　雪
嬰を背にして仰ぐ巣燕　貴子

平成二十年三月五日首
平成二十年四月二日尾（文音）

歌仙『走らす艀』

天高し画布に走らす艀かな　石渡蒼水捌
谷の合間の出でし月白　石渡蒼水
軒先に呟くやうな小鳥来て　梅谷静子
ハッカドロップ缶のすみっこ　田中てつ
公園の静寂に憩ふ子らの汗　中根明美
西へ西へと飛機が雲刷く　静
ゥ心にも目のあることに気の付きし　宮沢次男
今宵こそ欲し君の唇　渡辺日出子
湯あがりの肌の火照りに風当てる　美
電子メールの件り唐突　次
同窓会少女の侭の「ちゃん」で呼ぶ　水
褒めし一曲マイク離さぬ　水
冬月の乾いたひゞき靴の音　次
鍬鎌眠り畑は木枯し　静
学力に負けても勝るこの体　日
胸に煙の絶えぬ火の島　日
花御堂法話に訛りほのぼのと　静
弥生の空にハングライダー　〃
ナォ木々の揺れ影絵となりぬ春障子　水
狐狸の出てくる黄昏のみち　涼
夢がある末は博士か大臣か　て
衣裳で決めた若づくりの席　日
緑陰となりベランダで新刊書　水
水面に浴衣風情生む宿　て
三合の酒で天下を論じあふ　日
門限守り逢瀬悲しく　静
うしろ髪引かるゝ別れ終電車　次
四角い部屋を丸く掃く癖　水
縄文の月澄む水を筒に汲む　て
口笛上手吹きつ夜学子　次
ナウ木犀の香に噎せかへる官幣社　涼
向ふ鉢巻若き俥屋　日
狂言を園児に手とり足拍子　日
雨で万歩計もお休み　て
鉄橋の車が散らす花吹雪　次
磯の遊びに刻を忘る、　日

平成十九年九月十六日首尾
（於・伊東市中央会館）

歌仙『初凪や』

初凪や海鵜は余念なく稼ぐ　石渡蒼水捌
　エプロン掛けで打ちかへす羽子　石渡蒼　水
村のどか新鮮野菜売場にて　渡辺日出子
　歩き出す子に陽炎の立つ　宮沢次　男
春の月ひと息つけて飲む緑茶　梅谷静　子
　蔵書散らばる六帖のへや　田中てつ
ウジョギングにくっきり裾をみせる富士　次　日
　文字と似てゐる恋の組紐　日　美
只管のメールが運ぶ熱き胸　中根明美
　手作りアイス友に振舞ふ　水　て
願掛けし古刹汗ばむ昼下り　次　て
　傍目(おかめ)八目うるさく助言　静　美
稜線に月昇り染め清々し　日　静
　画布にやんまを絵筆走らす　て　次
宴果て、ほろ酔ひ手打蕎麦の店　静　日
　三面記事は生の現世　美　て
履きなれた靴も草臥れ花の宿　日　静
　落ちこぼれなく巣立つつばくろ　て　次
余念(ナオ)なく投釣りつゞく浜日永　水　て
　けむりひとすぢすぎるSL　て　美
陳者のあとはほにゃらら読めませぬ　美　水
　うから集ひて快気祝杯　水　次
うそ寒し偽装改ざん後絶たず　次　静
　百円ショップマフラーを買ふ　静　日
恩師より便り生命の尊さを　日　静
　酔ひにかこつけしな垂る、癖　静　美
少年は脛抱き余す思ひ草　美　て
　路地に漏れきくピアノの音色　て　美
言の葉よ小声がよろし後の月　美　静
　休耕田に盛るコスモス　静　日
彩(ナウ)を紡ぎし山を秋のたび　日　次
　節操もなく捨てる空缶　次　静
うとうと、疲れを癒やす終ひ風呂　静　て
　漬物樽はわが家の宝　て　日
せゝらぎを崩れずにゆく花筏　日　美
　ベイブリッヂを過ぎてうらゝか　美　水

平成十九年十月二十一日首
平成十九年十一月二十五日尾
（於・伊東市中央会館）

歌仙『春雷や』

春雷や測りかねたる子の心　宇野恭子捌
闇の奥より香る沈丁　二村文人
燕来る郵便局の軒先に　杉本聰
ネットで捜す産地直送　いぬじま正一
月高し笑顔真顔の夕餉どき　柴田きょう子
色紙の掛かる部屋の薄寒　三谷貴志夫
新薬で作る仁王の大草鞋　長谷豊子
メタボリックに悩む年頃　宇野恭子
似合いとは思えぬ二人社内婚　大島朋子
おしどり夫婦演じきれるか　正き
美濃駿河峠の月は冬ざれて　沖田泰子
枯蟷螂は鎌上げしまま　雄上絹子
与野党はガソリン税で揉めにもめ　貴き
漲ぎる闘志結ぶ黒帯　竹部慧美子
誘われて一両電車湯の里へ　文
少し辛めのかけそばの味　聰
篠笛の調べかそけき花篝　豊
留守番させた仔猫気がかり　恭
蜆売り母の代から顔なじみ　聰
手提げの中でたまごっち泣く　正
旧仮名と新仮名まじる文が来て　朋
羽織袴に編み上げの靴　豊
消えて点きまた消ゆ蛍光灯の恋　き
縺れて解けぬあやとりの糸　聰
抜け首にからみつかれる肝試し　正
座頭が居合蝙蝠を斬る　き
北斎の余韻にひたるカフェテラス　貴
オリンピックへ募るポスター　山本秀夫
残照は月に譲りて散居村　正
毒茸かも図鑑調べよ　貴
民宿に初めて造るにごり酒　豊
亡友の声聞きし空耳　吉藤一郎
お互いに夢を見んとて宝くじ　一
大日如来高値落札　秀
花吹雪木彫りの町の槌音に　朋
釣果の針魚刺身塩焼

平成二十年四月十九日首尾

（於・杉本邸）

歌仙『鳶辺る』

杉本　聰捌

春風や大手ひろげて鳶辺る　聰
　鯛の浜焼並ぶ磯の辺　豊
里人は菖蒲根分けをせわしげに　朋
　ラジオの歌に合わす口笛　正
終バスに小愛男ひょいと乗り　正
　相も変わらず夜なべする母　一
鎌祝野良着のままで地酒酌む　貴
　津軽三味線プロも顔負け　貴
ときめきは同姓異人電話帳　き
　有象無象に恋はそれぞれ　聰
迂回路が迷路に化ける不親切　聰
　欲しい煙草を隣町まで　朋
早乙女の揃う水田に昼の月　朋
　あわて鯰が畦を跳び越す　豊
六瓢の軸が和尚のお気に入り　恭
　喜怒哀楽の克服を説く　正
車椅子花のトンネル伴は犬　正
筆巧まざる曲水の宴　恭
立山も散居もかくす霾晦　豊
　峠の茶屋の団子家苞　豊
穴あきのジーンズ赤いポルシェ駆り　朋
　紅葉マークが義務になるとは　正
あどけなき少年民兵凍る銃　一
　回教寺院響くしわぶき　貴
逢引きに初めて履いたハイヒール　正
　彼がひと言膝を伸ばせと　豊
子沢山それが夢だとまず双子　文
　アイディア玩具間伐の杉　正
十六夜に御社の千木潔し　聰
　四股とてっぽう期する秋場所　き
観劇の幕間楽し茸飯　貴
　電車不通にじっと辛抱　朋
古書店の主詰碁に余念なく　聰
　脱獄案の奇想天外　正
花堤濃淡の紅重ねたる　恭
　園児の列を溶かす陽炎　豊

平成二十年四月二十五日首
平成二十年五月十日尾

（於・杉本宅）

KUSARI　『たのしい三句たち』

一月一日(月)

ありがとう今このときを生きている　(No. 62433)　ザ　リ

新年祝う満天の星　藍

一月二十二日(月)

研ぎたてでキャベツタマネギ真っ二つ　(No. 62927)　道草

スパツカナポリに響く靴音　風

旧市街世界遺産に指定され　ひわ

二月十八日(日)

止まるべき駅をはるかに通り越し　(No. 63627)　ばらずし

どこまで延びる平均寿命　ひわ

ケイタイとペットボトルが必需品　鵜

三月十四日(水)

ロゼを重ねる君の饒舌　(No. 64328)　氷心

バンサンカン軽い女のふりをする　藍

眠らない街パリ25時　ひわ

四月十七日(火)

赤々と夾竹桃が燃えている　(No. 65323)　ザリ

お願いですから水をください　氷心

キャパの死を写す写真は残されず　麦

五月七日(火)

夜空はまるでプラネタリウム　(No. 65794)　ひわ

さそり座に生まれその後の運命は　彗

こぶしをじっと見てる幼子　ふさ子

六月十四日(木)

今日もまたひっきりなしに救急車　(No. 66623)　桂

恋の伝染病が蔓延　ふさ子

タロットのカード涙で濡らす夜　カンちゃん

六月十四日(木)

大判焼はやはりつぶ餡　(No. 66648)　あずき

何事もアバウト好きなフリーター　芳梅

泣かした女数え切れない　不用之助

七月十三日(金)

遠い過去大事な米作り　(No. 65323)　ザリ

軍にはあぶら兵士には糧　道草

憲法の上で焚火をするような　暢

七月十三日(金)

湖水に揺れる睡蓮の華　(No. 67288)　ちいばば

ソムリエになりたし小さき店を持つ　小町

ウッドベースの響き静かに　のら

八月七日(火)

朧月末摘花になれますか　(No. 67853)　あずき

生活保護は受けられません　ザリ
閂のかかったままの鉄の門　桂
八月七日(火)　(No. 67834)
核の傘さし非核もごもご　暢
久々のきのこご飯で囲む卓　みのり
隣の壁に耳つける秋　氷心
九月十二日(水)　(No. 68701)
ヒビ割れの政治に意欲衰えて　かよねこ
襲う鬱病負えぬ責任　ちいばば
螻蛄鳴いててっぱの話題ひとつ増え　たつみ
九月十四日(金)　(No. 68741)
いいとこで運が逃げてく生まれつき　たつみ
女房だけはすぎたヤツだと　のら
黒光りしている柱五十年　蕗
十月二日(火)　(No. 69150)
郵便屋さん今日も道行く　ばび
首の皮一枚繋ぎ民営化　にゃん
ヘタだけ枝にのこる渋柿　あづさ
十一月十六日(金)　(No. 70204)
君との距離は少し縮まり　ザリ
いもうとのてのひらにおく海一個　ライワ
ピアノの上に白い貝殻　R

十二月七日(金)　(No. 70634)
海のあわいか友はいずこに　風
声限り呼んでもこだま帰り来ず　桂
記憶の底のオルガンの音　のら
コンドルが翔びたつ千の風に乗り　兎
君の才能君の情熱　藍
失いしもの大きかり時雨くる　霞
冬の薔薇の凛と紅　藍
天界に二胡を奏でる天女たち　風
十二月三十日(日)　(No. 71062)
地球儀回すおさなごの指　あづさ
この星の錆はきれいに落とさなきゃ　あずき

平成十九年一月一日より十二月三十一日
(6243 4番～7106 9番より抜粋)

歌仙『初時雨』

土屋実郎捌

旅先に一番札所初時雨　土屋実郎
雪吊見ゆる手入よき庭　原田安恵
どこからか琴の調べの流れ来て　池田笑子
猫膝上にまどろみの午後　宮脇美智子
八十路越え月に告げなん幸（しあはせ）を　佐崎静緒子
ペタンク優勝新酒乾杯　今村苗
駅（ウ）弁の松茸飯に人気あり　土屋実郎
示し合はせて出湯の隠れ家　速藤尹希子
長引ける恋患ひの後始末　苗
君の胸元きらりジュエリー　恵
親指と人差指の疼く掬摸　郎
携帯拾ひもてあます猿　苗
月面に地球涼しく昇りくる　緒
冷し西瓜をあげる深井戸　智
その昔漱石囲む俳談義　尹
防衛省に砲火集中　笑
鐘連打響く上野の花万朶　智
ふと気がつけばかかる初虹　尹
ナオ二丁櫓の舟に遊べる春日傘　笑
華語姦しく風が運んで　児（臼杵游）
世界中サプライムの破壊力　苗
逆玉ならば金はなくとも　勝（和田忠）
子を連れて戻りし家に居直って　章（柏元）
阿吽の呼吸陶の狛犬　恵
コタンよりムックリの音の露の夜　尹
穴釣をする湖の森閑　笑
部長とは名ばかり部下は三人ほど　緒
飛行船浮くく東京の空　尹
月光に松虫草の色深み　智
肝臓先生糸瓜水採る　郎
こだはらぬ質（たち）で剽（へう）げるハローウィン　苗
名取りとなつて踊るかつぽれ　智
骨董屋すすめる笑顔備前壺　緒
いつよりか来し背戸の鴬　尹
散る花に思ひし戦後六十年　郎
茶摘楽しき結（ゆひ）の手助け　笑

平成十九年十一月十九日首
平成十九年十二月一日尾
（於・NHK文化センター青山）

歌仙『冬落暉』

土屋実郎（前半）捌
宮脇美智子（後半）捌

飛行雲解けて透かす冬落暉　土屋実郎
自転車を押す坂の山茶花　今村苗
年の市華やぐ声に魅せられて　宮脇美智子
ずらりと並ぶ立喰ひの店　速藤尹希子
飼ひ主を待つか尨犬月に濡れ　苗
忘れ団扇に下手な戯れ書き　郎
赤蜻蛉追ひつ追はれつ散歩する　尹
腕白坊主役者気取って　智
いつキッスするか遠巻きロケ現場　郎
密事ゆゑ傘で隠さむ　苗
夜もすがら闇の灯ほそく灯りゐし　苗
夏月かかげ廣き海原　智
アザーンに寝莫蘆丸めて動き出す　尹
アラビア文字のテロの宣言　郎
「偽」に満ちし世の中すいと渡りかね　郎
乱高下する株におろおろ　智
散り易き命ぞ急げ花浄土　尹
調子とりつつ歌ふ頬白　苗
受験生夢は大きく欲深く　郎
お稲荷さんにお百度の母　尹
計らずも焼け棒杭に火がついて　智
地の果までもついて行きます　郎
酌み交すワイン赤白ラブホテル　尹
水嵩増して逆巻ける河　智
プランタの薬で作りし注連飾る　郎
ふくらむ餅の番はまかせぬ　苗
四島の返還いまだままならず　智
雲湧き立てる遠き山脈　尹
アポロから半世紀たつ月の基地　郎
やや寒の日は痛き関節　苗
夜もすがら鳴き通したるつづれさせ　尹
生きとし生けるもののいとなみ　智
縮緬の鯛を優雅に作りあげ　苗
湿檠図かかげ婆らパーティ　郎
花吹雪浴びてひねもす楽しまん　尹
魚紋きらめくうららかな里　智

平成十九年十二月十七日首
平成二十年　一月　七日尾
（於・NHK文化センター青山）

妖怪尽くし

二十韻『秋桜祭』

狐狸妖怪なだれこみたり秋桜祭　　彩火捌
　唐傘おばけりんご丸のみ　　藍
月光に一反木綿ひらひらと　　彩火
　砂かけババァ畑を耕す　　直生
ウ巡回中狼男に変身し　　たま祐
　ナイトメアがホップステップ　　洸
びんたされカオナシさめざめ泣く線路　　ふく子
　にゃあも言わずに止まる猫バス　　めじろ
塗壁が横れんぼして通せんぼ　　千絵
　うなじが伸びる友禅の美女　　沙織
ナオのぞき見のひとつ目小僧青ざめる　　たま祐
　どこでもドアで西洋の街　　ちえ
ドラキュラが生き血を求め凱旋門　　ハハ
　幽霊船は海霧の彼方へ　　プラチナ
夏の月チョンガー鬼神の嫉妬心　　藍
　振り向いたらば卵おばけが　　秀
ナウキョンシーが一列横隊マスゲーム　　〃
　キッコロふわり風船の旅　　徹
ルンルンルン蝶々と遊ぶ花の精　　めじろ
　バルタン星人酔い寝する春　　たま祐

執筆

平成十九年十月二十七日首尾

（於・桜花学園大学とよたキャンパス）

連句まつり会場

追悼　佐藤良瀬さん

現代歌仙　『夏も瓢』

中尾青宵捌

夏も瓢冬も瓢たる丈人（たけと）なりし　中尾青宵
仏法僧は山の深きを　塙於玉
パソコンの乗換案内送られて　竹崎梨野
子らの宿題夫婦分担　坂田武彦
夕顔は朝顔抑ふ力なし　玉宵
椀の縁から零る赤まま　彦玉
うり坊が木陰に隠れ覗く　大久保風子
天神裏に秘密基地あり　野彦
恋の成るまで寝て待つか寝待月　大城里水
ときどき途切るせゝらぎの音　水野玉
存念を横綱辛く問はれゐる　玉水
パオが並べど原は見透し　水〃
雨催ひ野太き声は種牛か　風玉
夜なべの草鞋やつと十束　水風
箱詰めの紅白饅頭秋祭　〃水
親爺の代り直会に出る　宵
二百万大台を越す異国人　彦
安保騒動遠き昔で　岡山朱
学園は展示す俳諧コレクション　藍
二見形なる文台も出て　宵
蒲公英や菫や道草喫茶店　彦
初虹かかる土手をジョギング　風
朧なる影を追ひかけ敵討ち　玉
マニキュアペディキュアきっちりとして　水
病院をやつと出られた記念日に　野
稲荷の鳥居一基寄付する　宵
さはさはと桐の上枝を渡る風　〃
穴浅く掘り潜る宿借　玉
合併に合併市の名難しく　藍
寝莫蓙を塋とごろ巻くかな　風
岩に浪月は澄ませる新走り　彦
囲炉裡掻きなば熾る堅炭　藍
やれ嬉し孫の袢どの福耳で　玉
除夜の札張り俵ごろごろ　風
地震あれど仮設住宅肩を寄せ　水
酸素ボンベは片影に置き　宵

平成十九年七月二十八日首尾
（於・慶応義塾三田キャンパス）

半歌仙　『爽やか』

和田忠勝捌

爽やかや虚を抱き実に遊ぶ漢　東浦佳子
苺の根分け家族総出で　和田忠勝
月踊る長き土塀の屋根上に　坂田武彦
三々五々に猫の影寄る　大久保風子
年毎に参加者増えるクラス会　大駒誠一
自慢話は去年も聴くもの　中尾青宵
道祖神招いたと詠む初懐紙　〃　一
野晒になる覚悟未だし　岡山朱藍風
両耳に金のピアスのゆらゆらと　東浦佳子
マリオネットになりさがりたり　和田忠勝
言うがまま何でも買ってくれる彼　坂田武彦
その島はもう水没の危機　大久保風子
月光にビールの泡はすぐ消えて　大駒誠一
よからぬことを納屋でたくらむ　中尾青宵
八時半黄門様のお出まし　岡山朱藍風
さあという時ＣＭが邪魔　東浦佳子
万号の油彩にまさる花大樹　和田忠勝
庵に近く春の波音　坂田武彦

執筆　彦一藍宵佳風藍一彦

平成十九年十月六日首尾
（於・慶応義塾三田キャンパス）

歌仙『虫の劇場』

福田太ろを捌く

空き地よりとっぷり暮れて星月夜　福田太ろを
　幕するすると虫の劇場　沢井三柳
母と子で運動会の準備して　澤田佳久
　砂山に立つ小旗はためき　小池タカ
有明けの窓一杯に夏の湖　伊東康之
　土用鰻が籠にうごめく　〃
万緑（ウ）に聳え立ちたる神の杉　佳
　名人芸の額を奉納　小田原喜代子
研究の為に脳波を調べられ　佳
　灸り出しかも白い付け文　高橋眞次
接吻をするクリムトの絵のように　佳
　石の狐は穹を見ている　上月叩子
雪の舞い月の光も定かにて　康
　今川焼に温い懐　眞
円天で物を買っては泣く羽目に　三
　算盤塾が人気復活　三
酔八分マイク取り合う花の下　眞
　鴛と化せり土手の土竜は　坂本禮子
初虹（ナオ）の二重にかかり甲斐の山　康
　龍太晩節いさぎよく逝く　佳
寄せる波返す波にも貝うたい　康
　願いを込めて投げる土器　眞
タンパンに麦藁帽子よく似合う　喜
　蚊帳の中ではパジャマ揃えて　佳
手鏡にうれしい跡のうっすらと　三
　彗星ながめ占いの運　タ
号外を知らせる鈴の大き音　佳
　防衛省はてんやわんやに　喜
気がつけば早やもかたぶく望の月　三
　雁渡りゆく声をのこして　月
セビリヤ（ナウ）のオリーブの実の懐かしき　喜
　ギプスのとれてそろりそろそろ　佳
ロボットの運ぶ珈琲香を散らし　眞
　丸い字を書く父に春風　三
花明かり新旧道を包みこみ　太
　烏ねぐらへのどらかな空　タ

平成十九年九月十八日首
平成十九年十月十八日尾

（於・さいたま文学館）

歌仙『新治かけて』

月光を鎧いて聳てり筑波山　福田太ろを　捌
新治かけてジーと鳴く螻蛄哉　澤田佳久
菊うらら絵筆持つ手のひさびさに　福田太ろを
師と仰がれて早も十年　沢井三柳
烏瓜咲く柴折戸をけぶらせて　小池タカ
涼しき風はコバルトの風　伊東康之
盛(ウ)りあがる胸板まぶし露天の湯　小田原喜代子
今もほれぼれ銀婚の妻　上月叩子
ペアルックスポーツカーを乗りまわす　三喜
揺れて招くは赤い提灯　佳
棚干ではもる口笛「神田川」　三
七八羽来て寒鴉笑む　眞次
月凍てて「し」と「ひ」の区別つかぬなり　高橋康
リハビリの医者首をかしげる　佳
路地裏にモカの香の漂いて　三喜
鐘の間遠に朝まだき古都　眞
花に酔い花に浮かれて花疲れ　タ
ちりめんじゃこで済ます夕飯　〃
行(ナオ)く春の影の短きみすずの碑　三
肋あらわに野犬ふらりと　康
ぞろ目出ていよよ麻雀白熱し　佳
筋彫だけで凄む下っ端　眞
雨弾く三社祭の急調子　康
錦玉糖の並ぶウインドー　〃
華やかなネイルアートにどっきりと　三
生れたままが壁の鏡に　佳
まどろみのいとまもなくて空しらみ　〃
かなかなかなとかなと蜩　月
波の間にただようがごと望の月　康
後生大事に籠の松茸　三
高速(ナウ)で昇るホテルのエレベーター　佳
一ドル紙幣尻のポケット　眞
浄財を被災の地へと呼びかけて　佳
棚田にやっと蛍蚪の天国　喜
花満ちて機嫌よろしき座禅堂　太
春告鳥の調べかろやか　執筆

平成十九年六月五日首
平成十九年七月四日尾

（於・さいたま文学館）

テルツァ・リーマ　『考へる葦』

鈴木　漠捌

ヴェクトルの如水仙の葉先伸ぶ　安丸てつじ
寒さ休まる哲人の葦　鈴木　漠
この部屋が開く時を待つドアのノブ　在間洋子

知つてゐるのも何か善し悪し　森本多衣
妖怪の小豆洗ひはちと不気味　三神あすか
下冷えの床そつと抜き足　山名　才

窓に照る月とシャンパン僕ときみ　松本昌子
輪舞に酔ひて踊り明かさん　香山雅代
相性はまづまづなりと告る易見　漠

ペアが嬉しく登る富士山　てつじ
編笠も麦藁帽も脱ぎ捨てる　多衣
茶道宗匠好む建盞　あすか

春愁の弥撒は聖母悲傷（スタバト・マーテル）　雅代
思ひ出優し淡雪は降る　洋子
囀りも高く低くと花ホテル　才
野遊びの子を呼べば手を振る　昌子

平成十九年十二月十八日首
平成十九年十二月三十日尾
（於・NHK神戸文化センター）

注　テルツァ・リーマ（三韻詩）
十三世紀イタリアに起源をもつ脚韻定型詩。三の倍数行プラス一行で構成される。十四世紀初頭に書かれたダンテ『神曲』は「地獄篇」「煉獄篇」「天堂篇」の全曲がこの形式で構成されている。
LA Divina Commedia
押韻形式は aba/bcb/cdc/ded/efe/f

歌仙『天守閣』

天守閣五月（さつき）の空に聳えけり　梶野浩楽捌
　濠の泉に群がる鯉　梶野浩　楽
いそいそと通園の児の手をひきて　寺坂十　留
　友を見つけて眼（ヨ）輝く　藤本純一　一
嶺離れぽつかり浮かぶ望の月　今井比呂夢　留
　鹿の声聞く山峡（かひ）の宿　楽
名物（ウ）の菊花展には人溢れ　夢
　喫茶ルームに憩ふカップル　楽
夕暮のベンチにそつと抱き合ひ　留
　新婚出発空き缶曳きて　一
通勤車上り下りのすれ違ひ　一
　仕事疲れを癒す晩酌　夢
寝静まる団地の家並月冴ゆる　楽
　お寺へ続く寒木瓜（はけ）の径　留
朝青龍無言のままに里帰り　留
　道義廃れし世相を嘆く　一
潮速き水軍城址花盛り　一
　明るき干潟鯊（むつ）五郎（ごろう）跳ね　楽
東京に少し慣れ来て大学祭（ナオ）　楽
　お産たいへん盥（たらい）回しに　留
衆参のねじれ国会どう動く　一
　職退きてより平穏の日々　楽
炎天下今年もドラマ甲子園　留
　白帆浮かべる紺碧の海　一
いつもより少し濃い目に紅引いて　楽
　お揃ひのシャツ似合ひのふたり　留
カラオケはいつもデュエット恋の歌　一
　もろく去りたる政権の主（ぬし）　楽
高原の薄ヶ原に月高く　夢
　空家の目立つ街秋祭（ナウ）　留
てのひらに載せて楽しむ栗の膚（はだ）　一
　このごろ増えし広告のバス　夢
土曜日のチラシは本紙より重く　楽
　福田宰相のらりくらりと　留
渓谷の花を眺めて川くだり　夢
　初子（ういご）囲みて愛（め）ず座敷雛　一

平成十九年六月二十八日首
平成十九年九月二十七日尾
（於・松山市総合福祉センター）

二十八宿　『就義百周年』

女性革命詩人秋瑾を尋ねる旅（紹興・杭州紀行）

*献本の就義百周年蓮の風　鈴木　漠捌
運河の橋を潜るつばくろ　松本杏花
うつつゆめ銘酒に往時揺蕩ひて　鈴木　漠
谷間の田にも藁塚を積み　三木英治
幾何を解く夜学の窓に昇る月　永田圭介
空気かるがるかまどうま跳ね　漠
公約にマニフェストなど入り乱れ　杏花
流れにまかせプロポーズする　圭介
眩きは恋の笑窪の日向ぼこ　永田康子
矜持を持ちて雪吊りの松　英治
後継者得たる庭師の温容に　杏花
あれは初音か耳を疑ふ　圭介
*御衣黄もてまりも花の通り抜け　永田康子
卯建を誇る棟もかぎろひ中に魯迅翁　英治
咸亭のにぎはひ　漠
紗の旗袍の素足ちらりと　洞沢純平
灼くごとき砂丘の舞にときめきて　杏花
今はむかしに移るたそがれ　康子
遊覧の西湖ゆかりの月いづこ　圭介
観念したか魚籠の落鮒　英治
父の背を追ひゆく家路火が欲しき　杏花
付録の玩具手に握りしめ　恒子
噦して紅茶にひたすマドレーヌ　漠
蜜柑を剥けば香り漂ひ　英治
地球儀を回して平和希ふなり　圭介
にじり口より迷ひ込む蝶　漠
蒼穹の機影を包む花の雲　杏花
陽炎斬つて新世を見ん　圭介
　英治

平成十九年七月十六日首
平成十九年七月三十一日尾　（文音）

注　*献本＝永田圭介著『秋瑾・競雄女侠伝』。
*御衣黄、てまり＝大阪造幣局通り抜けを代表する桜の品種。

歌仙『旧時花』

瀧田遊耳捌

櫓聲波を打つてはらわた氷る夜や涙　翁
楫火に映るわが影の痩　瀧田遊耳
厨辺に七種粥の香りして　別所真紀
青磁の碗の白魚を愛づ　服部秋扇
野を駆ける駿馬は憩ふ春の月　遠山博文
芽吹きの予感風光るなり　中島みどり
前髪（ウ）を切り揃へたる京娘　横山わこ
はじめての酒ちよつとのほせて　福永千晴
行先は山か海かで結ばれる　伊藤哲子
運玉投げて男児とぞ決め　渡辺祐子
晴嵐に五体微塵と電解せよ　紀
哲学のあと眠くなる汗の月　河村志乃
蜘蛛の囲の糸の最初はどのあたり　祐
早飯食ひも芸のうちとか　哲
コマーシャルタイムに不易流行見　晴
無器用が今直立してゐる　り
フレディの葉つぱはいつか花に逢ふ　乃
小さな靴が並ぶぶらんこ　哲
恋（ナオ）の猫掴まへることなんて出来ない　乃
治りかけては剥がす瘡蓋　紀
長爪にイミテーションのダイヤなど　祐
地獄に堕ちるやじろべえ様　こ
水底の小貝となりて世をしのぶ　扇
領巾を振りつつ高角に立ち　紀
毛糸玉君の傍へところがりぬ　り
雪暗に待つつながれた犬　晴
アランフェス協奏曲歓そして哀　紀
仮面の下に幾筋の皺　祐
千年の螺旋巻き了へし月の舟　り
しづもりめされ鳴の看経　扇
衣被（ノウ）つるつるとむけし子等のゐて　こ
落し噺の「時蕎麦」を真似　哲
旅鞄終着駅の俳画展　晴
かぎろひゆるる大和はまほろば　こ
春来還　発旧時花　耳
遅日悠々是好日乎　紀

平成十九年十一月十五日首尾

（於・セシオン杉並）

連句二十四韻　『清　水』

大久保風子捌

清水の舞台の変や半夏生　大久保風子
　渦巻く水に蛍合戦　塙　於玉
かけがへのなき夢の種掬ひゐて　田中安芸
　開拓疲れひしと老の背　中尾青宵

横座とは名のみ火を掻く囲炉裏端　東浦佳子
　袋回しの連句いたづら　大城里水
暦には赤い丸やら四角やら　竹崎梨野
　檀家回りの合に逢引　風子
禁断の実は森蔭の蛇苺　安芸玉
　どこか似てるな君（クン）の下の子　青宵
国会の憲法審議懸引きし　佳子
　B29音知らぬ面らで　里水
富士一つ雲の海より抜け出すや　梨野
　光のやふな友へ乾杯　風子
青春の記念だと言ふ瓶の砂　佳子
痺れる足にそつとも一度　里水
退職後蕎麦打ち名人集ひたる　於玉
　床に架けしは先代の軸　青宵
アノハナシ　ホント？　コートヲ　ヌガスコト　梨野
　オオカミモ　イルト　ババノ　セッカイ　風子
癖になりそうちびるけど其の怖さ　於玉
　間歩探る奥あつたロボット　安芸
どこからか風来て鳥の声耳に　青宵
　半世紀もの時が今此処　梨野

平成十九年七月二十八日首
平成十九年十月六日尾

（於・柴庵）

連句二十四韻　『微笑みと』

田中安芸捌

微笑と夏帽子　枢に　入れし　田中安芸
秘恋もろとも送り梅雨なか　大城里水
つくばいの蛙の頭突っつくと　竹崎梨野
唄え唄えと貫之の声　東浦佳子

桐の葉がいつ舞ひ落ちる風のやや　中尾青宵
願いの叶う一つ星飛び　大久保風子
胎の児の蠢く嬉し海凪いで　塙於玉
赤道越えの文が膝の上　安芸
三年の筈が忘れた程の年　里水
塩漬けされた襤褸の株式　梨野

政党の泥縄式のマニフェスト　佳子
太陽にある黒点て何　青宵
限り無きものをともかく座禅して　安芸
葉擦れの音を母のささやき　於玉
黄昏にただひたすらに紐を解く　風子
元に戻せぬ箱はからくり　青宵
旧道やT路T路の城下町　佳子
昼間の恋は汗が鳩尾　青宵
待つ籠に浴びせるような蝉しぐれ　風子
傷に塗るべき薬切れける　於玉

今年早や蒲の穂綿が夢模様　安芸
私に優しい古き神々　梨野
アテナイの柱遊ばすかくれんぼ　佳子
海空蒼く白きシーガル　青宵

平成十九年七月二十八日首
平成十九年九月二日尾

（於・柴庵）

歌仙『種井戸や』

江森京香捌

種井戸や故郷人の睦まじく　江森京香
　上に下にときしむ鞦韆　伊藤稜志
大試験入学通知待ちかねて　川岸冨貴
　二つとはない手作りの壺　髙橋たかえ
縁先へ招き入れたる小望月　白根順子
　松茸飯の炊きあがるころ　関根雪子
幾度も通い再び風の盆　山司英子
　宿の女将が腕まくりする　栗原英甫
何気ない仕草が魅力野暮な彼　冨貴
　無病息災ゴルフ・ジョギング　順子
骨董の寄木細工の長火鉢　京香
　耳順過ぎても好学指向　たかえ
月仄か冷酒は青き海の彩　英子
　蚤や虱は今はまぼろし　稜志
定年後自給自足の里に活き　雪子
　ギター弾いたりメール打ったり　英甫
花万朶飾りたてたる宙の隅　京香
ビルの彼方にシャボン玉消ゆ　稜志
お土産の鶯餅は絶品で　冨貴
　呼べば逃げゆくシャム猫の鈴　順子
奥津城へ兄弟姉妹打揃い　京香
　買物籠に旬の惣菜　たかえ
赴任地は山の分校雪女郎　英子
　太めのひとを懐炉がわりに　稜志
棒の剣持ってチャンバラ餓鬼大将　英甫
　向う疵には赤チンを塗り　冨貴
福田さんねじれ国会神だのみ　京香
　嘴細鴉いつの間に増え　順子
中天の月の雫を満たす湖　雪子
　化粧塩濃き落鮎の味　たかえ
残菊を浮かべて浸る岩の風呂　稜志
　麻雀卓はすべて自動で　英子
機関紙でNPOの勧誘を　冨貴
　サラリーマンに麗らかな昼　英甫
花仰ぐ初心を忘れてはならじ　京香
あしたは確と初虹の下　順子

平成二十年二月七日首
平成二十年三月六日尾
（於・熊谷市障害福祉会館）

歌仙『春の雨』

郷(さと)分けし大河けぶりぬ春の雨　臼杵游児捌
そよ吹く風に揺るる芽柳　浅沼小葦
新社員語る抱負の熱おびて　鈴木豊二
広辞苑にも校正のミス　臼杵游児
月の友帰りし後も月まどか　森垣信也
秋刀魚丸ごと狙ふ三毛猫　小島未紀
ウ重陽の饗(あるじ)設(まうけ)の賑やかに　葦二
携帯電話突如鳴り出す　未信
むつちりとお女将の臀の据り良き　信
何が本音か噺家の恋　信
ひさごから駒の飛び出す新世界　游
寒月浮かぶ銀の楼閣　葦
一茶忌の雁木の街をひとり旅　北川稔
治れ擦り傷ちちんぷいぷい　二
入れ墨を自慢やくざの空威張り　信
馴染みの飲屋ビルの谷間に　二
駅毎に夫々の花山手線　葦
八丈土産常節の籠　未
ナオ忘れ霜孫よちよと歩き初め　若松藍
過去の事より未来夢見て　香
警官の列に護られゆく聖火　未
猫のつそりと横切りて消ゆ　信
新発意の作務衣の藍の匂ひ立ち　香
夏座敷にて賞づる名水　未
金魚買ひ家族の増えし今宵なる　信
簾の中ゆ声のもれきて　二
いつしかに噂拡がる子連れ婚　未
苦い珈琲丁寧に入れ　二
飛行船月光を受け悠々と　香
八百歳の銀杏黄落　佐々木充明
ナウ秋収揃って村の鎮守まで　信
めでたく受ける百薬の長　香
シューベルト流れ干し物たたむ主婦　充
飛び出し絵本そっと開く児　未
花万朶終の住処は古りしまま　信
蜃楼吐かぬ蛤の口　香

平成二十年三月二十四日首
平成二十年四月二十八日尾
（於・藤ケ丘地区センター）

歌仙『春泥』

矢倉澄子捌

春泥に遊び心の目覚めけり　矢倉澄子
　祖母の相手はじやれる猫の子　原田安恵
弥生狂言衣裳選びを楽しみて　柏元章
　昔の風味ミルクキャラメル　渡部葉月
ルーキーの月に向つてホームラン　葉
　酸漿上手く鳴らす幼児　安
残る蚊に刺され消毒大げさに　〃
　近寄り難き白髪の医者　元
組板の上に寝たのは私です　葉
　二人仲良く目指す調理師　葉
空港に彩とりどりの万国旗　元
　タージマハルは左右対称　澄
笛の音に蛇動き出す月今宵　葉
　ベースキャンプの山男たち　安
突然に伏流水のほとばしり　〃
　栄枯盛衰語り継ぎゆく　水尾
ままごとの正客となる花莚　元
畑広々と雲雀歌へる　水

父に肩ひとつ叩かれ卒業し　水
　ＮＧＯで井戸を掘る人　澄
理由ありて外国暮し長くなり　元
　日課のごとく手紙出しつぐ　〃
ぱちぱちと暖炉が燃えて恋も燃え　水
　女正月ワインバーボン　〃
襖絵の山紫水明旅枕　葉
　里の訛の耳に障りて　安
ＬＰでベートーベンをかけてみる　子
　田園よりも都会大好き　元
月渡るだら祭続く間　安
　思はぬ方に飛ぶは蓮の実　葉
池の名は三四郎なりそぞろ寒　安
　禁煙誓ふこれで幾度　悦子
何事も急いては事を仕損じる　元
　つかまえどころなき人に逢ふ　稔
常世祝ぎ花燦々と咲き満ちて　葉
　牧童の吹くホルンうららか　元

平成二十年三月二十四日首
平成二十年四月二十八日尾
（於・藤ケ丘地区センター）

『連句のレシピ』

食尽くし

Wスワンスワン　矢崎硯水捌

『初折』

壱面

師走とて連句の「レシピ」繙かん　矢崎　硯　水
六つの花舞うビラの「鋤焼（すきやき）」　三神　あすか
それなりに「割烹着」など着こなせば　八尾暁吉女
研けば光る「薬缶」頭も　吉本芳　香
月の座を迎えて「お萩」盛り上げて　山本秀　夫
「米搗き」飛蝗（ばった）ふいに飛び出し　久我妙　子

弐面

「釜茹で」の五右衛門ゆだる南禅寺　硯　水
世に「千切り」の種は尽きまじ　あすか
「にぎり飯」手渡しながら餞別と　暁吉女
「板場」の修業旅鳥だす　芳　香
伴侶得て「擂粉木（すりこぎ）」捌きどないねん　秀　夫
「満腹」ならぬ臨月の腹　妙　子
さざ波は「ざらめ」にも似て夏の霜　硯　水
庭の向日葵「フライパン」大　あすか
年取れば「キッチン」は我が砦なり　暁吉女
「塩分」過多は万病の元　芳　香

参面

「するめ」噛み味な男を売りとして　秀　夫
「下戸と上戸」が泣き笑いする　妙　子
民芸とアングラ劇の「食い合わせ」　硯　水
験を担げばやはり「トンカツ」　あすか
「重箱」に螺鈿（らでん）とまがう落花霏霏　暁吉女
「三つ星」めざし揺らすふらここ　芳　香

『二折』

壱面

「正餐」に招かれ馴れぬ燕尾服　妙　子
顔の映れる「お澄まし」の椀　秀　夫
「暴食」のげっぷ恢えて躙り口　あすか
文福「茶釜」しっぽ隠さず　硯　水
マジックで曲げる「スプーン」月も冴え　芳　香
「プリン」プルプル「ゼリー」プルルン　暁吉女

弐面

ちょい待った「消費期限」を確かめて　妙　子
「手前味噌」なら問題はなし　秀　夫
君がため「ロールキャベツ」を巻きつづけ　あすか
「まな板」ショーがゼウス大好き　硯　水
穴まどい誰にでもある「迷い箸」　芳　香
わずかな「米」の残る瓢箪　暁吉女

望の月空き巣こっそり「たぐり飴」　妙子
毒入り「餃子」つつむ風呂敷　秀夫
「面取り」は関路の鳥の鳴くまでに　あすか
雪解の富士を「御造り」にせよ　硯水

参面

軒端には「振舞水」の四斗樽　芳香
鍬絵の「鯛」の刎ねる勢い　暁吉女
食い逃げのどら猫を追う「サザエ」さん　妙子
「チューインガム」を踏んでしまった　秀夫
羽団扇を遣う天狗の「花見酒」　あすか
代は「さしすせそ」甘辛の春　執筆

平成十九年十二月一日首
平成二十年　二月二十日尾　（文音）

●形式「スワンスワン」について
アラビア数字22（句数）を二羽の白鳥に見立てる。春秋二句から三句。夏冬一句から二句（鳥は定座ではない）。恋二句から三句（弐面か参面）。二月一花一鳥（鳥は定座ではない）。三つの面による序破急。矢崎硯水考案。「Wスワンスワン」は「スワンスワン」のダブル。鳥は「初折」に一羽、「二折」に一羽。この巻は「食尽くし」の特殊作品。

歌仙『耀歌の泉』

森茂り耀歌の泉今も湧く　　美代
　キャンプの村にラヂオ体操　　都茂黄
健康を自慢の爺が足早に　　幾多
　雀の仕種あかず見てをる　　美代
きららきらと甍ひからせのぼる月　　都茂黄
　秋の七草買うてくるなり　　美代
ウ農道にずらりと並ぶ案山子展　　幾多
　かれもわたしも夢は大きく　　都茂黄
父親の教え子と知り愛深む　　美代
　肩よせ合うてしばしうつとり　　幾多
スムーズに仕事はかどる退社刻　　都茂黄
　仕上り美しき長き生垣　　美代
月冴えて思はず衿をかきあはせ　　幾多
　拉致のニュースに湯冷め一入　　都茂黄
擦り寄れる黒猫ひよいと懐に　　美代
　飛行機雲が真直に伸ぶ　　幾多
あこがれの弘前へ来し花行脚　　都茂黄
　教会の鐘わたる春宵　　美代
ナオしやぼん玉吹いて昔をなつかしむ　　都茂黄
　職退いてより畠仕事を　　幾多
パンづくり素人の域すでに越え　　美代
　なかなか言へぬ愛の告白　　都茂黄
カーナビをデイト用にと買替えて　　幾多
　泊る言訳言うてウィンク　　美代
エプロンの柄が涼しとやさしかり　　幾多
　茄子の漬物お皿一杯　　都茂黄
武者窓を音もたてずに通る風　　幾多
　非常用にと残す古井戸　　美代
お月見を家族揃つて賑やかに　　都茂黄
　馬の市とて屋台まで出る　　幾多
ナウ声張つてお願いします赤い羽根　　美代
　オリンピックが目標と言ふ　　都茂黄
はからずもギリシャの遺蹟訪ね得て　　幾多
　清しと聞きぬ杖の鈴の音　　美代
初花をつけし若木の愛ほしく　　幾多
　陽炎たつを不思議がる子ら　　都茂黄

西　幾多捌

（平成二十年三月三日首尾　文音）

歌仙『丸太小屋』

噂りや木の香漂ふ丸太小屋　西　幾多捌
　川の向うにゆるる藤房　宮本恭子
テノールの余韻に歩すもおぼろにて　柴田美枝子
　日記一行書いて終りぬ　伊藤愛子
月天心銅鑼の音わたる港町　西　幾多
　ざくろ山盛りギャマンの皿　美枝子
ういただきし民族衣装爽やかに　恭子
　彼の瞳にゆるる灯の影　愛子
束の間の逢瀬に心昂りて　恭子
　カップに淡く紅の残れる　美枝子
信濃路の宿に松籟遠く聞き　幾多
　空の深さに冴えし満月　愛子
無器用に齢重ねて毛糸編む　恭子
　家族写真の子らも独立　美枝子
我翌はみいと言ふ名の三毛猫で　恭子
　椅子を使って柔軟体操　愛子
いつしかに小舟出てゐる花の池　幾多
小学唱歌うたふうららか　尊徳（ナオ）の像に燕が翻り　愛子
　剣道試合席入りの作法きつちり男客　幾多
心乱るる禁断の恋　美枝子
　居場所さへ明さず過ごす蜜月を　恭子
イルカと泳ぐ南国の午後　愛子
　炎天のチャペルへ続く石畳　恭子
ひとりぽつんとバーのとまり木　美枝子
　人並に格差社会を論じもし　愛子
行先決めず飛ばすナナハン　幾多
　見覚えの浜に佇ちたる望の夜　美枝子
ほくりと甘き母の栗飯　恭子
　赤（ナウ）い被布七五三にと譲られて　幾多
公園デビュー無事に果せる　愛子
　ベランダの有機野菜がよく育ち　恭子
携帯で撮りまたも発信　美枝子
　花の山紙飛行機が風に乗り　愛子
日にぴちぴちと上り鮎汲む　幾多

平成二十年四月二十日首尾（文音）

歌仙『山笑ふ』

滑川美智子捌

耳遠き人との会話山笑ふ　鈴木ヨシエ
マンガ本読む長閑なる午後　滑川美智子
種芋をえらびて植える日課にて　小林真理子
カリヨンの鐘時を告げをり　斉藤弘子
月まどか豪華客船沖を行く　ヨシエ
白萩ゆるる図書館の庭　真理子
しとやかに袱紗捌きの風炉名残　弘子
パッチワークで手提げ縫ひあぐ　ヨシエ
誘はれて暑中休暇は軽井沢　美智子
犬と散歩の白樺の道　真理子
評判のケーキを買つて待つ妻へ　弘子
歌をうたへば足も軽やか　ヨシエ
昇り来る月写さんとカメラ据え　真理子
素焼の壷に秋の七草　弘子
落鮎の串並びたる産業祭　ヨシエ
潑剌とした友と出合ひぬ　弘子
城跡はテニス広場よ花万朶　真理子
町は朧につつまれてをり　ヨシエ
岩影にもんどり打つて海女潜る　ナオ
机上を飾る水着の写真　美智子
彼からのメールが届く午前二時　ヨシエ
不意に抱かれて息のつまりし　弘子
小流れを両手で掬ひ小休止　真理子
観音堂に散る葉眺めて　ヨシエ
編みかけの毛糸ころがる猫の前　真理子
幾何学模様気に入つてをり　弘子
石塀の倒れしままの地震の跡　ヨシエ
遠廻りしてたどる故郷　真理子
月澄みて東京タワーのくきやかに　弘子
香りのまろき新酒を求め　真理子
懇ろに挨拶されて秋深む　ヨシエ
はきはきとした電話応対　真理子
日本中インターネットで結ばれて　弘子
欽ちやん走る二十四時間　ヨシエ
夜もなほコンビニはやる花の宴　真理子
風船売りの若き呼び声　美智子

平成十九年四月十八日首
平成十九年八月二十日尾
（於・中小路交流センター）

歌仙『夏座敷』

片野弥恵捌

還暦の師の若々し夏座敷　片野弥恵
茂みの奥に鯉跳ねる音　加藤土筆
葉書絵に近況添えて送るらん　鶴岡育枝
ビンゴで当るポテトチップス　石井斐子
満月へ肩車の児手を挙げて　鈴木ヨシエ
路地吹きぬける風の爽やか　澤畠シツ子
赤い羽根付けてくれたる声やさし　土恵
笑顔の佳さについ一日惚　伊香渚
駈落ちは京都と決めて乗る列車　枝
歌枕とて投句箱あり　斐
深眠るタイムカプセル揺り起こし　土
囲炉裏を囲み交わす盃　恵
月冴えて狸がのぞく茶道口　枝
老舗の偽装つぎつぎと出る　斐
縄抜けはあっと驚く見事さに　土
翁の面箒火に映ゆ　シ
樹木医が命さずけて花万朶　渚
屋台豪華な高山祭　エ
韓国の旅に誘われ惜む春　斐
古刹庭園飽かず眺めて　〃
出来たての熱き豆乳もてなされ　土
テニスのラリーふえる観衆　渚
愛らしきポンダリア今盛り　シ
はとこ同志で海を見ている　石川京子
仕組まれし政略結婚逃れ来て　枝
金のわらじで得たる女房　土
CMは五つ数えて早送り　渚
大草原に羊の群が　斐
寝そびれて暫し仰げる夜半の月　シ
萩の影置く蹲踞の水　京
城跡の像はけぶらう霧の中　土
歌舞伎役者に門戸開かれ　エ
泣きごとは言わず秘かにのむくすり　枝
ジーンズ穿いて買物に行く　斐
爛漫の花の街道どこまでも　渚
山の彼方にかかる初虹　恵

平成十九年五月　十日首
平成十九年六月二十五日尾
（於・大久保交流センター）

短歌行　『ひとむかし』

小向敏江捌

水すまし軽やかに過ぐひとむかし　小向敏江
　山あじさいの鉢並ぶ路地　大久保霞
キッチンに焼きたてパンの歌ひびき　斎藤靖子
　心弾んでフェーストレッチ　川岸絢子
ウ居待月明日は何がおこるやら　吉川智
　ワザリングハイツ愛冷まじく　亀田よしえ
ロザリオ祭尼僧の涙秘めやかに　平田宏子
　君住む街の駅を通過す　敏
埒もなし縊死で葬るカネの闇　靖
　はしか休校列島ゆるがす　絢
塔頭も花に埋もれる吉野山　智
田毎十匹蛙合戦　宏

ナオ紅のビラ撒くごとく胡沙来たる　霞
　アニメCD海賊版で　〃
バーチャルのゲーム通貨で大もうけ　敏
　毛皮のコート試着はネットで　霞
夫捨て子捨て二人で冬ごもり　絢
　うすき唇してカード占い　宏
野分去り山の端近く白い月　よ
　秋刀魚焼きつつブルックナー聴く　敏
ナウおしゃべりのババ来ないでと運動会　よ
　メダルを掲げ夢は七色　智
花吹雪カメラ構えて風を待つ　靖
　マルゲリータを春のテラスで　絢

平成十九年六月五日首尾
（於・パルテノン多摩）

歌仙『寒牡丹』

寒牡丹蕊に囲われ心地よげ　　田辺　昇捌
　辞めて羨む他人の賞与　　村伸良子
新幹線ビールと雑誌買いこんで　　伊藤秀峰
　月から受像地球の写真　　平本宗嘉
心字池名月映す松の影　　佐藤宗文
　独り寝侘しこおろぎの鳴く　　嘉昇
薄(ウ)暗し読書進まず秋時雨　　山本芳岳
　想いは焦る老いらくの恋　　嘉峰
初孫の歩んよをはやす好々爺(ジジ)　　良峰
　国保値上げで嘆く年寄　　昇昇
ウザイとかギャル語が辞書に顔をだす　　文嘉
　衆参ねじれ法案通らず　　峰良
早夜更けて降りつ止みつの梅雨の月　　峰峰
　タンクトップについ目を注ぎ　　昇昇
飼い猫も枕に頭お昼寝中　　嘉嘉
　心に沁みる古寺の鐘の音　　良良
待っていた桜前線予報でる　　峰峰
　高雄新緑清流に映え　　昇昇
紅(ナオ)白の梅の盛りや天祖神　　文文
　裏方達は準備忙し　　昇昇
観音を訪ね訪ねて鳰の湖　　峰峰
　ランナー活用都心の銭湯　　文文
掘炬燵除夜の鐘聴く老夫婦　　昇昇
　寒雀焔(エン)々禅僧の偈　　峰峰
社保庁の事務の杜撰に増す不安　　昇昇
　身も燃えつきた忘れえぬ方　　嘉嘉
人並に恋も卒業夢も見ぬ　　良良
　万能細胞人類救う　　文文
病む友を案ずる我に後の月　　昇昇
　新米引き立て秋刀魚塩焼　　文文
暮(ナウ)れなずむ紅葉の映えて浄瑠璃寺　　嘉嘉
　人気絶頂鳥獣の戯画　　峰峰
流行語「ハニカミ王子」大賞に　　文文
　観るものもなくチャンネルを変え　　昇昇
山の道人知れず散る遅桜　　良良
　峠の茶屋に春風の吹く　　峰峰

平成十九年十一月十四日首
平成十九年十二月十二日尾
（於・神田稲荷神社社務所）

歌仙『才蔵』

小池正博捌

才蔵の掌で舞う太夫かな　小池正　博
　淑気満ちたる猫の鈴の音　内山尚　美
ジャム買いに朝の市場へ駆け出して　伊藤　馨
　魚川岸に籠一つ浮く　久保田夜　虹
地下街の上には月の倉庫あり　渡辺廣　之
　車眠りて虫すだく夜　品部一　朝
ヲ理科室で栽培をする笑い茸　吉澤久　良
　ガクガクガクとあごの関節　松永直　子
仙人が雲に乗れない晴天日　夜　虹
　時計の針は止ったままで　久　良
心中の片割れとして金魚売り　廣　之
　紙人形の半身は赤　久　良
凍てる月父に出自を問いただす　直　子
　落葉を集め帳面に貼る　夜　虹
かけ上るオランダ坂の牛乳瓶　久　良
　世界地図にはふりがなを打つ　直　子
細枝の先の先まで花の精　夜　虹
蓬摘む人あちらこちらに　ナオ親知らず抜いてから　廣　之
　ミノタウロスが屋根裏に棲む　馨
ごうごうと又大鼾止みもせで　一　朝
　橋杭岩に打寄せる波　尚　美
少女マンガみたいなサムライでもいいの　馨
　余人をもって替えやすい俺　廣　之
参院選候補者難の〇〇党　一　朝
　南無阿弥陀仏ナムアミダブツ　〃
シンバルを叩き忘れて冬の猿　廣　之
　ポケットの穴三センチ半　正　博
もじもじと匂宮と月の宴　夜　虹
　鴉にくらし露の後朝　一　朝
ナウ団栗は廃校の門埋めてゆく　久　良
　山頂近く風力発電　夜　虹
だれそれが生まれたという文学碑　馨
　大志抱いて旅鞄提げ　尚　美
一族は花の扉を開けて酒　正　博
　目近に光る春の湖　馨

平成十九年一月八日首尾

（於・アウィーナ大阪）

初懐紙
歌仙

『初日の出』

海境を金龍走る初日の出　　斉藤一　燈
大漁旗たて舟起しする　　土屋実郎　燈
あたたかく翁媼の微笑みて　　二上貴夫　七
われに従ひ跳ねる若駒　　梅津半　七
春ショール靡かす先に月昇る　　尾山志ら玉
衙へ煙草でたむろする人　　出口太　尾
競輪場歓声どつとあがりたる　　安野ひと枝　七
たまには変へる待ち合せ場所　　土屋実郎捌
遠くから手を振る君の少し痩せ　　斉藤一　燈
婚約指輪サイズぶかぶか　　土屋実　燈
風うけて聴導犬と歩む夏　　二上貴夫　玉
大川端の月の涼しき　　梅津半　枝
「谷地千」というタウン誌に人気出て　　尾山志ら玉　尾
足裏揉んで心かろやか　　出口太　郎
友と酌む鰭酒の味乙なもの　　安野ひと枝　燈
かごめかごめを唄ふ境内　　斉藤一　夫
大凧に花の映ろふ夕間暮れ　　土屋実　玉
頬杖ついて浸る春愁　　二上貴夫　枝
羊の毛刈る牧師等はボランティア　　梅津半　尾
さてものどけく通る物売り　　尾山志ら玉　郎
七宝の皿に出山盛り甘納豆　　出口太　燈
竹屋の渡し今を昔に　　安野ひと枝　夫
すがりつく人の情をなぶる鬼　　斉藤一　燈
貴方次第よ地獄極楽　　土屋実　夫
逢ひみての後の心は嘘をつき　　二上貴夫　子
ウォール街をはしる激震　　梅津半　枝
冬ぬくしグリーンランド地肌みせ　　尾山志ら玉　尾
寒鯛さばく囃の雑踏　　出口太　玉
月まどか何故か安らぐ三畳間　　安野ひと枝　子
独身生活毒茸生え　　斉藤一　春
妻を呼ぶ牡鹿の声のもの哀し　　土屋実　七
しみじみと聞く薬師寺の鐘　　二上貴夫　燈
箒立てしばらく空を仰ぎては　　梅津半　夫
ママいつ御飯もう眠たいの　　尾山志ら玉　子
満開の木花咲耶富士の峯　　出口太　尾
村のはずれに巣立鳥啼く　　安野ひと枝　春

平成二十年一月十九日首尾
（於・マスミギャラリー）

大山忠作先生文化勲章受賞

歌仙『鶴来る（その一）』お祝い

磯　直道捌

瑞雲をはるか見下し鶴来（きた）る　磯　直道
画布に捉える冬凪の海　矢崎硯水
折紙を折る幼ナ子が傍らに　矢崎妙子
クッキーを焼く香り漂い　土師満智子
望の月早や山の端を昇るらん　山口安子
いよよ高まる瀬音爽やか　清　きくえ
千歳（ウ）経る銀杏黄葉に染まる寺　渡邉常子
妖精棲むと伝説の沼　吉田絹子
白馬駈る王子現る夢の中　田村外男
未婚のままで自由謳歌し　渡辺ハツヱ
給料は外国旅行パラサイト　森田英子
月に届けと高き噴水　舟木美代子
珍しや都心の森に青葉木菟　高山佳子
暴走族が走るバイパス　細田恵津子
団塊の父はそろそろ定年に　躰中ぬい子
追憶はみな美しきもの　倉澤以世子
花冷えのすぐ醒め易き酒の酔　駒村多賀子
うつらうつらと亀鳴くを聞き　清水福子
小面（ナオ）の少し傾く菜種梅雨　佐藤ゑつ子
不漁続きで発つ船もなく　守口　薫
たくましき腕にタトゥーの見え隠れ　井生素子
根は純情でちょっとしたワル　岡本　眸
ひたすらに好き好きとくり返し　松永由紀
暖房要らぬ新婚の部屋　井上雨道
軽やかに舞うては消ゆる細雪　吉金白水
故里の川しんと静まり　安藤君子
まあほんと次のサミット洞爺湖で　岡村和可
手腕問われる安倍総理殿　笠原悦子
仲秋の月輝けるビルの上　佐藤治子
耳にまつわる残り蚊を打ち　新井アイ子
長老（ナウ）が主役となりて村芝居　松本光世
縞のスーツにしゃれたネクタイ　佐藤鈴子
オフィスの窓開け放つ小半時　前原四月
頬をなでゆく風のあたたか　紀伊郁子
神苑の句碑に花びら舞いやまず　高木　潤
珠とこぼるる春光の中　中野かずえ

平成十八年十一月二十六日首
平成十九年　七月六日尾　（文音）

大山忠作先生文化勲章受賞

歌仙『鶴来る（その二）』

瑞雲をはるか見下し鶴来（きた）る　磯　直道捌

松玲瓏と冬凪の浜　磯　直道

耳澄まし風の声聞く幸ありて　木部八千代

古稀も傘寿も健やかな日々　井上弥生

月浮かぶ金杯の酒呑みほさん　永井政子

銀杏黄葉の照り映えし庭　武知千代

清麻呂（ウ）を祀る社の親子猪　米谷志奈英

謂われ語れば土鈴よく売れ　大江加代子

新婚の頃の思い出あれこれと　福泉淑子

片目つむりて遥かなる恋　仁杉とよ

お座敷に並べられたる夏料理　西尾みゐ

簾越しなる月は涼しく　渡辺美於

白壁の続く町並保存地区　成毛偕子

宿場町なる郷の静けさ　山澤カツ子

どこからか故里の唄聞こえきて　鈴木光枝

記憶の底にゆれる学舎（まなびや）　杉山明子

「くさくき」も十年となり花万朶　桑原百合子

弥栄たたえかかる初虹　松田千佐代

春の川手作りカヌーなめらかな（ナオ）　池田昭子

車椅子押し母は和かに　村上孝枝

干支の絵を画伯描きて道しるべ　青山瑛子

心楽しき旅の一刻　大内善一

幼な日はなつかしきもの何もかも　磯　喜代子

串柿大根ずらり軒先に　稲川久見子

ちらほらと小雪舞い散る北の国　田村昌江

美人芸者に席は華やぎ　武　淑子

屈強でいなせな彼は議員さん　三井佐恵

忙中閑で万事そつなく　久保田先一

関門の大橋渡る望の月　梁井和子

古戦場跡蟋蟀が鳴き　緒方幸子

遠（ナウ）くより粧いし山眩しみて　渡辺俊子

駆けよる孫に両手さしだし　山田徳子

佇みし物乞い過去は良家とか　岡本せつ子

まどろみおりぬ清明の昼　新堀亭樹

百年のしだれ桜の花吹雪　石澤邦彦

御掌合せし釈迦のうららか　新井竹子

平成十八年十一月二十六日首
平成十九年六月二十日尾　（文音）

大山忠作先生文化勲章受賞

歌仙『鶴来る（その三）』お祝い

瑞雲をはるか見下し鶴来（きた）る　磯　直道捌

色冴え冴えと千歳の松を直す手鏡　磯　直道

名工の翁の面の懸かりいて　東浦佳子

祝ぎ唄聞きつ大盃の酒　小谷伸子

師のありて古里ありて今日の月　岩垂道子

町騒遠く落つる菩提子　古田悦子

猪（ウ）出ると話しきりに旅の宿　稲垣治子

茶柱の立つお茶で一服　加藤武子

幸あれと誕生石に希い込め　佐渡谷ふみ子

肩を抱き寄せ熱い口づけ　宮崎宏一

ビル街に横文字の店増えてきて　佐野とし子

エスニックの香赤き夏月　瀧　麻里

箱庭に打ち興じたる刻を得し　永見徳代

教育談義ひどくかしまし　荒川有史

読むほどにグリム童話の奥深く　荒川由美子

母さんを待つ幼稚園の児　中山英子

隅田川水面にうつる花万朶　小野良子

ほつりほつりと春の雨なる　遠藤久美

お祝い　柏村誠子

化粧（ナオ）くずれを直す手鏡　渡邉梅子

お目当ての彼は二枚目背も高く　濱崎琴代

練り塀ごしにひびく和楽器　田尻禮子

ドライブはハイブリッドの新車にて　三喜玲子

献上品の蜜柑摘む島　戒能多喜

厳かな神事見守る寒鴉　寺岡情雨

高齢ばかり進む世の中　大西素之

木洩れ日をくぐり楽しむ試歩の道　白石喜代子

染工房の幟はためき　廣渡雪路

音絶えて二十三夜の淡あわと　村上弘子

森の宴の俤（オモカゲ）と舞茸　田辺公恵

伝統（ナウ）と斬新並ぶ美術展　飯沼しほ女

目がくりくりの鳩時計買う　八尾暁吉女

親元を離れて学ぶ年頃に　室井秋紅

日永の日々を通う図書館　大澤花蝶

俳諧の連歌にも似て花筏　紺谷珠

霞の中に浮ぶ城跡　嶋田利江

中座して東司に立てば鳴く蛙　山下一水

平成十八年十一月二十六日首
平成十九年　六月二十九日尾　（文音）

歌仙『江戸の夜』

江戸の夜はかくもありなん春の雨　磯　直道捌
　サラリーマンの通う温き灯　磯　直道
桜餅葉をとりのける女子のいて　田島正夫
　色鮮やかな折紙の束　利根川　裕
月光に園児忘れし靴ひとつ　道夫
　同行二人ひぐらしの啼く　〃　裕
四国路（ウ）に穂芒の波銀を描き　道夫
　大海原に鴎（かもめ）の乱舞し　裕
あばら家の恋の跡地に咲く野花　〃
　小町訪ねし少将の声　道夫
敬老の祝辞も済んで席崩れ　裕
　月寒々と隠しごとあり　〃
ほほ被りして柊の香の寺苑　道夫
　奥に届きし松坂の牛　裕
すまなさを酒に預けて集いたる　〃
　音痴同士のナツメロの歌　道夫
船宿の浅蜊砂吐く花の宵　裕
　胸騒ぎして影の陽炎い　〃
山笑い牧は牝馬の品定め（ナオ）　道夫
　シルクハットを小手にかざして　裕
男去り女も去って洟すする　〃
　特養ついに姥捨てとなり　道夫
町起こし自慢の出湯は破綻して　夫
　そば屋の軒に鳴れる風鈴　裕
お供えに榊若葉を小神棚　道
　軍国おたく惚けたるまま　〃
そそのかす弓の調べに香を燻き　裕
　旅装を解いて車座の宴　道
モンゴルの望月かかげ草の波　夫
　幼き肌に哀れ残る蚊　裕
秋（ナウ）耕の人に会釈し墓参り　道
　立身出世今や昔に　夫
実盛の故事に逆らい白き髪　裕
　雲を映して流る大川　道
花嵐修羅場は遠く六十年　夫
　タバコの訣れ万愚節なる　裕

歌仙『大館』

初秋や風吹き抜ける大館　磯　直道捌
月代ほのと匂う山の端　渡邉梅子
子と共に立ち止まりては虫を聞き　廣田節子　ハツヱ
土曜の休み心通える　小田廣男　梅子
玲瓏とワイングラスに透きし海　高山佳子　梅子
河豚の刺身を食べる贅沢　〃
ウ年送るわが古里に笑い講　田村昌江　梅子
健康長寿家庭円満　廣男
隠し子を秘めて妻子をたいせつに　西尾みゑ　廣男
ホスト通いを夫は知らない　梅子
新宿は昼夜たがわず人溢れ　廣男
うたかたの虹噴水の虹　〃
夕焼けの褪せてキラリと三日の月　ハツヱ
久方振りに向かう文机　廣男
退院のお祝どさと積み上げて　廣男
雨の匂いを運ぶ楽の音　ハツヱ
花の下古き宮居に句碑除幕　廣男
諸礼停止に虻の目障り　廣男
ナオ宰相の言不明瞭の夜　廣男
カタカナ文字の多きこの頃　ハツヱ
抱かれてたちまち解ける恨みごと　佳子
楊貴妃の魂尋める玄宗　岩垂道子
この筐は封印したる玉手箱　昌江
根雪の底は静もりしまま　ハツヱ
しゃしゃり出る焚火奉行に鍋奉行　佳子
団塊族とひとくくりされ　小谷伸子
渋茶のみ超高層の最下層　廣男
剣山睨む床の蓑虫　〃
鋳流しの湖満月を掲げおり　佳子
墓の掃除でまとう線香　昌江
ナウ放蕩を尽くして滲む父の背　廣男
ひとり酌みつつ猫に難題　道子
積読の本であたりは散乱し　ハツヱ
旅もよいぞと桶の蛤　廣男
お天守をあわあわ包む花の雲　佳子
立ち去りがたく春を惜しめる　ハツヱ

平成十八年八月首
平成十九年二月尾

（於・北沢タウンホール）

歌仙『歳時記』

初秋や歳時記ひらとめくる風　磯　直道捌
芭蕉の葉ずれ聞こえくる縁　磯　直道
月今宵友の角帯凛々しくて　東浦佳子
未来語れば海はひらけし　〃　佳
夢載せてゆっくり回る観覧車　舟木美代子
滴る山の近く迫れる　佳
ウ涼しきは父母のお伴の出湯の旅　仁杉とよ
嫁ぐ日間近か想う幼な日　美
生真面目の彼はカリスマ心臓医　青山瑛子
ワインセラーに洋酒並びし　佳
人形はつぶらな瞳光らせて　永雄瑞子
梟鳴いて尖る細月　美
拉致されし子の手袋を握りしめ　永見徳代
マンハッタンに見ゆる国連　〃　徳
船上のダンスパーティー楽はジャズ　〃　瑞
故郷遠く水温む頃　〃　佳
花一樹此処にも小さき天神社　〃
新入生は部活決めかねナオ硬貨手に裏か表か繰り返し　〃
女心の揺れをたくみに　〃
色好み紫式部筆さえて　〃　佳
石山寺の高き石段　〃　徳
広々と湖はヨットを浮かべたる　〃　と
夏休とて子等の喚声　〃
厨ではカレーの味見幾たびも　〃
選挙事務所は早やも開かれ　〃　佳
節操の無き人などと言う噂　〃
過疎の野山も一瀉千里に　〃
忌を修し雲間に仰ぐ暗き月　荒川有史
籠に盛りたる黄菊白菊　〃　美
ナウ新蕎麦の香り豊かに畑もよく　〃　瑞
戦の話尽きぬ爺様　〃　瑛
知らぬまに雨がぽつぽつ降り出して　〃　瑞
蛙喜び銀の笛吹き　〃　瑛
除幕式迎えて花も綻びし　〃　佳
寿ぎまつる爛漫の春　〃　徳

平成十八年八月首
平成十九年二月尾

（於・北沢タウンホール）

悼渡邉梅子様

歌仙『寂かなる連句に』

磯　直道捌

寂かなる連句に座すや走り梅雨　躰中ぬい子
君を偲べば沙羅の花落ち　中山英子
とびとびにある庭石の面白く　倉澤以世子
ついと下りたる名も知らぬ鳥　鈴木光枝
子に教え孫に教えて月用意　成毛偕子
黄菊白菊高く薫りて　杉山明子
思い出の写真を秘めて秋遍路　桑原百合子
晴れわたりたる潮騒の道　小野良子
一本のペットボトルの水を分け　駒村多賀子
真紅に残る口紅の跡　遠藤久美
どうみても不倫とみえるふたり連　柏村誠子
枯木にかかる寒の三日月　清水福子
ひっそりと襞を重ねて山眠り　細田恵津子
玻璃戸の広き小児病棟　磯　直道
不勉強後悔すれどはや傘寿　山澤カツ子
祢宜の好める辛口の酒　ぬ
しっかりと今生の花見納めて　英
大空かけて淡き初虹　以
池尻に押し移りたる蝌蚪の陣　(ナオ)
無事完結のハリーポッター　光
期日前投票場は混みあいつ　偕
世俗の外で釣りを楽しみ　明
名代なる箸に崩るる冷奴　百
火蛾のとびこむ板敷の床　良
ひそひそと幽霊のこと囁かれ　多
急に会計済ませ出発　久
ゆくりなく恋しきひとにめぐり逢い　誠
かたや男装かたや女装に　福
名月がにこにこ覗く軽井沢　恵
山荘抜ける風は爽やか　直
故里に太鼓ひびける宮相撲　(ナウ)　カ
寄付の名前のずらり並びて　ぬ
休日はマイカー多きパーキング　英
陽炎の中父母の笑み　以
霞とも雲ともなりて花万朶　光
うつつなに聴く亀の看経　偕
光　偕　明　百　良　多　久　誠　福　恵　直　カ　ぬ　英　以　光　偕　明

平成十九年七月二十六日首尾

（於・駒村別荘）

歌仙『汐の香』

磯　直道捌

汐の香の運び来るなり花火の夜　磯　直道
　幾橋越えて渡る涼風　永見徳代
漸くに上がる桝の嬉しくて　東浦佳子
　床を背らに刀自のお出まし　小谷伸子
舞い進むほどに月光ヶ朗々と　小川廣男
　じっと動かぬ秋の蜘蛛の囲　田村昌江
ウ計の知らせ届きて零る乱れ萩　直徳
　葷酒山門抜ける妖しさ　徳代
禅家なら五戒を保つ色と酔　三笑亭笑三
　まなうらに置く楚々とした女　佳子
からころと音軽やかに日和下駄　伸子
　蕎麦の屋台に凍月が射し　廣男
狐狸の待つ取材旅行はずっこけて　昌江
　絆創膏を貼りし農相　直徳
たたいてもホコリなんかはもう出ない　徳代
　祖母のゆずりの七色の領巾　直道
カラオケの口三味線に桜散り　廣男
　目ばかり残るいかなごの皿　昌江
ナオ弊を振りやおら遅日を断ちし祢宜　廣男
　賽銭はずみ願うＴＯＥＦＬ　昌江
ケイタイに金髪の娘の笑い顔　直徳
　恋のニュースがニューヨークから　徳代
不倫とは知りつつ年をわすれたか　笑三
　野は広々と萱草の咲き　佳子
木道を辿れば岳に夕焼けて　伸子
　画廊の前に停まるはとバス　廣男
昼食は一流ホテルバイキング　昌江
　蝶ネクタイを直すソムリエ　直徳
雁連れし月に故郷思うらん　渡辺雪之丞
　そぞろに寒き川辺歩みつ　徳代
ナウ芒野に耳にざわつくコンサート　笑三
　笑三師匠は言葉巧みに　佳子
売店におやつラーメンよく売れて　伸子
　風船飛ばす同窓の友　廣男
花万朶傘寿の席は明るかり　永見純雪
　船揃いして千金の宵

平成十九年七月二十八日首尾

（於・永見邸）

歌仙『寒の雨』

悼　木部八千代先生

俤を偲べる句座や寒の雨　磯　直道捌

凛と匂いし庭の水仙　磯　直道

山鳩のもう一声が聞きたくて　松田千佐代

行きずりの道交わす挨拶　佐藤ゑつ子

夕月の川面に光ゲを散らすらん　三宮玲子

忘れ扇が部屋の片隅　大江加代子

晩ウ秋の耶馬渓訪ねひもすがら　土師満智子

かたへの女の揺れる黒髪　池田昭子

愛憎は消えて又湧く仲なれど　山口安子

遥か彼方へバイク飛ばしつつ　岡本せつ子

二の腕の彫物見えてラムネ売　渡辺俊子

湖より昇る月は涼しく　井生素子

退院の日は近づきて孫はしゃぎ　梁井弘實

絵筆に籠める容赦なき彩　廣渡雪路

国会のガソリン税が気にかかり　村上孝枝

笊にいろいろ産地直送　佐藤鈴子

故里の古刹の花も綻びて　松本光世

風暖かき囀りの丘　守口和子

予定表エジプト旅行弥生尽　山田徳子

おほつかなげにパソコンを打ち　白石喜代子

白蓮の燃ゆる恋路に憧れて　新井アイ子

火遊びばれて修羅場さまざま　橋本美智子

冬将軍手ぐすねひいて待ちかまえ　梁井和子

閉ざさる門扉削げる北風　安子

独り居も慣れて静かなこの齢　渡邉常子

お三時としてチョコのクッキー　宮川左利

またかよとそっぽ向く父にが笑い　濱崎琴代

知らんぷりして爪を研ぐ猫　千佐代

望月を友として銘酒酌みあいて　徳子

人集まりて在祭わく　せつ子

籾ナウ筵拡げる家の数も減り　加代子

栄枯盛衰残る石垣　満智子

山の気を深呼吸して邪気払い　守口薫

鉢の模様を透ける春愁　雪路

花万朶雪洞の灯に揺れ動き　孝枝

亀鳴く明日にふくらます夢　鈴子

平成二十年一月二十四日首尾　素子

（於・ウェルシティ小倉）

歌仙『山茶花は』

稲川久見子捌

山茶花は淡き陽たのみ寄り添いぬ　稲川久見子
北風防ぐ庭の生垣　阿部愛子
翼鎌と歩ける幸をかみしめて　久保田先一
ピアノ演奏しばし聴き入り　鈴木裕子
お月様ときどき遊ぶ雲隠れ　新相節子
芒の原を一筋の道　小林美津恵
薄(ウ)明り銅鏡磨く秋の巫女　裕
ふところおさえ掏摸に用心　三井佐恵
シルバーの出湯と味覚旅列車　安藤君子
再婚同士酸いも甘いも　君
どうしても忘れられない前の男(ひと)　星野はるひ
原爆ドーム月は涼しく　君
もののけの如くよぎりし青蜥蜴　久
腰の痛みがいやに気になり　裕
願をかけ何か良い事祈ります　岡村和可
遥か彼方の遠き島々　節
満開の桜は城址浮きたたせ　田村昌江
過疎にも馴れて独り耕し　佐
春(ナオ)の夜は心静かに香を聴かな　斎木フミ
水琴窟の音色かすかに　佐
写真展自由課題で競い合い　佐藤治子
雅な宴嫁ぐ宮様　美
ひたむきにそれで前向き貴方向き　裕
幸せ運ぶサンタおじさん　福田里ん
粉雪の舞いて狭庭は雪化粧　篠田喜美子
抱けばシャボンの匂う犬の仔　酒井つね
玉音を聞いた昭和は遠くなり　佐
宇宙飛行士夢の若人　横溝邦子
三日月も三日見ないと太くなる　節
床の間飾る菊の大輪　君
子(ナウ)規の忌に集い賑やか連句会　佐
樽のお酒の減りの速さに　和
政界は総理交代論じ合い　治
屋根替終り雨がはらはら　裕
久方の上野公園花万朶　フ
嶺々渡り帰りゆく鳥　昌

平成十九年十二月満尾

（於・川口市西公民館）

歌仙『心の張り』

冬の雷心の張りを揺らしたり　守口　薫捌

南天どかと活ける大壺　守口　薫

わがままな猫が出たいと爪たてて　土師満智子

少し澱みし庭の古池　大江加代子

望の月いまビル街を昇るらん　田尻禮子

漸寒のなかネット交信　宮川佐利

宮ウ相撲昔杵柄とった仲　満

負んぶで聞きし孫の片言　加

金婚の写真互いにそっぽ向き　佐

亡夫の仕草を偲ぶこの頃　満

山深き摩周湖の旅遊ぶ侏儒　禮

風にのりくるシャンソンの楽　佐

竹垣についと止まりし糸とんぼ　佐

梅檀香りいつか夕月　薫

寝たきりの母の介護に疲れはて　満

海外移住駆けめぐる夢　満

交流の記念の若木花咲かん　加

ひとひ長閑に酌みかわす酒　加

黄ナオ塵をまき上げ過ぎる市営バス　佐

ムンクの顔がうかぶ中空　薫

高潮に村のすべてが持ち去られ　満

膝つき見舞う笑まいやさしく　加

河豚鍋に口説き上手な口車　満

いい気な彼に鬼の豆打ち　加

CDのお経流れるお命日　佐

レインコートの犬がお散歩　加

ファッション誌作るスタッフあたふたと　薫

無人の駅舎灯りひそやか　満

内職を二十三夜に覗かれて　薫

がばいばあちゃん刻む苦瓜　禮

釣ナウってきた太刀魚光る厨房に　佐

はるか彼方にほのと島影　禮

定年で晴耕雨読守る棚田　薫

佐保姫いつかはんなりと消え　佐

襖絵の落花見事な奥座敷　満

点となりつつ雲雀鳴く声　薫

平成十九年十二月十八日首
平成二十年　四月二十四日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『蕎麦掻きや』

蕎麦掻きや母の手捌きたぐりつつ　廣渡雪路捌

ビルの狭間に霜枯れの庭　渡邉常子

定刻に農協ニュース流れきて　濱崎琴代

ぐるりしなやか背伸びする猫　米谷志奈英

輪になって地産の名酒月の宴　常

山粧いて映す湖ウ在祭長の張り切る過疎の村　〃

見合いの相手簸で順つけ　志

じゃじゃ馬を銭で馴らせし若旦那　琴

防衛省の悪事暴かれ　〃

点となり機影はるかに消えゆきて　常

貴船の月に暑さ忘れる　雪

ふらふらと蛍一つが迷い込み　常

再起をかけて励むリハビリ　琴

欠かさじとジョギングシューズ新調し　志

上り詰めれば展がりし海　雪

老らくの古刹めぐりの花の旅　琴

百囀りの満ちる大空ナオ苗代の細波ゆれる明るさに　雪

付かず離れず愛のシグナル　常

黒髪を梳きつつ疼く昨夜のこと　琴

すんなりいかぬ古紙の活用　志

シラクより戦略的なサルコジへ　常

河豚提灯の語るちょぼ口　雪

店先を飾る南天朱に炎え　琴

瞼に浮かぶ故郷の墓　志

眼鏡橋じゃんけんぽんで渡る子等　常

運河の澱み消えてすっきり　琴

雲足の迅さに月の見え隠れ　志

ふつふつたぎる鯊の甘露煮　〃

自ナウ分史の校正あげし文化の日　雪

卓に積まれた洋書漢籍　志

期待する王監督の胴上げを　〃

賑わい余所に種案山子立ち　琴

落花の譜ちらちら吹かれアンダンテ　常

夢か現か揺れる陽炎　雪

平成十九年十二月　十八日首
平成二十年　四月二十四日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『望郷譜』

寒鴫や啼けばぐらりと望郷譜　佐藤ゑつ子捌

思い出たどる裸木の道　佐藤ゑつ子
紺碧の海まないに広がりて　松田千佐代
自慢の魚拓壁に掲げる　池田昭子
山の端に今宵の月の昇るらん　村上孝枝
栗の子餅を皿に盛りつけ　梁井和子
弁慶になりきる祖父の村芝居　孝
観光コースみちのくの旅　千
フォト俳句趣味の一致であつあつに　ゑ
愛の証がいつの間にやら　千
新型のウイルス菌に悩まされ　和
船底に付く貝殻の群　千
汗しとどぐいと呑み干すコップ酒　昭
水煙照らす赤き夏月　和
テレビでの予報はずれて雨となり　孝
裁縫箱はいつも手元に　ゑ
公園の花の蕾も匂い初め　千
乳母車押す長閑なる午後　和
街角の緑の羽根のバイト生（ナオ）　孝
ネットカフェーで熱烈なキス　ゑ
騙されて泣きを見るよな恋なれど　和
開き直りて仕事一筋　孝
枯芒根はしっかりと地をつかみ　和
連衆集う暖房の部屋　千
暴かれて振り出しとなるロス疑惑　孝
首位奪還を目ざすホークス　孝
裏木戸はいつも開いたままにして　ゑ
お稲荷さんに揚げを供える　千
名月の森より聞こゆ笛太鼓　孝
松ぼっくりのころところがり　昭
うり（ナウ）坊は墓石の蔭に顔を出し　孝
さらさら流る谷あいの水　千
地場産の三つ星料理大当り　孝
沓脱ぎ石に置かる庭下駄　ゑ
花爛漫無事に帰還のエンデバー　昭
蝶舞い上がる蒼天の春　和

平成十九年十二月　十八日首
平成二十年　四月二十四日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『曼珠沙華』

井生素子捌

風のみな透きてゆきけり曼珠沙華　井生素　子
あきつ飛び交い口ずさむ歌　白石喜代子
月の宴連句の友と久久に　山口安　子
シフォンケーキのふんわりと焼け　佐藤鈴　子
小さき靴スキップ踏みて帰るらん　三喜玲　子
伝統模様美しき絨毯　素
冬ウ(ゥ)うらら緩和病棟窓広く　安
待ちわびているなつかしき文　喜
逢いし夜はなべて忘れて夢うつつ　鈴
ぐるりぐるりとらせん階段　喜
宝くじ当たり外れは神頼み　安
ぽんと叩けば西瓜ぱっくり　鈴
林間のキャンプを覗くまるい月　喜
静かになりし犬の遠吠え　素
祖父のひざ昔話の面白く　玲
出土の剣謎に包まれ　安
城跡に幔幕張られ花万朶　喜
笑う山並写すデジカメ　素
空海忌四国巡りの旅に出で　玲
雨の上がりて視界すっきり　橋本美智子
財産と器量にうかと一目惚れ　喜
妻は社長で企業拡大　美
DNA継ぎし息子は切れ易く　安
イージス艦の事故に凍てつき　鈴
追う千鳥追われる千鳥浜の道　安
準備整う市民マラソン　美
シャンペンを抜きて仲間とかけあって　玲
つとよぎりしは物の怪の影　安
天と地のあわいにきらり眉の月　美
夜長に励む趣味の油絵　喜
剽軽(ナウ)な畦の案山子の笠はずれ　鈴
有機野菜は母の生きがい　素
みんなして過疎対策に知恵しぼり　喜
草陽炎のもえる足許　玲
霏霏と散る花に詩心溢れきて　安
地平はるかにかかる初虹　素

平成十九年十二月　十八日首
平成二十年四月二十四日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『飯蛸に』

磯　直道捌

飯蛸に瀬戸の汐騒聴く夜かな　磯　直道
　朧の月に淡き島影　高須節子
わんぱく子春泥の町出て弾み　中澤昌重
　どこへ行こうか心うきうき　吉本蓉子
情熱のスポットあびるフラメンコ　真伏晴美
　冷房完備ほっと一息　中村友美
ウ朝方の夢見の友に夏見舞　利安和子
　返事のメール元気元気と　田端幸子
公園を犬をおともにランニング　塩田清子
　イヴェントのバス鮮やかな色　佐藤允子
大当り出るたび鐘を振り鳴らし　北濱祥子
　広い境内踊りはじまり　加藤貞子
山の端を煌と染めあげ望の月　河村弘子
　窓に一輪活けしきちこう　大谷信恵
無垢の身と命捧げん添えずとも　内山尚美
　押しかけ妻に彼氏たじたじ　岩本朝二
薄紅をほのかに照らす花簪　岩井秀子
弥生の宵の暖かきこと　直
ナオふらここを揺らせ思い出つぎつぎに　節
　佳境に入るハリーポッター　昌
年金の政策如何参議院　蓉
　何はともあれ平和よろこび　晴
民族の衣装華やか緊張し　友
　冬田眺めつ気象気遣い　和
無住寺の庭隅にある実南天　幸
　静かに聞ける遠き琴の音　清
旅にあり美酒を楽しむ刻を得て　允
　大正昭和平成と生き　祥
新涼の湖面に小舟夕の月　貞
　秋耕終えて家路急ぎし　弘
ナウ年毎に敬老の日の参加増え　信
　車椅子でも口は達者で　朝
孫からのやさしき言葉涙ぐみ　秀
　長き睫毛は亡き妻に似て　直
過ぎしこと遠くにありて落花霏々　節
　胡蝶の舞の果てもなき波　尚

平成十九年　二月二十二日首
平成十九年十二月　一日尾　（文音）

歌仙『春立ちて』

春立ちて心寄せ合う集いかな　　高須節子捌

丘に雲雀の高き囀　　内山尚美

耕しの畝真っ直ぐに揃いいて　　北濱祥子

ほっとして飲む煎茶一服　　大谷信恵

名月の影の移ろう奥座敷　　岩本朝二

微かな風に揺れるコスモス　　岩井秀子

ウ落語なら目黒のサンマとびっきり　　真伏晴美

二声三声屋台賑わう　　中沢昌重

如来様オークションにて連れ戻し　　河村弘子

なにはともあれ終えし長旅　　佐藤允子

永久の愛初のデートで誓いあい　　塩田清子

貴方の好きな帽子斜めに　　加藤貞子

パソコンの待ち受け画面冬の月　　利安和子

暖炉の側で欠伸する猫　　吉本蓉子

ひと筋に冒険もなき生活すぎ　　杉みつる

いつの間にやらゴール近づく　　田端幸子

見渡せば全山白く花朧　　信恵

田螺まどろむせせらぎの中　　尚美

ナオ暮れ遅く子等存分に遊びいて　　祥子

病も癒えて先ずは安堵し　　朝二

故郷に向かう列車に母思い　　秀子

鎮守の森におわす竜神　　晴美

ひっそりと静けさ包む逢瀬道　　昌重

儚く消えし恋は何処に　　弘子

木洩れ日に緑の映える避暑の宿　　允子

海の香りをふゝむ涼しさ　　清子

迷走の聖火リレーに戸惑いつ　　貞子

世界変えるもコミュニケーション　　和子

トンネルを抜ければ懸かる後の月　　みつる

稲刈終えて帰りゆく畦　　幸子

ナウ談笑の窓に爽籟吹き入りて　　節子

晶子歌集のページ繰る時　　尚美

御無沙汰の友の便りのなつかしく　　秀子

盆に小さき徳利盃　　祥子

日照雨きて花ちらほろと降りかゝり　　朝二

舌つづみ打つ木の芽田楽　　信恵

平成二十年三月　六日首
平成二十年五月十五日尾　（文音）

半歌仙　『鎮もれる』

加藤貞子捌

鎮もれる五重塔や光る風　貞子
　紫雲英咲きたる野辺のそこ此所　北濱祥子
シャボン玉小さく大きく生まれいて　真伏晴美
　コーヒーの香の匂うリビング　塩田清子
虫の音に誘われ月の昇るらん　真伏晴美
　過疎の里にも祝う豊作　高須節子
粧ゥえる山を眺めつバスツアー　貞子
　君の瞳に僕は虜に　祥子
砂浜のふたりの名前波に消え　晴美
　遠く近くに海猫の群　清子
暑気中りシャトルで巡る夢をみて　節子
　百薬の長ちびちびと飲み　貞子
寒月も月の輪熊に子守唄　祥子
　家族みんなで囲むよせ鍋　貞子
年金の不安何処まで続くやら　節子
　老いての娯楽映画鑑賞　清子
やみて降り降りてまたやむ花の雨　晴美
露伴繙く春のあかとき　祥子

平成二十年三月十五日首
平成二十年四月四日尾

（文音）

歌仙『夜神楽』

夜神楽のあめのうずめのみこと舞ふ　牧野正弘捌
　強霜（つよしも）の気のあたり一面　牧野正　弘
馬小屋の蹄掻く音聞こえきて　齊藤眞　人
　起きがけに飲む水道の水　齊藤眞　人
東に明けの明星月西に　富田　要
　銀杏拾ふ人と挨拶　富田　要
米袋（ヲ）持つて山へと茸狩　井之前　勲
　ひと休みとて草に寝転ぶ　井之前　勲
恥じらひてくるりと回り背を向けて　太田直　史
　セーラー服がチョコを差しだす　太田直　史
カリヨンの鳴りいだしたるアーケード　にしあきこ
　女性議員の演説を聞く　にしあきこ
子供らは金魚すくいに熱中し　人
　月の光にアカシアの咲く　人
三味線の音聞こえくる駅の裏　要
　屋台の爺とさしつさされつ　要
夕風のすこし出できし花の河岸　史
お遍路さんの早足で行く　史
春時雨（ナオ）山家の軒でやり過ごす　勲
　できた俳句をケータイメール　勲
カプリへと渡るフェリーの銅鑼の音　弘
　声高にゆく韓国の人　弘
思はざる寒波に背中丸くして　人
　城のお濠に鴨の陣敷き　人
Tシャツのジョギングの列通り抜け　要
　オープンカーに元は女優と　要
三人は子供ほしいと抱きしめる　史
　潮騒ときに高く聞こゆる　史
満月を仰いでつかる露天風呂　弘
　出来秋のことあれこれと言ひ　弘
落鮎（ナウ）の塩焼き酒のつまみにし　勲
　李白は詩詠み友は琴ひく　勲
国境（くにざかい）なせる山並雲の中　要
　青年教師分校に来る　要
車座に弁当開く花筵　人
　逃水追つて走る子供ら　人

平成十九年十二月五日首
平成二十年　三月三日尾　（文音）

歌仙『青空へ』

白井風人捌

青空へ枝さし交はしほほえむ芽木　白井風人
うららかに舞ふ海辺の風車　山崎紋子
古屋敷バラ華やかに彩りて　諏訪陽子
赤子の声のとぎれとぎれに　西山妙
三日月を愛でて心を落ち着かす　紋
良夜の駅へ送る友人　陽
甕（ウ）箪笥のノッポもチビも一つ棚　妙
小雨に濡れる結び文あり　紋
美味い飯いつも貴女に感謝です　陽
社員食堂少し懐かし　妙
窓下のテニスコートにわく歓声　紋
外科病棟は回診時間　陽
下駄の音高らかに鳴り凍る月　妙
柚湯を浴びて香り楽しむ　紋
還暦や北海道へひとり旅　妙
群集の中握手をかはす　陽
自転車を押しながら行く花の堤　紋
小綬鶏が呼ぶ谷間を覗く　妙
親馬（ナオ）へ振り向いて又立つ仔馬　人
厩舎の奥でケイタイが鳴り　妙
前評判チケット売り場並ぶ客　紋
銀座の街の小さなホール　陽
真夏日を数えてはつくため息よ　妙
羅（うすもの）を着てリンと気を張る　陽
お話に聞き入る児の目輝いて　紋
綺麗だよつて言つて下さい　妙
患（わずら）つてちよいと試した草津の湯　紋
ひまにまかせて絵はがきを書き　妙
月光がピエロの踊り際立たせ　紋
伽藍が舞台秋の上演　妙
帰（ナウ）る燕畑の中に大集合　陽
皆が主役の井戸端会議　妙
ひようきんな仕草に笑ひはじけとぶ　紋
川のほとりに記念樹植えむ　妙
咲く花のにほふがごとき青春（トキ）偲ぶ　陽
思ひ出尽きず春深まりぬ　人

平成十九年　六月　二十日首
平成十九年十一月二十八日尾

（於・白井風人宅）

歌仙『わが胸へ』

白井風人捌

わが胸へ童の如く夏落葉　妙人
　釣糸垂れつつ聞く滝の音　風人
一斉に雀が木から飛び立ちて　白井
　ぶつかりもせず空へ散りゆき　妙
子の手取り窓辺に寄りて月仰ぐ　西山
　夜寒の露地にケイタイの声　妙
庭ウ木刈る男がひとりうれしげに　人
　フィアンセも孫連れてくるとか　妙
早々と今日は二人で午後のお茶　人
　白きペンション唐松に映え　妙
忘れてた友への返事あわて書く　人
　辞書を引きつついする道草　妙
中空に見張るかのごと冬の月　人
　霜降る江戸を義賊小走り　妙
小部屋にてひとりビデオを眺めをり　人
　昨夜のカレーゆつくり味わう　妙
知らぬ間に花のひと片袖につき　人
　駅へと急ぐ遠足の列　妙
ナオ海岸をゆくタンカーや風光る　妙
　ポケットにふと触れるがま口　人
石置けばよき景色なり盤の上　妙
　共に仰ぎぬ遠山の雲　人
教室は鉛筆のおと蝉しぐれ　妙
　隣り家の庭ハンモック吊り　人
朝刊に三段ヌキの見出しありて　妙
　昔のひとの名前あわてる　人
ギャルたちも神妙に待つ辻占い　妙
　ころげて止まるサイコロの六　人
サーカスの大小の檻月高し　妙
　明日はもみじの谷へ行こうか　人
ナウ大振りの松茸カナダ産とやら　妙
　包みをひろげしばし楽しむ　人
バイキングお互いの皿のぞき合い　妙
　廊下を猫のそつと過ぎ行き　人
グランドにボール追ふこえ花の昼　妙
　春日輪を拝む老翁　人

平成十九年六月五日首
平成十九年十二月六日尾（文音）

歌仙『町に貌』

住み馴れし町に貌あり冬うらら　岡本　眸捌
　ロータリー埋め咲ける山茶花　岡本　眸
手をつなぎ通園の子等和やかに　大月西女
　生まれし犬を貰う約束　井ノ口カ子
ピッコロの音色清しき望の夜　西
　マロンケーキにハーブティー添え　カ
夢に見た豪華客船爽涼と　紀伊郁子
　デ・ニーロに似た渋き彼の君　西
甘い声掛けてみようか止めようか　眸
　嫌いは好きの裏返しなる　眸
べらぼうな石油高騰打つ手なく　郁
　賞味期限は信じるが阿呆　西
街角に蚊を払いつつ立話　西
　月にきらきら廻る矢車　眸
久々に心引かれる戦記物　郁
　隷書の軸を掛け替えてみる　カ
絶え間なく散る花浴びる屋敷神　福井泰子
　帷子雪の遠き石鎚山　〃
　二眼レフ構えて写す戻り鴫　山田昭子
　こころ通える力ルチャーの友　川嶋七重
応援にマラソン選手ピッチ上げ　高木じゅん
　焦り見え見えテロ防止案　七
世界へと輪を広げゆく拉致家族　眸
　頬被りして逃げる泥棒　じ
その昔安アパートの隙間風　泰
　死語となりたる亭主関白　昭
色里が恋しと洩らし痴話げんか　七
　狂気の沙汰も愛の表現　じ
観世音描く酒杯に月の光　百合田紀子
　脂肪ののりし旬の秋鯵　西
婆さまが傷に貼りたる血止草　〃
　なまり言葉で煙に巻きたる　鷹田紅子
故郷に高速道路開通し　眸
　暮れかぬる日に続くイベント　紀
雪洞を点せば花の匂いたち　紅
　舞妓の帯のゆるる朧夜　〃
　　平成十九年　十月　十日首
　　平成十九年十二月十二日尾
　　（於・岡本宅）

源心『鷹渡る』

―明雅忌―

眩しくて見えぬ虚空を鷹渡る　東　明雅
　冬の訪れ告ぐる潮騒　矢崎　藍
玄関の一輪車増え石蕗は黄　長坂節子
　ロールケーキはパパのおみや　繁原敏女
ウ月巡る「かぐや」の映す我が地球　伊藤良重
　小牡鹿の呼ぶ山の頂　石川　葵
尽くせども充たされぬ恋萩の宿　黒木美代子
　タロットカード速きシャッフル　由川慶子
イスラムの祈りの響くモスクに　稲垣渥子
　裏切ることも明日生きるため　谷本守枝
屈託もなく洗濯機回りをり　矢崎　藍捌
　上目づかひで腹這へる犬　東　明雅
母とゆく一望千里花堤　矢崎　藍
　春の匂ひの招き看板　長坂節子
ナオ絵手紙のクレパスの色暖か　繁原敏女
　病気の理由みんなストレス　伊藤良重
大政党付いて離れてまた付いて　石川　葵
夕立が過ぎ濁流の河となる　黒木美代子
魂の蛍になりて君がもと　由川慶子
　洗ひてもなほ髪の移り香　稲垣渥子
ＣＤの尾崎豊を繰り返し　谷本守枝
　目的もなくとばすハイウェー　矢崎　藍
骨太の田舎育ちで月今宵　東　明雅
　ドラフト会議済んで爽やか　長坂節子
ナウ笑茸しめじ平茸ありつたけ　繁原敏女
　温暖化などすこし気になり　伊藤良重
花筵酒仙降臨やっとかめ　石川　葵
　どこでもドアで現れし初虹　黒木美代子

平成十九年十一月二十一日首尾
（於・桜花学園大学五一三教室）

半歌仙　『月の宴』

小野芳梅捌

月の宴ジャズのスウィング聞こえけり　石川　葵
秋桜ゆれる学園の庭　由川慶子
駅前の松茸飯がよく売れて　黒木美代子
久々に読む連載漫画　代
近未来空飛ぶ靴もできそうな　葵
赤児眠らすビーチパラソル　深津明子
北限（ウ）を越えて見つかる熱帯魚　明
深追いすれば逃げる恋人　慶
暁のKissやるせなきアパルトマン　藍
ブラックコーヒーぐいと飲みほす　代
垂木より一反木綿ぶら下がり　藍
狐の飛脚走る街道　矢崎藍
紙を漉く孤独かかえて月高く　明
祖父は総理で父は大臣　明
知らぬ間に下流社会に組み込まれ　葵
延命治療やめておくれと　梅
花の枝に鳥来る窓の小さき幸　小野芳梅
ぱりぱりレタスそえた食卓　執筆

平成十九年九月十八日首尾
（於・桜花学園大学五一三教室）

半歌仙　『作業着のランチ』

黒木美代子捌

作業着のままのランチや風光る　黒木美代子
黄のふっくらとクロッカスの街　矢崎　藍
目の開かぬ仔猫貰われ籐籠に　佐藤ふさ子
口笛吹いて部屋の片付け　石川　葵
留学生草原の月語るらん　藍
母の便りの届くやや寒　ふ
ウつややかな団栗独楽のくるくると　代
恋の予感のダンス教室　葵
ケイタイの動画でキスを送りまし　代
薔薇の香りのお茶は淹れたて　藍
初夏の旅は飛天と瓔珞と　葵
匠の技は忍の一文字　ふ
六本木ヒルズに雨の降りしきる　代
はるか聞こえたような銃声　藍
枯野ぬけ長距離列車ゆく孤独　葵
梟だけが起きている森　小野芳
月高くこよい聖夜の遠花火　梅
ハンドベル振る小さき両の手　ふ

平成二十年二月十九日首尾
（於・桜花学園大学五一三教室）

連句十八韻　『川柳』

中尾青宵捌

川柳やさしき死者の通りけり　城倉吉野
かたびら雪の残る夕ぐれ　中尾青宵
階の上の飼屋の小虫糸を吐く　加藤亀女
火伏せ様には湯気の立つ飯　福島朱鷺
遊学子ギター一丁肩の紐　小林節子
牛追ふ人とアルプスを越え　渡辺柚

休日はガラクタ市の探し物　水野禾甫
魔除け目玉に竦む泥棒　鶏澤八千代
縮緬のおじやみポンポン数増える　鈴木圭子
迷子泣き止む角の交番　鷺
細長の洒落たフレームよく似合ひ　柚
三忌明くころ一寸浮つ気　亀

植林をゴビの人々動かして　野
開く食堂託児所を兼ね　節
道の駅悪い話も取り交し　圭
葦原沈む何か鉱毒　甫

平成十九年四月十四日首尾

（於・柴庵）

連句二十二韻恋賦物　『鍋祭』

鍋祭幼なは数を欲しけり　中尾青宵捌

艶の山女の嗤ふせせらぎ　加藤亀女

藍染める浴衣は粋に抜きがけに　鈴木圭子

柳絲分けてよくぐる大門　渡辺柚

代を掻く特牛(こっとひ)太きししむらや　城倉吉野

筍に盛る飯来振れる犠鼻褌(たふさぎ)　青

山二つ熟れ〳〵麦の番をして　野野

水子お地蔵風車よろこぶ　福島朱鷺

夢きつく星降るほども憎むかな　水野禾甫

タヒチダンスの最中告白　柚

月の夜女けだるき黒い肌　鵜澤八千代

男行かせてシガー燻らす　都筑はっぱ

十六のおぼこに付くは梅小虫　野

邪(よこし)ま新発意(しんぼち)箒(ほき)でどつかれ　圭

獄舎(つなぎや)に蛍火ほどの慕情かな　小林節子

エルベに落とすアリア切なき　亀

白鳥の愛は失くしてから捜す　鷺

黄蓮草に嗅ぎし移り香　甫

玉昭君匈奴に輿を涙なく　ぱ

宿りし子の名簀にしたたむ　亀

Eメール絵文字で描く恋ごころ　代

末摘むの花壁に羞じらひ　節

平成十九年五月十九日首尾

（於・柴庵）

連句十二韻　『夏暖簾』

夏暖簾今よりここが風の道　中尾青宵捌

町屋造りよ苔の滴る　渡辺柚

故郷の夕日の色にジャムを煮て　中尾青宵

三丁目の角けふも立ち読み　小林節子

明日からリクルート服に身を固め　鈴木圭子

ひらり〳〵と洞のかはほり　鵜澤八千代

ハンカチを届けてよりは懇ろに　加藤亀女

竹人形の腰の細さよ　城倉吉野

殺生石をも砕かんの虎が雨　金久保淑烏

逃げても寺の法華経が追ふ　都筑はっぱ

園静か欅並木の片かげり　福島朱鷺

小浜へ四里貝を拾ひつ　森川淳子

平成十九年七月十四日（パリ祭の日）　水野禾甫

（於・柴庵）　首尾

半歌仙　『エンデバー』

間瀬芙美捌

春光や宙の碧さとエンデバー　間瀬芙美
四方に飛びたつ蒲公英の絮　山内多美子
竪笛を吹く子に仔猫じゃれるらん　恒川暁子
ドアを開ければシチューふつふつ　暁
まんまるな月も顔出す同郷会　芙
蔦葛這う宿の石垣終ウ　多
らない推理小説秋更けて　〃
しょせんこの世はメビウスの帯　暁
ブランデーケーキに秘めた甘い罠　〃
熟女なれども素足ほっそり　多
大見得をきって幕引く夏芝居　芙
日本橋より駕籠のご用意　暁
御神渡り伸びる湖面に月さして　多
温暖化だと訴える熊　芙
バイト後は研究室で修論を　暁
オレンジを剥く指のしなやか　多
ほどほどに聞こし召しませ花の宴　芙
忘れたいこと忘れ弥生野　暁

執筆　多　芙　暁　芙　多　芙　暁　多　〃　暁　〃　多　芙　暁

平成二十年三月十一日首尾
（於・桜花学園大学栄キャンパス）

歌仙『春耕や』

春耕や土の息吹を聞き済ます　青山満子捌
若駒を追う村の小童　〃　満子
曲水の宴に烏帽子の居並びて　〃　盛興
シャッターチャンス風が悪戯　〃　風子
アトリエを包むが如く月の光ヶ　〃　弘子
壁にびっしり蔦葛這う　〃　興
新ヵ蕎麦の赤い湯桶に折鶴を　〃　満
ファーストキスを細い項に　〃　興
トラキチのデートは又も甲子園　〃　風
生む機械等非難囂々　〃　風
次世紀は人口四千五百万　〃　弘
墓地の広告富士望む丘　〃　興
寒の月オリオン昴従えて　〃　風
蹲の辺に休む凍蝶　〃　風
煎らせる香にストレスほどけゆき　〃　満
心静かに習うかな文字　〃　興
花筵幽明分けし人のいて　〃　風
観音様の笑みの暖か　〃　弘
渦潮ナヲに棹さす舟の遠霞　〃　興
皆都会へと跡継ぎもなく　〃　風
当選の慎太郎節変らずに　立花李公　公
饅頭笠楊枝くわえて　〃　興
定斎屋憩う裏道昼下り　〃　公
垣根隠れに行水の肌　〃　〃
灯を消してふたり寄添うはめとなる　〃　満
眉をひそめて部屋を去る猫　〃　興
ベネチアングラスを満たすベルモット　〃　〃
素顔に戻るピエロ孤独に　〃　風
浜町を流す三味線真夜の月　〃　公
秋の祭の気配そこここ　〃　興
匂ヶよき松茸飯の炊き上がり　〃　満
団塊世代にわか家政夫　〃　興
送迎はハイブリッドのエコ車にて　〃　風
バードウォッチ眼鏡ぶらさげ　〃　〃
花筏運河を埋めてどこまでも　〃　満
蒼天高く上がる大凧　〃　風

平成十九年二月十四日首
平成十九年四月十一日尾
（於・さいたま市民会館うらわ）

歌仙『姫辛夷』

松本杏花捌

瑠璃色に鳩膨らみぬ姫辛夷　松本杏花
　春風そよと古書市の旗　土屋実郎
ぶらんこを漕げば浮雲寄ってきて　木之下みなみ
　クルージングのテープ放てり　杏
東西の月の伝説さまざまに　実
　行水名残追い焚きをする　み
とっときの種茄子育つ裏の畑（ウ）　杏
　過疎地に生きて至極曖昧　実
恋敵年と同じに重ねもし　み
　社交ダンスで踏んだ足元　杏
部活動うつつぬかして落第す　実
　初鯛に堅魚木の月　杏
守武の句碑を訪ねて五十鈴川　み
　額集めて読めぬ扁額　実
知事選はどこ吹く風の炬燵猫　実
　二日酔にてさがす胃薬　杏
分隊会花の最後に江田島へ　み
雛の家から笑い声洩れ　実
小さき影ひとつまといて蝶の舞う（ナオ）　河野貴游
　浚渫船が欠伸する昼　み
先生と競うパソコンゲームwii　仁村俊子
　早く帰れと秘密の絵文字　吉野日出美
アトリエの鏡にほどく朱き紐　み
　ウォーターベッドの揺れのはげしき　貴
乗り継ぎて十夜念仏腸に　俊
　狐火ひとつ追いつ追われつつ　貴
旅鞄馴染むローマのミニホテル　〃
　聖母マリアの遠きまなざし　み
坂多き煉瓦の街に月皓々　日
　天水桶にこおろぎを聴く　俊
零余子飯夫のおかわりこばみます（ナウ）　貴
　捗のいかない日曜大工　み
大股のままに庭下駄転がりて　貴
　囀りまでも丸いポストに　み
花吹雪肩で受ければ肩に乗り　貴
　名札まぶしく麗かな午後　執筆

平成十九年三月十三日首
平成十九年六月十三日尾
（於・さいたま市民会館うらわ）

半歌仙　『朝寝がち』

大久保風子捌

目覚しに陽の射し込むや朝寝がち　小林しげと
　ほころび始む床の盆梅　大久保風子
猫の子がじゃれては爪を研ぎおらん　木之下みなみ
　ラッパ鳴らして通る豆腐や　しげと
綿打てばはや山の端に三日の月　風子
　への字への字に渡るかりがね　みなみ
ひとり旅いやに身にしむコップ酒　しげと
　くべる手紙に消えぬ言の葉　風子
ロザリオの日々を祈りの愛に生き　みなみ
　僻地医療に過す半生　しげと
石ばかり転がる川の寒月光　風子
　エコの流行で売れる湯湯婆　伊藤哲子
もしかして電池で走る散水車　みなみ
　目くじら立てて掬う出目金　哲子
少年は映画監督夢に見て　しげと
　魔法の鳩が象の鼻から　風子
松江城幾重幾重の花の雲　みなみ
遥か彼方にかすむ汽水湖　哲子

平成二十年二月二十日首尾
（於・さいたま市浦和コミュニティセンター）

歌仙『蒲の穂』

井門可奈女捌

井門可奈女　投げ入れに蒲の穂高く生けにけり
林　半星　空晴れわたり黄なる月の出
山野千艸　秋扇着痩せし母のしづもりて
奈半　銘菓到来お茶をいつ服
千千　蝉の声三千億と言はれたる
奈奈　赤いリュックで帰省する子等
半半　「千の風」西條市から全国に
千千　畑をたがやし汗流す日々
奈奈　ひたすらに唯ひたすらに会ひたくて
半半　携帯電話かける毎日
千千　すぶりして剣一筋の修業道
奈奈　手足の痛み人には言へず
半半　掛け大根並びし軒に月照らす
千千　ストーブ列車鯛焼きつつ
奈奈　ダイアナ妃追ふパパラッチ数多く
半半　池の中島眠る永遠
千千　ひと枝の花をかざして舞ふ舞台
奈奈　かぜにゆら〳〵石鹸玉飛ぶ
半半　汐干狩児は写メールの中
千千　社の新生児今年三人
奈奈　姉の服てなほしをして着る妹
千千　見送る汽車にハンカチを振り
奈奈　芝刈機芝生残して冷茶飲み
千千　仏法僧のかすかに聞こゆ
奈奈　勝利杯ハニカミ王子最年少
千千　我を忘れて抱き咽びて
奈奈　移り香をいついつまでも胸いだき
千千　水も火もなき被災地の日々
〃〃　月満ちて砂漠の駱駝キャンプする
奈奈　秋薔薇の中野点頂く
千千　砧打つ音響きゐる家の土間
奈奈　与野党怒号会議ゆれをり
千千　土佐選手たつたひとつの銅メダル
奈奈　痩せたい為の朝のマラソン
千千　川の中淀みに浮かぶ花筏
奈奈　海女笛の鳴る穏やかな海
千千

注　野点（のだて）＝野庭で頂くお茶の手前のこと

平成十九年八月十四日首
平成十九年九月十一日尾
（於・生活文化センター）

歌仙『白梅』

故郷や庭に白梅咲きし頃　井門可奈女捌
　想ひは飛びし笹なき鶯　井門可奈女
卒業生髪を逆さにたちあげて　弓崎雅美
　前菜を盛る青磁の小鉢　西原ちづ子
子供待つ家路を急ぐ月光り　山野千艸
　路地の奥より秋刀魚の匂ふ　雅
秋風（ウラ）を友に独りの露天風呂　千
　実名ばらす恋の履歴書　ち
思ひ出の多き彼の名砂に書き　奈
　波に消されて胸は高まり　雅
神様を拝むポーズのヨガ始め　ち
　テレビの音をひかえめにする　千
雷鳴の去り行く空に月高し　雅
　体操兄さん人気絶頂　千
ご飯屋で「芋たこなんきん」ご馳走に　奈
　「辞任に追い込め」怒れる女性　ち
見渡せるポトマック川花ざかり　千
　若草焼きの煙たなびく　奈
どんたくの山車引く男威勢よく　奈
　かくれんぼの児帯少し見え　千
注くるりんに乗りて下界をうちながめ　奈
　母の手料理懐かしき味　千
新嘗祭勤労感謝は同じひよ　奈
　枯野ではしやぐ犬の群れゐる　千
注カート乗りゆつくり走る飛行場　奈
　熱き思ひの届かぬ日々に　千
彼追ひて地球の裏で抱き合ひ　奈
　憲法改正民に問ふとす　千
月照らす砂漠の中の野獣たち　奈
　古伊万里盃に新酒かたむけ　〃
押寿（ナウ）司に黄菊飾りて客を待つ　千
　神社を焼きし罰当り者　奈
社会科はスタジオ見学生放送　千
　紐のからみをほどく毎日　奈
花掃けど掃けど舞ひ散る小学校　千
　木に寄りかかり春の夢見る　奈

平成十九年二月六日首
平成十九年五月五日尾　（文音）

注　くるりん＝松山の観覧車
　カート＝野球場のピッチャーを送り出す乗り物

歌仙『狛犬』

近藤真以捌

狛犬の阿吽のどかに梅日和　近藤真　以
清き流れにそよぐクレソン　大見宣子　以
春の宵吹奏楽に誘はれて　坪根キミエ　以
名残りの余韻ひびく靴音　中森順和　和
鍵穴を探す手元を照らす月　溝野智寿子　智
色なき風の迷ひ込む窓　長野晴好　好
菊ウの酒白寿の父のにこにこと　宣
日光菩薩姿麗し　南雲玉江　江
指先の赤いマニキュア目につきて　以
バランスボール怪我の思ひ出　以
動物の絶滅危惧種増え続け　宣
大学教授西に東へ　エ
滴りの音のかすかに三日月　エ
酸漿市に母を伴ひ　千
税上がり支持率下がる格差の世　和
夜行列車降りる人あり　智
川端にぼんぼり灯す花の宴　好
鷲の声森を越えゆく　宣
ナオゴンドラに揺られ気ままな春の旅　智
心やすらぐ盲目の歌手　好
ハンバーガーつまみ食ひする夜の街　宣
辻占ひは又も凶と出　以
鎌鼬（かまいたち）気づかぬうちに臑（おそ）はれる　江
ふるへる肩にそつとジャンパー　千恵子 鼓
抱きしめて胸の鼓動のハーモニー　エ
宮に願かけテニス三昧　和
ケイタイできのふも今日も平和ボケ　好
中国の地震被害甚大　智
猛犬も月の光にいざなはれ　以
林檎のかをり車内いつぱい　江
ナウ田の畦の粂山子に宇宙服を着せ　宣
力士の四股名酒の名に似て　エ
イケメンと呼ばれ源氏のよみがへり　千
値上げにめげず主婦の賢さ　和
咲きほこる花の大樹の下に佇つ　智
朝の川面に跳ねる白魚　宣

平成二十年四月二十七日首
平成二十年五月二十五日尾
（於・大分市菊屋ホール）

『オルガンの雲』

脇起り
非懐紙　関口せう子捌

空よ　お前の散らすのは
　白いしィろい絮の列
帆の雲とオルガンの雲　椅子の雲
　轉りうれしい湖畔わが庭
丘続き耕しの影暮れかねて
　九九を数えて家路急ぐ子
僕の夢ロケット作る大博士
　目の輝きは褪せることなく
祈り終え石のクルスの跡を消す
　生月島に明らけき月
盆踊り初めて君の手を握り
　胸はきゅんきゅん地虫鳴きつぐ
ぜんまいはまだ動いてる古時計
　Ｓｕｉｃａ　Ｐａｓｍｏと時代変われど
戸惑いを帽子でかくす温め酒
　一方通行工事中です
千の風千のバラ咲く花の園
　霞む盆地に遠き鐘の音

立原道造　丹下博之　華尤子　関口せう子　柳田崩
小宮幸子　原伸一　博之　崩
松下英雄　尤子　博之　伸一　せう子　幸子　英雄

（注）立花道造『雲の祭日』より

平成十九年三月二十日首尾
（於・さいたま市別所沼公園ヒアシンスハウス）

半歌仙　『梅雨の雷』

松下英雄捌

梅雨の雷閃光高層ビルに立つ　　松下　英雄
　蝉が生まれる街路樹の下　　丹下　博之
植木屋のハサミの音は軽やかに　　華　尤子
　若者の乗る自転車が行く　　原　伸一
大平原道果てる先月丸く　　関口せう子
　備え進める馬肥ゆる秋　　柳田　萠
濁酒仕込んでほっと婆は笑み　　尤子
　思い出してるおさげ髪の日　　せう子
うれしくも恥ずかしきかな夜這いとは　　萠
　三輪のお山はみょうに鎮まる　　博之
東西の何処にもあるお話さ　　伸一
　気分はれば踊る道化師　　せう子
月寒く観光客は襟を立て　　尤子
　白鳥眠る森の湖　　せう子
一発の銃声谺を返しつつ　　伸一
　グラスにそっと添える両の手　　尤子
盗人の片頬ふるう花吹雪　　博之
弥生の空は今日も快晴　　萠

平成十九年六月首尾
（於・さいたま市案思庵）

漢和行歌仙　『石蕗は黄に』

○標[遇]韻

赤田玖實子捌

咲く石蕗の黄色に日差し留まりいし　赤田玖實子
　凍蝶舞園圃○　服部秋扇
壁掛に綾織の布飾られて　横山わこ
　シナモンティーを午後のカップに　泉浩一
月光覆橋畔　小島七重
　秋風払歸路○　森垣宏
ウ牛蒡引く男の脛の痩せ細り　浩
粋なおなごは外股で行く　扇
身八ツ口それかあらぬかゆったりと　七
　恋の坩堝に嵌る逆さま　わ
川流河童祀　〃
　瀧登龍仏遇○　浩
庖丁人調レ羹　宏
庭先に飼う鶏卵と聞き　七
　消費税上げる狙いの税務会　わ
料峭吟二詩賦一○　わ
　落花浴嬰児　扇
朧月眺老嫗○　七

ナオ今さらに母校の姿懐かしや　七
　新旧蔵二書庫一○　わ
試乗車欣然　七
　戦闘機危懼○　玖
難民へせめて衣食を届け度い　〃
不毛の沙漠遊ぶ裸子　〃
倦みもせず擂鉢虫は待っている　わ
純文学の本は積ン読　七
　大衆無二名跡一　わ
貴紳有二徳裕一○　〃
メビウスの帯継なげれば月の道　〃
　鹿啼伴侶慕○　七
カケられし愛煩わし泣く添水　宏
焼木杭が燃えつきるまで　七
　談笑賑円卓　宏
議論沸春酣○　〃
御神籤の吉ひきあてし花の宮　〃
　柳枝揺官渡○　わ

平成十九年十一月十三日首
平成十九年十二月十一日尾

（於・町田市民文学館）

遺吟脇起
短歌行
『はるのゆき』

大野鵠士捌

各務支考
大野鵠士
清水青瓢
岡本満智子
成瀬貞子
村岡美智江
河合はつ江
伊藤英司
井口ひろ
早野さと子
梅村五月
大竹とみ江

今一俵炭を買ふかはるのゆき　竹下一峰
穴虫かけたる虫のよそほひ　竹中定男
芥菜の黄の広がれる堤にて　芝とよ子
親子で食べる丸いおむすび　藤塚晶子
ゥ月めざしドライブウェーひた走る　高松正水
雁渡れるか遠く小さく　矢橋初美
面影を菊人形に重ねをり　堀内洋子
一夜の契確と残像　水野由紀子
寝台車いつの間にやら首都圏へ　後藤キヌエ
ズーズー弁を聞くもよかんべ　松橋慎吾
居酒屋に独り手酌の花冷ゆる　伊藤百雲
皿の目刺はぎよろと目を向け　執筆瀬尾千草

ナオ拾はれて寺に住みつく孕猫　竹下一峰
土産物として売れる地のもの　竹中定男
あの海と同じ色したネックレス　芝とよ子
涼風揺らすスカートの裾　藤塚晶子
お姉サマこれ本当の恋ですか　高松正水
毒も薬も口うつしなら　矢橋初美
月凍てむ絶対零度程までも　堀内洋子
ただ氷晶の光る静けさ　水野由紀子
ナウ念願の余生はスイスにて過ごし　後藤キヌエ
鐘の響きを聞ける湖　松橋慎吾
千年の花のいのちのよみがへり　伊藤百雲
朧の夜の家のともしび　執筆瀬尾千草

平成十九年三月二十五日首尾
（於・大智寺・獅子庵）

《岐阜・獅子門―その二》

遺吟脇起歌仙

『初霽』

大野鵠士捌

旅人と我名よばれん初霽　松尾芭蕉
三百年の後の山茶花　大野鵠士
まつすぐに一筋白き道延びて　船渡文子
ゲートを潜る国境の街　高松正水
仰ぎ見る今宵の月の丸々と　田辺桂月
いづくともなく秋の風鈴　藤塚晶子
千代尼忌の釣瓶に水の湛へられ（ウ）　宮本輝子
形見に貰ふ衣の羽二重　伊藤英司
若き日の俤妻に通ひあふ　井口ひろ
膝枕にて耳掃除させ　後藤キヌエ
黒猫のうたた寝したる大欠伸　早野さと子
不在がちなる町の交番　青木久美
ナイターは佳境に月は中天に　芝とよ子
アイスクリームとろり溶けたり　矢橋初美
車内でも人はばからず化粧する　宇野久恵
持ち物はみな贋のブランド　大山功
マイクより囀り流す花の山　蒼井遙
味噌田楽の山椒ぴりりと　文

逃水（ナオ）を追つてみたくて旅にあり　村岡美智江
スケッチブックはやも二冊目　堀部比呂美
ワンルームマンション古き西の部屋　松橋慎吾
カップの中に彼の歯刷子　遙
またしても日陰の恋に身を落とし　水
眠れぬ夜は眠り薬を　田中啓子
ただ一枝開き切つたる冬薔薇　瀬尾千草
湖のほとりに群るる水鳥　ろ
うやむやにされるか京都議定書は　功
土産はいつも生の八ツ橋　月
おらが国おらが里なる後の月　美
はるかかなたに威銃鳴る　後藤嶺子
運動会スタート前にぐづる子も（ナウ）　エ
サングラス掛け叩く軽口　と
カプチーノエスプレッソにカフェオーレ　澤井国造
星占ひに病ひ癒ゆると　恵
あるがまま時に棹さす花筏　伊藤百雲
模様とりどり蛤の殻　執筆草

平成十九年十二月九日首尾
（於・岐阜市長良真性寺）

遺吟脇起歌仙『しぐるゝや』

しぐるゝや田の新株の黒むほど　瀬尾千草捌

車輪の跡のつづく冬道　翁

ハーモニカ吹く少年の額広く　莉庵瀬尾千草

母の焼きたるパンの香ばし　一紅庵本屋良子

城山を統ぶる高みに望の月　蒼井遥

群を離れて鹿の佇む　後藤嶺子

秋祭（ウ）ふるまひ酒に足取られ　河合はつ江

ＤＮＡは美男好きにて　森川淳子

いつまでもアニメのフィギュア捨てられず　後藤キヌエ

夢の中吹く無機質な風　田中啓子

裏木戸は開いたままにしてあるよ　船渡文子

夜釣のひとのテトラポッドに　青木久美

童歌口ついてでる月涼し　小坂五百子

昭和の時代遠くなりゆく　成瀬貞子

東京にあたらしい街又も増え　神山初子

白きウェアで軽くジョギング　富田美佐子

黎明の花の息吹に包まるる　岡本満智子

縁広々と春の庭園　エ

はりほての象の綱引く仏生会（ナオ）　竹内昭子

ビデオをまはす微かなる音　啓

アンドゥトロワすまし顔してポーズ決め　江

怪人棲むてふ奈落深くに　草

短日の玻璃戸に映る橋の影　文

君を抱くのか恋をするのか　昭

わたくしを妻と呼ばせてみせるから　佐

ジョーカーばかりトランプの札　生

外つ国の推理小説斜め読み　伊藤弥

ご隠居さんは大学院生　満

月光のあまねく降りて秋気澄む　松尾博

スカートの裾草虱つけ　雄

縫針（ナウ）の数確かむるそぞろ寒　遥

脳細胞をほぐす体操　淳

笑み浮かべ次の一手の打たれたる　貞

石のオブジェの形いろいろ　エ

桜前線この星に花溢れさす　博

野点の席の会話うららか　文

江

平成十九年十一月十六日首尾
（於・ドリームシアター岐阜）

短歌行　『不破の関』

成瀬貞子捌

人去りしより秋蝶の不破の関　成瀬貞子
杉の秀先の白き夕月　竹内昭子
新蕎麦の椀を重ねてご機嫌に　松尾博雄
手刀切つて貰ふ小遣ひ　伊藤弥生
ウ路地裏を知り尽くしたるボスの猫　後藤キヌエ
風濡るるまで尼の打ち水　富田美佐子
扇面にかな文字散らす恋の歌　貞
婚前旅行夢のウイグル　佐
ちちんぷい魔法のランプ現れて　昭
半信半疑下がる血圧　〃
九拝し盃受ける花筵　雄
平和の像は囀りのなか　〃
ナオ城山を仰ぎて回す春日傘　生
ちらしを配り主婦のバザール　エ
香りよきハーブティー今評判に　昭
愛はびびつと視線からめて　〃
連舞の息もあひたる身のこなし　雄
太郎の屋根に雪は降り積む　貞
橋幾つ運河に架かり寒の月　佐
石油支援のゆくへ気になる　エ
ナウ唱和する般若心経札所寺　〃
つるかめ算は爺の特技で　佐
淡墨の花は柱に支へられ　貞
ハングライダー麗らかな空　生

平成十九年九月　七日首
平成十九年九月十七日尾

（文音）

遺吟脇起
歌仙　『置火燵』

住みつかぬ旅のこころや置火燵　翁
　湿りの残る土間の雪沓　田辺桂月
大屋根の返す光を仰ぎ見て　清水青瓢
　移動スーパー流す童謡　戸田華笙
サッカーのシュート練習月明り　五十川直靖
　金木犀の匂ひして来る　久世竹水
取ッておきなれど振舞ふ濁り酒　松岡裕子
　マニキュアの指髪をかきあぐ　福永常子
どうしやう恋のてほどき誰に聞く　沢井国造
　バージンロード父から彼へ　早崎都
新車にて湖畔の道をまつしぐら　新町恵子
　期待を乗せて「かぐや」打ち上げ　大橋正子
手作りの月が出て来る夏狂言　佐々木嘉代
　一つ目小僧Tシャツの背に　笙月
チーズ菓子「ちりとてちん」の味まろく　名和よちゑ
　丸太のベンチ掛け心地よし　伊藤百雲
元禄の芭蕉行列花盛り　靖

ナオ鳩文字の額を見あぐる春日傘　田辺桂月捌
　財布の紐は堅くしつかり　裕恵
このところ株の売買ネットにて　高松正水
　おれおれ電話婆がころりと　内藤安子
寄せ鍋の仲間に入る下宿人　都
　バルキーセーター袖の触れ合ふ　草
四畳半熱き恋には狭すぎる　草
　青い鳥去る山のかなたへ　ゑ
政界はどこへ行くやらインド洋　靖
　釈迦牟尼仏の笑まふおほでら　常
俳句集広げる窓辺望の月　代
　足しのばせて虫の声聞く　雲
ナウ干柿の渋がそろそろ抜けるころ　草
　隣の家の人や何する　水
ひとり児に飛び出す絵本読みきかせ　竹
　落語の稽古寿限無寿限無と　造
十重二十重美濃より飛騨へ花霞　大野鵠士
　種井しづかに雲の映れる　執筆裕子

平成十九年十一月十八日首尾
（於・大垣圓通寺興行）

歌仙『寒蜆』

加藤渓草捌

アイスピック砂を吐けよと寒蜆　加藤渓草
着ぶくれながら厨預かる　田辺桂月
登下校見守り隊に参加して　竹内昭子
洒落たカフェが町のはずれに　五十川直靖
月煌々稜線くきと浮びをり　堀内洋子
狗尾草を刺繍する母　戸田華笙
芸術祭行つて来ますと残すメモ　矢橋初美
着メロの鳴る胸のポケット　早野さと子
いつからか喧嘩友達両想ひ　洋
世界一周船旅が夢　美
突然にしぶきをあぐる棚氷　靖
細き国土のちぢこまりゆく　宮本輝子
熱帯夜寝返りうてば赤き月　月
守宮がぴたり窓に貼りつく　草
趣味講座女ばかりで和やかに　笙
機嫌直してペコちやんの恋　子
届きたる花見弁当こまごまと　月
人形浄瑠璃泣かす惜春　常

新しき出会ひと別れ弥生尽　昭
次回五輪は北京の地にて　靖
ビル群の竣工祝ふアドバルーン　洋
ミントの香り進む商談　草
外套の衿かき合はす夜の風　笙
軒に立てある雪掻き箒　洋
聴えくるトランペットに佇ち止まり　月
スキンヘッドのちよい悪る親父　美
禅寺に結婚式の幕を張る　靖
薄端の龍水晶玉を　笙
むら雲の動く速さよ望の月　さ
遠来の客今年酒提げ　靖
上等の服をきてゐるおどろかし　美
臭ひくんくん尻尾振る犬　月
湯治場の朝餉の皿に海の幸　靖
ハンガーに干すイラストタオル　洋
大道芸拍子喝采花の下　輝
藍の国なる春虹の中　美

平成十九年二月二十一日首
平成十九年四月　二十日尾

（於・大垣文化会館）

半歌仙　『鼎談熱き』

伊藤薮彦捌

赤田玖實子
伊藤薮彦
伊藤哲子
高山英子
小野誠一郎
鵜飼佐知子
泉浩一
並木丁途

残雪や弾む心に集い来る　玖實子
鼎談熱き茶房二ン月　薮彦
青年は四書五経を諳じて　哲子
おねだり上手今日もご褒美　英子
天空に月ずんずんと昇りゆく　誠一郎
蜻蛉の目には何が映るか　佐知子
ウデジタルの大画面にて紅葉狩り　浩一
歌舞伎伎見物誘う令室　玖實子
装いし和服八つ口ちと広い　薮彦
車見送る胸の苦しさ　哲子
憎しみに渝る恋情水の色　英子
便利のつけが襲う食卓　佐知子
月涼し錆たる鍵の合わぬドア　誠一郎
宅配便の薩摩焼酎　丁途
赤誠を皆で贈る師の白寿　浩一
乗って飛びたい千ほどの風　薮彦
境なす大河を超えて花吹雪く　哲子
母に寄り添う牧の若駒　薮彦

平成二十年二月六日首尾
（於・本八幡・ルノアール）

歌仙『冬うらら』

冬うらら戯画転び出る猿兎　　大窪瑞枝捌
藪巻済みて庭の広々　　近藤守男
盆点前抹茶とろりと仕上ぐらん　　遠藤央子
少し斜めに締める帯留　　佐々木有子
湖の底にも月を見るやうな　　梅田實
木の実を落す風夜もすがら　　央
牧閉ざす荷台に牛を引き上げて　　有
ほれぼれとする肩の筋肉　　央
スクリーンにクローズアップの君の貌　　男
アリバイ崩す妻の妄想　　〃
強迫感清潔好きの高ぶれば　　有
糊がきつちりきいたすててこ　　〃
月涼し銭湯帰りの下駄ばきに　　央
永世竜王名乗る渡辺　　男
国会の最上段の議員席　　央
スポーツクラブ週に一回　　實
飛花落花バトンで切つてチアガール　　有
妻恋の鳥梢行き交ひ　　有
啄木忌砂の洩れゆく掌　　實
夢に乗りたる銀河鉄道　　央
無農薬野菜の並ぶ朝の市　　男
新参者は遠巻きにされ　　有
立合の乱れを嘆く相撲通　　男
頷くほどに熱いお講義　　央
おでん鍋湯気の向うにゐる貴方　　有
納めの弥撒に祝婚の鐘　　〃
艦隊の相互訪問ポーツマス　　男
フリーハグにて選挙盛り上げ　　央
「かぐや」から見れば地球は青い月　　男
紅葉に映えて続く山脈　　實
虫籠を置いたまんまで子は眠り　　央
バスの中ではしりとりの歌　　有
すみませんありがたうとて永らへて　　實
当字ばかりの江戸の古文書　　〃
酒も添へ花の社の奉納舞　　枝
陽炎踏んで履きならす靴　　實

平成十九年十二月十六日首尾

（於・桃径庵）

歌仙『青鷺と』

青鷺とその影の逢ふ水面かな　鈴木了斎捌

布袋葵の淡きむらさき　鈴木了　斎
おはじきの弾けるたびに声あげて　倉本路　子
念入りに拭く広き縁側　登坂かりん
月ふはり明日は異国へ発つ夕べ　山本要　子
コーヒーの香をかいでゐる虫　中林あ　や
はらはらと銀杏黄葉の散り初むる　山口美　恵
手もとにいつも「みだれ髪」あり　路　や
編上げの靴脱ぐ君が待ち遠し　恵　ん
駄々のひとつもこねてみやうか　路　や
妹がつなぐ命の清瀬村　恵　や
ベッドの跡の残る絨緞　要　ん
古日記捨てられぬまま十日月　斎　ん
友人ですと招く雪鬼　路　〃
校庭のジャングルジムに登らうよ　要　〃
頼むしかない上着かけはぎ　斎　要
などかくも花は見事に咲くならむ　路　や
久方ぶりの秘仏開帳　要　や
孕馬祈らんばかり世話をして　恵　ん
父は直毛僕は縮毛　路　や
畏るべしインドの九九は十九まで　や　路
純金風呂を叩き納得　恵　や
柔らかき汗の匂ひのふと届く　路　や
燃ゆる汝が頬陶枕に乗せ　ん　恵
それぞれの獄に身動きならぬまま　要　路
積ン読本を売るブックオフ　や　要
塵ほどの記憶の道を辿る旅　ん　恵
白といふ犬三毛といふ猫　要　路
鐘の音に震へる月の仁王像　恵　〃
西瓜提灯やうやつと持ち　や　斎
戦争の絵に人群るる敗戦忌　ん　要
老いてすいすい無料の地下鉄　路　や
方舟に乗りし祖のありし吾がをり　〃　恵
砂漠に心癒すアブサン　斎　ん
朝の日に透ける大樹の花の色　要　路
もつれて東風の抜ける城址　路　や

平成十九年七月十六日首尾

（於・桃径庵）

歌仙『月の海』

式田恭子捌

艫綱を解き放ちたり月の海　遠藤央子
　夜なべの窓に遠き波音　鷲山京子
お得意のサフランライス香り来て　榎吉和美
　マラソン人の背に声かけ　鹿又英一
同胞の和に入りて笑む留学生　秋山志世子
　いつも気にする素袷の裾　式田恭子
ひつ(ウ)そりと吸ひ込むやうな蝉の穴　英
　振り向きざまに百の媚態が　央
杖をつく身にも似合はぬ血の騒ぎ　世
　外れ馬券を踏む帰り道　世
街灯のほのと点りし夕まぐれ　京
　クリスマスキャロル月の真下に　美
紙漉の業を農家の副業と　美
　郵便局で髭剃つてゐる　京
いそいそと四十路の集ふ同窓会　央
　ジルバの次はパソドブレよね　央
雨上がり花の足跡目印に　世
　稽古着洗ふ春風の中　英
ぢいちゃん(ナオ)と山羊の毛を刈る庭の先　英
　柱時計が眠さうに鳴る　京
パパロッテイ三大テノールひとり欠く　央
　ピザを抱えて歩く炎天　英
遠くから路面電車の影が見え　美
　いにしへ遥か大塚の駅　央
庄之助お七炬燵で手を握る　美
　愛の飛礫をくぐる角巻　世
旅人の言葉の先に聴く懺悔　英
　赤子の声は夢と希望と　世
「かぐや」今いづこか月は空にあり　京
　目交を舞ふ大き秋蝶　世
呑(ナウ)ませてよ新走りでも濁りでも　央
　男は何も言はず語らず　英
胸中に般若心経唱へをり　央
　何事もなし今朝の湖　京
花の宴扇を揃へ嫋やかに　恭
　三宝柑のお持たせの品　美

平成十九年九月十七日首尾

（於・桃径庵）

非懐紙　『冬ざれ』

澁谷　道捌

冬ざれの脂まはりし檜板　　澁谷　道
朱きはやかに霜の年輪　　西野文代
新造の漁船の出来を誉めあげて　　茨木和生
橋杭岩の列が見守る　　道代
信心のはじめの酒を酌みかはし　　生代
彤管（*とうくわん）を吹くひとが現れ　　道代
過ぎ去りし刻を甘美にめぐり逢ふ　　生代
ひよつとそなたは狐狸のたぐひか　　〃
木枕の古びをらぬもありがたく　　代
吸ひ殻はたく音を重ぬる　　道
暁暗の背戸に味噌など焼く匂　　生
三分（ぶ）が早も五分ひらく花　　代
つぎつぎに馬が飛び来て嘶れり　　道
月のひかりをのこす嫩草　　代
中世（なかつよ）に「奥の細道」名づくとか　　生
物懐かしと語りはじめて　　道
気まぐれのごとく私（わたくし）雨（あめ）が過ぎ　　代
かへす扇に舞ひ納めたり　　道

平成十九年八月二十二日首
平成十九年八月二十八日尾

（文音）

*彤管…朱塗りの笛

歌仙『笛太鼓』

雛段にあそびせんとや笛太鼓　笠
　母に教わる木の芽田楽　愛
渡り初め春装束の華やかに　正
　いたずら風がなぶる前髪　修
七草を活けて独りの月を待つ　妙
　勘を頼りに造るどぶろく　笠
ウ万歩計延ばすコースの秋麗　愛
　ペアールックがとてもお似合い　正
何げなくあかぎれ隠す妻の厄　修
　横恋慕とは年甲斐もなく　妙
気がつけば掏摸に抜かれしパスポート　笠
　シルクロードの炎暑延々　愛
手踊りの果てて広場の月明かり　正
　無重力には天も地もなし　修
潮騒の中に身を置き育ちける　妙
　虻が邪魔する婆のうたた寝　笠
自転車は三角乗りの花並木　愛
焼ける目刺の匂う公園　正

ナオ重き戸を開ける新発意山笑う　修
　和尚達者で午前様なり　妙
碁敵は待った待たぬで仲違い　笠
　角を曲がって犬に吠えられ　愛
変装の張込み刑事息白く　正
　留守番の夜の酒に牡蛎鍋　修
まどろみの夢に初恋筒井筒　妙
　紆余曲折が育んだ愛　笠
老いてなおメールで交わす熱い胸　愛
　後期高齢とは呼ぶなかれ　正
松ケ枝にしなだれかかる望の月　修
　蕎麦屋の工夫紅葉天麩羅　妙
ナウ穂薄の波を離れる渡し守　笠
　とらやの寅を囃す子供ら　愛
縄電車露地から路地へ通り抜け　正
　空見上げれば雲は飄々　修
茅葺きの屋根に降り積む花の舞　妙
　黄蝶ふんわり止まる呼び鈴　笠

執筆　愛

平成十九年二月十二日首
平成二十年五月二十日尾　（文音）

歌仙『山茶花』

降りしきる雪に山茶花朱を点ず　村上敦子捌
ずしんと響く餅搗の音　和田忠勝
鴨の群飛び立ちし跡眺めいて　池田紅魚
カルチャーセンター資料取寄せ　和久井八重
久闊の友と語らう月の窓　藤沼和ヱ
稲の作柄かなり良好　敦子
平成ウの神嘗祭もおごそかに　忠勝
雅言葉に暫し癒され　紅魚
離れし娘無事安産の知らせ来て　八重
夫と旅する豪華客船　和ヱ
五十年始めて聞いた「愛してる」　敦子
知らぬが仏余命幾許　忠勝
涼しげな月の出ている業平忌　紅魚
庭一面に打水のあと　八重
遠くへは行くまい逃げた籠の鳥　和ヱ
ワーキングプアー娑婆の厳しさ　敦子
花の闇ぼんぼりひとつ竹刀だこ　忠勝
黒猫の子の瞳真ん丸　紅魚
潮（ナオ）の香の膳にあふれて春の宿　八重
義経伝説脈々とあり　和ヱ
権力者怖れを酒に紛らせて　敦子
おなご抱いても安らぎを得ず　忠勝
前世より妻はお前と決めていた　紅魚
大観覧車ペアールックで　八重
年初めオーロラ見物夢心地　和ヱ
惑う白熊雪少なくて　敦子
シュミレート浮世の果てはいかならん　忠勝
峠の道に拾う団栗　紅魚
くっきりと胸すくようなこの良夜　敦子
残る案山子は眉あげしまま　八重
ガラス（ナウ）吹く工房忙中閑あるや　和ヱ
阿吽の呼吸チーム七名　八重
駅伝の朝から天気定まらず　和ヱ
若鮎はねる迅き谷川　敦子
屋号にて呼び合う里は花盛り　紅魚
菜飯大盛うち子沢山　和ヱ

平成十九年一月十三日首
平成十九年二月二十日尾　（文音）

歌仙『俳諧之連歌』

緋鯉泳ぐ連句舞台や風通る　松濤軒静司
　匂うが如き新緑の尾根　目黒雨峰
芭蕉布の街着ゆったり着こなして　大津博山
　並び置かれし酒のあれこれ　本屋良子
月に吹く笛の音取りのトヲロレロ　坂本孝子
　枝渡りする色鳥の影　赤田玖實子
ウ母と子は七夕踊りあとさきに　伊藤哲子
　老舗と称し佃煮を売る　宮原うた子
商いは曲がったことが大きらい　久良木憲
　君を愛する国も愛する　坂田武彦
嫁さんは博士号まで持つという　生田目常義
　犬の散歩も方位選びて　和田ひろ子
しめ飾り月の出前に付け終わり　和田忠勝
　雪の霊山鐘を吸い込む　飯田紫苑
挨拶に傘かしげるは江戸しぐさ　高島幸子
　喧嘩三日で直る碁仇　今村苗
何故に人恋しくなりぬ花の宵　孝
鬼平好み自慢草餅　哲

ナオうららかにシニア講座の賑わいて　長田友子
　一期一会の出会これあり　玖
糸を買うロシアの市場針も買い　二上貴夫
　蔭に女の漂泊の旅　義
そむかれし強き胎動身に耐えて　村上敦子
　能楽堂にひいき筋あり　原崎弥生
「あのなもし」坊ちゃん電車に隣りあい　紫
　鍬形虫を追いかける道　鈴木善春
イケメンの過ぎにし頃の君想う　高柳慶子
　朝な夕なに唱う心経　速藤尹希子
月昇り湖面きらきら波をうつ　成田玲子
　エコ燃料で秋のドライブ　秋山よう子
ナウ佐渡の夢野生の鴇が空に舞う　良
　優しい地球きっとそうなる　田口明子
神よりの言霊水の如くにて　近藤蕉肝
　翁の辞世にかけし生涯　抱虚庵実郎
大山の右も左も花霞　宗匠
　春たけなわの庭に佇む　執筆

平成十九年五月二十七日首尾
（於・大山阿夫利神社能楽殿）

宗匠　松濤軒静司　　座配　大津博山
脇宗匠　抱虚庵実郎　　花司　千場ひで子
知司　近藤蕉肝　　配硯　和田ひろ子
執筆　横山わこ　　配硯　秋山よう子

『抱虚庵九世襲号記念』

脇起海内　抱虚庵七世　大林杣平仏
付廻百韻

菖蒲葺く藁屋を左右に俳行脚　和田忠勝
山時鳥こだまする渓　伊藤薮彦
訪えば裸童子のまず現れて　田島竹四
すすめられたる酢昆布の味　田島もり
風待の港に弾む国なまり　西田青沙
最屓それぞれ明日の地芝居　岡本耕史
祝ぎ唄に手拍子揃う月の宴　瀬野喜代
あきつあかあか群がりて飛ぶ　式田恭子
ウ医師となる夢を抱きて東京へ　広田遊
父の負債も忘るこのごろ　浅賀丁那
女将にはいまだ幼き児のありて　峯田政志
仲居のしごき商売の知恵　大島洋子
腐れ縁絡(からま)り解けずはや三十路　本屋良子
インサイダーで捕まって候　川名将義
お勤めを終えて涼しき鐘の声　山口美恵
片方ばかり減らす黒靴　伊藤哲子
凍土(フンドラ)をペルシャンブルーの月照らす　鈴木美奈子
外套を立て叫ぶハラショー　
喫煙の出来ない駅で煙草買い　
魚缶どれをあけても塩が利き　中林あや
左衛門橋をくぐる猪牙船　登坂かりん
にごりえのお力が散らす夜の花　坂本孝子
緋の巾着にしまう紅貝　鈴木了斎
二オ手をついて半眼となり蛙鳴く　赤田玖實子
もういいかいと竹垣の外　二上貴夫
神隠れ雲の中からまあだだよ　出口太尾
落ちないようにと網握りしめ　真田露丁
いつもより高っ調子の鼻唄で　生田目常義
辻占にきく明日の取引　杉崎優子
仲人の威儀正し居る夏袴　原田安恵
身籠りし娘の汗の艶やか　宮脇美智子
蟇鳴き退屈な昼下り　池田笑子
紅茶の時間ミルク多めに　佐崎静緒子
ころころとゴルフボールは穴の中　武村利子
試験のやまがごっつ当った　青島ゆみを
月愛でる折敷にのせる幸の物　杉山壽子
甕にこぼるる秋の七草　中森美保子
二ウ人住まず簾名残がかけられて　大口元通
よそ者寄って地揚げ目論む　伴野末季
リゾートのプレゼンテーション夢のせる　古賀幹子
迷うことなく口座振込　齋藤一燈
喫煙の出来ない駅で煙草買い　泉浩一

ぽつりぽつりと雨が降り出し石段に下駄の音する宗祇水

篠原達子

角巻被り彼につきゆく

松島アンズ

オーバーの男臭さに包まれて

西幾多

中華街にて選ぶ月餅

佐藤昌子

弓張もおぼろゆるゆる遊ぶらん

佐々木リサ

公魚釣りの車並びて

永見徳代

身を賭して成すことのあり花の下

渋谷盛興

無事に果さん千句奉納

下鉢清子

二ォ縁ある社の森は鎮もりて

宮原うた子

富士をそびらに湧水の街

田口明子

吾が夫は製紙工場技術長

長田友子

肩肘張らぬ湯宿一泊

鈴木玲子

この辺り昔の愛の小径にて

大場初江

立ち止まったが運の尽きかな

高木千代子

カラフルな名刺デザイン角と丸

久保田夜虹

NPOの法人の虹

岡本麻有

蓑かけて翁待つごとし夕立雲

内山純一

天才の目に浮ぶ涙よ

北原俊平

ゲルニカを戦憎みて描かれし

小金井康臣

歌を忘れた冬のカナリヤ

梅田實

熱燗に独り侘寝の夜半の月

末沢福栄

とんとんとんと叩くくぐり戸

柳井道弘

炭崎博

三ゥ正客に呼ばれて今日は紋付に

川嶋昭司

白髪にして政界の雄

遊免篤子

このところユーロ一段高にして

池本一軒

狭い海峡船の混み合う

高橋微代

愛用の双眼鏡も古りにけり

緒方眞也

子供とバードウオッチングに

前川英人

さわやかに里山手入れ精出さん

長嶋顕信

もち米の穂のたわわなる風

谷崎蕩々子

月出れば已忘れて他を利する

山田司

物の音澄みし次庵守りて

居関正二郎

男にも女にもよし嵯峨豆腐

小畑実

つらい憂き世のおかめひょっとこ

小畑一

花の幕あがるやどっと沸く讃歌

宇咲冬男

いのち光らせ遡る若鮎

新井秋芳

ナォ上の香の立つまで深く畑を打つ

川岸富貴

町村合併おらが村でも

高尾秀四郎

名物に残りしものの尊ばれ

柏元章

金襴緞子仕覆仕立てに

村井昭三

ワープする宇宙五次元超能力

楠正三

美人教授のかぐわしき汗

倉本路子

「ただ友よ」しかしこの俺マジ本気

井上達磨

すりきれ草鞋庫裡に吊され

小川庭水

山頭火まねての旅を自転車で

密田妖子

植物分布絵図面にする　いぬじま正一
饒舌も無口も和むジンフィーズ　滝沢尚子
大型台風勢いを増し　三浦和枝
月明かり工具揃えて励む父　田部井窓月
御萩作りは祖母の役割　山口武雄
ナウ裾分の返しは庭の千代見草　原田子楓
今日も朗読明日も朗読に　土屋真澄
誰が為に水は流るる高らかに　福永千晴
風呂吹大根味噌のまろやかに　服部秋扇
てっぺんの薄くなりゆく自然体　滝田遊耳
コレクションする帽子いろいろ　渡辺祐子
花抱き仰ぐ虚空の大いなる　別所真紀
メインセール主帆のはらむ春風　中島みどり

平成十九年九月吉日満尾（文音）

歌仙『歌声空に』

新緑や歌声空に吸はれゆく　瀬谷智恵子
　ボートの群れる夏の湖　吉成正夫
誕生日ウォーキングの靴替へて　荒井美三雄
　一気に上る螺旋階段　藤田とよ
街騒のやはらかくなり望の月　河西克員
　小鳥に餌をあげる道化師　吉成正夫挿
楓(ウ)散るモンマルトルの丘を訪ふ　瀬谷智恵子
　想ひのたけの即興の詩　吉成正夫
どうなるのどうにかなると抱き寄せる　荒井美三雄
　コロボックルの住まふ谷間　藤田とよ
木洩れ陽の匂ひ占ひあすは吉　河西克員
　風邪引きかけて舐めるのど飴　瀬谷智恵子
寒垢離の肌白々と月渡る　吉成正夫
　眠気を覚ます犬の遠吠え　荒井美三雄
株投資バブル弾けて奈落へと　藤田とよ
　家宝の壷がなんと千円　河西克員
義経の伝説床し花の里　瀬谷智恵子
　春の虹濃い駅に降り立つ　吉成正夫
メーデー(ナオ)におかおにぎり持参する　荒井美三雄
　集団自決模糊としたまま　藤田とよ
乾杯はパインジュースの休肝日　河西克員
　マンション管理荒れる総会　瀬谷智恵子
端居して来し方とくと考へる　吉成正夫
　揺るる蚊柱石垣の辺　河西克員
携帯の番号そつときかれし夜　藤田とよ
　裸身眩しい湯煙の中　吉成正夫
踊り子の薫りほのかに隠れ宿　荒井美三雄
　時計の針を零に戻しぬ　藤田とよ
月浴びる水槽の魚煌ける　瀬谷智恵子
　線路伝ひになびく刈萱　吉成正夫
列(ナウ)を組む登校の児ら赤い羽根　河西克員
　京の話題は朝粥のこと　瀬谷智恵子
ゆく川のしばしたゆたふ太鼓橋　荒井美三雄
　雲は天才我は凡才　藤田とよ
案内図に添ひてぶらぶら花の山　河西克員
　藁を咥へて帰るつばくろ　吉成正夫

平成十九年五月　六日首
平成十九年七月二十七日尾　（後半文音）
（於・氷川の社文化会館）

歌仙『師の筆あと』

西田青沙捌

白梅や師の筆あとの美しき　岡本耕史
　春陰に笑む若女（わこうな）の面　西田青沙
土筆んぼ野の涯見んと背伸びして　水谷草央
　魔法瓶より珈琲を注ぐ　伊藤千秋
コロシアム湧く歓声に月昇り　史
　雁もねぐらに去（い）にし堀割　沙
ウジーンズの裾に連鎖の草虱　央
　短足に泣く片想ひして　沙
どの皃も年齢重ね句座の女　央
　風情を残す古き町筋　史
拭きこみし旭新地の櫺子窓　史
　お預け徳利ちびりちびりと　沙
月出でて露の涼しき道帰る　秋
　甚平似合ふ先生の髭　秋
轆轤師をオンコ師と呼ぶ萬古町　〃
　照る日曇る日同じ明け暮れ　央
南国の海に沿ひゆく花の旅　沙
　釜揚げにせし白子干しをり　沙
ナ句碑苑は茶畑の中若芽季　松平菩提子
　微醺を帯びて夜道連れだつ　市川雄二
相槌を打てば話のきりもなく　史
　開演告げるブザー鳴りだし　沙
着膨れし襟より細き頸のばす　秋
　すつぽん料理またも散財　子
人待ちて石塀小路の石畳　二
　左褄とるかりそめの恋　沙
野暮天と思はれてゐて艶福家　秋
　猿に注意と看板にあり　史
山里は田毎の月と演奏会　子
　栗を商ふ婆は健在　〃
ナウ萩刈つて径あらはれし客設け　秋
　上がり框は太い樺の木　子
御詠歌を詠ひ舟こぐ善女たち　二
　ぎつくり腰で医者にはこばる　史
はんなりと光りと闇の花籌　二
　味噌田楽の焦げて香ばし　秋

平成十九年三月十三日首
平成十九年四月　十日尾
（於・四日市市文化会館）

歌仙『楽隊は』

名和未知男捌

楽隊は児ら従へて鰯雲　夫
　月の都へ消えてゆく鳥　民
咲きかけの菊人形に霧吹いて　外
　美しい小鳥の声の子守歌　よ
何をするにもそつのないひと　夫
　観音像の胎内の闇　男
情報はネット駆使して世界より　彦
　歩を伸ばし雪の積もれる棚田へと　男
寒さ知らずの冬の別荘　夫
　枯葉舞ふ道弾むおしやべり　民
蕎麦(ウ)掻にチーポンロンは一休み　外
　逢引はかの懐かしの銀巴里で　彦
出船のテープ波に漂ふ　民
　恋の媚薬を赤いグラスに　夫
帯留は珊瑚の達磨若女将　よ
　生来の味覚障害秘めしまま　外
下駄が間へて縋りつく腕　彦
　雨月となりぬ船場吉兆　よ
再びは会はぬつもりの文を書き　外
　築山にひとつ尾を引き秋蛍　彦
勘亭流を継いで八代　男
　夜のしじまに木の実時雨が　男
叱られて泣く裏庭に夏の月　夫
　脚絆(ナウ)巻き次の宿へとひた急ぎ　夫
世はこともなく回り灯籠　民
　日本一と大向ふから　民
熊撃ちの武勇伝聞く旅なかば　彦
　強打者にバントのサイン敢へて出す　彦
土産物屋に群るるをばさん　よ
　粘り強きは父の身上　よ
ゆつくりと吉野の川の花筏　外
　葉隠れの教へは今も花明り　外
西行庵に別れ霜降る　男
　少年を乗せ駈くる若駒　男

平成十九年　九月二十八日首
平成十九年十二月　十一日尾

（文音）

歌仙　『牧水のごと』

名和未知男捌

秋澄みぬ牧水のごと酔はんかな　名和未知男
　月燦々と満ち足れる刻　東杏奴
赤い羽根つけた同士が会釈して　小林公直
　美の殿堂は総ガラス張り　河西克員
断崖に洞窟の家立ち並び　川崎陶子
　夕餉の支度椎火小さく　荒井美三雄
ウ終業のチャイム軽ろやか日脚伸ぶ　奴
　いつもの店で五時に待ちます　男
差向ひ微かな笑窪また惚れる　男
　想ひを告げる初めての手話　員
あれこれと教はるばかり古稀の我　直
　万葉集の講座再開　奴
香久山にかかれる月を涼しとも　奴
　写経一途に夏安居の僧　直
衆参のねぢれ国会ケセラセラ　員
　気魄で放つ逆転の駒　男
花吹雪二次検診は異常なし　子
　浮きつ沈みつ陽だまりの蝌蚪　雄
ナオ焼き上がるパン香ばしき復活祭　子
　ひねもす迷ふベネチアの路地　〃
悩みごとそのひとことでふつきれる　男
　肩組み合つて寮歌高吟　直
息白く空見上げればカシオペア　子
　納豆好きな青い目の彼　員
沈黙の風の中にも愛流れ　男
　今際の時を離さじと抱く　奴
繰り返しこころで叫ぶありがたう　直
　磨き残しの窓にさす月　員
新しき厩舎の建ちて馬肥ゆる　子
　掃除はやばや酌める菊酒　雄
ナウ鎌倉の極楽寺坂たどり行き　男
　竜笛の音に鎮もれる町　奴
ペット抱く人の集まる役場前　直
　話題の主は今日も変らず　員
とりどりに屋台を構へ花明り　雄
　大評判の母の露味噌　子

平成十九年九月二十七日首
平成二十年一月四日尾　（文音）

歌仙『啄木鳥来る』

平成十九年　九月　九日首
平成十九年十二月三十一日尾　（文音）

山からの客人のごと啄木鳥来る　中島子路捌
　句集とづれば有明の月　奥山晃希
刈田道築場へ向かふ男ゐて　鴻巣浩子
　ジャンケンポンと子供らの声　牧野正弘
削氷に色とりどりの砂糖かけ　滑川美智子
　夏手袋を普段着のまま　香西力
ウ湖近きしやれた館のクラス会　中島子路
　いまだ独身あこがれの君　浩希
倫敦へ婚前旅行夢のなか　美美
　蒸気機関車汽笛鳴らしつつ　弘路
病院をわが家と思ひ外科内科　路力
　卒寿の母は寅さんが好き　力浩
凍て空の帝釈天にかかる月　浩弘
　笙をききつつ年越しの蕎麦　弘美
日展に入賞すると意気さかん　美希
　デジカメもつて日本周遊　希力
花のもと弁当ひろげコップ酒　力路
　のどかなる里水車ごつとん　路弘
ナオぴちぴちと若鮎上る相模川　弘美
　親爺の威張る長者番付　美希
ホリエモンマスコミからも見放され　希力
　SF本をのんびりと読む　力浩
職を退き白き衣の富士詣　浩路
　雲海消えて樹海眼下に　路弘
戦友の遺骨はいまだ帰らざる　弘希
　横顔のよき兄の後輩　希浩
電話するたびに想ひの募りゆき　浩弘
　外つ国めざす機影あざやか　弘美
波頭大きく砕け後の月　美力
　快気祝ひの風のさはやか　力路
ナウ図書館の静かな時間木の実落つ　路浩
　激辛カレー皆に振舞ひ　浩希
文明の十字路といふオアシスに　希美
　露天市場のつづくあきなひ　美弘
ひなびたる産土神の花万朶　弘路
　着く船を待つ春のパラソル　路力

歌仙『春待つ庭』

奥山晃希捌

庭師来て春待つ庭となりにけり　奥山晃希
　茶を飲みをれば裏の笹鳴　牧野正弘
お隣は歌舞伎見物おしやれして　香西力
　万葉仮名の床の掛け軸　河西克員
玻璃窓に月の光の淡く差し　鴻巣浩子
　母子でむける渋柿の皮　滑川美智子
新(ウ)走囲みて祝ふ古希の宴　吉成正夫
　最屓の女将俳号をもつ　荒井美三雄
谷根千を案内するとランデブー　弘
　ハネムーンには世界一周　希
沙漠ゆくらくだの上の夏の月　員
　絵の完成をあせる短夜　力
六畳に児らひしめきて寝入りをり　智
　疎開先での戸打つ暴風　浩
ひさびさの水団汁をすすりこみ　雄
　報せこがるる芥川賞　夫
オートバイ連ねみちのく花の旅　希
　清流のぼる若鮎の群　弘
分(ナオ)校の卒業生はふたりだけ　力
　道路できれば免許返納　員
万歩計着けて毎日ジム通ひ　浩
　肉屋の前に長い行列　智
インフレを蕪と大根ぶつぶつと　夫
　テレビを消せば灯る狐火　雄
寺の鐘聞こえてきたる湯治宿　弘
　俥やさんへ言付ける文　希
目印の三本杉で逢ひませう　員
　惚れたときにはすでに人妻　力
滞杭の鷺動かずに望の月　智
　公園の隅虫の合唱　浩
傘(ナウ)立てて時代祭の集合所　雄
　若者言葉幅を利かせる　夫
午後十時ブログ書き換へ慣ひとす　希
　季節の話題写真添付し　弘
蝦夷地より忘れし頃の花便り　力
　遠近の峰朧なる昼　員

平成二十年一月　八日首
平成二十年五月三十一日尾　（文音）

歌仙『雀の子』

庭下駄をぴよんと越したる雀の子　臼杵游児捌
　風に乗れるはたんぽぽの絮　原田安恵
歌ひつぐプリマドンナのうららかに　佐島和人
　やつと叶ひし留学の夢　大森道生
乾盃の盃重ね月今宵　荒井慈
　山田の添水時をきざみつ　割田容子
ウ木の実落つ復活誓ふ大リーガー　臼杵游児
　これも人生あれも人生　原田安恵
この方と決めたからには手鍋さげ　佐島和人
　香り楽しむ朝の珈琲　大森道生
何もかも値上げばかりの世になりて　荒井慈
　霊峰富士の高く聳ゆる　割田容子
釣れたるは虎魚（おこぜ）皮剝鰭（はた）めごち　臼杵游児
　月渡りゆく端居いつまで　原田安恵
還らざる兄を待つ母戸を閉めず　佐島和人
　荒神様の煤けたる御符　大森道生
花冷の西郷どんを洗ふ雨　荒井慈
　病める地球に亀鳴くを聴く　割田容子
ナオ春帽を空に飛ばして駈出して　臼杵游児
　素朴ながらも故郷の味　原田安恵
隊商の憩ふオアシスなつめ椰子　佐島和人
　ミイラの少女誰を恋せし　大森道生
千の風千年吹きて慕ひ継ぐ　荒井慈
　ひとり黙つてさぐる埋火　割田容子
大寒の靴音乾くビルの間（あひ）　臼杵游児
　営業時間セブンイレブン　原田安恵
あちこちの隠しカメラに見張られて　佐島和人
　江戸の古地図のなつかしくなる　大森道生
列車去り月残りたる貨物駅　荒井慈
　拝み太郎は鎌を振り上げ　割田容子
ナウ家苞に人形焼の菊供養　臼杵游児
　冬の支度に心忙しく　原田安恵
健在のボンネットバス田舎道　佐島和人
　湯治の宿に烟る炊煙　大森道生
琴の音に誘はれしまま花の門　荒井慈
　曲水の宴今ぞはじまる　割田容子

平成二十年三月二十一日首尾

（於・成城クラブ）

歌仙『秋日傘』

城師句碑拝すや畳む秋日傘　　石丸静月
　樹々の間より小牡鹿の声　　戒能多喜
月の舟真珠筏の上に出て　　藤原十重
　素焼の壷に描く山水　　石丸信子
リビングのテレビゲームが賑やかに　　永井政子
　冷し西瓜を十に切り分け　　信
讃仏偈誦ししばしを夏に籠る　　月
　プチ断食で見事減量　　信
若妻の幸せそうに抱だかれて　　多
　人目忍んで逢瀬たのしむ　　月
新総理親子二代の福田さん　　政
　誰も一度は坐り度き椅子　　十
火事騒ぎ声のたかぶる方に月　　十
　失意の胸に迫る年の瀬　　政
校外の団地の昼は鎮もりて　　月
　アンパンマンもQちやんもゐる　　多
花咲きて米寿を祝ふクラス会　　信
おいでなもしとお茶に草餅　　十
鴬の八方に鳴き楽土とも　　月
　万歩計つけ辿る山路　　多
次々と大型店舗閉鎖され　　信
　六十五まで伸びる定年　　か
遊船の右舷に揺る、絵提灯　　十
　土用鰻で元気もりもり　　月
夫との世界旅行を夢に見て　　信
　ことある毎に熱き口づけ　　多
官僚の接待ゴルフ許せない　　か
　老舗を汚す伊勢の「赤福」　　信
掘り起こす遺跡に月の影淡く　　月
　相撲甚句の聞こゆや、寒　　多
今年酒一本提げて知恵借りに　　十
「子供の城」も偽装建築　　信
読みあきし俳書も辞書も積み重ね　　十
　柱にもたれ悠々の日々　　か
散る花のほのかな香り愛づるとし　　多
　大師の像に霞棚引く　　月

平成十九年九月二十六日首
平成十九年十月二十四日尾

（於・清流庵）

歌仙『敗戦忌』

ほくわたし昭和の青春敗戦忌
　指にとまりし残りの蛍
たそがれの山に三日月かかりゐて
　軽い財布に夢をつめこむ
流れ来る素麺待ちてひまな箸
　アイスキャンディー三本いくら
ウ門口にかあさん居るかと立ちをれば
　作務衣の僧の連れは若衆
恋も売る内藤新宿小間物屋
　江戸と東京ゆるりと散歩
もの言はぬ犬にもの言ふ昼下がり
　ニコニコ見てるお地蔵さんよ
あのねのね内緒のお話冬の月
　雪しまく夜は長湯きめこむ
また伸びし平均寿命夫婦舟
　うつらうつらと教科書の陰
花盛り「サイタサイタ」の一年生
　電報配達春色の道
ナオ野遊びの娘は空に手をあてる
　演劇半ば台詞を忘れ
置き薬とんと効かざる孫太郎虫
　白石川の水に汗ひく
ひとくせも二癖もある老家主
　雨漏り長屋壁に耳あり
瑠璃色の僕ら少年探偵団
　小犬のワルツあの瞳と手
耳元でそつとささやくお茶どうぞ
　見向きもしないながつちり客
裏口にさかさの箒夜半の月
　やつと覚えた秋の七草
ナウ懐の匂ひ袋は蘭草（フジバカマ）
　風雲急を告げる政界
特売日かつてくるぞと主夫走り
　沖縄料理家族べた褒め
あるかなき風に舞ひたる花の里
　袖をひらりと佐保姫は立ち

萱場健之捌

佐藤無風　伊藤鈍　萱場健之　中島房　佐藤阿房　斎藤信　伊藤南三　若生芥子

鈍　無風　房　健之　信　阿房　芥子　南三　無風　鈍

平成十九年七月十六日首
平成十九年九月二十六日尾
（於・エル・パーク仙台・セミナー室）

歌仙『新米』

萱場健之捌

佐藤無風　新米やわれも新米庭を掃く
若生芥子　見上げる月に白衣まつさら
伊藤南三　その果ての遠山裾も紅葉して
佐藤阿房　今日は二三(ふみ)の日便り書きをり
中島房　果樹園は爺さんばかり袋掛け
伊藤鈍　昼寝なしとは婆はゆるさじ
斎藤信　往復(ウ)の舟に悩む安旅籠
萱場健之　となりの部屋の声もなやまし
芥子　奥勤め宿直(とのゐ)装束くずさずに
無風　かへろかへろと雀はさわぐ
阿房　束の間に変はる政界めまぐるし
南三　彼のゆく道われ避くる道
鈍　六無齋眠る北山雪の月
房　炬燵囲んでつきぬ夜噺
健之　鬼が島ここほれワンワン柿の種
信　石けり縄跳びジャンケン遊び
無風　風立ちぬ花ハ散ル散ル赤門よ
芥子　泣きなさい来春笑ひなさい
南三　想(ナオ)ひとは似つかぬ雛の膳
鈍　ぱちりぱちりと戦ふ影絵
房　目に見えて吾子の背丈は親を抜く
健之　つきあいですと朝のお帰り
芥子　お屋敷を守る風情のひきがえる
無風　夏の合唱ベース快調
鈍　ひそひそと嫁と娘の内緒ごと
南三　未婚の母となるやもしれず
健之　惚れられたとはいへどうも野暮なやつ
芥子　頭でつかちち木づちとんかち
無風　当世は小顔願望月見そば
鈍　葡萄を醸す甲州街道
南三　末(ナウ)枯れの富士ふり返る旅の果て
鈍　どしゃぶりの雨やみ招き猫
芥子　「申し申し」仙台四郎ニコニコと
鈍　うしとみしよに昼風呂の中
南三　満開の花に背を向け農一途
鈍　業平蜆の味噌汁匂ふ

平成十九年十月六日首
平成十九年十二月二十八日尾
（於・エル・パーク仙台・セミナー室）

歌仙『夏至の空耳』

川野蓼艸捌

ボーイング離陸望月塗りつぶし　川野蓼艸
流星群としばし交信　西川なほ
照紅葉窓いつぱいの書院にて　志治美世子
ストロー微妙な角度保ちつつ　高岡粗濫
とことんに考への果て塑像練る　大橋俊彦
雪の庭へと犬出してやる　篠原詠美
晩ウ祷のぢつと動かぬ冬の蝿　粗濫
組み立てて積むちぐはぐな愛　俊彦
放心の顔が鏡の中にある　なほ
終りはいつも悲しみの海　詠美
褒貶のまゝ千年を眠りたる　俊彦
古代木乃伊の蒼き王冠　美世子
月涼し切りなきシャドウボクシング　粗濫
点滴の音　夏至の空耳　なほ
単三の電池を二つ取り替へて　真鍋天魚
何はさておき午後は白酒　詠美
無人駅花は黙々降りそそぐ　美世子
金を返しに清明の橋　粗濫
亀ナオ鳴くと言ひ張りしより疎まれる　俊彦
ひと日の鬱をリモコンで消し　粗濫
断崖を飛び下りさつと鳥となり　美世子
迷路の街を見えつ隠れつ　なほ
ひらひらと文面のなき葉書来て　美世子
座禅の僧の袖を引く指　俊彦
やがて吊る首とは知らずしがみつき　天魚
また灯したる小夜といふ闇　粗濫
喝采の扉を後手でそと閉めて　なほ
射幸心てふ蜉蝣の飛ぶ　詠美
行あけて月の脚韻踏んでゆく　蓼艸
菊人形よ何か声出せ　俊彦
秋ナウ寒の日輪掬ふ観覧車　美世子
赤旗を巻き傘立てに刺す　粗濫
ひとり逝きまたひとり逝く春愁　蓼艸
榮螺は螺旋の夢を見るらむ　美世子
花曇りもつとも汚れ遊撃手　粗濫
仮面はづして陽炎を行く　なほ

平成十九年九月十五日首尾
（於・東京文化会館）

歌仙『炬燵』

石川光男捌

晩学の炬燵の上の電子辞書　町田　節子
ちぎれちぎれに走る雪雲　杉野辨一郎
里山は鳥の羽ばたき満ち溢れ　柏原　和宏
地図を確かめ迷いたる道　柏原　知子
琴の音の調べととのえ月を待つ　市川美代子
古城の跡に往時訪ねて　田島　光子
秋（ウ）の風揺れる簾を猫見上げ　八巻　隆昭
果てなき浮き名流す住職　和宏
歳の差も身分上下の隔てなく　長谷川　安
ブスでもデブは良いと言う方　節子
倍額の生命保険勧められ　辨一郎
閻の彼方に青葉木菟鳴く　美代子
月赤しローカル線の始発駅　和宏
金婚式を二人健やかに　節子
臍曲げる夫を扶け五十年　辨一郎
座に溶け込めず茶菓子頬張る　石川光男
花遅き昔を語る武家屋敷　知子
春の土あげ動くものあり　和宏
浮（ナオ）き籾を掬いて居りし種選び　節子
鶏冠振り〳〵走りくる軍鶏　和宏
両足に静脈瘤のくっきりと　美代子
度胸だめしと墓地へ連れ込み　眞下　草笠
何見ても何を聞いても何しても　光男
心頭滅却火もまた涼し　和宏
口程はもてぬ男の咳払い　草笠
枯れし梢に凍てし青空　辨一郎
政経の思いばかりが駆けめぐり　光子
文学賞は女性独占　草笠
煩悩を解きて書きたる閨の月　安
秋灯揺れ観音の笑み　知子
新（ナウ）走信濃路分けてゆらゆらと　美代子
行くも帰るも旅は道連れ　光子
温泉に何度も入り逆上（のぼせ）もし　節子
鴬の声うっとりと聞く　美代子
花篝火浮き世の憂（う）さを忘れ去り　島崎　和子
プライバシーを覆う陽炎　隆昭

平成十九年十二月　十日首
平成二十年一月二十日尾
（於・寄居町よりい会館）

歌仙『臘梅を』

臘梅を訪ね里山風の中　石川光男捌

腰をかがめて麦を踏む影　杉野辨一郎

入学の孫の祝を思案して　町田節子

長く伸びゆく飛行機の雲　眞下草笠

中天に渡りし月の切り立てる　柏原知子

枝折戸押せば萩の零れて　新堀亭樹

こおろぎのか細き声が部屋の隅　柏原和宏

枕濡らして人を忘れず　田島光子

拝啓の後がつづかぬラブレター　島崎和子

いつか見た夢またも夢見る　八巻隆昭

アメリカのデッドヒートの選挙戦　石川光男

どこまで届く軒の風鈴　草笠

ラムネ抜く玉に光れる月明り　節子

輪廻転生何のことやら　知子

生き過ぎた男が鼻毛抜いている　光子

膝には猫が涎たらして　草笠

秩父路にＳＬ響き花万朶　光子

憩う茶店の草餅の味　知子

湖の底を掬いて蜆とり　和宏

春雨降りて土よみがえる　節子

術後とは思えぬ禰宜の顔の艶　和宏

懸賞小説息もつかずに　節子

やきもきと焦る心は愛知りて　知子

百年経ても変らぬものは　光子

落ちそうな小便小僧の冬帽子　和宏

枯れ蟷螂の力無き斧　知子

言わずして顎で指図す妻のいて　節子

上目使いて仰ぐ飼犬　市川美代子

名月に大根二本供えたり　辨一郎

分けても秋の灯ともしの頃　知子

飴薬師絵馬とりどりの筆の跡　光子

杜の暗さに潜む物の怪　節子

医師示すエックス線を怖々と　隆昭

傘寿の舞の師匠きびしく　和宏

花の精居るやも知れぬ花吹雪　知子

夫婦寄り添い垣根繕う　節子

（於・寄居町よりい会館）

平成二十年二月十五日首
平成二十年三月十七日尾

歌仙『安曇野や』

安曇野や秋日に並ぶ道祖神　岡本耕史
　薄紅葉して古き街道　福井栄一
月の宿荷を解き腰を労はりて　岡本耕史
　この頃流行るハイブリッドカー　伊藤文夫
浮き沈みなく淡々と世を送り　福井栄一
　レシピ頼りに豆御飯炊く　岡本耕史
夏(ウ)籠の寺の立札静粛に　伊藤文夫
　思ひ伝へるもどかしき文　福井栄一
妻子ある男と知るも深い仲　岡本耕史
　テレビ映画を夜中過ぎまで　伊藤文夫
ガス燈のあはく照らせる石畳　福井栄一
　別れを告げる出港の銅鑼　岡本耕史
一つ家に住む人もなく冬の月　伊藤文夫
　遠い記憶に角巻の母　福井栄一
開発にのまれて旧居ダムの底　岡本耕史
　いいことづくめマニフェスト書き　伊藤文夫
落慶の稚児行列に花ふぶき　福井栄一
　鳥帰りゆく夕暮の空　岡本耕史

山笑ふ峠の道に句碑訪ね(ナオ)　岡本耕史
　足湯につかりかはす挨拶　福井栄一
猿の群れ谷から谷へ渡り行く　伊藤文夫
　大連立で揺れし与野党　福井栄一
伝統の日永団扇を伊勢土産　岡本耕史
　葛饅頭は竹の簀に載る　伊藤文夫
お点前は由緒正しき裏千家　福井栄一
　化粧せずとも艶めける刀自　岡本耕史
好きな人見つけたらしい孫娘　伊藤文夫
　はにかみ王子甘いマスクで　福井栄一
名園の心字の池に映る月　岡本耕史
　走り蕎麦だす店に誘はれ　伊藤文夫
気(ナウ)の置けぬ友と酌み交ふ温め酒　福井栄一
　噂話に尾鰭つきもの　岡本耕史
立ち並ぶ高層ビルは新名所　伊藤文夫
　北京五輪に成信しめして　福井栄一
駅伝の花散る里を駆け抜ける　岡本耕史
　車座となり憩ふ春芝　伊藤文夫

平成十九年九月　五日首
平成二十年一月十六日尾

（文音）

《東京・多摩連句会》

歌仙『聖母像』

宮下太郎捌

水仙や石の造りの聖母像　宮下太郎
　讃歌流るる冬天の庭　安江眞砂女
先生を囲む園児らほがらかに　田中之扶子
　揃いの帽子ひとりかぶらず　村川雅子
満月のいつのまにやら上りきて　眞之
　銀山あとにひそと松虫　雅
引き絞る弓矢に紅葉動かざり　眞之
　一徹の人姿りりしく　雅
プリンスの恋の噂にやきもきと　眞之
　ウインブルドンめざす白球　雅
北海の大きな鱈を捌きかね　眞
　小千谷ちじみは肌に涼しき　之
定刻に翼の止まる夏の月　雅
　色黒き人空港に待つ　眞
ジャングルも環境破壊進みいて　之
　てんやわんやの食の安全　雅
神苑の真ん中占める花万朶　眞
　佐保姫の笑み夢か現つか　之
春日傘少し斜めにポーズとり　雅
　意味深長な恋文はなに　眞
ロス疑惑色と欲とを使い分け　之
　黒革手帳仕舞うポケット　雅
残されし母の針跡なつかしき　眞
　予報外れの雨の一日　之
凍港の酒場に集う漁師ばら　雅
　帆立肴にぐっと熱燗　眞
目が合ってつい引き取りしチワワ犬　之
　赤ちゃんポスト需要あるとか　雅
月照らす格子のなかの観世音　太
　竹伐る音す飯炊ける頃　之
銀杏降る玉堂描く絵のように　眞
　土蔵の隅に穴惑いいる　太
思いきや突如四川の大地震　雅
　ふらここ揺らす風の道あり　眞
若武者も駈け抜けたらむ花堤　之
　遠き初虹うっすらと見ゆ　執筆

平成二十年一月二十日首
平成二十年五月　吉日尾　（後半文音）

（於・安江邸）

《東京・遅刻坂連句会》

歌仙

『あらぶるや』

田中安芸捌

あらぶるや春一番の自然力　山中主水
新しきものみな芽立ちおり　田中安芸
鎮座する雛（ひいな）の目元すずやかに　横田思案人
蒔絵の椀に潮汁注ぐ　青柳祥風
ひたひたとゆるき波音月今宵　今富千辺
案山子を友に農夫いっぷく　小林喜一
傘（ウ）寿なる母の呼ぶ声赤とんぼ　塙於玉
もの想う日々不眠重なる　武井蛙女
西蔵の御仏座して妃抱く　小野酔陶
遅れてはまる韓流チャングム　秀島一生
お宝の薬おろしの芳しき　安芸
世に非常識さらけだしたり　主水
月冴えて湖を貫く神の道　祥風
氷の穴に垂れる釣り糸　思案人
ギターの音たどたどしくも心撃ち　喜一
隣の窓に踊る人影　千辺
理髪屋の鋏の光る花の午後　於玉
ぬくき雨降る道の追分　〃

山影（ナオ）のクレソン水にざわめいて　一生
弁当だけのザック軽々　主水
振出しを振れば末吉良しとなし　安芸
ぴりりと辛き愛の現実　祥風
するすると背中の指が文字を書く　千辺
瞳の語る別れたくない　喜一
何もかもお歯黒溝（どぶ）にぶちこんで　於玉
寒柝近く犬の遠吠え　思案人
知らぬ間にワイン店主も鬼籍なり　蛙女
出番待ちつつめくる歳時記　一生
小望月資源探査の気配濃く　酔陶
甘蔗（さとう）（きび）でも走る自動車　祥風
秋（ナウ）惜しむノスリの声の高々と　主水
明日の明日誰か手招き　安芸
ジオラマの小さき鶴嘴夢探る　思案人
もつれる蝶の白や黄色や　千辺
花吹雪花ひとひらの命とて　蛙女
舟端に聞く海女の口笛　執筆

平成十九年二月十七日首
平成十九年十二月二十日尾　（文音）

歌仙『地に返す』

春驟雨怒濤かき分け艇進む　大久保風子捌

順次集まる旧正の客　仲本お池

ゆらゆらり畦に土筆のいならびて　大久保風子

縁の下から三毛猫の顔　山中直子

十六夜の月むら雲に迷うらん　半田有杜

習い覚えて打ちし新蕎麦　遠藤翠鶏

紅葉狩旅に出てより昨日今日（ウ）　山内螺々子

歌懐かしく君がほほえむ　石原丈行

数式で書いた恋文解きほどく　山縣敬二

渡る青嵐捷き渓流　大城里水

地に返す骨は軽かり夏の月　新田透舟

首が伸びると万治石仏　風子

検診を受ける前だけ酒を断ち　お池

晴耕雨読の火水木金　有杜

またたくま爺にさせられ玉手箱　直子

誰を呼ぶのか電線の鳩　螺々子

花の下豆鉄砲に興じ入り　翠鶏

逃水を追うふるさとの道　敬二

凛然と祠に住まう岩燕（ナオ）　螺々子

座敷童子も隣組とか　丈行

文化とは低きに流ると教わりて　お池

秤会社に天下り決め　風子

席あけて来るや来ずやと胸弾む　直子

暖炉明か明か身の溶けるまで　有杜

かきやりしその黒髪は枯れ尾花　翠鶏

雪深深と積もる新年　螺々子

スコッチの蘊蓄談義果てしなく　丈行

ネタをあかせばウィキペディアよ（こう）　敬二

有明を横に気球の気まま行　里水

巾着田染め曼珠沙華咲く　透舟

朝寒（ナウ）を行き交う人の背はまるく　横田童子

また間違える暗証番号　透舟

棹の先しなりて糸の引っ張れる　お池

けぶり立つ野に遠き鐘の音　風子

花に酔い句に酔い詩に酔い人に酔い　有杜

夢の浅瀬に藤の風吹く　翠鶏

平成十九年二月十八日首
平成十九年十二月二十日尾　（文音）

《東京・遅刻坂連句会》

歌仙　『胡差のバラード』

前田圭衛子捌

横田思案人　牧広し画帳に止まる秋茜
遠藤翠鶏　風に驚くもとあらの萩
田中安芸　月は今四次元の街映しゐて
半田有杜　硝子の盃に酒なみなみと
大久保風子　曳かれゆく首振る牛の舌赤し
小林喜一　田畑の水に雪滲みたる
山中主水　困(ウ)に煙突がなる北千住
仲本お池　エンドレスにて営業中なり
安芸　愛の字の倒れしドミノそれからは
風子　どしや降りのなか奴の泣き顔
主水　思ひきり背びれを噛んで子を宿し
有杜　蚊帳の内なる紐のいろいろ
横田童子　納涼の艫の先には月砕け
有杜　宇陀の石仏骨に食ひこみ
思案人　はるけくも大胆に盛る日御天麩羅
翠鶏　かすむ野面に雲雀囀り
山内螺々子　ふり向けば父よ母よと花の雲
主水　山焼く杣のけぶり立つ見ゆ
螺々子　良(ナオ)きことの何かあるべし初の虹
思案人　呼吸整へラランナーズハイ
風子　晴であれ雨降りであれでくのぼう
翠鶏　天満宮に願ひごとして
有杜　松とれてエプロン似合ふ幼な妻
童子　髪の乱れに門くぐられず
安芸　波はげし舟揺れるとき抱く乳房
お池　胡差のバラード・砂灼ける道
風子　行く末は狐のかみそり枯るるとも
喜一　全財産は二屯トラック
翠鶏　宿題はまだかと迫る法師蝉
風子　月を仕掛ける老いた手品師
安芸　山峡(ナウ)の囮にかかる糸電話
お池　里はゆらゆら水はゆらゆら
思案人　平積みの「白い恋人」いま何処
螺々子　かの古池に薄氷のあり
翠鶏　散る散らぬ花の遅速も命にて
喜一　さんどりよんに蝶はばたきぬ

平成十九年八月十七日首尾
（於・八ヶ岳「さんどりよん」）

歌仙『寒梅』

寒梅や名もなき寺の念仏講　　小林しげと
　笹子の鳴ける裏の竹藪　　池田笑子
塾へ行く児に襟巻を掛けてやり　　今村苗
　メトロ*ローズはやっと卒業　　佐崎静緒子
塀越しに猫の横切る月明り　　笑子
　遠山影の冷えるこのごろ　　しげと
駅ウ前にお願いしますの赤い羽根　　静緒子
　恥ずかしそうでちょっと可愛い　　苗
目が合って少年グッと固唾飲む　　町井緑
　ペダルを軽く何処までも漕ぎ　　森本しょう
十戒はどうでもいいが気になって　　しげと
　どぎゃんかせんといかん政局　　笑子
有明にやませを受けて船出する　　苗
　土用見舞はいつも絵手紙　　静緒子
恬として座右に初版の広辞苑　　笑子
　伊香保みやげと言えば饅頭　　しげと
花を待つ大吟醸も楽しみに　　しょう
句作に耽る縁に春雨　　緑
いかなごナオの群れが浜辺に打ち寄せて　　苗
　里の法事で叙する久闊　　坂田武彦
磊落な祖父は近衛の師団長　　しげと
　もとの厩舎はいまの物置　　苗
戸を叩く風にひっそり残る虫　　武彦
　小春つづきに達磨乾かす　　しげと
しわ苦茶の絵図を拡げて道訊けば　　浅沼小葦
　彼女を乗せたバイク疾走　　武彦
いっぱしの悪の振りしてハイサワー　　苗
　惚れた腫れたで泣いて笑って　　しげと
認知症かかえる母と月拝む　　小葦
　草の錦に羅漢安らぎ　　苗
尉ナウ鶏威儀整えて餌をつつく　　武彦
　無骨に太い指の園丁　　小葦
克明にノートを綴る人となり　　しげと
　ガリア戦記はカエサルの作　　苗
花びらをわが懐に夢の中　　武彦
　そぞろの神の誘う永日　　小葦

注　4句目　メトドローズ　初心者向けピアノ教則本

平成二十年一月　十五日首
平成二十年三月二十五日尾
（於・東京・中央区立産業会館）

歌仙『薬研堀』

宮下太郎捌

大寒の枯れぬ柳や薬研堀　宮下太郎
　流れゆるやか暖冬の岸　伊藤哲子
宿題に学童達の集まって　坂田武彦
　三平方の定理とは何　土屋実郎
名月は永久に変わらず皓々と　哲
　厨へ歩むかまどうまなり　太
ウ赤い羽根老の胸にも帽子にも　実
　目立ちたがり屋モデル気取って　武
猫抱けば必ずぎゅっと抱きしめる　実
　金平糖を入れし裂き織り　哲
みちのくの安達太良山に走る雲　太
　夭折の妻恋うる詩人　武
土用波攫われそうなワンピース　実
　蛸が手を振り足を振る月　哲
徹マンで国士無双を自模っては　太
　再放送で相撲観戦　武
花吹雪浴びて木鶏すくと立ち　実
　よーいやさーと弥生狂言　哲
ナオ空充つる大和国原あたたかに　武
　俺の歌柱を見に来いと友　実
人麻呂は行きつ戻りつ坂道を　太
　恨み垂乳根砂に埋めん　哲
何もかも捨てて遂には逃避行　実
　外れ馬券の高々と舞う　武
凍み豆腐治部煮に入れて熱燗を　哲
　棚のお稲荷笑まう歳旦　太
新手口振込め詐欺のたくみなる　武
　ルノワールにて計画を練り　哲
月百態太陰暦のカレンダー　実
　盆に帰れと放つ蜻蛉　武
ナウ鴫の声今も昔も変らずに　太
　へぼのボギーにキャディー喜ぶ　実
おとついは都電を降りて都バス乗り　哲
　観音堂に残る薄氷　太
花筵木偶人形のあれこれと　武
　解散惜しむ観潮の旅　実

平成二十年一月十五日首尾

（於・中央区民会館）

半歌仙　『流　氷　の』

今村　苗捌

流氷の台に仏いまさずや　今村　苗
　岬の牧に跳ねる馬の仔　小林しげと
本を読む窓うららかに鳥の来て　佐崎静緒子
　積み木で遊ぶ園児にぎやか　春日久子
するするとバスを待つ間に月上る　と
　ほんのり白く蕎麦の花畑　苗
ヮ秋袷角帯締めて総稽古　緒
　理想の人にいまだ出逢えず　久
幾度も観音様に願を掛け　緒
　京の土産は対の福鈴　久
香薫る広間ゴッホの飾られて　と
　雲龍添えるお抹茶の席　苗
凍月に首相外交策を練り　と
　慈善鍋立つ街の十字路　苗
コンシエルジュ噂話をひとしきり　久
　テニスの後に愛でるコニャック　緒
揚羽蝶追う子のお下げ花結び　久
山荘閉ざし終わる夏の日　緒

平成十九年四月十七日首尾

（於・中央産業会館）

歌仙『こころの眼』

初冬や少し拡がるこころの眼　奥村富久女捌
　枯野にもある日溜の道　奥村富久女
旅便り興のる時は絵を添へて　長尾信子
　帯の矢立は先祖伝来　品部一朝
月明り手籠をのぞくあけびの実　上田真而子
　遠来の客待ちて新蕎麦（ウ）　竹内茂翁
この鐘を鳴らして下さい杜鵑草（ほととぎす）　而
　言はず語らず秘めてこそ恋　而
忍び逢ひ記録は全て焼きつくし　信
　博愛よりも偏愛が好き　近藤蕉肝
十字架にかかれる人に泪して　横山わこ
　甕は幾世を能舞台下　朝
きうりもち河童は月に乾杯す　女
　天瓜粉ふる濃き蒙古斑　茂
おさわがせやんちや横綱陳謝など　わ
　かたびら雪はすぐに溶け出し　恵
菅公の梅に花こふ京めぐり　わ
連ね歌巻く爛漫の春　肝
うるはしく季節の柄を着こなして（ナオ）　女
　末の妹裕（ゆた）に賢く　信
いつの世もその名輝くコーデリア　而
　介護保険は破綻寸前　裕
人集り子（ね）年の餅をいざ割らむ　子
　注連縄太く街道の杉　朝
相共に寄り添ひ遂げて幾星霜　千
　墓まで一緒はちとつらかろか　女
月夜見の酒酌ますらむ赤き月　而
　紫式部こぼれんばかり　朝
色鳥の来て又飛びぬ音（ね）を残し　裕
　涸れることなき蹲踞の水　信
努力（ナウ）して縁起かついで世界一　而
　丸い地球の昇りくる影　〃
童謡をオカリナにのせ夢心地　女
　笑ひはじめし今朝の山々　景
遠近の花匂ひくる歩をゆるめ　千
　四つ角に佇つしやぼん玉売　高岡裕子

平成十九年十一月十七日首
平成十九年十二月一日尾

（於・京都京新山）

歌仙『浮かるるや』

浮かるるや四条大橋花の客　奥村富久女捌

見えぬ雨降る岸の青柳　高岡裕子

菜飯茶屋藍染のれんはためきて　丸山景子

親孝行の息子二代目　竹内茂翁

月の宴自慢の詩吟朗々と　上田真而子

灯影流れてすだく蟋蟀　奥村富久女

籾(ウ)摺機運転音の響く里　長尾信子

大病超えて笑顔晴れやか　出来千恵

江戸へ発つ筆で立たむとこころざし　女裕子

薄化粧から厚化粧へと　裕千恵

湯壷まで水かげろふをまとひゆく　千裕

遠景しるく紫の山　信女

月涼し卆寿の尼僧蹲る　信茂

夕餉の馳走鯵をたたきに　茂朝

深淵の心の飢えに揺さぶられ　朝裕

いよいよ始動赤ちゃんポスト　裕而

さくら咲きさくら散りゆく刻々に　千朝

逃げ水追ひて果ては何処ぞ　而千

五色幕(ナオ)しづしづ下り春の行く　千而

ピカソ若やぐ年を取るほど　而茂

宿酔円周率のきりもなし　茂裕

試験なければ勉強は好き　裕女

佳き朝を竹の葉ずれのさやさやと　女信

ふたりの夢の覚めやらぬ際　信茂

えりくびにかすかにのこる跡はなに　茂女

立つ名も嬉しあの人となら　女而

寒月に中将面の彫り深く　而千

陶の狸は大地踏みしめ　千朝

このところ北に南に地震騒ぎ　朝信

鎮守の杜は子等の遊び場　信茂

朽(ナウ)ちかける賽銭箱に鴉来て　茂朝

急ぎ取り込む晴れの装束　朝裕

定年の主夫の腕前磨きあげ　裕而

鍵の隠し場忘れては駄目　而朝

さんざめき挙りて行くは花の山　朝千

栗毛の仔馬つややかに照り　千而

平成十九年四月七日首
平成十九年六月二日尾

（於・京都京新山）

歌仙『かの折に』

遠藤嘉章捌

かの折に遊びし国の衣被　遠藤嘉章
　峠の上を月明の雁　鵜沢治久
小男の仰ぐ秋空腕組みて　白井風人
　水車をまはす水に親しむ　遠藤嘉章
野良猫の一瞥に逢ひたぢろげり　鵜沢治久
　夏ばての子ら思はぬショック　白井風人
ウ板の間に音を決めたる蠅叩き　遠藤嘉章
　表六玉と語りつつ惚れ　鵜沢治久
デートの日手帖をひらき確かむる　白井風人
　夜の会食満席となり　遠藤嘉章
腹の底見せぬつもりの薄笑ひ　鵜沢治久
　窓あけて読む今朝の新聞　白井風人
寒月をたつぷり浴びる鬼瓦　遠藤嘉章
　越前平野すさぶ朔風　鵜沢治久
しつかりと帽子を押さへ四つ角へ　白井風人
　地蔵の笑みに両手を合せ　遠藤嘉章
一族の業(ごふ)解くわざか花見酒　鵜沢治久
　祈る形に名草の芽立つ　白井風人
小野路より武相荘まで雲雀鳴く　遠藤嘉章
　正子と呼ばふ聲幻聴す　鵜沢治久
くたびれて縁に腰かけ脚さすり　白井風人
　思ひをはせるかくれ里へと　遠藤嘉章
端居して在五中将一首成る　鵜沢治久
　梅雨の雷何時か激しく　白井風人
歌舞伎座へ誘ひ女のよき返事　遠藤嘉章
　横笛いのち十九はかなや　鵜沢治久
庭下駄を突つかけ隣家のぞき見る　白井風人
　枯山水に夕日差し初め　遠藤嘉章
客人(まろうど)の去りし望月独り占め　鵜沢治久
　硯を洗ひ机にもどる　白井風人
ナウ音もなく地面に落ちし桐一葉　遠藤嘉章
　合掌しつつ僧通り過ぐ　鵜沢治久
お布施手に行脚の比丘を追うて行く　白井風人
　無心の境地喫茶三昧　遠藤嘉章
庭の花塀の外より讃むる聲　鵜沢治久
　霞たなびく遠山へ道　白井風人

平成十九年七月八日首
平成十九年十一月九日尾（文音）

歌仙『喜寿の薔薇』

丹精の薔薇に濡れつつ祝う喜寿　　引地冬樹捌
　ハンカチの白眩し胸元に　　引地冬樹
「ようそろ」の声に帆船舟出して　　二羽智子
　かもめ引き連れ地の果てまでも　　吉本芳香
月耿々百万石の城仰ぎ　　田川利公
　馬上杯には新酒なみなみと　　酒井愛子
ウ爽やかにモンゴル力士土俵入り　　谷本綾子
　そのやわ肌の餅のようなる　　冬樹
憧れがいつの間にやら深情け　　芳香
　あやめもわかぬ熟年離婚　　智子
老いの身に日々の悲しきおさんどん　　利公
　秋父山坂めぐる観音　　愛子
銀狐寒満月に化粧して　　綾子
　廻り舞台に凍つる柝の音　　冬樹
いろいろなサプリメントを小袋に　　芳香
　句帳携え西へ東へ　　智子
爛漫の花に仮寝の夢結び　　利公
　雲雀が吹くよ天のピッコロ　　愛子
ナオうららけきゴルフ王子を追いかけて　　綾子
　風になびかす絹のスカーフ　　芳香
復興の能登朝市に人溢れ　　智子
　口笛聞けば迷い犬くる　　愛子
一粒の梅干食べて暑を凌ぎ　　利子
　逢いにゆくとて婆のおめかし　　綾子
人生が色気ゆたかに織りあがり　　冬樹
　遺影の笑顔いまもあでやか　　智子
命かけ北鮮を出し小舟着き　　利公
　捨てる神あり拾う神あり　　愛子
峰染めて円かなる月昇るらん　　芳香
　孫も楽しむ甕の鈴虫　　綾子
ナウキャンパスにコーラスひびく黄落期　　智子
　歩け歩けとメタボリックに　　芳香
次の世の宇宙旅行を希いつつ　　愛子
　魚津の沖の海市鮮やか　　利子
花浴びて平家を語る琵琶法師　　綾子
　烏鷺の飛び交う碁盤のどけし　　木上紫雲

平成十九年六月　一日首
平成十九年六月二十五日尾　（文音）

歌仙『赤い羽根』

引地冬樹捌

母がりの帆となりそよげ赤い羽根　引地冬樹
　金波さざめく月の湖　吉本芳香
いのこずちものともせずに駆けゆきて　二羽智子
　取柄もないが元気だけあり　田川利公
片陰の中できりなき立ち話　密田妖子
　蘭鋳泳ぐ水槽の中　谷本綾子
ういつどこで変わる運命か吾知らず　酒井愛子
　顎のほくろについ惚れてそろ　冬
大火傷してもこりない浮気癖　芳
　思わせぶりなモナリザの笑み　智
答弁をそつなく軽く新総理　利
　寂滅為楽とナマ悟りして　妖
月に吠ゆ狼がゆく蝦夷の峰　綾
　頬かむりしてさする鉄砲　愛
しみじみと師を懐かしむ茶碗酒　冬
　一弦琴の調べ流るる　芳
友禅の染め美しき花衣　智
　うつつか夢か亀の鳴く声　利
妖しくも高層ビルの霞見ゆ　妖
「円天」とかにみごと騙され　綾
氏神の賽銭なども盗まれて　愛
　人間万事塞翁が馬　冬
蚊遣焚く鈍感力を養いつ　芳
　四十を過ぎていまだ独身　智
世渡りが男に勝る女番長　利
　豪華客船百国めぐり　妖
カラオケで「アンコ椿」を熱唱し　芳
　そぞろ涙す母の想い出　智
玲瓏と澄みわたりたる後の月　利
　糸瓜のようにぶらり口過ぎ　冬
好物はもってのほかの菊膾　妖
　宇宙旅行は五億円とか　芳
ホールインワンを狙ってグー・ショット　智
　頼みの綱は年金だけさ　利
繽紛と盧生の夢に花の散る　冬
　見返り阿弥陀ほのと暖か　妖

平成十九年十月　五日首
平成十九年十月三十日尾　（文音）

歌仙『雑炊』

雑炊は昭和の味か涙味　　冬
身振り手振りで母の炉話し　　芳
レトロバス凸凹道を走り来て　　智
田舎なれども酒の良き里　　妖
猫集い月天心に遊ぶ頃　　利
宅配便で届く川鮭　　利
露寒の襟かきよせる矢絣に　　冬
おでこにちょこと戯れのキス　　芳
出来ちゃったままごと気分の新世帯　　智
鳩時計から魔女が飛び出し　　綾
したたかに我慢の総理頭下げ　　妖
南無や日ノ本救い給えと　　芳
辻占と八卦にすがり月涼し　　智
甘い水よと誘うほうたる　　利
環境にやさしい農業目指しつつ　　冬
百姓知らずと人は陰口　　妖
思い立ちハドソン河の花を見に　　綾
吟行兼ねて旅のうららか　　冬
富士仰ぎ次郎長唄う茶摘うた　　妖
五百羅漢のさまざまな顔　　綾
寝坊してファーストフード弁当に　　智
女系の家に髭の婿殿　　芳
雪焼けの男らしさに惚れこんで　　利
わたる世間は「偽」の字の世相　　利
校訓は清く正しく美しく　　綾
昔とったる槍と薙刀　　智
「神風」の鉢巻をせるあで姿　　冬
十八番の喉がうなる屋台に　　利
湖染めてまどかなる月上るらん　　芳
甍の波にいたる秋冷　　妖
祭獅子舞うて豊作祝う村　　綾
ファックス用紙くるりくるりと　　芳
絶景に歓声あげる観覧車　　智
ラジオ体操元気いっぱい　　利
二十四の瞳かがやく花の島　　冬
いざや渡らん初虹の橋　　妖

引地冬樹捌

引地冬樹
二羽智子
吉本芳香
田川利公
密田妖子
谷本綾子

平成十九年十二月一日首
平成十九年十二月二十日尾（文音）

Wスワンスワン　『神隠し』

八尾暁吉女捌

『一折』

壱面

霾晦瀬戸の島々神隠し　八尾暁吉女
やどかりの這う大き岩陰　飯沼三千古
雛納め教わる子等の懇ろに　宇野恭子
隔世遺伝揃い賑やか　矢崎妙子
しゃっくりに背中をどんと叩かれて　矢崎硯水
松の雪吊り照らす弦月　暁

弐面

十四日追慕茶会の座にはべり　三
ネールアートを少しひかえめ　恭
何につけ心算狂うセレブ婚　硯
こっそり逢うは若き弁護士　三
空港の中華飯店ちょい穴場　暁
今の震度は六と速報　恭
妖しげな青き月影雲間出て　妙
そろそろ決める水落す時　三
歓迎に持ち山に入る茸狩り　暁
話題はいつかゴルフスコアに　恭

参面

窓際に懸けるモビール信天翁（あほうどり）　硯
南仏風のしゃれた街並　妙
新聞は比べて見るが面白く　三
兄は音読弟数独　暁
花の昼草反芻の牛の群　恭
いとのどろかに響く角笛　三

『二折』

壱面

儒者らしき人に混じりて孔子祭　妙
礼節いずこ衣食足りても　暁
ゴミ置場掃除当番順繰りに　三
ねんきん便のいまだ届かず　恭
紫宸殿穀象もいて赤き月　硯
夏風邪なれどかかる召集　暁
挨拶は二の次三の次にせん　妙
蟲屓の力士幕内に入り　三
早々に金だ銀だとメダル病　恭
ＯＴＡＫＵ好みの珍なコスプレ　硯
虚と実の間を揺れる恋ごころ　暁
こうのとりさえ機嫌伺う　恭

望の月ゆたけき里をわたりつつ
久方ぶりに祝う出来秋
瓢箪に細工する者描く者
曲が流れる「琵琶湖周航」
参面
埋れ木と銘ある菓子のほの甘く
ひとつ御供ひとつ楽しみ
この所客人多き右隣り
春塵しずめ早朝の雨
花弁の打ち震えつつ競う色
いかなご釘煮先ずは一献

恭硯暁妙三　恭硯暁妙三

平成二十年三月三十一日首
平成二十年五月五日尾（文音）

歌仙『早蕨』

藤江紫虹捌

早蕨や遠くかすかに日本海　多田史代
囀りこぼるほそき峠路　田川利公
ゆく春の歌仙一巻仕上りて　藤江紫虹
からりと揚げしかきもちの味　公代
訪ねくる人もなきまま盆の月　公代
詩集に栞る紅葉ひとひら　史虹
在(ウ)祭民族衣裳の留学生　代虹
お好み焼きをつつくなれそめ　公代
肩書きもキャリアも捨てたいとしさに　〃公
浮世離れて山里に住む　〃虹
なけなしの財布をはたき簪を買い　〃代
覚めて儚なき竜宮の夢　虹公
月涼し陶の狸に化かされて　〃虹
汗拭きながら磨くお宝　〃代
コンピュータ試算によれば金鉱が　〃虹
振り込め詐欺に油断召さるな　〃公
あれあれと稚児が這い出す花筵　〃虹
風にのりくる蒲公英の絮　〃公
暖(ナオ)かし五百羅漢のゑびす顔　代公
無人売場に並ぶ鳩笛　公虹
ガリバーという名の小さき喫茶店　虹公
医師も薬も要らぬ元気さ　公山本比佐子
笠地蔵粉雪舞う夜の恩返し　代多田芦畔
炬燵にはまりゲームたのしむ　公代
窓際に洗濯物の取り忘れ　代公
幼なじみがいつか妹背に　公虹
純愛の夜をつんざく救急車　虹佐
聖火リレーに治安ははら　佐畔
乳搾る牛舎の窓に月明り　畔代
運動会で怪我の巧名　代公
気(ナウ)のおけぬ仲間と新酒酌み交わし　公虹
戦国美談秘して語らず　虹佐
恩給で世界遺産をめぐる旅　佐畔
日替りメニューにおそろいの服　畔代
咲き継ぎて列島つなぐ花前線　代公
うつらとろりと朝寝楽しむ　公

平成二十年四月二十日首
平成二十年五月八日尾

（於・中条公民館）

歌仙『能登上布』

二羽智子捌

朱鷺棲みし里に織り継ぐ能登上布　二羽智子
　窓よりすうと入りし涼風　木上紫雲
軽々とデジタルカメラ肩にして　加納俊子
　三味の音色の洩るる裏町　細山吉女
山の端に懸りし月のまどかなる　紫雲
　丹精込めし稲穂たわわに　俊子
ゥわが胸の想い染めしか曼珠沙華　智子
　エプロン姿愛し新妻　吉女
昼酒に酔うたふりして膝まくら　紫雲
　のらりくらりと捻じれ国会　俊子
門前で睨みを利かす仁王像　智子
　急勾配の坂にくたびれ　吉女
月覗く炬燵でペルシャ猫抱き　俊子
　白き息もて癌と告げらる　智子
優勝の達成感を渇望す　吉女
　拍手が好きな北の統領　紫雲
一歩二歩あるき初む子へ花の舞い　吉女
休耕田は蝌蚪に貸し切り　紫雲
ナォカーナビに誘われ行く磯開き　智子
　元気元気と地震復興　吉女
ふっくらな千寿大福頬ばりて　俊子
　親睦ふかむ足湯温泉　智子
夏場所の升席広く陣を占め　中田風来
　衣替えても常に胴乱　紫雲
天引きの年金ぐらし日々苦し　俊子
　彼のためなら手鍋さげても　吉女
スリットにちらちら透ける若い肌　赤坂久子
　聖火リレーのルート変更　俊子
うぶすなの祭太鼓へ月澄める　風風
　砂丘すれすれわたる雁がね　紫雲
ナゥ紅葉映ゆ嵯峨野の古き史跡訪う　吉女
　通学の児へやさし見守り　久子
持ち寄りし物で朝市賑わいて　紫雲
　携帯電話またも鳴り出す　吉女
船方の棹ゆったりと花惜しむ　智子
　ペットボトルに揺れる陽炎　風風

平成二十年四月二十日首尾

（於・中条公民館）

歌仙『夏来る讃歌』

酒井愛子捌

鳥達の夏来る讃歌磯木の香　酒井愛子
色とりどりに張られしテント　宮嶋茂
木々抜ける児等の歓声賑やかに　芝田祥子
ゆつくり走るシルバーマーク　永田澄枝
いつまでも追ひかけて来る望の月　茂
紅葉の山の写メール届く　澄枝
ウ新酒酌み疲れをいやす旅の宿　祥子
恋を秘めたる胸のブローチ　澄枝
何時かこんな夢を見たよと抱かれて　愛子
星占いに一喜一憂　茂
高齢化社会問題目白押し　澄枝
日本丸の羅針盤無く　茂
夜番の柝打ちつつ仰ぐ冬の月　愛
おでんをつつき昔話を　祥
カラオケを唄ふ叔父さん艶歌好き　澄
趣味が高じて慰問活動　澄
開校を知るや知らずや花万朶　茂
あくびする猫春は麗か　祥
ナオ野遊びにスケッチ帖を携へて　愛
今年の服はフリル流行　祥
スクラッチ買つて擦つてハズレなり　澄
今となつては神仏たのみ　祥
縁日に浴衣がけしてそぞろ行く　茂
名人もいる金魚すくひよ　澄
邂逅もつかの間搭乗アナウンス　愛
桟上の人に残るいとしさ　茂
禁断の恋ゆえになほ燃え上がり　愛
急がば廻れ瀬田の長橋　〃
月さやか五百羅漢を照らし出し　茂
たわわに実る背戸の富有柿　〃
ナウ秋日傘くらがり坂の人となり　澄
期待高まるゴジラのマーチ　〃
人文字がゆれるグランド九回裏　愛
ハンカチ王子の神髄を見る　茂
花見舟三味は二上り三下り　愛
ぴいひよろひよろと春の鳥舞ふ　〃

平成二十年四月二十日首尾

（於・中条公民館）

歌仙『一徹に』

吉本芳香捌

一徹に昔ながらの紙を漉く　吉本芳　香
　ふくら雀の群れる庭先　前山優美子
カンバスに孫の笑顔を描きいて　加藤定　雄
　口に頬ばるポテトチップス　村上町　子
山並を染めて満月昇るらん　水野道　代
　丹精込めし菊が入賞　藤田暁　夫
不動寺へ続く坂道そぞろ寒　芳
　携帯電話胸の高鳴り　優
つかのまの逢瀬に愛を重ねつつ　定
　消えては灯るイルミネーション　町
高齢者天引き悲し保険料　道
　安いお酒で憂さを紛らす　暁
月涼し波おだやかな別世界　優
　旅行マップを開く籐椅子　定
シャンゼリゼ・エッフェル塔を夢にみて　町
　膝の白猫尻尾ふりふり　道
爛漫の花の下なる連句の碑　暁
暮れかねている峡の村里　芳
元気よく野遊びの児等帰りきて　優
　叱られながら宿題をする　町
与野党のねじれ国会治まらず　定
　残る手立ては神頼みのみ　道
燃えさかる達磨ストーブ明あかと　暁
　樏吊す土間の片隅　定
熊撃ちが終の生業茶碗酒　芳
　心やさしい糟糠の妻　優
そのうちに旅へ出ようと声かけて　町
　靴と洋服新しく買い　道
ハモニカで懐メロを吹く月今宵　暁
　急に飛びだすおかま蟋蟀　芳
故郷にもどりて祝う秋祭り　優
　恩師囲みて同窓の会　定
天気図はお日様マークにこやかに　町
　産着縫いつぐひだまりの縁　道
菱櫓望むお濠の花筏　暁
　路面電車に乗るもうらら　芳

執筆

平成二十年四月二十日首尾
（於・津幡町中条公民館）

歌仙『御裳濯川』

榊原由美捌

初参り御裳濯川を風渡る　　由美
　白馬曳かるる淑気満つ苑　　美子
椿餅朱の重箱に詰められて　　圭子
　卒業祝ふ寮母朗らか　　孝子
衛星の去りておぼろの月仰ぐ　　ひろみ
　路上ライブの声は高々　　〃
口（ウ）よりも手が出る父に躾られ　　み
　嫁入り道具トラックいつぱい　　圭
いつこうに訪れの無きこうのとり　　美
　琉球グラスにビール酌み合ひ　　美
久方に孫子ら揃ふ夏座敷　　孝
　団塊世代退職のとき　　圭
静かなる月を邀へる大天守　　み
　つるりと剥きて衣被食む　　孝
旅便り開けば聞こゆ虫の声　　美
　アロマの瓶が棚にびつしり　　圭
雛僧の掃ける花屑きりもなく　　孝
発掘作業は黄塵の中　　美

平成十九年一月　二日首
平成十九年四月十九日尾　（文音）

歌仙『天神に』

浅野黍穂捌

天神に五月の黄砂黄信号　浅野黍　穂
　捲れる袖に滲む汗あと　八木紫　暁
珈琲のそそぎの技法授かりて　穂
　団子状なる下校児の列　暁
飛行船ゆらりと現るる月見酒　穂
　湖へ近径こぼれ萩踏み　暁
ウ火の粉刺す鞍馬火祭勇み肌　〃
　妙齢なれど探偵の助手　暁
徒情けつひに嵌まりし色の罠　穂
　寅さん流となる受け答え　黒木嫩乃
じやあなにか名代の蕎麦などいかがです　暁
　識者会議は同じ顔ぶれ　穂
国鉄のむかしの大義いま社保庁　乃
　寒月光に日本漂流　暁
さらされる裸の王子虎落笛　穂
　スパイス四種チャイに安らぎ　諏訪欣二
心地良し仮寝の蓆花ん央　穂
むつくり起きて踊る春興　暁
ナオ雁瘡のやつと癒えたる妻機嫌　二
　新聞漫画ギャグの面白　暁
横須賀の海軍カレー買つてきて　穂
　港に船の入る夕暮れ　乃
聞こえくるファドの歌声クレセント　二
　過去をもつ愛どこかモノクロ　穂
山間の宿の浴衣のしつとりと　暁
　仏法僧と流れくる謄　二
定年後理想の暮し退屈に　乃
　仕手株券を眺め溜息　暁
臥待の杯はついつい重ねつつ　中本七水
　紫苑の影に夢も揺るゆる　乃
ナウひつそりと雁の立ち寄るまろき沼　穂
　科学進んで続く大地震い　水
参院選我に弓引く者多く　暁
　鈍感力とTシャツに書き　穂
花の道朝嵐山夜は平野　二
　春灯に浮き義満の楼　乃

平成十九年三月二十七日首
平成十九年七月二十二日尾
（於・福岡・行動医学研究所）

短歌行　『げんげ田の』

八木紫暁捌

げんげ田の煙突のあるパン屋かな　浅野黍穂
　若鮎遡る峡のせせらぎ　八木紫暁
風光るチアー練習始まりて　水谷卯波
　囲む子達の瞳かがやく　福武孝義
ウ知事の乗る開通道路晴れやかに　暁
　もろ〳〵値上げ豪の旱魃　穂
裏までもかぐやに見せて夏の月　義
　レーザーメスで切りしポリープ　波
ソプラノの「四つの最後の歌」沁（しみ）沁（じみ）と　穂
　涙腺ゆるきは母のお譲り　暁
健気にも凛と咲きたる帰り花　義
　秋山小兵衛ふぐ鍋と酒　波
ナオ（ナヲ）ひたすらに舌で盗んだシェフの技　暁
　マウナ・ケア山星に見（まみ）ゆる　穂
透き通る珊瑚の鬼ひとで　義
　万有引力金の頓服　波
かまつかと勝負のフィンガーペインティング　穂
　木の実こぼるる月の階段　暁
話し込む若い二人に鹿の声　義
　引きとめられし去年の心中　穂
ナウ（ナヲ）商ひの歴史を諏訪（かた）る古暖簾　暁
　春一番の轟（がう）と吹きくる　義
告白の背にはらはらと花の散り　欣二
　蟻穴を出づ庭の踏石　執筆

平成二十年四月二十日首
平成二十年五月十八日尾
（於・福岡・行動医学研究所）

脇起歌仙　『緑蔭』

飯泉葉子捌

緑蔭に椅子ひとつ置き安息日　大竹多可志
　切子の皿に冷えし水菓子　飯泉葉子
颯爽と新幹線に乗り込みて　五味真琴
　買ひつけに行くキャリアウーマン　豊田美代子
月今宵海原に道あるごとく　葉子
　耳をすませばこれは鈴虫　真琴
一ウ途なる思ひを託すさねかづら　美代子
　かつては源氏いまはヨン様　葉子
憚らず亭主の前でのろけたる　真琴
　野菜づくりに励む毎日　美代子
これからはシンプルライフ心掛け　葉子
　夕べつのりし背戸を吹く風　真琴
冬の月又もお詫びの社長族　美代子
　コンパの鍋は狸汁とか　葉子
代々の振り子時計が時刻み　真琴
　主婦のやりくり投資信託　美代子
来合せる花の万朶の六義園　葉子
記念写真の笑顔うららか　真琴
ナオふる里の川に稚鮎の跳ねてをり　美代子
　けさもかかさぬテレビ体操　葉子
もしかしてさつきの事はプロポーズ　真琴
　女盛りが人の噂に　美代子
うすものにあまたの修羅を包み込み　葉子
　涼しき部屋に般若心経　真琴
新聞の旅の広告切抜いて　美代子
　夢をいざなふ豪華客船　葉子
こだはりのコーヒー豆を土産とし　真琴
　病癒えしと声のはづめる　美代子
満月に影絵となりて踊るなり　葉子
　いと爽やかに庭の蹲踞　真琴
ナウ雁渡り竹馬の友の饒舌な　美代子
　新調したるゴルフウェアー　葉子
裏山は世界遺産の中と言ふ　真琴
　エール送らん若き総理に　美代子
入社式終へたる窓の花明り　葉子
しやぼん玉にも七色の虹　真琴

平成十九年九月五日満尾　（文音）

脇起歌仙　『新涼』

羽場桂子捌

新涼の風を聞きをる埴輪かな　大竹多可志　子
　前山の端に淡き昼月　飯泉葉子　子
障子貼る手付もいつか母に似て　木崎節子　子
　文字の大きな辞書を択びぬ　羽場桂子　子
教はりし菖蒲刀で遊ぶてふ　葉子
　徊となりて郭公の声　節子
底（ウ）深く釣瓶を落し水を汲み　桂子
　茶房通ひのお目あては何　葉子
見かけより彼の心の一途さに　節子
　赤いドレスで踊るカルメン　桂子
腹出して陶の狸がうす笑ひ　葉子
　痩せる効果を煽る番組　節子
寒月にしらしら渓の巌襖　桂子
　狩人宿のケトル鳴り出す　葉子
口惜しさは孫に負けたる詰将棋　葉子
　引くに引かれぬ株の値上がり　葉子
チンドン屋花咲く町を練り歩き　桂子
　再開発のビルの陽炎　節子
潮吹貝（ナオしおふき）が泡吹いてゐる大干潟　桂子
　留学の夢言ひだせずをり　節子
今宵また愛しきひとに付いてゆき　葉子
　思ひ乱れてこもる言の葉　節子
たはたとシュレッダーが裂くラブレター　桂子
　梅酒の封を切つてもひとり　葉子
湿拓の翁の句碑がやや傾ぎ　桂子
　村起しなる忍者体験　節子
名が売れて参院選の候補へと　葉子
　地蔵様にもお辞儀してゆく　桂子
止められぬ煙草くゆらせ見上ぐ月　節子
　千成瓢箪太りすぎたる　葉子
襟（ナウ）元の黄ばみ気になる秋袷　桂子
　上方よりの芝居かかりぬ　節子
キムタクの写真ちまたにあふれゐて　葉子
　鞄にしまふノートパソコン　桂子
車座の少し崩れし花の下　節子
　ふはりと揺るる春のスカーフ　葉子

平成十九年十月十五日満尾　（文音）

脇起歌仙　『野の匂ひ』

早田維紀子捌

野には野の匂ひ脹らむ夏暁かな　大竹多可志
　風の青さに透ける水底の広さよ　早田維紀子
陶土掲く唐臼の音聞こえきて　木崎節子
　軒をこぼるる雀五六羽　石田榮子
まんまるの月に幼が走り出す　小出民子
　挟みそこねし小芋ころころ　河野玲鼓
うらぶれの身にみちのくの秋時雨　維
　思ひのたけを書きし大作　節
吸ひ差しの煙草にちよつと残る紅　榮
　上司と部下の垣根取れゆく　榮
あつさりと女大臣誕生し　鼓
　鳥獣戯画の掛かる扁額　維
パソコンで決める献立冬の月　維
　炬燵で語る忘れ得ぬ夢　節
あまえ寄る猫のひとみの金と銀　民
　選挙参謀気配りがきく　民
花吹雪つひに舞台の幕が下り　鼓
　喜の寿を子等と祝ふ春宵　鼓

若芦（ナオ）の揺れだす杣の道を来て　榮
　家鴨群れゐる池の広さよ　民
うとうととアンデルセンの国に入り　鼓
　単身赴任のカップラーメン　維
念願が叶つて担ぐ荒御輿　節
　まことお洒落な麻の袢纏　榮
べらんめえ口調が胸に火を点じ　榮
　千字の「好き」で埋まる恋文　民
信楽の狸が並ぶコンコース　鼓
　募金の前を通り過ぎたる　榮
夕月へサッカーボール蹴り上げて　維
　悔し涙で呼るどぶろく　節
門（ナウ）前を全開にして松手入れ　鼓
　捜査本部がねらふ大物　維
いくつもの肩書どれがほんとやら　維
　自分で決めし定年の歳　節
花筵ところ狭しと重なりて　民
　穀雨に濡るる夢の農園　鼓

平成十九年　五月十七日首
平成十九年十二月　九日尾　（文音）

半歌仙　『時告ぐる』

太田島秋山捌

時告ぐるからくりの手も悴(かじ)かめり　若山日夜子
　爪切る背なに冬の日を受け　利根川たらう
甲高い声して孫の騒ぐらん　秋山柿生
　ほとほり冷ます大臣がいて　太田里空
月高く終電去りし高架駅　矢野徳三郎
　芋田楽に祖母のおもかげ　田島呑空
駒下駄(ウ)の捨てられいしか曼珠沙華　里空
　打ち明けぬまま同窓の宴　たらう
新妻の髪かきあげる白き指　柿生
　島に伝わる祝歌(ほぎうた)を弾く　日夜子
アドレスを記せし手帳女文字　徳三郎
　通夜のせわしさ友の気遣い　呑空
その辺で許してやれよ暑き月　里空
　夫婦喧嘩のあとの夏蕎麦　たらう
夕影の濃くして三毛の帰宅なり　柿生
　捧げ持ちたる拝領の太刀　日夜子
花曇り立ちつくしたる少年僧　徳三郎
　温(ぬく)き手探り夢の一睡　呑空

平成二十年二月三日首尾
（於・有楽町マリオン談話室）

半歌仙　『牡蠣の店』

太田島秋山捌

春昼や跡形もなき牡蠣の店　太田里　空
　暖かなりとワイン抜きたる　矢野徳三郎
しゃぼん玉小さき下駄のまろびして　田島呑　空
　怖いものなど無いと強がる　若山日夜子
忘れたきことのみ多し冴ゆる月　利根川たらう
　夜食のうどんすでに冷めいて　秋山柿　生
ウフラスコに新薬生れて秋うらら　日夜子
　人かげふたつ女坂ゆく　徳三郎
勢いでネオンの門に手を引きて　呑空
　ためらいがちにぬぐう口紅　里空
雨やまずこれが別れといいつづけ　たらう
　比翼の湯船熱海なる宿　柿生
月浴びて変身もせず水遊び　日夜子
　久方振りに蚊帳の涼しさ　徳三郎
山寺の献額破れ子は走り　呑空
　白粥すする漁師老いたる　里空
消息をそうとは告げず花便り　たらう
　今宵の酒に蕗の薹摘む　柿生

平成二十年二月二十三日首尾
（於・有楽町マリオン談話室）

歌仙『浜千鳥』

高田保二氏御子息耕志さん追悼

鈴木　漠捌

親千鳥子千鳥も啼け月の浜　　鈴木　漠
　置くかと見えて消ゆる初雪　　紀野　恵
山国をめざしてえらび行く道に　　斎藤梅子
　本草絵図をやをら繰りつつ　　東條士郎
梅咲くも薄氷（うすらひ）の情いかにせん　　高田保二
　春手袋の柔き感触　　漠
佐保姫（ウ）がこちらへ来よと招く風　　恵
　いまだ娶らず耕してをり　　漠
鳴る鐘はかつて二人で聴きしもの　　士郎
　路地住（すま）ひして涼み台佳（よ）き　　梅子
掛け損ね黒鯛惜しむ釣談義　　漠
　さはさりながら長きもの捨て　　保二
月影の美（は）しき母郷に詩を詠まな　　梅子
　小包便に送る鈴虫　　恵
肌寒を覚えしままに活字追ふ　　保二
　かたくなになる老いのこのごろ　　士郎
花の色せめて心に移れかし　　恵
　朝寝の夢の続き貪（むさぼ）り　　漠
日刺焼（ナオ）きフロイト全集購ひしまま　　士郎
　万年筆を使ひゐる我　　梅子
大伯父は無声映画の弁士たり　　漠
　一日散に逃げるいかづち　　保二
裏口に行水の児らはしやぎゐて　　梅子
　ピサの斜塔と我が家呼ばるる　　恵
いつからか魑魅魍魎と呢懇に　　保二
　言ふこと勿れ此方（こち）も破鍋（われなべ）なり　　士郎
白萩の君とたへて恋せしが　　恵
　うり坊奔（はし）る稚気と衒気と　　漠
雲間より月洩れ出づるハイウェイ　　士郎
　獺祭忌には与謝蕪村読む　　保二
晴（ナウ）れやかに野球殿堂入り嬉し　　漠
　とんびのコート似合ふ体格　　恵
ぐびぐびと骸酒よと洒落のめし　　士郎
　徳利と碗は志野にこだはる　　漠
果てもなし花を透かせる蒼穹（あをぞら）は　　保二
　蚕飼（こかひ）の里を囲む連峰　　士郎

平成十九年十二月二十二日首
平成二十年二月二十九日尾　（文音）

脇起歌仙　『七種粥』

和田忠勝捌

大林杣平仏　大椀の七種粥のみどりかな
和田忠勝　飾納めも夫の国ぶり
今村苗　鶯の鳴く音を心待ちにして
蛭海停雲子　ポスト一杯新車広告
大津博山　月明り紙風船のぶらぶらと
千場ひで子　かゆい所へ届く嫁の手
苗　荒浪(ウ)に逆らい漕ぐ櫓きしみたる
雲　養老・老松・敬老の曲
山　町内の世話役またも引き受けて
苗　思いもかけぬ程のもてよう
雲　ベランダで震えているはいい男
ひ　踊り疲れたおかめひょっとこ
苗　政局の亡者は月に策を練る
ひ　案山子のいない棚田荒れ果て
苗　バリ島の森渡りゆく狒々の群れ
勝　世界遺産を巡る長旅
雲　ここかしこ余花に出逢えて満足し
ひ　甘酒でつる寺の案内
山　駅名も日米韓で気を遣い
苗　胸の谷間にすべる目差し
ひ　痴漢よと叫んだゆえにいきそびれ
勝　八つ裂きにしてクローゼットに
雲　凍てつきし古城の厚き石の壁
苗　鍋焼饂飩名物の店
ひ　釣り宿の明日の釣果を競い合い
山　どちらの国も国技外人
雲　伝統の地球儀売れているらしい
ひ　蔵の二階に祖父のお宝
山　冥王星どうしたんだと月に酔い
雲　屋根に激しく落ちる椎の実
苗　核(ナウ)ありや無人探査機そぞろ寒
山　体重減らし膝も軽々
ひ　弥次喜多の遥かに拝む富士の山
苗　春のうらら の声は銭湯
雲　花の門くぐれば近き里の道
ひ　おたまじゃくしと遊ぶ子供等
山　駅名も日米韓で気を遣い

執筆

平成十九年一月七日首尾
（於・深川芭蕉記念館・杣平師五回忌）

海内付
廻百韻

『抱虚庵九世襲号記念』

俳諧の種撒き散らせ春嵐　土屋実郎
社日の大地潤える朝　和田忠勝
新築す軒たがわずに燕来て　名古則子
有れば事足る味噌と玄米　山口良子
尺八に聞き入る碧き眼の人も　池田紅魚
雅びごころに東西は無し　小張昭一
月さやか沖に小島のありありと　小林しげと
露けきが良しポストへの道　蛭海停雲子
ウ母と娘の背丈程ある吾亦紅　宮脇昌子
レトロな紬着付マニュアル　岡本貞子
舞台より隣の席が気にかかり　大駒泰子
仕事大事と頼もしき彼　大駒誠一
飛行機はいまアルプスを眼下にす　木谷英子
テロ対策は靴の底まで　中井淑子
握手してきのうに変わる今日の顔　榎本良之助
一番人気あぶり鰭酒　中井啓輔
名披露に玉兎の餅を振る舞いて　伊藤百雲
ひたすら回すカメラスタッフ　玉生うめ子
納得のロングパットにポーズとる　辻松雄
蝮注意の立て札が見え　辻賢次郎
団塊の世代帰農の花田植　磯直道
能楽堂を守る村人　土肥暢子
オ波荒し史跡の多き佐渡ヶ島　諫武雪谿
神亀織り上ぐ金糸なめらか　宮下瑩子
留学の期限も残りわずかなり　木谷藍
すり寄ってくる仲良しの犬　和田柚香
太っちょのお肉屋さんに声かけて　和田実桜
マドンナを追う復飾の恋　和田晶子
忘れ霜相合傘が遠くなり　内海鉄弥
上流目指し躍る若鮎　宮坂和之
枝を張る大樹の松の緑濃き　海津桂子
スローライフの刻は悠々　下田博
アトリエに油絵の具を溶きながら　下田幸枝
珈琲豆も値上がりと聞く　松本カヨ
分析の濾紙の雫も月に透き　品川鈴子
規則正しく響く唐臼　大久保風子
ニウ障子貼る座敷童子とかくれんぼ　大城悦子
鑑定に出す蔵の古文書　岡村糸子
蘭奢待大和の秘宝薫らせて　宮澤うか
もゆる想いを伝え得ぬ姫　鈴木山波
辛きこと凌ぎし末の共白髪　竹崎梨野

名相きどり立つ位置をき　伊東あさぢ
記録出すドミノ倒しの確かさ　森脇甘蘭
河鹿聞こえる山の学校　平良末遊虹
月涼し少年雄志胸に秘め　臼杵游児
きっといつかは横綱になる　名和未知男
漸くに魚料理も食べ馴染み　東浦佳子
狐火の群れ巡る里の村　塙於玉
餅花をゆらし翁の舞い現れて　引地冬樹
正座に慣れて茶の湯大好き　福島壷春
三オ留め石を飛び越え猫の横切り　岡山朱藍
快癒信じて又会おうと友　佐藤良弥
こわごわと携帯メール送信し　岡村耿
気を転じたる瓜番の笛　小川廣男
炎帝に二次曲線は立ち上る　川野蓼艸
初狂言は矢の根助六　島村暁巳
松過ぎの宵の銀座の灯りそめ　白根順子
最上階で祝うパーティー　福田太ろを
当選と垂幕に朱を大書して　八木紫暁
消え易きもの筐に納めん　狩野康子
許可なしに入って来ては困ります　小池正博
水晶玉を磨く占女　上田渓水
春の月恋は朧をいいことに　中尾青宵
遍路の抱く俤　伊藤稜志

三ウたまゆらの雉子の一声指呼に聞き　伊藤貴子
サンクチュアリを守り続けて　梅村光明
頬骨も濃き森番の伯父貴なり　鈴木漠
囲碁と俳諧ともにずば抜け　松尾博雄
ネットカフェ出でて寒靄深き街　矢崎藍
山彦を抱き眠る山々　富田昌宏
超伝導リニアに夢をふくらませ　大西素之
ぐいと飲み干す乾盃の酒　城依子
あきらめよ幼馴染の思慕の情　片山多迦夫
これっきりよと一夜あかしぬ　春日久子
有明の月は阿修羅の顔をして　青木秀樹
宮本武蔵秋風を切る　近藤蕉肝
わざおぎの心さながら花相撲　大野鵠士
癖のひとつが知らぬ間に増え　東條士郎
ナオ近頃はユーロばかりが強くなり　横山わこ
企業買収話立ち消え　高津明生子
たましいの集まってくる出雲道　村上敦子
君を想えば合歓の花散る　秋山よう子
暑気中りせめて一日側にいて　白井暎子
和太鼓の音に励まされつつ　高島幸子
視聴率プロより上げし甲子園　和久井八重
ふるさと自慢ネタは尽きまじ　大津博山
ゆっくりと目をいれこけし笑む顔に　柴田寿賀

事なき通知検診の老
端然と筑波嶺立ちて嬶歌の地
古く新し風土記万葉
いつの間に皆既月蝕始まりぬ
ウィーンの森の黄落の頃
初（ナウ）猟の犬勇み立つ牧外れ
つらいドラマも果ては笑顔で
香案は誰が作ならむ千代八千代
心を癒す深き飴色
譲り受く兜に光る星数多
詩う如くに寄する春潮
花古木ますます花の万朶なり
籾を浸せば新しき風

原崎弥生
藤沼和ヱ
坂田武彦
宮下太郎
藤井弘美
久良木憲
鈴木善春
高木桜子
落合博一
遠藤尹希子
和田ひろ子
小林静司
今村苗

平成十九年九月吉日満尾（文音）

抱虚庵襲号記念正式俳諧興行

世吉『道継ぐや』

土屋実郎捌

道継ぐや牡丹の根分ねんごろに　土屋実　郎
　月は上弦行合の空　今村　苗
残る海猫波切る船を追いかけて　秋山よう子
　ギター片手に舶来の酒　蛭海停雲子
思わざる受賞の報せ絵画展　和久井八　重
　ラーメンカップ溜まるいっぽう　白井暎　子
全山に梅雨明けの滝轟かん　小林静　司
白絣なる旅の若者　横山わ　こ

絶ウ筆の戦争体験克明に　高島幸　子
　ゲゲゲの鬼太郎境港へ　池田紅　魚
妖しげに光るネオンに惑わされ　山口良　子
　胸の谷間にゆれる十字架　柴田寿　賀
もういち度もういち度とてキスせがむ　藤井弘　美
　やきもち焼きの犬がみている　和田ひろ子
月凍つる回転木馬ゆっくりと　小張昭　一
　肼・燁は出来たことなし　原崎弥　生
鮫鰊の肝探る箸からみ合い　鈴木善　春
　起承転結首相起だけか　村上敦　子
甦るメタセコイアは化石の樹　藤沼和　ヱ
　金接ぎ茶碗仕上がりの良き　坂田武　彦
わらしこが花嫁になり若女将　赤田玖實子
土筆摘む手の触れる嬉しさ　久良木　憲

別れ霜林の脇の地蔵尊（ナオ）　和田忠勝

赤潮寄せる波止場突堤　高津明生子

人間になりたい人魚夢はるか　楠正三

ハイデルベルグ古城賑わう　大津博山

絶えまなく流れは岸辺洗いつつ　小林しげと

世界類なし天子一系　落合博一

我意通す成吉思汗のスケールで　高木桜子

巨大甲虫破る蜘蛛の囲　近藤蕉肝

山鉾の蔵出し差配老いてなお　春日久子

故郷の香り胸にいっぱい　土屋文子

お説教「親死に子死に孫が死に」　伊藤八千代

母校の襷しかと渡せる　大場梅子

九世を祝う真如の月澄めり　引地冬樹

面打つ音と揺るる桔梗と　川野蓼艸

抱瓶（ナウ）を腰に南の紅葉狩　臼杵游児

ガンダーラさは秋の風吹き　中尾青宵

いつの間にタイムスリップして居りぬ　宮下太郎

「付け」と「句あり」を取違え候　本屋良子

何事もよいと思えばよいこの世　青木秀樹

鮒もそろそろ動く川底　松本杏花

国鎮め御魂も花に酔うてあり　宗匠

恩師の言葉あたたかき宵　執筆

平成十九年九月三十日首尾（於・江東区芭蕉記念館）

宗匠　土屋実郎　花司　横山わこ

脇宗匠　小林静司　香元　和田ひろ子

知司　小林しげと　配硯　和田柚香

執筆　和田忠勝　〃　和田実桜

座配　坂田武彦　奏楽　久良木憲

短歌行　『夏蕨』

二村文人捌

産土の背戸を隠すや夏蕨　北野眞知子
小瑠璃の声の繁き林泉　江沼半夏
ハム卵サンドイッチを分け合いて　山中狐太
つまんで洗うエプロンの染み　二村文人
我(ウ)が手相くまなく照らし月今宵　奥野美友紀
新走り添え妻のたよりが　富尾弘美子
菊枕ダブルサイズの横長に　野島一枝夏
痛む奥歯がやすやすと抜け　美太
自転車を習い初めたる小学生　子
知覧の街は観光で売り
訪ね来て花に埋もるる痩せ仏
老いた漁師の放つ鮎の子
紙鳶(ナオ)きのうの空にきょうもまた　夏枝
ショパンのソナタ路地にあふれる　枝美
ケータイもパソコンもなく押し通し　美子
暦の〇(まる)は大切な〇(まる)　子紀
倫ならぬ恋は証拠を残さずに　紀太
デッドボールがホームラン呼ぶ　太人
月の道帰り待ちぶせ上棚屋　人同
神楽太鼓を打てる若衆　同夏
倹約(ナウ)と自らの身を削るまで　夏枝
パンダ元々チベットのもの　枝紀
定年の夫婦気儘に花の旅　紀太
蜜蜂を飼う丘のなだらか　太枝

平成二十年五月十一日首尾
（於・富山市星井町公民館）

短歌行　『茅花流し』

瀧澤尚子捌

鳥の声しきりに茅花流しかな　瀧澤尚子
矢車光る合掌の屋根　八木孝子
ハイウェー仔犬も窓に頬寄せて　藤縄慶昭
今日の出来事記す絵手紙　伊勢良子
ウ雪女立つてゐさうな月明り　いぬじま正一
ふたりに爆ぜる備長の炭　宮村千鶴子
三拝に九拝の末夢叶へ　尚
どこかの国の党利党略　昭
赤ワインソムリエナイフ手際よく　一
ジャンプして取るスタンドの球　孝
次々と迷子お知らせ花の園　千
並ぶ羅漢に配る草餅　良

ナオ里人の喜ぶ春のロケーション　昭
サロメチールの匂ひそこはか　尚
井戸掘りの支援を阻む砂嵐　一
夫の帰りへ進む日めくり　昭
彼だけに見てもらひたいダイエット　孝
糸を伸ばして揺れる蓑虫　千
上弦は信玄の湯にひつそりと　良
女主は菊の名人　孝
ナウなんとなく母に似てゐる鬼の面　千
模型電車が部屋をぐるぐる　一
早々に陣を守りて花筵　昭
茶摘しまへば和む晩酌　良

平成二十年五月十一日首尾
（於・富山市星井町公民館）

歌仙『氷面鏡』

西岡恭平捌

西岡恭平　沈(しん)沈(しん)と杜映したる氷面鏡
宇野恭子　色を重ぬる葉牡丹の渦
杉本聡　かにかくに多才の友の遠くより
瀧澤尚子　声朗々と仕舞ひとさし
密田妖子　風雪を耐へし松ヶ枝月抱き
平　過疎村里に鳴(しぎ)の看経(かんきん)
恭　ウ駅長の指呼する襟に赤い羽根
聡　愁ひ湛へし眸潤みぬ
尚　表裏硬貨(コイン)で決めし逃避行
妖　ちやらつぽ叩き夫婦善哉
平　蒐めたる貝合せやらフィギュアが
恭　シュワーと消えしサイダーの泡
聡　おねだりの出目金さげて月の径
尚　格差なんぞと団欒の夜
妖　産直の不揃ひ野菜が大もてで
平　手間を惜しまず煮込むボルシチ
恭　花守が機嫌伺ふ花の幹
聡　梅若様の涙雨降る
尚　ナオ連衆の剽軽玉ら伊勢詣
妖　ほろりと酔へばいよよ明るく
平　ぐりはまな尖言続く政治屋さん
恭　チルドレンらは影うすくなる
尚　茎漬を提げて師匠にご挨拶
聡　雪の女郎の尾行ひたひた
聡　ふと見れば比翼連理の塚があり
妖　座禅の惰気にぴしり警策
平　お相手のロボット犬は電池漏れ
恭　足の石膏(ギプス)にへのへのもへじ
尚　更待に畦に転がる案山子殿
聡　指揮棒(タクト)ふるふるえんまこおろぎ
妖　ナウ「露」の字を連歌師に入れたげな
平　油滴(ゆてき)茶碗に凝りし数寄者
恭　拾得は箒に跨り宙へ飛び
尚　悟空雲より彼を出迎ふ
聡　花のした花一匁と請ひ請はれ
妖　蜑の網干すうららかな海

平成十九年一月十五日首
平成十九年三月二十日尾　（文音）

歌仙『月の小屋』

明日遣ふ木偶揃ひけり月の小屋　田島竹四捌
　岬の松に鳴るは秋風　広　波青
苦瓜の料理法など教はりて　田島竹　四
　自画自賛する手造りの皿　木村ふう
学生を育てる句会盛り上がり　西岡美代女
　噴煙秘めて眠る山々　出口一点
ウリストラを親には言へず吹雪中　田島もり
　夢と挫折の続くぬかるみ　黒沼葵　邱
今のうち恋せよ乙女清らかに　青
　またも持ち込む伯母の釣書　四
帯揚に残るぬくみを解きをり　四
　卯波の寄する紀の露天風呂　う
月涼し引つ張りだこの旅芝居　女
　思ひのほかの株の値上がり　女
酒苦く二重帳簿を作る羽目　う
　いらいらさせる浮かれ猫ども　点
花筵場所取り役は待ちぼうけ　り
　めくるページに蝶のもつるる　卯
サッカーの試合最中に黄砂降り　り
　鮫の肝油が関節に効き　青
御令室もとは芸者とささやかれ　四
　鹿鳴館に恋の渦巻く　四
あの人は手編みセーター着てくれし　う
　捜索訓練つづく雪山　女
Uターン父亡き跡の寺を継ぐ　女
　練り餌を与ふ手のり文鳥　点
甘言は選挙すむまでご用心　り
　野の片隅の老後生活　青
余りにも月影青きこの夕べ　邱
　声のよろしき閻魔蟋蟀　四
衝立に千草八千草描きつづけ　う
　社長の腕は趣味の域越え　り
金儲けよりも大事なものがある　四
　遠足の子に母の弁当　青
そこここに弾ける笑ひ花の昼　女
　犬が上手に漕げるふらここ　う

平成十八年十二月二十六日首
平成十九年二月二十七日尾　（文音）

歌仙『一茶忌や』

一茶忌や雀俳画に描きやすし　田島もり　捌
枇杷の花咲く馬小屋の跡　木村ふう
あちこちに建設ブーム市となりて　田島竹四
揺り椅子ゆらし聴くはシャンソン　黒沼葵邱
望月の瑞気いつぱい胸の中　吉藤一郎
両手を挙げて案山子歓迎　りう
峡（ウ）住みの行者戻りて冬支度　四
村おこしとてスター招かれ　邱
いつの間に男嫌ひが恋に落ち　郎
寄ればうふふとするりかはして　邱
パーティーのあとに転がるイヤリング　四
鑑識官は塵も漏らさず　う
月の亭涼しく指され須磨明石　り
芭蕉の詠みし蛸壺はこれ　郎
懐に聖書抱きてホームレス　邱
残る寒さもあと少しなり　四
出張は花前線をくぐり抜け　う
鯛網を見て鯛のおみやげ（ナオ）　り
合格のお礼参りは子と共に　四
酌み合ふ地酒ちょつと辛口　郎
かの知事はもつたいないで当選し　り
シャッター通り吹き抜ける風　う
咳き込んでつい道端にしやがみこむ　四
ふたりで巻いた長い襟巻　邱
旅の空甘え心がくすぐられ　郎
あつと言ふ間に決めた結婚　邱
剃り捨てて菩提弔ふ生き地獄　う
あなた任せに重ぬいくとせ　り
買ひたての新車に乗つて月今宵　四
柿を食はずに帰る客人　う
秋（ナウ）団扇茶の間の隅にぽつねんと　郎
家宝の面はレプリカと知る　り
いろいろな夢を育てる恐竜展　四
笑ふ山から貝の化石が　り
船頭に手拍子合せ花見船　郎
頬を掠める黄蝶白蝶　四

平成十九年二月四日首
平成十九年三月四日尾（文音）

歌仙『冬紅葉』

散り敷いて日毎色増す冬紅葉　　近藤蕉肝捌
　主とペアの犬のセーター　　中島好江
輸入物セレクトショップに飾られて　　近藤蕉肝
　少し訛りの混じる挨拶　　横山わこ
月の宴苦みばしったいい男　　峯田政志
　偽皇族の笑みさわやかに　　梅田實
ウクーデター藤原京は露の里　　狩野びんや
　金石文字で干支の印彫る　　林ジョウ
首出したねずみ一匹右顧左眄　　江
　君のペースに引き込まれそう　　や
そこが嫌あそこが駄目と見合いずれ　　志
　琴瑟和して孫に囲まれ　　こ
寿老人俎板橋の月すずし　　こ
　酒気帯びの蟹縦歩きして　　實
アイアイの森切り倒す露天掘り　　ウ
　瑪瑙の夢に消えた一生　　江
花仰ぎ花浴びている身の果報　　や
　都踊りで立役になる　　志
誰か知る亀の鳴くのとギャフンの音（ナオ）　　實
　影踏んじゃった影踏んじゃった　　ウ
境内に道草の子が集まって　　實
　国を飛び出すアニメヒーロー　　こ
孫悟空エアーズロックの上に佇ち　　志
　盲千人目明き千人　　江
忍ぶ恋邪の恋耐える恋　　こ
　小町なんぞにならせまいぞえ　　實
緋の色の衣を褥の幻に　　吉野雪
　麻薬にまがう匂いあやしく　　こ
雪の海今し沈まん月の舟　　雪
　五加皮で灯火親しむ　　志
漱石（ナウ）も荷風もあって宿の秋　　ウ
　枕の下をせせらぎの音　　實
円周率兄妹ともに諳んじて　　江
　山路もとおる遠足の列　　雪
尼寺もやや明るみて花の門　　や
　ガラスの室で蝶の収集　　執筆

平成十九年十一月三十日首尾
（於・九段生涯学習センター）

歌仙『黄金芋』

横山わこ捌

木犀の香もよみがえれ黄※金芋　志
　立ち止まる子の笑顔さわやか　雪
弦月のしばし泉にいこうらん　肝
　詩吟朗詠酌み交わす酒　雪
綾織の帯をテーブルセンターに　こ
　襷がけしてアイス運んで　肝
神ウ宮で義足の投手玉の汗　志
　こんなに早くその時が来た　肝
仲人に恥ずかしい癖言えぬまま　雪
　縋って絡みアイラブユーと　肝
不祥事の続く政界きりもなし　ウ
　積もると見えでつもる白雪　雪
山の湯にひそかにはいる冬の月　〃
　狼が出たうわさもちきり　志
刃をもひと呑みにする修行僧　ウ
　仮設テントは地獄極楽　雪
着飾って遊ぶ御苑の花万朶　こ
　紙風船で蹴鞠合戦　志
春ナオの旅オーダーメイドの鞄下げ　志
　七日余りの菜飯乾鱈　雪
九州の倭建は優男　肝
　タイムマシンにのせる恋文　雪
裏返す引っ掻き傷にあなかしこ　こ
　ほととぎす今靖国の杜　肝
相場師の近頃すこし焦り気味　志
　流転悠々極楽の果て　こ
シベリアの収容所跡月にじむ　肝
　香月泰男の秋の埋葬　ウ
色変えぬ松は移植に耐え抜きて　雪
　はかなきものは君の約束　〃
詰ナウ問もそ知らぬ顔の千の風　志
　グランドゴルフ打ち興じいて　實
このところ水かさ増さる信濃川　〃
　大観覧車家族賑わう　ウ
花びらを頭上に掲げ地蔵尊　志
　蝶も舞うかや古き街道　こ

平成十九年十月二十二日首尾

（於・人形町）

※黄金芋＝東京人形町銘菓

俳諧トロワ　『繊　月』

窪田阿空捌

繊　月

夜の明け切らぬ河岸の賑わい　　空
冴えざえと繊月の眉美しく　　苗
猪を仕留て戻る山道　　空

トリス

老い給う母の仕立てし秋袷　　苗
月にトリスを飲んで貧しく　　空
出稼ぎの一家支えている背中　　〃

結　婚

思い切り小石蹴飛ばす靴の先　　空
結婚しようなんて突然　　苗
まま事の小家に亭主ビール飲み　　空

刀　自

幼子の玩具取り合う力ずく　　空
おちょぼ口して笑う家刀自　　苗
葛桜古い暖簾の店に買う　　空

茶　髪

物一つ言ってはあとを慰める　　独吟
茶髪に染めた嫁の歯軋り
あら貴女ご主人任さんなのね

遊　び

茜の色に染まる家並　　独吟
通りゃんせ遊ぶ子供の声も消え
白髪となって落葉焚く祢宜

腕　組

三手詰め声張りあげる賭将棋　　独吟
腕組みしてる生直面な顔
コイン機に入れれば戻る五百円

平成二十年三月末日首尾
（後半・文音　於・俳諧工房）

連句十八韻　『かはほりの』

中尾青宵捌

かはほりや島唄いつか音霊に　小林節子
あの八月の中の五日の　中尾青宵
長櫃に黒米すこし残りゐて　城倉吉野
紬織る手の痩せる月白　鵜澤八千代
しばらくは開通の橋混み合へる　水野禾甫
スターマインで競ふ花火師　代
初とんぼ水流るるやに桧皮葺　節
桐壺にゐて病癒へざる　甫
警策に肩を差し出し想ひ断つ　代
狐に託す文の焼却　青
氷室までは復元ならぬ海図城　節
見に行こう青いシャツ着て　吉
カフェラッテ手にアクセルのひとふかし　代
ジャムセッションは楽譜要らざり　柚
夏の灯を涼しと高階帰るなり　吉
露台の鉢に遅き水遣る　節
四川の銀河衝突嘘ほんと　甫
mizukiらに賭く北京マラソン　青

平成十九年八月首尾

（於・柴庵）

歌仙『朝東風や』

松澤晴美捌

(起)朝東風や日をきらめかす群れ鴎　松澤晴美
(オ)大き未来を秘めし紅貝　後藤典雄
入園のいたずらっ子が神妙に　矢倉澄子
書庫に積まれし美術全集　中野稔子
月の宴中世の城うきたたせ　岸田芳雄
峡の流れに舞いちる黄葉　石井季康
(ウ)承やや寒の豆腐屋の湯気立ちのぼる　川上綾子
犬の散歩に出合うイケメン　綾
ブルガリのタイは私のこのみです　澄
肩寄せあいて哲学の道　晴
たまゆらの刻は静かに過ぎゆきて　稔
霊気漂う石室の中　典
見はるかす夏の霜おく丘陵に　綾
遠くこだますキャンパーの声　澄
海渡る聖火ランナーかまびすし　澄
部屋いっぱいにパン焼く香り　綾
上千本下千千本の花ごころ　澄
観音堂を拝す階　澄
(転)(オ)腕組んで血潮たぎらすメーデー歌　季
高速道を飛ばすパトカー　綾
天空は賢治のせかい星降れり　澄
琥珀の酒に潤む目差し　晴
好きですと赤いソファーに暖炉の炎　綾
お腹の嬰を包む掻巻　澄
流産の歎きを胸に無名塾　晴
ニコライ堂に祈るひととき　季
装いを変えてあしたへ託す夢　綾
世直し天狗逢坂に現れ　典
太陽の塔蘇る月今宵　〃　稔
眼裏深く翁敬う　〃　稔
(ナウ)結地芝居の役者顔見せ勢揃い　〃　芳
小雨の中を古都の逍遥　〃　芳
これからも前頭葉をいきいきと　〃　季
何運び来る初蝶の影　〃　季
陸奥の万朶の桜花満ちて　〃　稔
8ミリカメラ廻す惜春　〃　稔

平成二十年二月二十七日首
平成二十年三月二十六日尾
（於・江東区芭蕉記念館）

歌仙　『津軽じょんがら』

中野稔子捌

秋懐の津軽じょんがら聞く夜かな　起　中野稔子
(オ)しんしん潤む山の端の月　(オ)　後藤典雄
実むらさき亡びの美学果てもなし　松澤晴美
ＩＴ関連われはひと筋　川上綾子
枯蟷螂大見得きって眼前に　石井季康
すっくと立てる冬耕の人　矢倉澄子
(ウ)水お宝の溢れ出でたりなまこ蔵　岸田芳雄
国家財政ピンチ迎える　季　典雄
長き布旗に掲げて汐見台　典　晴美
目を金色に雄雄し益荒男　晴　典子
法螺の音の身内を燃やす江戸育ち　典　季康
浄土をなせる毛越寺の庭　季　綾子
夏の霜妖しきまでに迫りきて　綾　稔子
ひらり過りし蝙蝠の影　稔　綾子
見はるかす物にすべての智慧と慈悲　綾　季康
思いのたけを余すことなく　季　〃
花の雲毀誉褒貶を遠去かり　〃　典子
春の愁いを誘うカクテル　典　芳雄
(ナオ)転ふらここを漕いであしたへ夢つなぎ　芳雄
(ナオ)また再びのシャトル外交　〃
アメリカンドリーム今に大リーガー　晴美
讃美歌流る村の教会　季康
血の滾るナースチェンカの息白し　典子
雪しまく中かたき抱擁　吉田光子
振り向かぬひと滲みゆく涙愴愴　大和田隆蕉
じゃんけんぽんで子等の散らばる　澄子
語り部のときには素顔垣間みせ　綾子
苑に置石沈黙の形　光子
天心の月の雫を満身に　芳雄
猪まっしぐら株の暴落　綾子
(ナウ)結爽涼に伝来の軸掛け替えし　稔子
独りふふめる抹茶一服　晴美
段葛婚礼の列絢爛と　芳雄
野火の行方の定まらぬまま　澄子
立ち上る伏姫桜花万朶　晴美
歴史繙く青陽の縁　澄子

平成十九年十月二十四日首
平成十九年十一月二十八日尾
（於・江東区芭蕉記念館）

短歌行　『眉目よき月』

大野鵠士捌

柳ヶ瀬の眉目よき月も四丁目　大野鵠士
　酒の肴にまづは枝豆　大山功
資客を秋の狩場に案内して　箕浦琢翁
　大きな犬のたつたひと吠え　奥山節子
立（ウ）回り朱房の十手振り回す　清水貴久彦
　スポットライト常に主役に　松尾一歩
ぴかぴかの新車の脇に美女立たせ　堀部比呂美
　投資ファンドも今は落ち目と　彦
凍道に鴉のつつくごみ袋　功
　一人暮しのすでに三年　彦
身をやつし花見の宴に紛れ込み　節子
　慣れた坂道自転車で行く　士
幾年を経たらむ花の今盛り　歩
　違鷹羽幕のうらら　彦

佐保姫（ナオ）のリングのサイズ確かめむ　翁
　今宵限りと叩く大枚　功
血の匂ひする鴨川の向うより　彦
　騙されたままついて行きたい　節
骰子に命を預けケラセラ　翁
　薬捨てたる僧を蚊が食ふ　歩
何事も無きかのやうな夏の月　美
　ファラオの夢は永遠の生　功
教（ナウ）授にはなれずに終るそれでよし　士
　慣れた坂道自転車で行く　節
幾年を経たらむ花の今盛り　歩
　違鷹羽幕のうらら　彦

平成十九年十月六日首尾

（於・岐阜柳ヶ瀬羽酒）

歌仙『すだち大事』

大山　功捌

氏よりはすだち大事の土産かな　大野鵠士
　塗りの箸にてつまむ松茸　清水貴久彦
格子戸の桟くつきりと月影に　奥山節子
　町並保存募る妙案　各務恵紅
コンピュータ使ひこなせる定年後　士
　畑酒にして一合と決め　藤田真木子
遠火事に犬次々と吠へたてる　紅
　ひとごとならず黒き噂は　大山功
男にも賞味期限のありまする　大竹恵子
　整形手術受けてやらうか　功
小切手の振出人に記憶あり　彦
　自動開閉ドアの開け閉て　士
裏側のことに涼しき月の色　真
　テラスで眠るローマ教皇　彦
オードリー・ヘップバーンの映画好き　士
　観光バスに笑ひ弾ける　紅
届けたき人多くゐて花便り　恵
　多事も多端も立てる陽炎　功
野に山に飛び交ひ鳴ける百千鳥　翁
　覗き込みたる高き吊橋　彦
楽ニ死ヌ方法君ニ教ヘマス　士
　すでに知つてる蜜の苦さを　紅
本物の恋に憧れ歳重ね　恵
　息子のやうな男侍らせ　士
屋上の庭にゆれたる枯芒　歩
偽装・収賄・値上・解散　紅
マヨネーズぐつと絞つて顔へ飛び　士
勝手口から猫の窺ふ　節
鎌に似る月の刃に雲掛かる　翁
露にいつしか袖も重たげ　歩
ひねもすを海に沿ひゆく秋遍路　彦
笛吹いてゐる婦人警官　士
フェアレディーZの止まる交差点　節
ポップコーンを膝にこぼせる　士
原子力空母入り来る花の冷え　筆
命を讃へ生まれたる蠅　翁

（於・岐阜柳ヶ瀬羽酒）
平成十九年十一月　十日首
平成十九年十二月十五日尾

四季鳥虫つくし三十六韻　『雁行や』

西田舟人捌

雁行や茜の空を点々と　和田澄子
久しぶりだネ交尾みトンボよ　西田秀花
風そよぎ月しらじらと鉦叩　澄
明神池に鴨渡り来て　阿部愛子
ダンディの鶺鴒妹に口吻ける　西田舟人
箸で押さへし枕の百足　愛
翡翠(ウ)や描く絵の具の澄みに澄み　秀
時鳥啼く隠れ宿にも　〃
おのが火に焦がれ焦がれて恋蛍　澄
鶯替へ嫉妬をも渡しけり　愛
囀りや合コンのかの人思ひ　舟
危な危なに初蝶の飛び　秀
月おぼろ鳩に見られて投函す　愛
おしやべり遊ぶつばくろの子ら　澄
鶯鳶の男は見事おしやれして　舟
空中ふはり綿虫の行く　舟
落椿雀飛び立つ苔の上　秀
御陵の薮に冬蜂の巣が　愛
雨蛙(ナオ)かつらぎ山に雲を呼び　舟
お、蝉しぐれ朝のファイトを　秀
水すまし世に逆らひて流さるゝ　愛
怒涛のはるか海猫の行く　舟
雌鳥のまづ誘ひけり秋日和　澄
君待つカフェへ色鳥の来る　秀
虫すだき忍び音洩れて薄明かり　〃
秋蝶の恋今日のひとひに　愛
来世をともに丹頂の声　澄
雪の荒野に夢見て鳥帰る　舟
研ぎ澄ます冬満月やかいつぶり　秀
日溜まりのなか凍蝿の飛び　愛
ナウ(ベンガラ)の格子に止まる冬の虻　澄
狭庭を走る初音のかげ　〃
宮鳩も野鳩も交じる春の朝　秀
あゝ無情なり蚕糸吹き　舟
花筏乗りて行かまし蛙さん　澄
近つ飛鳥に揚雲雀鳴く　秀

（於・羽曳野連句会）

平成十九年九月十一日首
平成十九年十月十八日尾

註　形式「四季鳥虫つくし三十六韻」について
春秋の鳥虫を各十句づつ、夏冬の鳥虫を各八句づつ詠み、歌仙と同じく、花二句、月三句、恋二箇所を入れる。

非定型連句二十八韻　『花散らしの雨』

花散らしの雨に掻き抱く薩摩琵琶　加藤亀女捌

流れは絶えず游游の河　加藤亀　女

観覧車ひねもす街を見下ろして　淀川しゞみ

ビルの谷間をよそ行きの服　城倉吉　野

塗り鉢の空也の最中苔ひかる　森川淳　子

ふはり舞ひ込む紙のヒコーキ　渡辺　柚

棋士の手の震へるほどの決断に　水野禾　甫

けさのカップはジノリ、マイセン　小林節　子

久々のだるまストーブ取り出して　亀　女

雲湧く島は父母の里　しゞみ

上皇も生き肌いとしと焦がれたる　吉　野

後朝の歌熱く今なほ　淳　子

出国の人で陽気な関空港　禾　甫

車椅子にはぬくき膝掛け　柚

濃やまぶき裏山の風聴いてをり　節　子

晩年の曾良上手から来る　亀　女

おもしろうてやがてかなしき競輪場　しゞみ

フェロモン撥ねて太きふともも　吉　野

百億の胃を如何にせん水の星　淳　子

烏鵲橋とてスモッグのなか　禾　甫

カサノヴァに似たる輩が呼び止めて　柚

卒塔婆の彼にちょいとごめんよ　節　子

そこなのよそこそこマグネット　亀　女

お使ひ置いて木苺の藪　しゞみ

城址の噴井にありし物語　吉　野

光の龍は天を目指せる　淳　子

さかばやしまだ新しく今年酒　禾　甫

ゆらりと向きの変はる秋蝶　柚

平成十九年四月　九日首
平成十九年四月二十七日尾　（文音）

歌仙『飛鳥美人』

千年の飛鳥美人の五月かな　水野禾甫捌
　蒼穹めぐる星の涼しく　水野禾甫
床を背に囲む基盤も佳境にて　福島朱鷺
　濃いめの煎茶ちよつとひと息　鶏沢八千代
もの売りと街道渡るいぼむしり　鈴木圭子
　舟より菜切れ流す有明　城倉吉野
ゥ薄紅葉かはらけ投げる竹生島　加藤亀女
　恋のご利生願ふヤンキー　朱鷺
やつちや場の嫁は元気で子沢山　亀女
　ひねもす晴の予報あたりて　八千代
この海に新種の魚の棲むといふ　禾甫
　ネットカフェにはお決まりのかほ　吉野
スキー帽目深にかぶり独り月　〃
　丁石のごと雪の灯籠　圭子
書評欄国の品格問はれゐて　亀女
　どこへ消えたか年金の怪　小林節子
花に遊ぶ鳥の無心を小半時　黒住尚子
　干鱈戻して作る甘露煮　亀女
ナォ二度くぐる三解脱門万愚節　禾甫
　殯といふ字やつと書けたよ　亀女
招待の映画の後はスカイバー　尚子
　アダルトペアーは煉瓦色です　〃
耳奥に残る告白あまやかに　禾甫
　道をはづれて夏運河越ゆ　節子
炎熱の認証コード読み切れず　節子
　きよとんと屋根に風見鶏立つ　渡辺柚
ダンケ・シェーン留学の子の無事帰る　節子
　あんばいのよきおにぎりの味　亀女
満月の森は獣の気配して　柚
　道の普請を案山子見守る　節子
ナゥバザールに新綿積んで車着く　亀女
　痛みやはらぐ膝の関節　尚子
知足庵錆壁の土はらり落ち　柚
　春虹の弧を駆ける愛犬　節子
酔ふほどに妖しさを増すけふの花　禾甫
　細螺をしまふ縮緬の筐　亀女

平成十九年五月十六日首尾
（於・神奈川県民センター）

歌仙『鼻眼鏡』

黒田耕三捌

のどけしや古書肆主ジの鼻眼鏡　黒田耕三
　日永の客に赦す立読み　加藤朋子
芽柳を眺むる川に棹さして　矢野勝三
　犬の番する太き盤台　後藤波久
軽やかに口笛の人月天心　朋三
　亭主のこねる新蕎麦のよき　朋三
ウ再生の留守番電話や、寒く　耕三
　週末だけの逢瀬重ぬる　朋三
赤き唇その一言が命とり　耕三
　わざと遅れし最終列車　波久
あてもなくサウナに入り仮眠する　朋三
　和洋折衷バイキングなる　朋三
月涼し角を曲れば女坂　耕三
　見舞に提げる蛍籠なり　朋三
経済の舵取る総理策のなく　朋三
　音を上ぐ掘り手遺跡からつぼ　朋三
訪ねきし城下の花の酣に　耕三
来島瀬戸に滾つ春潮　波久
ナオ鴬の舌整ひし峡日和　波久
　白髪をほめる散髪屋なり　三
長寿者も後期も同じ高齢者　波久
　金比羅歌舞伎とみに賑ひ　朋三
木枯しに構ふ仁王のひねり腰　三
　楷の明かりにこくり〳〵と　耕三
知らぬ間に内緒話が漏れてゐて　朋三
　手に手をとりて恋の道行　三
チャンネルを回せばまさに濡場なる　耕三
　マドンナ閉ぢるからくり時計　波久
茶を点て、二服三服居待月　三
　白露をおく庭に降り立ち　朋三
ナウ地芝居に駆り出されたる陶狸　耕三
　転がり落つる緩き勾配　三
継ぎ目なき虚空吹抜けより仰ぐ　波久
　戦時体制語り部として　朋三
嬰鑿の白寿の肩に花吹雪　耕三
　風やはらかく蝶々の舞ふ　波久

平成十九年四月十九日首
平成十九年六月十六日尾

（於・松山市民会館）

歌仙『水匂ふ』

夕顔のほどけゆく刻水匂ふ　両吟

童女（わらわ）さし出す扇ほの白し　鈴木アヤ

見ぬひまに愛敬づきてらちもなし　内田さち子

ちよつと力んだ眉の遠山　ヤ

行合の空渡る月彩怪し　ち

文章（ふみ）の生ウ竦むやや寒　ヤ

若ウき歯が浅漬大根ハリハリと　ち

ジンをベースのカクテルが好き　ヤ

壁の影ゆらりもつれる路地の奥　ち

四世同堂煙立ち立つ　ヤ

映像の沙漠ほとほと広きこと　ち

食ふ寝る所どこにでもある　ヤ

リムジンの小廻り利かず寒の月　ち

伊達の薄着で嘘三つ四つ　ヤ

しくしくと脛（ネ）のどこやら痛みそめ　ち

白球それて芳草に落つ　ヤ

空を来し花一ひらの肩に添ひ　ち

鷲合せ日がな一日洛陽（ナオ）をおうと言はせて霾埃　ち

クウとも吠えぬ権門の狆　ヤ

訓練士無口なれども威のありて　ち

長嶋さんの笑顔ふたたび　ヤ

球場のライト消えたり一斉に　ち

木下闇濃しついひそめ声　ヤ

白抜きの模様涼しき浴衣欲し　ち

スキンヘッドの凄いイケメン　ヤ

花道の飛六方を俤に　ち

経済指標がたたら踏んでる　ヤ

月明し漢字検定発熱す　ち

老い諾（うべな）ひてすする鯏（はらご）　ヤ

師（ナウ）と弟子とあたため酒をほん少し　ち

金剛組は奈良時代より　ヤ

注連結ひて千年の柱据ゑらるる　ち

筆太々と記す願文　ヤ

散る花にうすく口開く伎楽面　ち

春愁といふこの甘きもの　ヤ

平成十九年七月十六日首
平成二十年一月十二日尾　（文音）

歌仙『立夏かな』

成田淑美捌

立夏かな棒高跳びの空展け　清
　七彩散らし昇る噴水　〃
開会を告ぐファンファーレ響かいて　冨
　記念に刻む手形足形　春
月を待つ茅葺き真屋の軒深く　昌
　乾ききったる鵙の早贄　淑
ウ腰痛を堪えて秋の遍路旅　輝
　硫黄臭さが脱けぬ湯上がり　冨
幻の銘酒を添えし祝い膳　清
　ハニカミ王子ぽっと頬染め　清
御簾内へ「苦しゆうない」と招き入れ　淑
　いろは紅葉は激流へ散る　冨
凍月の暴く天狗の隠れ岩　春
　お悔みメール遠きパリから　昌
オペラ座の舞台狭しと六方踏み　ゆ
　盗られし財布こんな処に　み
人生を花に重ねて綴る日々　淑
風より淡く野辺の春鹿　昌
ナオ煎餅を焼く香に満ちて麗らかに　清
　赤い襷に紺の前掛け　〃
還暦を迎える妻に惚れなおし　冨
　四十余年返してほしい　春
神杉に爪をたてたる蝉の殻　淑
　鉄橋渡る列車涼しく　輝
夕暮を奏でる古きオルゴール　昌
　谷中千駄木根津池之端　冨
漱石は洋行帰り猫が好き　清
　活字離れに眉をひそめる　淑
瓢箪のぶらりと下る糸瓜棚　冨
　ひとりで観るに惜しき望月　春
ナウやや寒の名残りの茶炉の灰白く　輝
　インターネットゲームピコピコ　清
絵タイルにさまざまな魚泳がせて　清
　降りてはすぐに溶ける淡雪　春
帯をなし海へと急ぐ花筏　ゆ
　呵々と大きく笑う山脈　み
平成十九年五月二十五日首　淑
平成十九年八月二十二日尾

（於・上野東京文化会館）

半歌仙　『河原鶸』

成田淑美捌

河原鶸翔つとき光ゲをときめかす　成田淑美
　雪解しずくの歌う軒先　羽田野由紀
遠足の児らは帽子をお揃いに　柿沼喜美子
　横断歩道旗をふりふり　津田由利
城跡の風に吹かれて仰ぐ月　田口清華
　紅葉焚く香の低く流るる　荒井智恵子
ウ長き夜の読書に瞼重くなり　紀
　源氏の君の生れて千年　山本としみ
ひそやかに石山寺へ舟仕立て　喜多紀
「好き」とメールで済ます現代　喜多利
汗の手で通帳開きにんまりと　喜多利
　梅雨雷のふいの一撃　喜多淑
献杯に忌明けの膳の箸をとり　喜多淑
　机の下でうずくまる犬　喜多智
短日の片側翳る月球儀　喜多清
　思い出色の古きアルバム　喜多清
花守に応えてゆさと花の揺れ　喜多淑
陽炎のたつ武蔵丘陵　喜多淑

平成二十年一月十五日首
平成二十年二月十三日尾
（於・富士見市西みずほ台コミュニティーセンター）

歌仙『臘梅に』

品川鈴子捌

震災の地に臘梅の盛りなる　　竹下昭子
　押しくら饅頭猿山の猿　　勝野薫
おもひきり高笑ひして温泉に　　水野範子
　間違ひ電話拍子ぬけして　　荒木治代
鎧戸の閉める手を止め望の月　　昭子
　村の芝居に爺の白塗り　　薫
修行僧朝餉にドリア・衣被ぎ　　範子
　船の旅にて屋久島の杉　　治代
小娘の鍛へ自慢の力こぶ　　昭子
　鏡の井戸に姿うつして　　薫
居酒屋もコンビニもない過疎の村　　範子
　約束の場所地図を頼りに　　治代
夏初月グランドキャニオンそそり立つ　　昭子
　蚊遣火消えて灰はうずまき　　薫
引率の後ろ歩きの保母の笛　　範子
　選挙スローガン格差なくすと　　昭子
つぶら目の犀の背中に花ふぶき　　治代
　千魚ならべ浜は麗らか　　範子
憧れはタカラジェンヌの春帽子　　治代
　飛鳥路たどる老の錫杖　　範子
豆を炊く天気予報は明日も雨　　薫
　時計の針がぴたり重なり　　昭子
生欠伸ばかり風邪とも疲れとも　　治代
　無精の髭にマスク大きめ　　範子
蔵の隅葛籠に古き和とじ本　　薫
　婿を探して叩くパソコン　　昭子
予期もせぬ遺産ころがる夢を見て　　範子
　ひとり暮しを覗く満月　　治代
土のつく問引き蕪をざぶざぶと　　昭子
　縞秋袷せ親子三代　　薫
露座仏の掌にのせらるるいほむしり　　範子
　新築マンション入居始まる　　治代
腰ふつてロボットダンスしなやかに　　昭子
　足るを知るてふことの虚しく　　薫
廃線の最後の汽笛花明り　　範子
　ライブの余韻春のスカーフ　　治代

平成二十年一月十七日首
平成二十年三月二十日尾
（於・神戸新聞文化センター）

歌仙『絵タイル』

中田寿子捌

絵タイルの道は画廊へ木の葉散る　昭
　青いベレーに革のジャンパー　蓉子
隠れん坊「もういいかい」と薄目して　寿
　からくり時計太鼓繰り出す　邦
早々と酒酌み乍ら居待月　喜
　ぬかご携へ遠来の友　美
鬼(ウ)やんま発掘のあと旋回し　昭
　つなぎあふ手のびくりびくりと　蓉
不器用な彼を信じて半世紀　寿
　首を傾げるビクターの犬　邦
うつかりと操作ボタンを間違へて　喜
　新幹線は発車みあはせ　美
浮御堂あまたの弥陀に月涼し　邦
　ブラックバスは哀れ洗膾に　昭
がらくたも財産のうち捨てられず　蓉
　袱紗捌きの稽古念入り　寿
花ごろも女系家族の連綿と　美
　薫煙草は春風に乗る　邦
車椅子(ナオ)みんなで囲み野に遊ぶ　昭
　アンデルセンの童話そらんじ　蓉
親切な駐在さんが停年に　寿
　漸く越える有為のおくやま　喜
馬の脚つとめ幾とせ近松忌　美
　三寒四温もぐさ商ふ　邦
神棚に忘れてありし当りくじ　蓉
　シャルウイダンス妻はうかれて　昭
接吻を鎖骨に受けてさりげなく　喜
　ぼけ予防にとはやる折紙　邦
知恵の輪もなつかしきもの月の縁　寿
　波の静かに流す灯篭　美
おどけ(ナウ)ものやがて悲しき案山子翁　昭
　保釈に億の金を納めて　蓉
歩く事日課と決めて買物へ　寿
　我慢のしこりほぐすむし風呂　喜
花ざかり最終便のアナウンス　美
　かぎに棹にと帰るかりがね　邦

平成十九年五月　十日首
平成十九年六月十五日尾

（於・毎日連句教室）

歌仙『芍薬』

品川鈴子捌

芍薬の客を待たずに散りにけり　須賀悦子
　猫肉球で撫づるでで虫　登美
欄間彫る千年杉に精こめて　公代
　留学生が人力車曳き　左耳子
天領の沃野隈なく月明り　美登
　粉白くふく鄙の干しいも　登美
ウ息の合ふ漫才に沸く文化祭　公左
　デイサービスで一目惚れされ　悦公
御神体おぼこ娘が撫でさすり　登左
　着せ替へ人形衣裳手作り　美登
隣から鰐のつそりと上がり込む　左公
　政界までもいじめ蔓延　公美
山襞の蕎麦刈りしあと月照らす　美登
　モンタン気取り枯葉かさりと　登公
洞窟を稀少ワインの貯蔵庫に　公左
　風戯れる森のゆりかご　左美
新駅にどつと降り込む花ふぶき　美公
老も若きも磯の口開　公美
ナオ校庭に囀みちる地震あと　美公
　いつのまにやら盗み聞きされ　公左
反則を嗾けられてつけあがり　左公
　父が遺せし株の暴落　公美
冬日和トロフィー並ぶ散髪屋　美登
　狐の提灯見え隠れして　悦悦
門前の手焼きせんべい歯のたたず　登登
　大安選び恋の道行　美美
ささやきにいやと言はせぬ口上手　悦悦
　連句最中に留守を頼まれ　左左
ジャワの月ゴムの樹液の溜りつつ　公公
　初秋刀魚とて脂よくのる　登登
ナウ万鬼祭の馬鹿騒ぎ避け別荘へ　美美
　谷から谷へ響くヨーデル　左左
掛軸はまる一筆のみづみづし　登登
　日向の地鶏取り寄せもして　美美
妖精の舵取りたくみ花筏　登登
　写真をつけて飛ばす風船　公公

平成十九年五月十六日首
平成十九年十二月十五日尾

（於・夙川公民館）

歌仙『紫苑盛り』

品川鈴子捌

沖島は紫苑盛りの径ばかり　泰
　末広上げし棟の月光　喜
焼判のせんべいの香に鹿寄りて　泰
　ゲームソフトに心奪はれ　喜
波乗りのウェットスーツよく似合ひ　泰
　薄暑の路地に叱る大声　喜
神水（ウ）を汲みてふるまふ句友にも　泰
　彼の気配で分る関心　喜
なれそめは合唱団のデュエットに　泰
　媚と雌で長寿支へて　喜
退官後ひとり占めする暇つぶし　泰
　伝言板に残る丸文字　喜
重慶のネオン明りに凍てし月　泰
　雪のゴルフは赤いボールで　喜
見真似にてゴリラもすなる綱渡り　泰
　謝罪会見強面のまま　喜
はや万朶六年生で植ゑし花　泰
　蜃気楼へとUターンして　喜
野遊び（ナオ）のつもり幼と庭仕事　泰
　訃報の電話言葉なく切る　喜
故里へ急ぐ道路は渋滞し　泰
　煽てに乗つて指輪買ふはめ　喜
こんなにも思はれてゐて良いのやら　泰
　うしろ姿は永遠に軍服　喜
脚気とは気付かぬ世にて皺だらけ　〃
　くやし紛れにビールがぶ飲み　泰
覗きみる厨つましき芭蕉庵　妙
　疎開の話なども懐かし　喜
満月のおもてを過ぎる勘斗雲　泰
　庭の蟋蟀いつか鎮まり　妙
ハロウィーン（ナウ）南瓜を彫りて四苦八苦　〃
　研究競う皮膚の培養　喜
新築のマンション遂に完成し　妙
　鴨発ちてより戻る静けさ　〃
花びらを浴びてほつこり露天風呂　喜
　古戦場とて笑ふ山々　泰

平成十九年十月二十六日首
平成十九年十二月二十九日尾
（於・柿衛連句教室）

歌仙『布袋の臍』

品川鈴子捌

ほととぎす布袋の臍を笑ひけり　野口喜久子
　蓮見の舟に水尾のひろごる　岡田禎子
連句の座まづは茶菓子に手がのびて　喜
　宝探しに子らの勘どり　禎
パスポートいまだ持たずに旅の月　喜
　窓を開ければ風の爽やか　禎
院（ウ）展の大作やつと完成す　喜
　思ひ募りて枕湿らせ　禎
マスターは好みのタイプ妻子あり　喜
　公然のキッス怒る神々　〃
夢でない見事に当たる一億円　禎
　路地の行商猫も待ちわび　喜
凍つる月荒野の天に貼りつきぬ　禎
　雪女より道を問はれし　喜
勇みたつ総理の采配如何ならむ　禎
　杯重ねても酔へぬシャンパン　喜
花の雲浮かれ浮かれて祇園へと　禎
仲良しこよしふらここを漕ぎ　喜
春眠の宇宙遊泳さながらに（ナオ）　藤田かもめ
　不意のサイレン走るパトカー　喜
はからずも受賞内定知らされて　か
　南無阿弥陀他力本願　喜
小糠雨賀名生の渚鮎を釣る　か
　夏座敷には何も飾らず　喜
ジーンズの超ミニパンツ脚線美　か
　幸せブーケ受けるのは誰れ　喜
薬膳の虜となりし偕老は　か
　気前よすぎていつも文無し　喜
ぶらり来てひと夜を過す月の宿　か
　遠き船笛オリーブを挽ぐ　〃
これ雀焼き蛤に化けてこい（ナウ）　喜
　米一石で百の太巻　か
長寿蔵ことば遊びの落語聞き　中山せつ
　入れ歯がくがく困るカラオケ　喜
花びらの幌に吹き込む乳母車　か
　蚕棚の並ぶ父の故郷　禎

平成十九年五月二十七日首
平成十九年六月二十二日尾

（於・柿衛連句教室）

歌仙『母の日』

品川鈴子捌

母の日にはじめて参加連句会　朱宮明美
　やさしく清き大和撫子　佐田昭子
あれこれと鈴の整理のきりもなし　神田のぶ
　アナウンサーの引き抜かれても　中田芳子
野も山も月の光に蘇る　岡田章子
　無骨なかぼちや納屋に置き去り　の
おもちや箱ひつくり返すへこき虫（ウ）　昭
　メールの絵文字にこにこの愛　美
丸ビルに人目かまはずディープキス　章
　靴磨くとも心変はらず　芳
優しさが少し重たい運命線（にい）　昭
　向かう鉢巻魚河岸の兄　の
月冴ゆる法九条のポスターに　芳
　地酒の熱燗泪ぐみつつ　子
禅寺のヨガ教室は賑はひて　の
　風に乗りくる般若波羅蜜多　美
みどり児の四肢いそがしき花吹雪　章
　殿様蛙でんと構へる　の
うかうかと傘寿を迎ふうららかさ（ナオ）　佐竹千寿子
　着易くなりし手織りの紬　三輪慶子
バーチャルなネットサーフィン夜明けまで　美
　飛ばしてみたい人工衛星　章
猛暑日を空調かけて閉ぢこもり　芳
　居ながらにして花火見物　慶
亭主留守合鍵もちてイケメンが　芳
　天上天下唯我独尊　千
砂漠には二人の長き影法師　芳
　寝たきり防ぐ水中歩行　慶
汐留の月皓々と照りわたり　美
　厨にすだくこほろぎの声　芳
いつせい（ナウ）にお辞儀をされて赤い羽根　の
　セーラー服のリボンひらひら　北畠明子
特注の椅子の坐りの心地よく　の
　世界旅行へ出航のドラ　明
西行の庵を囲む花の雲　の
　小鳥の卵遠く見守る　慶

平成十九年五月十三日首
平成十九年十月十四日尾

（於・東京ぐろっけ）

十二調　『日本海』

品川鈴子捌

日本海まで仰向けに雛流る　品川鈴子
革のヒールにじやれる猫の子　谷泰子
長身の思はずかがむ鴨居にて　河村泰子
「かぐや」が写すあばた月面　岡本幸枝
どこからか焼松茸の香のよぎる　木村美猫
連想あそびやみつきとなり　森田蓉子
抜け穴は修道院へ続くとか　長谷川鮎
昭和も遠し貨車は百輌　竹下昭子
返り花おどろおどろし珍妃の井　吉田光子
耳をいぢらす膝枕して　鈴
紛れ込む蝙蝠玻璃に八つ当り　鮎
官邸暮しまんざらでなし　蓉

平成十九年十一月十日首尾

（於・産経学園梅田）

歌仙『青棗』

松本昌子捌

青棗(あをなつめ)齧(かじ)りゐし子の末知らず　松本昌子
　友みな優し風の澄む町　鈴木漠
につこりと月が顔出す山の端に　服部恵美子
　猫の眼過る林泉(しま)の暗がり　宮崎鬼持
後継者得たる庭師の矍鑠(くわくしやく)と　漠
　銃身磨く狩人の宿　昌子
炉(ウ)語りに翌檜(あすなろ)を雪しづる音　鬼持
　忘れねばこそ言葉響かふ　恵美子
遊び女(め)の恋は意気地が達引(たてひき)か　鬼持
　水掛け不動願掛けをして　漠
ゆくりなく未来へ残す落し文　昌子
　月も涼しく曾孫(ひまご)賜る　鬼持
創業は百年前の暖簾とか　恵美子
　レトロ調なるワインポスター　漠
喇叭節なほ耳にありモボなりし　昌子
　村で名うての凧の作り手　鬼持
三日見ぬ間に変りたり花の世も　恵美子
　命限りと芽ぷくひこばえ　漠
童心に返る回転木馬にて(ナオ)　昌子
　ホームレス起き朝の星消ゆ　鬼持
誰しもが空想で有つ(も)秘密の壕　漠
　あちらこちらで光る蜘蛛の囲(ゐ)　昌子
明易のニュースジュエラー襲はると　鬼持
　パントマイムの面(おもて)白塗り　恵美子
流刑さる絵島生島愛の果て　昌子
　相対死(あひたいじに)で噂もちきり　漠
Tシャツを着たる馴染みの驚(おどろ)かし　恵美子
　つと瓜坊と擦れ違ふ背戸　鬼持
虧(か)くることなく大いなり月の円　漠
　晴耕雨読盆石を賞(め)で　昌子
晩酌(ナウ)に燗酒二合嗜まれ　鬼持
　海鼠腸(このわた)つまみ胃の腑なだめる　恵美子
反骨の精神いまだ衰へず　昌子
　ひばりの主張いとも誇りか　漠
花衣薫(た)かれし香(かう)の芳しく　恵美子
　別れ霜踏みゆるり参らん　鬼持

平成十九年十月十日首
平成十九年十月三十一日尾（文音）

歌仙『翼張る鷹』

田口明子捌

翼張る鷹に蒼天かぎりなし　　田口明子
　起伏静かに眠る山並　　小林静司
定刻に重役の顔とととのいて　　宮原うた子
　世界の石油未来計画　　大庭初江
月光は湖の深きに沈み行く　　長田友子
　風さわさわと和せる虫の音　　鈴木玲子
ッしごき採る数珠玉片手いっぱいに　　高木千代子
　プレゼントする胸の高鳴り　　明司
砂漠往く王子と姫を夢に描き　　司
　謎解き明かせ朽ちし楼蘭　　たた
人の世のすべては神の御心に　　玲
　縁大事に涼み浄瑠璃　　友
短夜を弓張月に軒忍　　江
　高校球児の強化合宿　　代
焦げ付きを谷川の瀬に鍋洗う　　代
　親より享けし杣のなりわい　　江
五日ほど遅き初花ひそやかに　　友
　リュックに靡く麗らバンダナ（ナォ）　　玲
地図片手パリ郊外に胡蝶舞い　　た
　口ずさむるは好きなシャンソン　　江
轆轤から大きな壷が立ち上る　　友
　年金頼る余生質素に　　玲
足音の聞き分けられる程の仲　　た
　想いを込めた熱燗の酌　　明
湯の街の川沿いとくに雪しまく　　司
　又三郎が揺らす竹林　　司
絵手紙に干支の鼠を孫が描き　　代
　サイフォン仕立淹れる珈琲　　代
シンボルのタワーを照らす眞夜の月　　江
「柿羊かん」と老舗看板　　友
秋（ナウ）遍路結願の歩の軽やかに　　玲
　一句しるして添える短冊　　た
白寿にて明治の気骨見せ賜う　　江
　古き学び舎春日燦々　　友
鬼女面外せしシテに花明り　　司
　襲名祝い鯛の浜焼　　明

執筆　玲

平成十九年十二月　十日首
平成十九年十二月二十八日尾　（文音）

歌仙『今朝の秋』

今朝の秋富士ほっそりと立ちにけり　宮原うた子捌

湖面に淡く写る月影　小林静司

風炉名残り師匠の点前戴きて　長田友子

米寿の祖母の今だ矍鑠　大庭初江

繕けばインクの匂う新刊書　鈴木玲子

気質違いは仔亀にもあり　高木千代子

ウパリー祭似顔絵画家に顔預け　田口明子

ムーランルージュ売れっこのママ　宮原うた子

寵愛の人財界の御曹司　小林静司

教え親しく乗馬並足　長田友子

草原の涯になだらか地平線　大庭初江

時折流る風の口笛　鈴木玲子

着ぶくれて丸い心で月仰ぐ　高木千代子

十夜念仏満ち足りし帰路　田口明子

大正もまして明治の人減りて　宮原うた子

遺産の株も電子化の世に　小林静司

花便り画像添付のメール受く　長田友子

茅葺き屋根を春の雁鳴く　大庭初江

ナオ胡沙の来てうっすら白き古箪笥　鈴木玲子

仕舞忘れし貯金通帳　高木千代子

仲良しの元悪童は今文士　田口明子

ひたすら語り情を深めて　宮原うた子

つるつるの肌は源泉掛流し　小林静司

喉ごしよくて利きし冷酒　長田友子

草の庵入口蛇の横たえり　大庭初江

遥かとなりし清盛のこと　鈴木玲子

都路のひとつひとつにロマン知る　高木千代子

頭たたいて鶏頭の種　田口明子

月に練る飽くなき技術羅針盤　宮原うた子

ふんぞり返る蟷螂の斧　小林静司

ナウ袖の下欲しがりません勝つまでは　長田友子

どうして造る県の空港　大庭初江

篆刻を道楽として農夫たり　鈴木玲子

雪解雫のリズム軽ろやか　高木千代子

根接ぎして万朶の花の命又　田口明子

未来の都市へ飛ばす風船　宮原うた子

平成十九年八月　三日首
平成十九年八月三十日尾　（文音）

歌仙『沖の船』

高階和音捌

田寺　舞
高階和音　音
池永英沙　沙
藤井木良　良

喞や一点となる沖の船　舞
眩しさ増せる鯛網の頃　音
撥ね踊る銀鱗見れば麗らかに　沙
句帳代りに首にカメラを　良
筆料紙選みてゐたる月の客　舞
穂芒たはむ岩端の風　音
栗色のうながみ撫でて馬市へ　沙
番頭連れし長者らしきも　舞
主様と補陀落浄土拝みたく　良
手を取り合ふて辿る山道　音
夕暮れて九龍あたり街灯　沙
少年励むカンフーの路地　舞
熱々を吹き冷しをる中華粥　良
籐椅子にかけ弥撒の鐘きく　音
タブローは赤が主調の夏の月　舞
藍色の思案ならば広重　沙
花の旅五十三次巡りしが　良
桑名の海にかひやぐら立つ　舞
春疾風潮干の貝ら光らせて　沙
ナツメロ好きの歌ふ鼻唄　良
甲板を転げてボースン骨折の砂目　音
祖父の残せし杖を力に　舞
今風のスノーボードで橇遊び　良
掻い暮れどきのもしか狐火　沙
密猟の毛並ざらつく山窩の家　舞
忍びあふ日に酌みかはす酒　音
思ふことうふふとおもふ二人かな　沙
甘納豆に目鼻つけしよ　良
眉上げて月を仰げば雲に入る　舞
角落されし飛火野の鹿　音
庭先の枯草に露はしとどに　沙
探題をする下見かたがた　舞
幼児の立て看板に気をとられ　良
器量自慢のをりし煙草屋　音
当地には仙桜なる花の笑　舞
ふらここ漕いで空の果てまで　沙

平成十九年四月一日首
平成十九年四月十四日尾（文音）

二十韻　『海峡の』

藤井木良捌

海峡の真中へ釣瓶落しかな　石
秋日追ひかけぶらり船旅　舞
紅葉狩お国訛りを耳にして　人
赤提灯へ幼馴染と　良
春月に戊辰を偲ぶ鶴が城　石
東風に剣舞の美少年達　舞
恋猫のひげの話がきつかけで　人
無理を承知で逢瀬重ねる　良
アステカの神へ祈る膝影深め　舞
恐山にて口寄せの声　石
ナオ白い雲パラグライダーの二つ三つ　人
わさびの花が似合ふくらがり　良
鳴きながら近づく鹿と眼を合はす　舞
角隠しゆれ婚儀さやかに　石
宵闇の髪に触れゐて時過ぎぬ　人
釣果の何も無きが口惜し　良
宝籤当りウィーンへ春の夢　石
セーヌ越え行く引き鶴の列　舞
花屑が集まり川面化粧濃く　人
足向くまゝに陽炎のはて　良

平成十九年十月十六日首
平成十九年十一月十八日尾（文音）

胡蝶『かわたれの』

かわたれの牡丹息をゆるめたり　狩野康子捌
　薄化粧などしたき梅雨空　狩野康子
リズムとるチアリーダーの涼やかに　熊坂昌子
　模様のように席の埋まる　垂石よう子
満月へ触れんばかりに重機据え　秋田てる子
　避けて曲がって伸びる自然薯　谷田部弓子
ナカほんとうは人間嫌い銀やんま　昌子
　僕の彼女はグラビアに笑む　松ノ井洋子
受精卵あたためることなくて老い　弓子
　宇宙空間謎に包まれ　康子
寒林を抜け行列の最後尾　てる子
　湯の滾りたる暮の炊き出し　よ子
痩身の似顔絵描きの見当たらず　弓子
　ファンドが狙うやわな商売　洋子
襲名に仙台平の袴着け　弓子
　思いもよらぬ麻疹患う　昌子
高層の四角四面を洗う月　洋子
とうとうたらりと新走酌め　弓子
ウ品格が備わり鹿の角切りに　て
　南を向いた創始者の像　昌子
波間には移民のやや傾ぎ　よ
　かっぱえびせん鴎引き連れ　康子
飛花落花シャーマンめいてきたる母　洋子
　三味線草も七草のうち　弓子

平成十九年八月七日首尾
（於・北仙台コミュニティセンター）

ダブルソネット　『時間差の影』

冬籠り箔置くように追伸　狩野康子捌

山気極まり雪となるらん　狩野康子

タンバリン子らは五体を弾ませて　山田史子

影のひとつに時間差のあり　高橋玻斗子

満月を見しようと開ける旅鞄　佐藤千枝子

樫の実転げ蹲に波　佐々木嘉宇

モナリザのくくと笑うを鋲で止め　史

診療所にはうら若き医師　枝

恋なるや霞かかりしわが想い　宇

初蝶舞ってもろき純潔　玻

限定のバイオ燃料売出し中　康

旧町名の消えし街並　枝

花田植神馬の鈴の鳴り響き　宇

炎帝へ美酒捧げ奉りし　史

二連

外つ国へ二人羽織の妙技持ち　枝

イラクの鳥はどこへ飛びゆく　康

喪の仕度くちを閉ざした白桔梗　〃

案山子を見てもつい涙ぐむ　宇

老野鍛冶硬き槌胼胝誇りにて　玻

しりふり曲がる市電愛らし　史

器量良き幽霊通る青簾　枝

匂い袋をほのと香らせ　宇

妬かされて妬かせて夫婦は円満に　玻

潤目鰯に月の玲瓏　史

雑炊の湯気雲版の大厨　〃

絆の弟のぞく物陰　宇

花筏渦に逆らい渦に落つ　玻

日和見主義がメーデーの列　枝

平成十九年六月四日首尾

（於・エルパーク仙台）

歌仙『鯉幟』

山里や沢渡りたる鯉幟　和田忠勝捌

茄子に胡瓜と苗売りの声　森脇甘蘭

籐寝椅子ふと目を覚ます翁いて　大久保風子

頃合いをみて季節お干菓子　竹崎梨野

月の茶事茶杓の銘の面影に　岡村糸子

いつか来た道すすき野の風　和田ひろ子

ウ爽やかにエステサロンのリニューアル　鈴木山波

サッカーくじに出来る行列　伊東あさぢ

夢ばかり追いかける彼忘れ得ず　岡村耿

想いは千々に他人の女房　宮澤うか

波ついて湾を出てゆく大帆船　平良木遊虹

地球の丸さ実感として　大城里水

シドニーの師走の月を背負うサン　和田忠勝

雪化粧した塔の煙突　風

千羽鶴ひたすら平癒祈りつつ　蘭

到来物のワイン片付け　糸

花満ちし集落夢の如くにて　野

新入学児ピカピカの朝　波

ほこらしく緑の羽を胸元に　ろ

ナオ議員バッジは麻薬妙薬

この歳で空中遊泳試したし

十国見える山寺の坊

時鳥聞けば未練の髣髴と

ポワゾンの香に狂う短夜

未来より今が大事の二人ゆえ

売りそこなった株の暴落

耳立てて餌を待つ犬の腹時計

勾玉模様しゃれたバンダナ

有明に見つけた毬を指で突き

満天星紅葉参道で描き

ナウ秋扇要の少し黒きこと

天下り先辞退退身に入む

嘲嘘と風鳴る丘に独り立ち

鰊来たりて浜は銀色

散りて尚掃き寄せられて花は花

鬼籍の友の笑顔あたたか　執筆

平成十九年五月一日首
平成十九年七月六日尾　（文音）

歌仙『月の舟』

和田忠勝捌

月の舟ネオンの海を独り旅　和田忠勝
新酒入荷と張り紙の店　大久保風子
秋の末陶器作りに凝りだして　岡村糸子
極めて嬉し深い紫　竹崎梨野
晩学の母のフルート他と和せり　鈴木山波
ペーチカ燃えて子等は眠りに　岡村耿
未明より降り出す雪に山は荒れ　和田ひろ子
跳び出す猿に急停車する　宮澤うか
口紅を背広の衿につけられて　森脇甘蘭
優しい男ただの軟弱　伊東あさぢ
割れ鍋の蓋といわれて五十年　大城里水
選挙公約投げてすり寄り　平良木遊虹
月の下卵を托すほととぎす　風
自生の百合の香る谷間　勝
故郷を思う心のバルザック　野
独りゆるりと淹れる珈琲　糸
熱戦のテニスコートに花吹雪　耿
荏柄に集う針供養の日　波

石臼で粉挽く老いに春の蠅　か
恋に憑かれし娘渚に　ろ
道ならぬ愛の行方の曲がり角　ぢ
新演出にオペラ大うけ　蘭
ユーロ高日本語聞けぬパリの街　虹
河を下れば風頬をなで　水
鼻欠けの地蔵に摘みし草供え　勝
ニシン御殿の門も豆撒き　風
底冷えの取調室張りつめて　糸
次官溺れる接待の業　野
月明かりたどりて友の家　波
べい独楽まわし昔懐かし　耿
大瘤を抱きて欅の紅葉なる　ろ
子連れ再婚笑顔倍旧　か
赤ちゃんの象と遊べる飼育員　蘭
なくて七癖好む摘み草　ぢ
蒼穹を背に夢多色の花たわわ　水
佐保姫ゆけば光優しく　虹

平成十九年十月二十三日首
平成十九年十二月二十七日尾　（文音）

歌仙『もの枯れても』

井上弥生捌

もの枯れても自が詩魂は枯らすまじ　井上　弥生
馥郁として庭の寒梅　戒能　多喜
相寄りて迎えてくれし嬉しさに　中野　かずえ
甘党も居り辛党もおり　松永　由紀
月祀る準備漸く調いて　吉金　白水
いずこともなく聞ゆ虫の音　松永　勝政
ウカーナビをたよりてめぐる秋遍路　永井　政子
太平洋をのぞむ岬鼻　多
ねえーあなた世界遺産も夢でない　白
幼馴染みは今もちゃんづけ　由
コンサート前売券は完売し　政
夏の街路で口笛を吹く　勝
破れたる金魚掬いの網に月　多
薬害訴訟やっと解決　か
国会はねじれたままで会期終え　弥
平和を願う石手寺の鐘　多
はらはらと連句碑染める花の塵　政
夢を託して漕げるふらここ　由
打ち揃いあづま踊の旅とせん（ナオ）　弥
心ひかれるゆきずりの女　井上而道
惚れ抜いて早や五十年共白髪　弥
傾しぎしままの角の道標　白
奥飛騨に雪かきわけて熊を追い　多
けんちん汁を囲む団欒　雨
血糖値コレステロール異状なく　勝
電子マネーで買物をする　政
着メロの「ずんどこ節」がお気に入り　か
素人芸がいつか本業　多
堂々と名月に浮く一路にて　白
糸瓜の水を取るとしようか　雨
ゆく秋（ナウ）を惜しみつひとり庭に佇ち　〃
酒に溺れて捨てし古里　弥
産土神の柿落しの大歌舞伎　勝
ここころ長閑に登る階　弥
おそ咲きの花の綻び愛うしく　白
水陽炎のゆるる池の面　政
か

平成二十年一月十九日首
平成二十年二月二日尾

（於・井上弥生宅）

《東京・「窓」連句会》

歌仙『年深し』

日々の過ぎゆく速さ年深し　白濱節子捌
　ふいては掬ふ葛湯一さじ　杉浦喜久代
珊瑚色山はたゞ〳〵陽を浴びて　菅野陽子
　ねぐらをめざし鳥は群れ行く　深井玲
名月に供へ物ある野天風呂　野口敏子
　松手入とて顔馴染みなり　白濱節子
闇（ウ）の先鞍馬火祭天に爆ぜ　倉橋澄子
　肩抱きしこと遠く茫々　代
生きるとは忘れることよ恋去りて　鈴木アヤ
　飼主に似ておひと好しなり　玲
髭男あいつはすこし知りすぎた　ヤ
　チャンネル回すドーハ・ロンドン　代
オールの手やすめて仰ぐ月涼し　ヤ
　ビールに限ると飲みつぷりよく　陽
観覧車半分だけが見える窓　恵
　隣は誰ぞマンション暮し　代
舞ひ込みし花ひとひらの匂ひけり　ヤ
　甘茶に濡れる御仏の貌　則
岩隠（ナオ）れ呼びかはす声磯菜摘　ヤ
　帰りのバスは一時間あと　内田さち子
不機嫌な夫にそそくさ夕支度　陽
　放牧の馬思ひおもひに　代
スクラムのラガー激しく湯気を立て　高月三世子
　ダルマストーブ囲む団欒　陽
知らぬ間に従兄の横に坐る癖　ち
　戦に征きし君は若くて　代
距りはかへずたがひに年を経し　澄
　高速道路ルビー連ねて　世
雑踏の街静まりて明けの月　陽
　寄せ植ゑの根に紫苑あしらひ　敏
まち（ナウ）わびし松茸とどく宅急便　節
　謡の稽古今日も終らず　ち
この頃は書写を日課に過ごすとか　澄
　願ひかなつてコーラスの指揮　代
楊貴妃と名づけられたる花の艶　世
　はるか彼方にかゝる初虹　節

平成十八年十二月九日首
平成十九年　三月十日尾
（於・東京女子大同窓会館）

歌仙『蝉氷』

蝉氷割る程もなく消えし径　　鎌田耕仁捌
　寒さ忘れてはしゃぐ子供等　　広谷青石
久々に連衆つどい嬉しさに　　今井水映
　出で湯の宿の古き蹲居　　鎌田耕仁
新しきビルの谷間に月昇る　　石
　番傘たたく銀杏の音　　仁
金柑(ウ)に文添えてあり老いし友　　河野素人
「光源氏」は千年の夢　　石
寂聴の現代語訳に蘇る　　映
　閑けさの中キラリ点滴　　〃
病院を襲う非常のアルカイダ　　石
　ルーブルが呼ぶ文楽の芸　　人
砂漠は夕陽にまかせ夏の月　　人
　涼風一過潮の香をのせ　　石
サブプライム世界経済を冷え込ます　　仁
　北京の五輪後二〇〇八日　　映
長江に届けてやりたし花筏　　映
　同文の国春また会える　　石
鰊(ナオ)二男一女三寒四温恙なし　　仁
　愛しき孫さま元気溌溂　　映
弁当のレシピ色々取揃え　　仁
　金比羅芝居人気絶頂　　映
辞書繰れば日脚の伸びる古畳　　石
　爺着ぶくれて三毛のお相手　　人
おデートは映画館でとメール来る　　〃
　小屋の片隅「チャタレーの恋」　　石
ギリシャから無事に届くか女神の火　　人
　小浜塗箸オバマ氏アピール　　映
草深き西行庵は月に濡れ　　人
　墓掃く先に萩の一群　　仁
砧(ナウ)打つ昔の音を聞きたくて　　映
　三峡ダムに消えし猿声　　石
年ごとに戦(とも)友の消息減る許り　　映
　兎にも角にも今が大切　　仁
人ごみに揉まれて花の宵　　映
　春燈仄かに産土の神　　執筆

平成二十年一月二十二日首
平成二十年三月二十九日尾
（於・丸亀市望城書屋）

《三重・三重県連句協会》

三島大社千句奉納俳諧之連歌

百韻『時雨忌』

初折　西田　青沙捌
二の折　瀬野　喜代捌
三の折　田島　竹四捌
四の折　山村としお捌
松濤軒五世　小林　静司宗匠加朱

時雨忌の献詠をもて修しけり　大智院　岡本耕史
師恩尊み集ふ小春日　泗楽　西田青沙
敷き直す松葉清しき香の立ちて　伊藤千秋
武門の誉れ高き町柄　松平菩提子
路地へ来る時を違へぬ豆腐売り　水谷草央
萎えた法被でねぢり鉢巻　大智院　伊藤文夫
倹約の家訓鴨居に厳めしく　福井栄一
土蔵の鏝絵浮かぶ月影　小田中柑子
ウ定年の夫はだんまり温め酒　小原みどり
初めて生りし秋茄子は美味　白魚　蛭川晶代
念願の田舎暮らしもやや慣れて　泗楽　岡田重義
狭き世間は噂好きなり　千秋
珈琲をネイル・アートの娘が淹れる　草央
男ごころをそそる胸元　重義
相談はほかの意中のひとのこと　青沙
何か笑へぬへまな寅さん　千秋
甚平に着替へくつろぐ膳の前　栄一
月あそばせて夜濯の川　みどり
迷ひ出し飼犬いまは何処へやら　柑子
霞ヶ関にほくそ笑む奴　白魚　市川雄二
風さそふ花は無心に咲き揃ひ　青沙
遠き鶯うつつなに聴く　晶代
二オ歩かう会歴史辿つて旧街道　鈴峰　北川英昭
潮の香寄せる青き海原　滝川史
株下落続く円安果てもなく　平田喜久
埃静かに溜まる額裏　新美千代子
増血剤効いて体調軽くなり　大泉美千代
箱舟で買ふ琉金競り　橋本倫子
元ミスが校長となる若葉風　山中悦子
火襷かけた寸胴の壺　喜久
三味線の撥もどかしき音を立てて　英昭
米中睨み決める不自由　倫子
北斎は富岳百景描き尽くし　美千代
労をねぎらひ酌み交はす酒　風蘭　増田みさを
嫁ぎゆく娘の言葉月昇る　岡田陽邨
葛の葉裏に募る恋風　阪君江
二ウ狭牡鹿の径通ひしか五つ衣　〃
老舗の苦労今も昔も　牧野濤女

増税が拍車を掛ける物価高　陽邨
直売をする町の朝市　安濃津
ミシュランに認められたる料理長　湯浅重好
祝ひのメール届く嬉しさ　三澤かずみ
まだ若し柔軟体操軽やかに　〃
鎮守の峰に続く石段　重好
初冬の月に冷え込む宵の風　瀬野喜代城
友に誘はれ雪の茶会に　中田泰左
煤けたる屏風に薄き抜け雀　後藤秋千
離れ住む子は恙なきかと　〃
花便り花前線に遅速あり　後藤彰子
入社記念の写真頬笑み　喜代
オ「オンリー・ユー」窓に重なる影おぼろ　泰左
彼の吐息の熱さ感じて　高山孝子
夫への叱責に揺るるイヤリング　岡田美代子
機密漏洩仲間内からつら　山口圭子
釈迦如来垂らし給ふた蜘蛛の糸　榊原由美
新樹の香り浴びるマラソン　山岸れい子
時鳥一声聞きぬ里の駅　中北ひろみ
深き谷間に仰ぐ天空　山口龍一
湯の煙湯本を守る大女将　藤岡よし子
バイリンガルで案内をする　小西澄子
今日もまた好きなメロディー口遊み　西村幸子
抹茶好きとて既に三杯　渡邊紘男
望月は入り江に黄波撒きちらし　さくら
展示会の黄菊しだれる　山根於京
三ウ碁敵と語る秋の夜肌寒く　中世古正郎
姿勢崩さぬ兵たりし父　増田喬子
つぎつぎと飛び立つ気球山越えて　野口良夫
見合ひ話に夢もふくらむ　田島もり
気に食はぬ八重歯にいつか惚れこんで　出口一点
書き換へられた家系図の謎　西岡美代女
青信号スクランブルの交差点　廣波青
ポリスボックス警官は留守　木村ふう
寒灸の勧めに迷ひ月に問ふ　黒沼葵邱
舌も身体も肥える飽食　田島竹四
真つ白な真珠取り出す阿古屋貝　吉藤一郎
道楽をして今を楽しむ　圭子
舞ひ扇開けばさつと花ふぶき　正郎
ひろき牧場に仔馬いなくて　よし子
名オのつぽビル彼方に霞む中に見え　竹四
のれんの技に出来る行列　由美
主治医からメタボリックと告げられて　伊賀
つり銭入れるユニセフの箱　山村としお
園児らが飼ふ雄鳥の声高く　奥田雅生
コマ撮りのごと開く朝顔　杉本従子
　町野とし子
　川本政子
　恒岡弘二

帰省子に父の寝巻は膝半ば
ハンドボールでレギュラーになる
エレベーターまたも出会つて恋心
鏡に向かふときの嬉しさ
蛍火は闇の彼方に落ちて行き
戦後生まれの知らぬ赤紙
カストリで武運祈つた夜の月
雁来紅の葉もたわわなる
名ウ桃吹きの畑抜ける道駆け抜けて
地元選手に送る声援
生活も横文字ばかり不便にて
パソコン操作頼む助つ人
世の流れ代はる米露の大統領
遷宮近きお木曳きの川
俳諧の栄ゆる花のめでたさに
大志いだきて巣立つ学舎

片山妙子
中森恵子
村田圭子
峠美晴
田中とし子
福森豊子
梅田徹
余野共子
小澤みゆき
森田満枝
山村勝子
美晴
妙子
満枝
としお
青沙

平成十九年十二月首
平成二十年三月七日尾

（文音）

歌仙『柿若葉』

柿若葉風をはらみて身揺るぎす　堀江水城捌
一家総出で始まる田植　大山とし子
久々に友の絵手紙届きいて　安島茨穂
紅茶はいつも手捻りのマグ　小岩菖蒲
山の端にかかりし月のまどかなる　上条洲紅
籠いっぱいにこすもすの花　筒井香と
名ウ湯の女将に似合う秋袷　水城
婿の選びに国境を越え　菖蒲
ミサで会う長身のかれにうっとりと　茨
アイラブユーと臆面もなく　洲
白髪になって執心燃えさかり　香
孫に囲まれ浮かぬこのごろ　菖
終電車発ちて頭上に冬の月　水
自販機で買う熱燗の酒　と
悔しきはすっぽ抜けたるあの一投　香
テーマソングは天城越えとか　洲
花の雲ふもとの水車静かなり　水
鳶の笛が長閑に聞こゆ　と
手作りの心尽くしの蓬餅ナオ　香
半分枯れた神木如何　洲
水かけし焼けぼっくいに火がついて　水
ついて行きます僧立つ町の辻　と
托鉢の若き僧立つ町の辻　菖
二階の軒に燕の巣あり　水
休日は身ほとりに置く知恵子抄　と
筑波の嶺に浮雲ひとつ　洲
パソコンはいつになったら打てるやら　茨
まだまだ続く年金問題　菖
望の月我が行く道を照らしをり　香
金木犀の香り沈もる　と
晩ナウ餐のポトフの茸自家製で　菖
そっと気遣う夫の健康　茨
破鍋に綴蓋のような番い犬　水
遠回りする学校帰り　香
湖へそそぐ光に花見舟　と
春の虹見る陸橋の上　洲

平成十九年五月一日首
平成十九年六月一日尾（文音）

歌仙『僧の鉦』

藤房や回廊渡る僧の鉦　雨宮文江捌

ゆかしき香り運ぶ春風　文江

種袋胸弾ませつつ選びいて　牛野弥恵

色とりどりの夢が生まれし　宮本茂登

望の夜の二筋三筋けもの道　根本美茄子

岩茸採りの影遠ざかる　後藤算子

秋(ウ)場所の蟲屓の力士頼もしく　文江

弱い巨人にファンやきもき　恵

合コンはいつも遅刻をするハメに　登

道行なれど豪華客船　美

大統領指名争い火ぶた切る　美

更衣して街へ繰り出す　算

月浴びて金魚は鰭をひーらひら　文

フラのリズムで長寿体操　恵

自販機のペットボトルは冷え不足　登

養成塾に通う子供等　美

初花を詠みし一句を短冊に　美

佐保姫さまも機嫌うるわし　算

賑(ナオ)やかに家族総出の大掃除　美

シャボンの匂う湯上がりの肌　算

贈られし絹のパジャマを羽織りいて　文

逝きしあなたと永久に生きましょ　恵

夜の更けてひときは光る星ひとつ　登

ベツレヘムにも舞う雪蛍　美

嘘吐いて唇寒き礼拝堂　算

湯水の如く垂れ流す税　文

鈍行が好きでのんびりひとり旅　恵

「獺祭」という酒を酌みつつ　登

ぼよよよーんと中也の詩のような月　美

磯鳴の群れ羽を休める　算

木(ナウ)の実落ち眠気を誘う化学式　文

混ぜるな危険酸とアルカリ　恵

若き日に読んだ格言思い出し　登

愛犬を連れ遠回りする　美

花筏お堀の中を漂うて　算

高く小さく武者絵連凧　筆

執

平成二十年二月　十六日首
平成二十年三月二十七日尾　（文音）

歌仙『燕来る』

廃線の決まる駅舎に燕来る　宮本茂登捌
　行商籠に喇叭水仙　宮本茂　登
うららかに女声コーラス流れきて　岩下秋月
　好きなカップでエスプレッソを　長澤矢麻女
月天心ほのと白きは波がしら　高木遥子
　立ったばかりの案山子おどおど　黒澤かすみ
ウ信仰は待たねど紅葉寺巡り　登
　手繰りてみたき糸の端など　秋
カタコトで愛を囁くイタリア人　遥
　相触れしまま揺れるゴンドラ　麻
雨上がる物価もすべて上昇中　み
　隧道出ればあやかしの森　登
ひいふうみい麻酔医の声遠くなり　秋
　しらしら明ける月の涼しき　遥
薦かぶり山につまれて祭小屋　麻
　お国ことばが耳に懐かし　み
花吹雪く路面電車が通り過ぎ　登
　ぽっかりと浮く春の綿雲　秋
ナオ噂りを右に左にハイキング　遥
　一粒含むチョコレート菓子　麻
初孫のお宮参りは上天気　み
　口伝で継がる狐狂言　登
紙漉きの里は静かに時を積み　秋
　ひたむきに編む赤いマフラー　遥
恐いほど君への想い深まりて　麻
　惚れた弱みで尻にしかれる　み
食道楽嵩じて蕎麦屋開店し　登
　長男次男捻じりはちまき　秋
球場の上にぽっかり昇る月　遥
　秋の叙勲の噂ちらほら　麻
ナウ美術展一〇〇号の絵を搬入し　み
　湖のほとりをさまよえる馬　登
山頭火気の向くままに風まかせ　秋
　新入生は瞳きらきら　遥
正門も通用門も花の下　麻
　尾根をつないでかかる初虹　み

平成二十年二月十六日首
平成二十年三月十五日尾　（文音）

執筆

歌仙『ローランサンの少女』

土屋実郎捌

藤揺れてローランサンの絵の少女　土屋実郎
　大空へ向け飛べよ春帽　山本ゆう
猫の仔につられて欠伸金もなし　大木佳
　人待ち顔に並ぶ自販機　吉田安芸
「月百姿」こよなく愛す月の客　土屋実郎
　一億ドルの投手爽やか　佳
マンションに閻魔蟋蟀鳴き出して　ゆ
　おねむの時間童話手に持ち　郎
冷泉家紙背文書に恋の歌　芸
　蔀戸あけてすべる上臈　佳
冬陽うけ庭の小流れ渡る人　ゆ
　ホバリングして降りる隼　郎
竜宮といふ名の店でナツメロを　芸
　セルフスタンド涼風の月　佳
川開き渋滞つづく高速路　ゆ
　ひつまぶしにて腹を拵へ　佳
花疲れソメイヨシノはクローン種　芸
　しこりを解きに行く謝恩会　ゆ
街おぼろ新宿駅は様変り　芸
　迷った末の屋台はしごか　郎
曇天の大工を泣かす隅に墨　佳
　カラスの知能ニホンザル並み　ゆ
御東征神武の粂内せしことも　郎
　額集めて歴史繙く　芸
早乙女の紅の蹴出しに笛太鼓　ゆ
　ストロー二本冷しサイダー　佳
今時は地上デジタルユビキタス　芸
　管理を嫌ふB型の人　佳
木星の月は十五を超えて居り　郎
　ポックリ寺に木の実降る降る　ゆ
故里の蜂の仔捕りに凝る仲間　郎
　佃煮づくり囲炉裏囲んで　佳
面打ちの一子相伝脈々と　ゆ
　長押に家紋丸に鷹の羽　郎
王朝の風情のこして花の奥　佳
　パステルトーン春日傘さし　ゆ

平成十九年四月二十七日首
平成十九年五月二十五日尾

（於・抱虚庵実郎居）

歌仙『炎帝や』

菅原泰子捌

炎帝や太き腕のヘラの像　　菅原泰子
　パティオに佇てば匂う茉莉花　　川村紀子
万緑へ児らは自転車漕ぎ出して　　蔦とく子
　肘掛け椅子に猫の伸びする　　久保田千代
鍵穴を探すには足る月明り　　浜田則子
　秋風ととも訪ねくる人　　紀子
境（ウ）内の裏整然と柿簾　　とく子
　変身願望外すエプロン　　則子
愛捨ててアイドルの座をはなやかに　　千代
　思いの丈を埋む砂浜　　泰子
約束は真珠（たま）括る糸切れるまで　　紀子
　しんと寒林天を突き上げ　　千代
連山に手毬のような冬の月　　とく子
　家の設計風水で決め　　紀子
国会の教育方針さまよえる　　とく子
　脳の回線かるくリセット　　千代
やわらかな陽ざしをまとう花の宿　　紀子
　都踊りへ誘うポスター　　泰子
暮（ナオ）の春機内食には焼餃子　　紀子
　琥珀色した紹興酒愛で　　とく子
老いたれど戦争の惨語り継ぐ　　千代
　客席を射る名優の目よ　　泰子
レガッタの湖波立てる夏の夕　　紀子
　鯰を追って気象予報士　　千代
宇宙まで手を結んだり離したり　　則子
　恋しさ募り鬼女となるらん　　〃
情熱のタンゴのリズム葬送に　　とく子
　起伏はげしき月の裏側　　泰子
まどろめば幻聴のごと萩の雨　　千代
　つうと蓑虫古典講じる　　則子
末（ナウ）枯野寂黙な兄に会いに行く　　とく子
　蒸気時計の前の停車場　　泰子
インディアン人形を売る開拓地　　千代
　生みたて卵なんとあたたか　　泰子
創世記花の盛りを揺蕩いて　　則子
　黄金週間しばし休息　　千代

平成十九年八月二十四日首
平成十九年十月二十六日尾

（於・菅原宅）

《東京・「もん」の会》

歌仙『涙の睫毛』

晩夏光今宵我らは酒祝(さけほがひ)　川野蓼艸捌

笑ひの渦に凛と向日葵　川野蓼艸
吊橋が頻繁に揺る　ゴリラ来る　尾山祥子
我が詩藻螺旋を巻いて伸びゆきて　観世音思惟　志治美世子
ポテトフライと転ぶビー玉　鍵盤は短調の月奏で出で　田辺つる路
眉爽やかに来場所に期す　種川とみ子
ウレモン置く神保町(じんぼうちょう)の古書店に　友野海也
栞の隅に「待つ」と一片　古川柴子
指つなぎ夜の迷路の水族館　とみ子
涙の睫毛卓に忘れし　柴子
魂を風になびかせ風に消ゆ　〃
あつけらかんとトラ河豚を食ふ　美世子
刻々と育つ氷柱に月封じ　祥子
遠く遥けき鳥葬の唄　つる路
マンモスをそつくりと掘るシベリアに　美世子
頭に戴せた神を地に置く　祥子
花びらを吸ひ込む笑窪空にあり　とみ子
単身赴任強東風に乗り　祥子
蝶々(ナオ)よ鈍行列車を越しなさい　つる路
グレンミラーをひねもすに聴く　海也
吊橋が頻繁に揺る　ゴリラ来る　とみ子
考へる葦　観世音思惟　美世子
首すぢにかかる溜息熱かりき　柴子
女体の中を蛇行する川　〃
悲しみと交じり合へない地下にゐる　祥子
おにぎりころと転がつてくる　つる路
はだか行く崑崙山の懐を　祥子
地図遡り少年となる　美世子
満月の金色の環を背にかざし　祥子
新絹紡ぎ機織の音　海也
むさ(ナウ)さびの滑空長き時間あり　つる路
奥入瀬の森木ノ実降りけり　とみ子
露天風呂硫化水素の髪の人　美世子
雛の客に接待の雪　つる路
花の影親のあれそれ積もりそむ　とみ子
茶柱の立つ八十八夜

平成十九年七月二十四日首尾
（於・中野北口「もん」）

二十韻　『揚げ雲雀』

水谷卯波捌

揚げ雲雀地の寿歌を天までも　水谷　卯波
　装い新た入園の子等　三宅　繁代
丹精を込めた鉢物根分けして　斎藤　テル
　ホットケーキを友が持ちくる　秋好　紀子
夜更(ウ)けまで楽しむパズル月明し　荒木　陽子
　水の澄みたる山峡の池　遠入　和子
ひとおもい美男蔓の蔓ひけば　河野　末広
　種も仕掛けも無い事はない　倉迫　久雄
二人今アダム・イヴのＤＮＡ　工藤　美佐子
　老いの坂超え無漏窟の中　相良　久馬
カクテル(ナヲ)をゆらし呟く独り言　重松　節子
　聖火リレー世界悩ます　都甲　クニ子
静かなる青の洞門夏の月　藤原　文子
　浴衣の女そぞろ歩ける　吉武　圭子
ケアマネのナース食事に手を添えて　卯波
　ペン画の景色壁に飾られ　テル

次(ナウ)々と届く四川大地震　宇都宮　靖
　指おり数え寒明けを待つ　金丸　啓子
ともどちの揃い祝いの花吹雪　重春　艶
　田をはすかいに通う蜜蜂　執筆

平成二十年五月十九日首尾
（於・邪馬渓風物館研修室）

半歌仙　『冬終る』

坂田武彦捌

雪吊の汚れぬままに冬終る　坂田武彦
岩陰よぎる鴨の一列　土屋実郎
心字池雲形池と連れ立ちて　池田耕治
二の丸跡に人の佇む　山口武雄
月に弾く琴と竹との面白さ　今村苗彦
犬跳びついて揺れる瓢箪　苗
ウ紅葉山儲け話はないものか　彦
顔はつやつや昼酒に酔い　郎
夢覚めてあわてて上衣探す人　治
急につめたき花魁の声　治
いつまでもダブルベッドの軋み居り　郎
麻薬の手入れ探す確証　彦
対局の座につく夏の月見上げ　苗
気の向くままに打ち水をする　雄
骨揚げのあとは兄弟怪気焔　雄
鳥インフルに飛びまはる知事　治
球団のキャンプめぐりも花の中　郎
父の母校に見事合格　雄治

平成十九年二月三日首尾
（於・浦高同窓会事務所）

歌仙『明日香の春』

電波時計三針ぴたり十二月　土屋実郎捌
冬うららかなビルの内外　小張昭一
掃き清め料亭塩を盛り上げて　横山わこ
家路はまたも終電となる　今村苗
雲流れ玉鏡俄か影落し　池田耕治
秋刀魚満船無線高声　山口武雄
忘(ウ)れ居りポケットの中早生蜜柑　土屋実郎
酸いも甘いも訳知りの仲　坂田武彦
三つ星のついた老舗は玄冶店　わこ
触れ合ふ手と手そっとそのまま　昭一
ゴンドリエ唄はトレモロ櫂さばき　耕治
ドゥオモの扉厳かに開き　苗
向日葵の丘ゆるゆると赤い月　武雄
白衣の裾の汗みずくなる　苗
空部屋のナースコールを聞きとがめ　わこ
仮面の男柩担ぎて　武彦
様変り姿現はす花の精　昭一
胡蝶もつれつ消えてゆく午後　苗
のどけしや赤門くぐる車椅子(ナオ)　耕治
保険かけすて八十の坂　わこ
株相場日毎夜毎をパソコンで　苗
海底火山津波誘発　実郎
半鐘をいとし男の声かとも　武雄
長振袖の色もあでやか　わこ
忘れてはいやよ昭和の流行歌　昭一
防衛省に汚職夫婦が　武彦
おでん酒酌みて難聴同士なる　耕治
欠伸してゐる白鳥が二羽　苗
くつきりと液晶画面月の裏　わこ
手の団栗のあてつこをして　耕治
権(ナウ)の禰宜時代祭は馬に乗り　苗
ピンチヒッターホームラン打つ　耕治
流行語ハニカミ王子大賞に　わこ
鳥獣戯画に蛙本尊　実郎
千年の花に尋ねよまつりごと　武彦
明日香の春に幟はためく　武雄

平成十九年十二月四日首尾
（於・浦高同窓会事務所）

《横浜・横浜ベイサイド連句会》

歌仙『小ササ幟ノボリ』

久良木　憲捌

男の児ここにも一人小幟　　久良木　憲
　菖蒲の束の香り立つ軒　　生田目常義
大形のカミキリムシを展翅して　　和田忠勝
　象牙の塔に籠る毎日　　土屋実郎
望の月ゆらり離れる峰の松　　秋山よう子
　新酒の出来は上々と言ふ　　吉田酔山
ウ備長でじつくりと焼く下り鮎　　杉崎優子
　頬を押さへる仕種愛らし　　義うさん
このひとはほんとに男なんですか　　勝義
　手切れ金まで出せとはいはぬが　　義山
円高で世界の通貨買ひあさり　　義郎
　外套どかと座るリムジン　　義山
月中天百八の鐘鳴り響き　　義郎
　サイドブレーキ引いて軽トラ　　義義
ジグソーパズル徹夜完成　　義うさん
　安全を家族ぐるみで祈願して　　義山
骨折の食欲ばかり旺盛に　　義義
　霞の空に機影紛れる　　義郎
タッチの差こそ脅壊ショウジョウの間　　義山
　満開の花の傾ナダる濠の上　　義うさん
差し伸べし手には止まらぬ飛花落花　　義憲
　童女の如く嫣笑む春　　義優
誰が笛の音か暮れ遅き頃　　義郎
孔子祭教授も今日は神妙に　　義山
　フォーカスされぬ術を知りたし　　義勝
コンビニの雑誌コーナー賑やかに　　義うさん
　詐称販売多きこのごろ　　義郎
すつぴんを確かめてからプロポーズ　　義義
　大きお尻は親に受けよく　　義山
蚕豆の鉢にどつさり宵の卓　　義憲
　百物語蝋燭の灯で　　義優
子ら皆は何の苦もなく静座して　　義義
　正式俳諧白足袋を履く　　義うさん
丹田で月に向かひて発声す　　義山
　秋風秋雨愁思梵論字　　義郎
ナウ山峡は早手回しの落とし水　　義義
　サイドブレーキ引いて軽トラ　　義山
安全を家族ぐるみで祈願して　　義憲
　霞の空に機影紛れる　　義うさん
満開の花の傾ナダる濠の上　　義優
　童女の如く嫣笑む春　　義義

平成二十年五月十八日首尾

（於・磯子杉田劇場）

《川口・読売文化センター川口》

歌仙『緋鯉群るる』

緋鯉群るる互いの彩を楽しみつ　磯　直道
夏日かえして揺るる水の面　柏村　誠子
窓からはピアノの曲の流れきて　佐藤　治子
御機嫌ようと客の到来　岡村　和可
まんまるな月煌々と昇り初め　笠原　悦子
白萩こぼる裏の山道　安藤　君子
亡(ウ)き友の俤偲びそぞろ寒　直
国境越えてメールとび交い　誠
青い瞳も茶髪もみんなアイラヴユー　治
待ち望んだのこんな抱擁　和
教会の鐘の音ひびく旅の宿　悦
雪晴れの夜の月は遠野に　康
点々と狐歩みし跡のあり　誠
通学の子等まわす雨傘　直
針仕事母の背中を思い出し　君
セピア色なる写真数枚　悦
裏庭に枝垂れ咲きたる花匂い　和
ゆらりゆらりと無人ぶらんこ　治
いつまでも噂り高くこぼれきて(ナオ)　悦
三々五々と吟行の人　和
伎芸天阿修羅の像をめぐりつつ　直
許六の雄姿腰に長剣　誠
名苑は苔むすままに静もりて　君
夕顔の花ひそとほのかに　悦
新妻の浴衣姿にみとれおり　和
二十歳(はたち)違いの六十の恋　治
国会はねじれ状態つづきたる　誠
陶の狸が酒を飲みつつ　直
薄明り窓辺によりて仰ぐ月　君
吉祥草を鉢植えにして　悦
「ごはんです」(ナウ)松茸飯に舌つづみ　和
風に吹かれてこける自転車　治
道端の身代り地蔵にが笑い　康
水温みたるせせらぎの音　誠
花ほぐれやさしく包む車椅子　直
前へ後(うしろ)へ舞える蝶々　君

平成十九年七月一日首
平成二十年一月三十一日尾
（於・読売文化センター川口）

《東京・ラピロス連句会》

歌仙『梛の花』

心敬の句碑のかたはら梛の花　　本屋良子捌

　ほととぎす啼く雨霽るる山　　本屋良子

小筥よりカメオの腕輪取り出して　　服部秋扇

　双子の姉妹絹のブラウス　　浅沼小葦

まんまるにならざる月もよかりけり　　赤松よう子

　ふはりふはりと遊ぶ草の穂　　永島董玉

秋澄めば当歳馬敏き耳立てる　　吉村ゑみこ

　符丁とび交ふ仲買の人　　扇

先生の今日の謎掛けむずかしく　　横山わこ

　恋のシナプスめくるめく宵　　高田明日伽

カルメンに紅の一本冬薔薇　　小泉桂

　美男の髭も凍る止まり木　　乙黒初音

歯刷子の硬さを試す去年今年　　柴田真澄

　中近東に煙あがるや　　古川直

国宝のブルーモスクが隠れ蓑　　葦こ

　天の恵みと受ける幸せ　　葦扇

笛の音にさくら舞ひ散る朧月　　高橋賢

道も新たに遍路迎へる　　扇

あたたかき窓覗き込む己が影　　ゑ

　東大卒のフリーターです　　良

時計草さらに色増す午後三時　　賢

　髪結さんへ芸妓連れだち　　伽

据膳よ夢のうちより艶な声　　こ

　背中の竜にしがみつかれて　　澄

かさぶたに未練を残す　　賢

　穹の深みへ白き浮雲　　葦

夕月は新幹線の鼻の先　　こ

　紅葉たなご弁当を購ふ　　音

稽田の落穂を拾ふ円空さん　　伽

　分別ざかりのエコ暮し守る　　玉

ペテン師に壺の目利きを褒められて　　賢

　神のゐぬ間にちよつと悪戯　　桂

六本木ヒルズさまよふ昼下り　　直

　大好物はコシヨウセンベイ　　よ

潮満玉潮干玉を投げて花　　良

　眼張並べる瀬戸の魚店　　ゑ

平成二十年五月九日首尾

（於・六本木ぎふ倶楽部）

歌仙『白梅や』

長坂節子捌

白梅や一生（ひとよ）にもある句読点　長坂節　子
ゆっくり進む牛の耕　稲垣渥　子
幼子のまわらぬ舌ののどらかに　宇井美和子
テニスシューズの並ぶ玄関　武藤美恵子
名月に切子びかりの川流れ　美和子
夜食に添える焼きたてのパン　田中イスズ
橡（ウ）の実の実る街路樹ロータリー　松井文　子
迎えの車次々と来る　森田美耶子
ふたりして恋を占う駅の裏　イスズ
勝負下着のレース繊細　文　子
赤福は再出発に満を持し　節　子
凍てたる月を仰ぐ暁　渥　子
デブ猫を炬燵がわりに抱いて寝る　美耶子
貧乏暮らし書いた小説　美恵子
今が良し大正昭和くぐり来て　とみ子
オリンピックも政治がらみに　美耶子
花の昼心経ぶつぶつ墓の前　塚本益　美
レタスと卵で作るチャーハン　美耶子
山里に鮎放流の時の来て　益　美
大黒柱黒光りする　とみ子
皮下脂肪ぽっこり出てる腹を撫で　益　美
薬事違反の通販の品　とみ子
夏休みアメリカ行きは満席に　イスズ
大和なでしこ浴衣姿で　美和子
君の名は個人情報知りたくて　文　子
酔ったふりしてもう帰さない　とみ子
夢の刻言葉にならず爪を立て　イスズ
いつか着れるとしまい込む服　美耶子
近未来月に別荘予約する　とみ子
飛び入り歓迎利酒大会　益　美
鬼（ナウ）やんまついと横切る散歩道　美耶子
悪いね悪いね口癖の母　益　美
遺伝子は頭脳明晰受け継がず　美恵子
まっすぐ伸びる淡い初虹　とみ子
ひらひらと花の語れる隅田川　美和子
ショパン流れる春宵の窓　節　子

平成二十年二月一日首
平成二十年三月二十日尾

（於・竜神交流館）

短歌行　『道元忌』

河合はつ江捌

はりはりと漬物かじる道元忌　河合はつ江
銀木犀の匂ひたつころ　船渡文子
公園の大観覧車月乗せて　瀬尾千草
トロットの馬手綱引き締めて　青木久美
ウピッケルを背に仰ぎ見る八ヶ岳　文
泉のほとり風の立ちたる　草
美少年己が姿にうつとりと　江
役者を愛づる時の将軍　〃
葡萄酒の杯透かしゐる紅の色　草
からくり時計鳩の飛び出す　岡本満智子
友好の記念の花の今盛り　草
遠足の子の丸いおむすび　美

ナオ弥生野に化石探しの人のゐて　文
着慣れたベスト多きポケット　満
けふもまた手品教室いそいそと　文
年金台帳記入漏れてふ　満
女房に絵文字ばかりのメール打つ　草
浮いた噂にくさめ三回　満
月皓と鮫鰊吊るす裏通り　文
軒に並べるゴムの長靴　江
ナウオルガンに合はせて歌ふ賛美歌を　美
離れ小島に波の寄せくる　満
ひとひらの花の舞ひ散る昼下り　江
春の日傘を傾けてさす　草

平成十九年十一月十九日首尾
（於・岐阜鋳物会館）

歌仙『星祭』

中村記康捌

湖に書物眠らせ星祭　　中村孝史
峡の村より月上り初む　　佐藤千賀子
ふしくれ手新蕎麦打つ時しなやかに　　木田真智子
樋にひき込む甘き湧水　　小岩秀子
徐に甲骨文字を写しとる　　中村記康
緑陰が生むつつましき青　　田中裕子
うまいもの広げ呼び込む初蛍　　横山浜江
からだひとつで嫁に行きます　　記康
盗み取るあなたのＩＤパスワード　　孝史
リーフフィッシュのうまく化けたり　　千賀子
剥き出しの岩肌みせし硫黄島　　秀子
語り継手のまた一人欠け　　孝史
寒月に浮ぶ黒猫招きよせ　　真智子
カーナビ頼り冬ざれの路　　裕子
副都心かっての田んぼ高層に　　浜江
晩酌急かす停年の父　　記康
花愛でる笑い上戸と泣き上戸　　孝史
オラショの響く長閑なる里　　千賀子
イーゼルの十字架となる春の闇　　秀子
口過ぎのため地雷除去する　　浜江
行政がやらせのタウンミーティング　　記康
高速道に羽抜け鳥落ち　　孝史
尻上がり出来ずに泣いた夏の朝　　千賀子
先生慕い薄く紅引く　　孝史
褥には君の鋳型のまざまざと　　記康
投げ出されてるポーの短編　　千賀子
揺り椅子にいつもの人が見当らず　　秀子
休診の札秋雨に濡れ　　真智子
満月へ北欧めぐりの飛機発ちぬ　　孝史
夜寒に囲むチーズフォンデュ　　浜江
カラヤンの指揮一閃に木の実降る　　孝史
独断偏見時によろしく　　千賀子
日曜も紫煙のこもる記者倶楽部　　秀子
母の電話はそそくさと切る　　千賀子
学舎は花回廊を過ぎてより　　真智子
微睡む堤萌ゆる若草　　記康

平成十八年八月二十四日首
平成十九年二月　八日尾

（於・仙台市パル長町）

映画賦物・歌仙　『日曜はダメよ』

衆議判　澁谷盛興
中村記康　永渕丹
佐々木游子　高山達雄　狩野康子　筒井草平　盛興　記康　丹　游子　達雄　康子　草平　盛興　記康　丹　游子

出羽なる新茶の味の甘さかな
　郭公の巣の上にねまらん
木の間より黄色いハンカチ手招いて
　風のゆくえは誰も知らない
七人の侍そろい三日月
　糸遊散ってゆれる吊橋
ウ芸術祭ゴジラ岩なる名前付き
　濡れた欲情持て余したる
抱き寄せてShall Weダンスあの世まで
　駅舎セピアに仄とガス灯
キューポラのある街夢に出づるらん
　外人部隊えーじゃないかと
おおいなる幻影月とクリスマス
　男はつらいよ食らう河豚鍋
天国と地獄天秤かけてみる
　用心棒のふくよかな耳
潮騒に花の蕾のうち震え
　八十八夜雨あがるとき
ナオターザンの禁じられた遊び　春
　北北西に進路を取れと
日に光りウエスト・サイド物語
　心通わす猿の惑星
竹夫人暗くなるまで待ってても
　第三の男そこに居たのか
妖精の慕情振り切る赤い河
　カサブランカに交わす乾杯
哀愁は夭折の画家偲ぶとき
　直垂に菊影武者の意気
月白に薨黒々羅生門
　新蕎麦啜る日の名残りなり
ナウあにいもうと並べる笠の秋遍路
　やっぱり大人は判ってくれない
ビンラディン裸の大将いずこへと
　日曜はダメよ旅の支度を
山神の懐深く花炎上
　バックコーラス揃いうららか

平成十九年五月九日首
平成十九年五月十日尾
（於・寒河江市　ほーてろ村　静心荘）

歌仙『赤煉瓦』

辻幸雄捌

赤煉瓦スペイン坂の鯉幟　金枝　純
　夏の匂いを運び来る風　馬場英子
土手を行くサイクリングに手を振りて　辻　幸雄
　望遠で眺める月のクレーター　坂田武彦
静かな海を揺らす不知火（ウ）　英
　濁酒隠れクルスの酌み交わす　純
微笑するかにマリア観音　彦
　夕闇をリリーマルレーン流れ来て　幸
大人の恋に憧れし頃　純
　ミニスカもロングブーツも革で決め　英
仔犬籠から目玉きょろきょろ　幸
　プードルを探してますと冬の門　彦
革酒の碑文寒月に読む　英
　天下人天平の香焚きしとや　純
ここぞと響く釈台の音　彦
　千の風大樹震いて花吹雪　幸
春闘の旗遠くなりゆく　英
　峠路を少女も越えてみどりの日（ナオ）　純
ギャラリー続き王子はにかみ　彦
　イアーゴの奸計の果て白昼夢　英
軍靴の記憶平和ぼけにも　純
　老いて猶蝮嫌いは親譲り　彦
こどもが精をつけてどうする　幸
　馴れ初めはおきゃんがおませを誘惑し　純
女難の相とあきらめの日々　英
　地下鉄を降りた途端にど突かれて　彦
超高層に映る眉月　幸
　虫時雨ドラキュラの城黒々と　純
啼く百舌聞けば哀れ速贄　英
　弱い者強者支える変な税（ナウ）　彦
すでに墓から覚めしアドルフ　幸
　久闊の改札口にエヴァ見えず　純
サンバのリズム街のどよめき　英
　今年もよ汝も堅固か峰の花　幸
遅日悠々独りスケッチ　彦

平成十九年五月十日首
平成十九年六月二十七日尾（文音）

歌仙『紫蘇の実』

奈良榮夫捌

紫蘇の実を扱く指先香に染まる　奈良榮夫
　濯ぐ竹ざる掛けて秋の灯　中村記康
クラス会後の月見に招かれて　小野寺妙子
　庭に据えたる大き蹲踞　小野寺信一郎
切り岸に紅き断層川原風　康夫
　父に学びし鮎の友釣り　鈴木文男
ウ山の家夏合宿の賑わいに　郎
　Vサインして記念撮影　男
達筆な良縁祈願絵馬の文字　子
　勝気が仇で疎まれる性　郎
天罰に丸刈りやんちゃ縮こまる　男
　オレもオレもとメジャーリーグへ　康
ライン引き残るグランド冬の月　夫
　氷柱に透けて金次郎像　子
息災に喜寿を迎えた訳でなく　郎
　苦しみの渕喜びの界　男
花明り里人癒す共同湯　康
　畦に転がる畑打の鍬　夫
ナオ三脚を据えて待ちたり巣立鳥　子
　眠い眠いと飲みしコーヒー　夫
無伴奏提琴呻き変奏曲　康
　鼠を追えぬ猫の肥え過ぎ　男
天井に血糊の寺の宵涼し　郎
　地上に出でて雷雨はげしく　子
聖火行く北京五輪の道多難　夫
　思いそれぞれ増える晩婚　康
敏腕の美人社長で株を上げ　男
　錦を飾る村の懐し　郎
梯子酒酔眼朦朧朝の月　康
　膳に盛られし蝗佃煮　夫
ナウ逆縁に泣く葬の列鵙高音　子
　源氏千年絹せぬ輝き　男
自分史の中には飢餓と戦争と　郎
　用意万端シャトル飛び立つ　康
詩を吟ず古城碑前の花吹雪　夫
　昭和の日とて門に日の丸　子

平成十九年十月　七日首
平成十九年十二月二十五日尾　（文音）

歌仙『雪の節分』

和田忠勝捌

珍しき雪の節分句座遠し　和田忠勝
開園待ちて独り探梅　宮坂和之
新幹線旅好き同士居合わせて　大駒誠一
交わす盃遠く島影　内海鉄弥
雲抜けて望月の下渡る雁　宮脇昌子
そぞろ身に入む細道の風　諫武雪谿
棟(ウ)梁の声秋郊に棟上がる　海津桂子
愛妻弁当開ける瞬間　松本カヨ
好物に至福の時が甦り　宮下瑩子
抱かれて眠る猫の無防備　佐藤玻璃
重たげに主の棺運ばれて　和田ひろ子
世界遺産の資料山積み　辻賢次郎
水煙に懸かりし月の眼に涼し　辻松雄
神田祭に外人を呼び　土肥暢子
中国製ギョーザ中毒大騒ぎ　和一
おえらいさんはお辞儀要員　弥
卒業児夢ふくらませ花の下　昌
十三詣りちょっとすまして　桂(ナオ)
桂浜海舟像は春景色　谿
カッと目を剥く取れたての魚　中井淑子
お転婆なあの娘はにかむお年頃　下田幸枝
婚約指輪の筐に頬ずり　木谷英子
パンドラと知らずに開けてしまったが　中井啓輔
金のメダルは努力次第で　和田晶子
先達に踏みしめられし枯野道　岡本貞子
峰々映える冬の夕焼け　下田博
別れ際グッドラックと手を振って　大駒泰子
今夜のおかず何にしようか　木谷藍
欲一つ生きる支えに月仰ぐ　榎本良之助
おわら祭に胡弓三味の音　玉生うめ子
秋(ナウ)草の名を数えつつ母と行く　佐藤たまき
古き着物に香を焚きしめ　桂
いずこでもままにならない後継者　ヨ
蜂それぞれに分担を決め　瑩
パレードのブラスバンドに花吹雪　郎
陽炎ゆらぎ眩しスタンド　雄

平成二十年二月三日首
平成二十年三月十七日尾（文音）

歌仙『梅の香り』

平成二十年三月二日首
平成二十年四月十三日尾
（於・大倉山ヒルタウン）

辻　松雄捌

坂半ば梅の香りに息をつぐ　辻　松雄
　春手袋を脱ぎて清新　宮坂和之
芝萌ゆる初ホームラン場外へ　佐藤たまき
　ピョロリたて笛テスト練習　木谷　藍
江戸気質押し戴いて月の酒　中井淑子
　道具に凝って走り蕎麦打つ　大駒誠一
ウ声明に負けじと競う虫時雨　海津桂子
　ライバルのいて恋心燃え　た
リムジンに乗せて夜景のプロポーズ　藍
　ロケ地賑わう映画撮影　和
魔の薬空白長き再逮捕　雄
　差し出されたる牛乳を飲む　淑
旅の宿テムズに揺れる夏の月　藍
　鼠火爆ぜて逃げまわる児等　桂
安達太良の山を智恵子は懐かしみ　桂
　新人賞はノミネートまで　一
花咲きて花の在り処ぞ知りにける　一
水族館に泳ぐ海豹ナオ暮れかねてひげ発条のきざむ刻　た
　鑑定団は贋と断定　藍
鼻筋と二重まぶたを整形し　和
　痛み伴う健保改革　雄
クローンでよいから欲しい彼のこと　淑
　引く手あまたで悩む毎日　藍
真ん中の鈴を鳴らして札納め　桂
　社会鍋にはみんな冷やか　一
聖火ゆく開催国の面子かけ　雄
　老舗後継ついにご破算　淑
十五夜に周り灯を消し祀りの座　和
　過疎に負けずに守る地芝居　〃
ナウ故郷で鮭の生態究めんと　藍
　喜寿の恩師のなおも美し　桂
文集の夢をかなえて笑みし友　淑
　霞たなびく単線の果て　た
贅沢な花の莚に家族連れ　一
　茅葺き門をくぐる白蝶　雄

執筆

歌仙『雛飾る』

明治なる母の遺せし雛飾る　辻　賢次郎捌
　見つめる子等に分ける草餅　諫武雪　谿
蜜蜂の強き羽音に驚いて　和田忠勝
　川辺に並ぶ釣竿の列　竹崎梨野
澄む月を崩して入る露天風呂　下田幸枝
　舌鼓打つ旬の秋茄子　玉生うめ子
讃岐（ウ）路に金毘羅祭賑わいぬ　辻　賢次郎
　道州制に賛否両論　野郎
負け犬の生き方選びさばさばと　幸
　傷舐め合っていつかいい仲　勝
阿久悠の歌詞そのままに結ぶ愛　谿
　波止場のバーに抜ける涼風　郎
マラリアを異国に病みて仰ぐ月　めめ
　本社の指令矢継ぎ早なる　郎
鉄狂（きち）は大忙しの新路線　野
　首相答弁まるで他人（ひと）事（ごと）　野
過疎地から忘れずに来る花便り　幸
　古刹の鐘の響きおぼろに　谿
たらの芽（ナオ）の庭に伸びきて友招く　幸
　酒は地元の名代吟醸　野
各都市の聖火リレーの物々し　博
　どの世界にも鵺はいるもの　勝
宝塚退いて奏でる平家琵琶　郎
　ロケの出会いがゴールインへと　谿
風邪引くとコートの中に抱え入れ　勝
　木枯らし受けて独り行く旅　博
長寿とは世の邪魔者で余計者　谿
　シーラカンスの潜む深海　郎
月明かり億光年の彼方まで　勝
　ベストセラーを積みし長き夜　博
故郷（ナウ）の金木犀の香の中に　勝
　如何に如何にと禅の問答　郎
自転車は消える胡*同を走り抜け　谿
　冴え返る地下剣と人骨　郎
人満ちるしだれし花の古都の宵　博
　清明節に小糠雨降る　谿

*胡同＝北京の横丁

平成二十年三月二日首
平成二十年四月十三日尾
（於・大倉山ヒルタウン）

歌仙『享保雛』

和田ひろ子捌

菓子匠で享保の雛に出会いけり　宮下瑩子
　芽柳風に遊ぶ川端　和田ひろ子
クラス会春の別れを惜しむらん　佐藤玻瑠
　成長予測下方修正　中井啓輔
淡き雲月を残していつの間に　松本カヨ
　啄木鳥遠くタララララララ　内海鉄弥
ゥ肌寒に異人のダンス見とれおる　瑠
　想い届けと上衣着せかけ　弥
アルバムの妻は達者で呵々大笑　ヨ
　おひとり様の老後不安に　ろ
座標軸時とお金でにらめっこ　凛
　和尚自慢は唐の襖絵　輔
南極の氷でロック飲む仲間　弥
　月にベースの汗がはじける　ヨ
繁栄を戻せ魚付き保安林　凛
　再生細胞創る情熱　輔
凍蝶のすがりつきたる作り花　ろ
　日光写真児等と夢中に　瑩
ナォ読みかけの本に挟みし鼻眼鏡　子
　ポタラ宮殿ラサの反乱　弥
ひっそりと高地暮らしを好む人　〃
　はにかむ指の轆轤胼胝撫で　ろ
ジャズが好きスローなブギと貴方好き　凛
　マルクスボーイ見事沈没　輔
今月も赤い家計簿続きおり　凛
　介護に追われ師走小走　ヨ
どうしましょ忘れたことを忘れたの　凛
　岩戸を開ける強腕の神　輔
池の面の十五夜風に揺らめいて　弥
　垣に通草の笑みがこぼれる　ろ
ナゥ運動会だるまころがし殿に　凛
　綿飴父が買ってくれた日　弥
犬の子の声に目覚める朝まだき　ヨ
　山脈越える佐保姫の裾　凛
太公望竿の先には花筏　輔
　初虹の立つ恙なき旅　筆

平成二十年三月　二日首
平成二十年四月十三日尾
（於・大倉山ヒルタウン）

執筆

百韻『枯野道』

衆判

枯野道ダムの落差をはるかに　阿片瓢郎
　雪に閉さぬ堰堤の　小林梁
自転車の列に歓声流れ来　山本房子
　分校跡にのこる校　飯沼三千古
苔生せる村長の文字肉太　梁
　縄目の土器またも発　房
遠き世もかくやと仰ぐ月今　古
　紫苑の垣を分けて住む　梁
初ウ夫の留守少し手をぬくとろろ汁　房
　命日近き母を偲び　古
もんぺ着は疎開先なる古写真　梁
　銃後の乙女耐へに耐へたる　房
流れくるりんごの唄に癒されて　古
　あしたの空に祈る幸　梁
クルーザーで世界を尋ね旅三昧　房
　マストの鴎風見鶏めく　古
月赤く船乗ポパイ日焼して　梁
　活動写真に魅せられし頃　房
人声に読みさしの本伏せて立つ　古
　軒の陽差しは三時回れる　梁
山深く花には少し早かりき　房
　庵のそびらに呼子鳥鳴く　古
二オ清明のあけゆく空に友思ふ　房
　企業戦士でひとり異国に　古
防人の嬬恋衣われも又　梁
　筑紫の果てに馴染む荒波　房
合格を天神様に祈願して　梁
　重なりあへる大小の絵馬　〃
満願ときまればゆるりと寄席に寄り　古
　末広亭にかかるオリオン　房
老舗守る昔かたぎの女将さん　梁
　骨の髄まで柔き甘露煮　房
晩酌をせずにはをれぬ休肝日　古
　定期検診あすに控へて　梁
目覚めよや露のいのちを宿の月　房
　夜長に語る過ぎし日のこと　古
二ウ在祭いとこはとこのうち集ひ　梁
　古びて光るひよつとこの面　房
訪れし家の何やら懐しき　梁
　庄屋日記の虫くひの跡　古
恋の文字らしきがひとつ穴となり　梁

あとつぎ生れし喜びの記事　房
たぐひなし室町御所の弥栄え　梁
世阿弥の至芸今に伝へて　古
流離の身都に遠く凍てる月　梁
シベリアの地に眠る父兄に　房
銀しやりの仏飯日毎高く盛り　古
戦時の我れを映す浄玻璃　梁
花一本だけの小庭の満天に　房
目借どきとてうつらうつらと　古
新社員名刺出す手もぎごちなく　房
アップの見込み当分はゼロ　梁
とめどなく株価低迷つづきをり　古
パンダの恋を追ひしあのころ　房
悲しきは性の営み免れず　梁
微塵となりて消え果てし夢　古
漁船を蹴飛ばして行く自衛艦　梁
安房や上総のつい鼻の先　房
婆ひとり海酸漿をならしつつ　梁
段々畠の版画彫り上げ　古
大胆な構図画壇の話題たり　房
矢継早なる質問を受け　梁
幼き子月には亀もゐるといふ　古
ピエロの頬に紅葉かつ散る　房
襲ひくる睡魔のかなた櫂の音　梁
牧閉ざす角笛遠くひびかひて　古
ユングフラウの覗く丸窓　房
南欧の風吹き溜めて吹きおろす　梁
白きドレスに秘めし情熱　古
お披露目は六頭立ての馬車で行き　房
大聖堂は空に鋭角　梁
月のさすステンドグラス涼やかに　古
地物ビールで旅の更け行く　房
菩提心余生をめぐる古戦場　梁
調べもあはれ一弦の琴　古
定年の余韻に浸る日暮どき　梁
ビルの谷間に忍びよる闇　房
花篝炎えて宴は酣に　古
仔猫の背に残るひとひら　房
源氏読む局静かに春灯下　梁
碁盤の目なす千年の都市　古
燕京でやがて開かるオリンピック　房
風静かなれ万国の旗　梁
永劫の未来へ放つ鳩百羽　古
宇宙に「きぼう」何か始まる　房
磁気嵐神武以前の光見む　梁
鈴うち振りて舞ふは鈿女か　古

大雪原の果はしまきて
民芸の刺子半纏買ひ求め
今に残りし宿場町なら
早立ちの若草踏んで有明に
春の別れを惜しむ朋友
名ウ植樹祭踊る絵文字のメール着き
みどりの惑星エコを守りて
顕微鏡のぞくあけくれ研究所
有象無象も釈迦の手の上
慈悲光に大千世界包まれて
風のまにまに身を任せつつ
空を行く名残の花のひとさかり
郷土館まで霞む川沿ひ

執
筆 梁古 梁房古 梁房古 梁房古 梁

平成十九年十二月五日首
平成二十年四月十日尾

（文音）

歌仙『花六輪』

靖国や花六輪の初名乗り　　土屋実郎捌
下見する人水温む濠　　村井昭三
ボート小屋ペンキ塗りいる東風吹きて　　土屋実郎
庶民マラソンイベントとなる　　原田子楓
月光を一重わが身に纏いては　　萩原勝夫
里山の栗入れて炊く飯ウ　　楠正三
焼酎もセレブとなりて秋の声　　子楓
帯解く気配吐息まじりに　　勝夫
ふとよぎる愛の流刑地ワンカット　　昭三
ゆりかもめ群れ岩礁に舞う　　子楓
アノラック機能豊かで恰好よく　　勝夫
いじめを知らぬ識者講演　　正三
人いきれ逃れ屋上月涼し　　実郎
夏狂言は四谷怪談　　昭三
教会は迎賓館に隣して　　子楓
典範改正立ち消えとなり　　実郎
挿木せし枝凛としてあるじ顔　　正三
土手のつくしの生(いき)のいいこと　　昭三
春祭神輿担ぎの景気よき　　佐々木英夫
商店街を隠居支へて　　子楓
伝統に知恵を加へてヒット出せ　　勝夫
「鼓童」轟く佐渡の島山　　昭三
助手席に海藻類の匂ひして　　正三
人に語れぬ恋の虜に　　子楓
ようやくに仲居修業も板につき　　実郎
艶ある噂カウンター越し　　英夫
よき夢を見たしと今日も夜半の月　　勝夫
ボトルシップに月の差し込む　　正三
浴室の坪庭に合う菊の鉢　　英夫
杜氏来りて夕餉賑う　　子楓
天(ナウ)下り冬の到来覚悟せよ　　昭三
湖畔の道を朝のタンデム　　正三
茅葺きの母屋を満たす子の笑い　　英夫
誰も乗らぬに揺るるふらここ　　子楓
花心未来を背負う新入生　　勝夫
日々怠らぬ田打ち畑打ち　　実郎

平成十九年三月二十二日首
平成十九年四月二日尾
（於・柳川ビル士官室）

歌仙『雲の峰』

ロケットに乗せし童心雲の峰　　土屋実郎捌
八十路涼しく青春の賦（うた）峰　　〃
木洩れ陽のやはく蟷螂生れ来て　　佐々木英夫
ミニコンサート音色軽やか　　原田子楓
一輪車見事操り月を待つ　　楠正三
風呂上がりには新酒ある筈　　萩本勝夫
夜半（ウ）の秋露地裏ぐらし身について　　村井昭三
見目よきひとはすぐに噂に　　勝夫
ぎこちない彼の仕草が可愛くて　　正三
痘痕（あばた）も靨なくて七癖　　実郎
町起しダンス教室賑はへる　　勝夫
シルバーエイジ海に山にと　　昭三
潮を吹く鯨お目当て青ヶ島　　実郎
月冴え冴えとかかる中天　　正三
讃州に金刀比羅宮の鎮座せる　　勝夫
老の脳トレ漢字書取り　　昭三
花簪はじけてヒント閃める　　実郎
数珠子（*じゅずこ）びくびく泳ぎ出すころ　　正三
入学（ナオ）の祝ひは赤きランドセル　　子楓
曽祖父以来しにせ付合ひ　　実郎
鉄漿（おはぐろ）の道具ひっそり蔵の中　　子楓
素直に感謝席を譲られ　　勝夫
五次元の世界実在夏の朝　　正三
富士山開きブロッケン立つ　　昭三
流行の片仮名用語孫に問ひ　　勝夫
百円ショップひやかすが趣味　　実郎
パトカーを呼ばれ言い訳あれこれと　　子楓
本の間にひそむ恋文　　正三
影法師二つづつ減る月明り　　子楓
夜露に語る心ゆくまで　　昭三
落鮒（ナウ）の釣竿宿に置きしまま　　子楓
背戸にひたひた寄せる高潮　　実郎
バーゲンで人格変ることもあり　　勝夫
活断層にゆらぐ原発　　昭三
そつけなき社長釈明花の下　　実郎
すべて忘却春の永き日　　正三

平成十九年六月二十八日首
平成十九年八月二十三日尾
（於・横浜柳川ビル士官室）

*数珠子＝おたまじゃくしのこと

歌仙『陵涼し』

安斎厚子捌

整いて仁徳帝の陵涼し　安斎厚子
乱れも切れも無きは蟻道　伊藤航
信号の時差指示じっと待つならん　小野寺妙子
捨て犬いまだ習い忘れず　笹川圭子
山端に勾玉色の月出でて　井上せつ子
肩で舵取る竿灯の棹　坂本浩子
手作りの柚味噌ようやく得る販路　航
家族写真はみんな笑顔で　浩
いまどきの結納全て略式に　せ
メールアドレス「教えて」と聞き　圭
枕辺に半透明の薬包紙　浩
赤ちゃんポスト賛否両論　せ
月天心宿下駄しまく土産店　妙
熱燗好きな父を憶いき　〃
アラ雨じゃござんせんかと人声の　航
大学野球湧かす佑ちゃん　せ
太からず若木ながら花万朶　航
着流にして闘鶏師なり　子
眺めつつ鼻をほじくる昼気楼　航
飢えすこやかに日曜の朝　福
遠くより鐘の音聞こえ町はずれ　浩
男ばかりのコインランドリー　圭
羅の僧がバイクで風はらむ　妙
原爆絵図に汗拭いたる　福
実印を盗られたなんて言えなくて　妙
ふたり乗りして通う銭湯　浩
知り初めてハシカ休講入りびたり　航
新人研修先ずは挨拶　浩
十和田湖のさざ波もなき月今宵　福
いなご佃煮デパ地下で買い　圭
門口の満天星紅葉にぎやかに　航
自治会長の傘寿巡回　妙
温泉の長逗留に招かるる　福
僻地勤務はネオン恋しき　厚
飛花落花小さき母を隠したり　圭
風呂敷包む薇の束　せ

平成十九年五月二十三日首
平成十九年七月　九日尾
（於・荒町市民センター）

徳島県連句協会

会　長　東條浩士

副会長　竹内菊世・梅村光明

事務局　梅村光明

〒770-0868 徳島市福島1-10-16

(088-652-1989)

香川県連句協会

会　長　鎌田孝義
副会長　植松晴子・広谷高士
　　西岡恭平・今井　盈
事務局　鎌田孝義
〒763-0013 丸亀市城東町1-3-26

福岡県連句協会

会　長　八木紫暁
副会長　守口　薫
事務局　八木紫暁
〒816-0931 大野城市筒井3-13-12
(092-593-2575)

大分県連句協会

会　長　中森順和
事務局　南雲玉江
〒874-0902 別府市青山町8-72
佐々木方
(0977-26-9407)

連句協会広島県支部

支部長　高橋昭三
事務局　同　　上
〒731-0223 広島県安佐北区可部南
4-5-47
(082-815-1914)

宮城県連句協会

会　長　狩野康子
副会長　中村孝史・中村記康
事務局　狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ケ丘
2-5-12
(022-271-0005)

鳥取県連句協会

会　長　音田靛治
副会長　新田幸子・永江重昭
　　高野重子・山崎君子
事務局　田中史郎
〒682-0402 鳥取県東伯郡関金町大鳥
居関金町教育委員会内
(0858-45-2111・FAX3961)

岡山県連句協会

会　長　米林　真
副会長　花房八映
事務局　米林　真
〒700-0904 岡山市柳町2-2-1
(086-222-6176)

山形県連句協会

会　長　内田素舟
副会長　浅沼鶏子・三浦和枝
　　安部英子倍
事務局　内田素舟
〒996-0035 新庄市鉄砲町3-71
(0233-22-1285)

連句協会群馬県支部

支部長　伊藤稜志
事務局　伊藤稜志
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

茨城県連句協会

会　長　堀江信男
副会長　西　幾多・城　依子
事務局　根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会　長　諏訪欣二
事務局　中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

静岡県連句協会

会　長　石渡蒼水
副会長　中村雄爾・宮沢次男
　　久保田静男
事務局　宮沢次男
〒414-0051 伊東市吉田保代山
(0557-45-2244)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

支部長　大西素之
副会長　井上雨道・岡本　眸
　　戒能多喜
事務局長　山口博三
〒791-0311 松山市白水台1-1-9
(089-927-3231)

連句協会関西支部

支部長　近松寿子
事務局　同　　上
〒567-0048 茨木市北春日丘2-13-7
(0726-23-8817)

連句協会石川県支部

支部長　藤江紫虹
事務局　宮嶋　茂
〒929-0393 石川県河北郡津幡町字
加賀爪ニ3　津幡町役場
(076-288-2123)

連句協会三重県支部

支部長　岡本耕史
事務局　西田青沙
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

埼玉県連句協会

顧　問　金子兜太・宇咲冬男
会　長　磯　直道
副会長　白根順子・福田太ろを
事務局長　石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
寄居535
(048-581-5943)

岐阜県連句協会

会　長　伊藤百雲
副会長　水野　隆
理事長　大野鵠士
事務局　松尾一歩
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
横山ビル
(058-274-9479)

連句協会千葉県支部

顧　問　上田渓水・伊藤藪彦
下鉢清子・浅野黍穂
支部長　引地冬樹
副支部長　東浦佳子・斎藤一灯
幹事長兼事務局長　伊藤貴子
〒264-0006 千葉市若葉区小倉台1-12-3
(043-233-3555)

連句協会岩手県支部

支部長　小原啄葉
副支部長　志和正巳　菅原多つを
事務局　沼宮内凌子
〒020-01 盛岡市西青山2-4-41
(0197-46-5164)

連句協会栃木県支部

支部長　中尾硫苦
副支部長　高井利夫・田中きみ
田浪富布
事務局長　富田昌宏
〒329-4406 栃木県下都賀郡大平町
下皆川721
(0282-43-2664)

連句協会富山県支部

支部長　二村文人
事務局
〒930 富山市大手5-1　富山新聞社内
(0764-91-8111)

1. 事業計画および収支予算についての事項
2. 事業報告および収支決算についての事項
3. 役員の選任
4. その他この会の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

(総会の議決方法)

第22条 総会の議事は会員である出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第7章 会 計

(会計の種類)

第23条 この会の会計は次のとおりとする。

1. 経常会計
2. 特別会計

(経常会計)

第24条 経常会計の収入は会費、協力金その他とし、これによってこの会の経常的運営の支出にあてる。

(特別会計)

第25条 特別会計の収入は連句グループ、会員、関係団体等よりの寄付金とし、これを基金として積み立てるものとする。

(経常会計の剰余金)

第26条 経常会計に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を経て、その一部もしくは全部を特別会計の基金へ繰り入れることができる。

(会計年度)

第27条 この会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第8章 規約の変更

(規約の変更)

第28条 この規約は理事会において理事現在数の4分の3以上の議決を経、かつ総会において出席者の4分の3以上の議決を経なければ変更することができない。

第9章 解 散

(解散)

第29条 この会の解散については前条に定める手続きを準用する。

この規約の制定、施行は昭和63年10月1日とする。

平成2年9月1日 一部改訂。
平成8年6月23日 一部改訂。
平成16年4月18日 一部改訂。
平成18年3月19日 一部改訂。

『連句協会』顧問・役員名簿

(顧 問) 宇咲冬男・土屋実郎・上田渓水・小林しげと・近松寿子

(役 員)

会 長 磯 直道

副会長 中尾青宵・引地冬樹・品川鈴子

理事長 宮下太郎

常任理事 青木秀樹・伊藤百雲・伊藤稜志・今村 苗・臼杵游児・小川廣男・川野蓼艸・島村暁巳・白根順子・福田太ろを・八木紫暁・和田忠勝・狩野康子

理 事 伊藤貴子・井門可奈女・梅村光明・岡本 眸・鈴木 漠・高橋昭三・西 幾多・二村文人・松尾博雄・矢崎 藍・富田昌宏・大西素之・小池正博・近藤蕉肝・城 依子

会 計 臼杵游児(兼)・島村暁巳(兼)

監 事 内藤 廣・東浦佳子

『連句協会』規約

第1章　総　　則

（名称）

第1条　この会は連句協会という。

（事務所）

第2条　この会の事務所は会長の指定する場所に置く。

（支部）

第3条　この会は理事会の議決を経て必要の地に支部を置くことができる。

第2章　目的および事業

（目的）

第4条　この会は連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とする。

（事業）

第5条　この会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催
2. 会報（隔月）の発行
3. 連句年鑑の出版
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援と参加
6. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章　会　　員

（種別）

第6条　この会の会員は次のとおりとする。

1. 正会員

（入会）

第7条　正会員になろうとする者は、入会金2千円と所定の会費を納入することにより入会できるものとする。

（会費）

第8条　この会の会費は次のとおりとする。

1. 正会員　　年額3千円

但し1月から12月まで

（資格の喪失）

第9条　会員は次の事由によってその資格を喪失する。

1. 退会したとき
2. 理由なくして会費を2年以上滞納したとき

（退会）

第10条　会員が退会しようとするときは退会届を会長に提出しなければならない。

第4章　役　　員

（種別）

第11条　この会には次の役員を置く。

1. 理事　35名以内（うち会長1名、副会長5名以内、理事長1名、常任理事若干名）
2. 監事2名

（役員の選任）

第12条　理事および監事は会員のなかから総会でこれを選任する。会長、副会長、理事長および常任理事は理事会の互選でこれを定める。

（理事の職務）

第13条

1. 会長はこの会の業務を総理しこの会を代表する。
2. 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
3. 理事長は会長、副会長を補佐してこの会の業務を掌理する。
4. 常任理事は会長、副会長および理事長を補佐し理事会の議決に基づき業務に従事する。
5. 理事は理事会を組織して業務を行う。

（監事の職務）

第14条　監事は会の会計を監査する。

（役員の任期）

第15条　この会の役員の任期は2年とする。但し、再任を妨げない。

第5章　顧　　問

（顧問）

第16条　この会に顧問を置くことができる。顧問は理事会の議決を経て会長が委嘱する。顧問はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。顧問は会費を納めることを要しない。

第6章　会　　議

（理事会）

第17条　理事会は原則として年3回会長が招集する。理事会の議長は会長とする。理事会の運営については別に定めるところによる。

（常任理事会）

第18条　常任理事会は原則として隔月に会長が招集する。常任理事会の運営については別に定めるところによる。

（総会）

第19条　総会は毎年1回会長が招集する。また必要と認めたとき会長は臨時に総会を招集することができる。

（総会の議長）

第20条　総会の議長は会長がこれを務める。

（総会の議決事項）

第21条　総会は次の事項を議決する。

連　句　協　会　規　約

前平2-16-2-502池　央耿(044-855-8546)

若泉連句会

川田　章夫

師系・宇咲冬男　連絡先372-0842伊勢崎市馬見塚町1121-4川田章夫(0270-32-8410)会員8名

和光大学

深沢　眞二

連絡先406-0002山梨県東山梨郡春日居町別田520-3深沢眞二

若笹連句会

笹川　圭子

連絡先982-0003仙台市太白区郡山2-9-11笹川圭子(022-246-2892)会員8名

ワラハナ連句会

児玉　俊子

連絡先336-0012さいたま市浦和区岸町1-11-12児玉俊子(048-886-8820)

未来図連句会

鍵和田秞子

連絡先108-0074港区高輪2-1-51-302鍵和田秞子会員13名

Web BBS めぎつね座

八木　聖子

連絡先471-0822豊田市水源町4-1-16矢崎　藍(0565-26-9324)会員不特定数

目黒連句会

渡邊　　博

師系・宮下太郎　連絡先152-0001目黒区中央町2-25-1-204渡邊　博

メヌエット若い現代連句の会

川端　秀夫

連絡先152-0035目黒区自由が丘2-15-9-302メヌエットの会事務局(03-3724-4263)会員3名

「もん」の会

川野　蓼艸

連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(042-485-5480)

木　曜　会

青野　竜斗

連絡先791-0204愛媛県温泉郡重信町志津川98-5青野竜斗

八千草連句会

山元志津香

師系・宇咲冬男　連絡先215-0006川崎市麻生区金程4-9-8山元志津香(044-955-9886・FAX 9882)会員30名

やまくに連句の会

水谷純一郎

連絡先871-0712大分県下毛郡山国町守実水谷純一郎(0979-62-2009)会員33名

山利喜会

粒針　　修

連絡先364-0014北本市二ツ家2-51粒針　修(048-592-8957)会員8名

大和屋別荘連句の会

やみつくば会

下房　桃庵

連絡先690-0823松江市西川津町1060島根大学文学部内下房桃庵(0852-32-6206)会員6名

弥　生　会

林　　道子

師系・岡本春人・岡本星女　連絡先563-0341大阪府豊能郡能勢町宿野1507林　道子(0727-34-0023)会員5名

瑶沙連句会

土屋　実郎

師系・清水瓢左　連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員15名

葉門連句会

井口　昌亮

師系・宇田零雨・木村葉山　連絡先156-0057世田谷区上北沢3-28-13内田たづ(03-3303-5457)会員11名

よみうり文化センター川口

磯　　直道

師系・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)

よみうり文化センター京葉

引地　冬樹

師系・今泉宇涯　連絡先274-0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹(047-448-7260)会員10名

ラピロス連句会

本屋　良子

師系・東　明雅・國島十雨　連絡先248-0008逗子市小坪2-12-6本屋良子TEL&FAX(0467-25-5139)

落柿舎連句会

奥西　　保

連絡先616-8395京都市右京区嵯峨小倉山落柿舎奥西　保(075-881-1953)会員9名

竜神連句会

長坂　節子

師系・矢崎　藍　連絡先471-0027豊田市喜多町4-53長坂節子会員15名

連句ななの会

土屋　実郎

連絡先223-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

鈴峰連句会

北川　英昭

連絡先513-0012鈴鹿市石薬師町35-1北川英昭(059-374-1784)会員7名

連句会未恋座

金枝　　純

連絡先459-8004名古屋市緑区有松南501-E-102金枝　純(052-624-5149)会員4名

連句会遊子座

和田　忠勝

師系・清水瓢左　連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員25名

連句会「遊」

小野寺妙子

連絡先980-0005仙台市青葉区梅田町4-28小野寺妙子(022-233-0693)会員5名

連句倶楽部

城　　依子

師系・宇咲冬男　連絡先300-1636茨城県北相馬郡利根町羽根野800-55城　依子(0297-68-4424)会員10名

連句「笹」

伊藤　敬子

連絡先465-0083名古屋市名東区神丘町2-51-1伊藤敬子(052-701-5050)会員7名

連句研究会

小林　　梁

師系・松根東洋城・野村喜舟　連絡先214-0012川崎市多摩区中野島4-23-14小林　梁(044-922-7868)

連句パワー

浅沼　　璞

師系・眞鍋天魚　連絡先241-0825横浜市旭区中希望ヶ丘97-14浅沼　璞(045-362-2717)

連　楽　会

高畑　白遊

師系・阿片瓢郎　連絡先168-0063杉並区和泉4-26-15高畑白遊(03-3323-2454)会員10名

鹿　吟　舎

池　　央耿

連絡先216-0006川崎市宮前区宮

燧連句会

植松　晴子

師系・鈴木春山洞　連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

菱の実会

巌　　涼江

師系・中尾青宵　連絡先210-0824川崎市川崎区日ノ出1-15-11-202巌　涼江(044-277-5143)

PC-VAN電脳連句

木原　幹雄

連絡先185-0014国分寺市東恋ヶ窪2-29-3木原幹雄

美々っと連句会

成田　淑美

師系・宇咲冬男　連絡先354-0018富士見市西みずほ台3-6-1-402成田淑美(049-252-6318)会員15名

ひよどり連句会

品川　鈴子

師系・橋　閒石　連絡先651-1123神戸市北区ひよどり台1-17-1品川鈴子(078-741-4472)会員74名

ひょんの会

松本　昌子

連絡先650-0046神戸市中央区港島中町6-2-1-2-912松本昌子(078-303-0780)会員4名

連句会ひらめき

狩野　康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員8名

広野連句会

村木佐紀夫

連絡先520-0026大津市桜野町1-13-16村木佐紀夫(0775-22-5444)会員15名

風蘭連句会

岡田　陽邨

連絡先514-0058津市安東町1941岡田陽邨(059-228-0962)会員4名

風蘭社連句会

師系・東　明雅

富士裾野連句会

中村　雄爾

連絡先410-1126裾野市桃園154中村雄爾(055-992-0264)会員16名

富士裾野ひよ子連句会

宮原うた子

連絡先410-1127裾野市平松611-1宮原うた子(055-992-2932)会員8名

ふらくたる

藤井　　清

連絡先655-0007神戸市垂水区多聞台5-3-34藤井　清(078-781-7766)

紅　の　会

神山　愛子

連絡先502-0017岐阜市長良雄総195-2神山愛子会員5名

ほほほ連

大久保風子

連絡先330-0053さいたま市浦和区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員11名

ほれぼれ座

永渕　　丹

師系・狩野康子　連絡先981-0952仙台市青葉区中山7-4-14永渕　丹(022-278-7387)会員6名

北杜連句塾

狩野　康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双葉が丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員15名

匂玉の会

山口　龍一

連絡先516-0078伊勢市曽祢2-1-16山口龍一(0596-28-5343)会員5名

松山連句協会

大西　素之

連絡先791-0113松山市白水台4-12-11大西素之(086-923-3993)会員10名

松山連句教室

井上　弥生

師系・宇田零雨　連絡先790-0045松山市余戸中2-13-19井上弥生(089-973-6055)

摩天楼連句会

星野　石雀

師系・野村牛耳　連絡先262-0046千葉市花見川区花見川2-6-105星野石雀(043-286-0725)会員6名

窓連句会

高月三世子

師系・名古則子　連絡先157-0041杉並区善福寺2-23-11東京女子大同窓会連句の会高月三世子(03-3395-4448)会員11名

摩耶連句会

佐野　千遊

師系・橋　閒石　連絡先654-0075神戸市須磨区潮見台町3-2-30佐野千遊(078-731-0334)会員11名

丸亀連句会

今井　水映

連絡先763-8619丸亀市土器町1-18平和写真印刷㈱気付今井水映(0877-23-1300)会員6名

三重県連句協会

岡本　耕史

連絡先512-0921四日市市尾平町3768-188西田青沙(0593-32-8931)

宮城県連句協会

狩野　康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)

三河連句会

斉藤　吾朗

師系・宮下太郎　連絡先445-0806西尾市伊藤町伊藤前15-1斉藤吾朗(0563-57-8332)会員12名

三豊連句会

植松　晴子

連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

水無月連句会

堀江　信男

連絡先310-0903水戸市堀町1147-18堀江信男(029-252-2634)会員12名

美晴連句会

土屋　実郎

連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-943-8059FAX846-1526)会員6名

栃木県連句協会

中尾　硫苦

連絡先329-4406栃木県下都賀郡大平町下皆川721富田昌宏(0282-43-2664)

富山県連句協会

二村　文人

連絡先930-0123富山市呉羽富田町4143-18二村文人(076-436-2257)会員40名

とよあけ連句会

永坂　博美

師系・矢崎　藍　連絡先470-1152豊明市前後町仙人塚1736-144永坂博美(0562-92-1030)会員18名

どん・あ・くらぶ

豊島　呑烏

師系・鈴木春山洞　連絡先790-0844松山市道後一万11-13豊島呑烏(089-926-2331)会員7名

なでしこ連句会

大平　堯子

連絡先874-0902別府市青山町8-13村橋公子(0977-23-6526)

長尾連句会

砂井斗志男

師系・渡邉陽行　連絡先769-2302香川県大川郡長尾町西683-10砂井斗志男(0879-52-4391)会員10名

渚の会

西岡　恭平

師系・長谷川ひさを　連絡先760-0011高松市浜ノ町60-25-705西岡恭平(087-851-9006)会員9名

夏炉の会

岩村　牙童

連絡先781-0252高知市瀬戸東町2-323岩村牙童(0888-42-7656)会員20名

習志野連句会

師系・阿片瓢郎　会員7名

南草連句会

田島　竹四

連絡先517-0506三重県志摩郡阿児町国府南草1120-69田島竹四(05994-3-1846)会員9名

にほんご連句会

岡本　康子

連絡先182-0006調布市西つつじが丘2-5-2岡本康子(03-3326-0496)会員10名

日本作家クラブ連句会

市村美就夫

連絡先150-0012渋谷区広尾3-17-4-205中島まさし(03-3407-5368)会員20名

猫蓑会

青木　秀樹

師系・東　明雅・根津芦丈　連絡先182-0003調布市若葉町2-21-16青木秀樹(03-3309-0953)会員170名

拈華連句会

近藤　蕉肝

連絡先102-0074千代田区九段南3-3-3横山わこ(03-3261-4425)会員10名

能登川連句友遊クラブ

長谷川美雄

連絡先521-1204東近江市小川町668長谷川美雄

俳諧工房

窪田　阿空

連絡先359-1146所沢市小手指南2-33-12窪田阿空(0429-48-6618)会員6名

俳諧田園（協会主催）

中尾　青宵

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵

俳諧文芸考究会

中尾　青宵

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)E:sss@f07.itscom.net

白水台連句会

山口　博三

師系・宇田零雨・寺岡情雨　連絡先791-0113松山市白水台1-1-9山口博三(089-927-3231)会員4名

白塔歌仙会

佐藤俊一郎

連絡先350-0275坂戸市伊豆の山町17-30佐藤俊一郎会員11名

芭蕉記念館連句会

宇咲　冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先135-0003江東区猿江1-2-2-501松澤晴美(03-3634-4094)会員20名

巴世里連句会

各務　恵紅

師系・東　明雅・國島十雨　連絡先500-8367岐阜市宇佐南1-2-5各務恵紅(058-273-0539)会員20名

八戸俳諧倶楽部

名久井白好

連絡先039-1114八戸市北白山台3-6-8森きよし(0178-27-0311)

花野連句会

小出きよみ

師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先390-0821松本市筑摩東2419小出きよみ(0263-25-5436)会員11名

はねだ連句会

内海　良太

師系・名古則子　連絡先216-0001川崎市宮前区野川3138-17山口和義(044-777-2460)会員16名

羽曳野連句会

西田　舟人

連絡先583-0864羽曳野市羽曳が丘3-16-9西田舟人(0729-56-3576)

浜風

城倉　吉野

師系・加藤亀女　連絡先241-0831横浜市旭区今宿2666-1城倉吉野(045-391-2362)会員15名

祓川

黒田　耕三

師系・鈴木春山洞　連絡先791-8083松山市新浜9-25黒田耕三(0899-51-2889)会員9名

芭流朱連句会

師系・松根東洋城

B面

内田さち子

師系・名古則子　連絡先176-0023練馬区中村北4-23-4内田さち子(03-3970-2468)会員5名

戒能　多喜
師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先791-0312東温市則之内乙2590-3戒能多喜(0899-66-3096)会員7名

浅春連句会

谷敷　寛
連絡先112-0003文京区春日2-25-2谷敷　寛(03-3811-8519)会員9名

せんだい座

伊藤　直子
連絡先981-8003仙台市泉区南光台3-3-9伊藤直子(022-233-7732)会員9名

宗祇法師研究会

林　茂樹
師系・金子金治郎　連絡先521-1200滋賀県神崎郡能登川町泉台215-24林　茂樹(0748-42-2037)会員8名

草門会

川野　蓼舟
師系・野村牛耳　連絡先112-0006文京区小日向1-1-8-505村松定史(03-3943-6494)会員10名

啐啄会

柏原　和宏
師系・石沢無腸・森　三郎　連絡先369-1203埼玉県大里郡寄居町寄居958-2柏原和宏(048-581-0087)会員11名

染井の会

蒲　幾美
師系・中村俊定　連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36蒲　幾美(044-955-8726)

大智院連句会

岡本　耕史
師系・名古則子　連絡先511-1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員6名

第六天連句会

浅野　黍穂
師系・上甲平谷・清水瓢左　連絡先272-0836市川市北国分1-2-19星野恵則(047-372-6448)会員30名

高田馬場連句会

佐伯　俊介
連絡先273-0005船橋市本町6-16-9佐伯俊介(0474-22-5782)

多度津連句会

師系・鈴木春山洞　連絡先764-0003香川県仲多度郡多度津町青木169

多摩連句会

宮下　太郎
連絡先206-0034多摩市鶴牧2-26-1-112宮下太郎(042-374-7002)

遅刻坂連句会

大久保風子
連絡先330-0053さいたま市浦和区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員20名

中央連句会（協会主催）

連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

千代の会

奥村富久女
連絡先606-8433京都市左京区永観堂西町20奥村富久女(075-771-0767)

土筆・有楽帖三吟会

遠藤　嘉章
連絡先214-0039川崎市多摩区栗谷1-14-16遠藤嘉章

筑波連句会

引地　冬樹
師系・今泉宇涯　連絡先274-0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹(0474-48-7260・FAX7274)会員16名

つばさ連句会

八尾暁吉女
師系・磯　直道・矢崎硯水　連絡先678-0232赤穂市中広841八尾暁吉女(0791-43-6117)

津幡連句クラブ

藤江　紫虹
師系・今泉宇涯　連絡先929-0393石川県河北郡津幡町字加賀爪二3津幡町役場宮嶋　茂(076-288-2123)会員26名

つらつら吟社

榊原　由美
連絡先516-0072伊勢市宮後1-10-16榊原由美TEL&FAX(0596-28-2284)

天神連句会

八木　紫暁
連絡先816-0931大野城市筒井3-13-12八木紫暁(092-593-2575)

東京義仲寺連句会馬山人記念会

師系・野村牛耳・高藤馬山人　連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼舟(0424-85-5480)会員10名

桃雅会

杉山　壽子
師系・東　明雅・式田和子　連絡先464-0032名古屋市千種区猫洞通1-5-1-409杉山壽子(052-782-3751)会員15名

道後連句会

井上　和久
師系・宇田零雨　連絡先791-8031松山市北斉院町1040-3井上和久(089-971-2727)会員8名

刀水の宴連句会

太田　博
連絡先253-0054茅ヶ崎市東海岸南6-3-33太田　博(0467-87-5703)

桃夭樹唫聚

赤田玖實子
師系・根津芦丈・清水瓢左　連絡先228-0818相模原市上鶴間本町8-3-6赤田玖實子

徳島県連句協会

東條　士郎
連絡先770-0868徳島市福島1-10-16梅村光明(088-652-1989)会員30名

徳島連句懇話会

高田　保二
連絡先650-0046神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木　漠(078-302-2230)会員3名

都心連句会

和田　忠勝
師系・清水瓢左・大林柚平・土屋実郎　連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員30名

渡文子(058-231-1716)会員8名

獅子門花わさび

森川　淳子
師系・國島十雨　連絡先509-7205恵那市長島町中野829-3森川淳子(0573-25-4864)会員11名

獅子門藜杖社

瀬尾　千草
師系・國島十雨　連絡先502-0857岐阜市正木1979-25瀬尾千草(058-231-2400)会員23名

獅子門麗水社

田辺　桂月
師系・國島十雨　連絡先502-0879大垣市新町2-67田辺桂月(0584-78-4693)会員19名

獅子門友楽社

矢崎　初美
師系・國島十雨　連絡先503-2213大垣市赤坂町2072-2矢崎初美(0584-71-0298)会員8名

静岡県連句協会

石渡　蒼水
連絡先414-0051伊東市吉田保代山宮沢次男(0557-45-2244)会員25名

下町連句会

伊藤　哲子
連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員10名

紫薇の会

澁谷　道
師系・橋閒石　連絡先558-0002大阪市住吉区長居西1-9-2渋谷　道(06-6691-1395)会員8名

四宮会

式田　恭子
師系・東明雅・式田和子　連絡先107-0062港区南青山7-3-3-501式田恭子(03-3498-0029)会員10名

朱の会

柴田　由乃
連絡先503-0937大垣市釜笛1-177-2柴田由乃(058-273-4499)会員9名

樹氷連句会

犬島　正一
連絡先939-8083富山市西中野本町5-14犬島正一(0764-21-3494)

湘南吟社

小林　静司
師系・根津芦丈・清水瓢左　連絡先141-0031品川区西五反田6-23-8小林静司(03-3492-2983)会員10名

湘南連句うらら会

橘　文子
師系・東　明雅　連絡先195-0074町田市山崎町2130-6-2-105橘　文子

正風

藤野　鶴山
師系・寺崎方堂　連絡先520-0822大津市秋葉台35－9正風発行所藤野鶴山(0775-25-9159)会員100名

正風大府支部

久野　渓流
師系・寺崎方堂　連絡先470-1143豊明市阿野町上納91-6鈴置一花(0562-92-4521)会員25名

正風和気支部

桐山　北天
師系・寺崎方堂　連絡先709-0441岡山県和気郡和気町衣笠171桐山北天(0869-92-0807)会員10名

上毛連句会

伊藤　稜志
師系・宮下太郎　連絡先371-0811前橋市朝倉町3-5-37伊藤稜志(027-261-2297)会員15名

白河連句会

荒井美三雄
連絡先330-0841さいたま市大宮区東町2-203-1-502荒井美三雄(048-644-6446)会員5名

しらさぎ連句会

森川　年
師系・寺岡情雨　連絡先799-1303西条市河原津甲484-1森川年(0898-66-5232)会員3名

白魚連句会

岡本　耕史
連絡先511-1112桑名市長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員3名

泗楽連句会

西田　青沙
連絡先512-0921四日市市尾平町3768-188西田青沙(0593-32-8931)会員9名

城

瀬尾喜代子
師系・名古則子　連絡先514-2317津市安濃町前野24瀬尾喜代子(059-268-0267)会員5名

尋牛会

師系・矢崎　藍　連絡先460-8445名古屋市中区栄4-16-36㈱電通中部支社内(052-263-8324)会員8名

信州大学連句会

宮坂　静生
師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先399-0025松本市寿台4-5-3宮坂静生(0263-57-2461)会員40名

新庄・氷室の会

永沢　安栄
師系・笹　白州　連絡先996-0082新庄市北町5-19永沢安栄会員6名

新庄北陽社

内田　武
師系・春秋庵幹雄　連絡先996-0035新庄市鉄砲町3-71内田　武

深大寺連句会

吉成　正夫
連絡先179-0085練馬区早宮3-34-22吉成正夫(03-3994-8055)会員20名

篠

岡田　史乃
連絡先107-0052港区赤坂6-9-4-301岡田史乃(03-3582-0081)

粋酔連句会

奥山　晃希
連絡先277-0823柏市布施新町3-4-5奥山晃希(04-7139-8253)

成城連句会

臼杵　游児
連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-22臼杵游児(045-971-3293)会員6名

清流連句会

連絡先501-4216岐阜県郡上郡八幡町本町天野收一(0575-65-1591)

くさくきスコーレ連句会

高須　節子

師系・磯　直道　連絡先599-8114堺市日置荘西町2-39-1高須節子(072-285-0588)会員16名

くすのき連句会

牧野　正弘

連絡先158-0098世田谷区上用賀6-3-8-103牧野正弘(03-3426-4698)会員8名

くのいち連句会

内山　秀子

師系・暉峻桐雨　連絡先101-0047千代田区内神田2-12-5内山回漕店方内山秀子(03-3252-2941)会員8名

熊谷梶の葉連句会

山司　美子

師系・宇咲冬男　連絡先364-0035北本市西高尾7-83川岸冨貴(048-591-5208)

栗の木連句会

白井　風人

連絡先214-0005川崎市多摩区寺尾台1-15-9白井風人(044-955-3393)会員5名

耕

加藤　耕子

連絡先467-0067名古屋市瑞穂区石田町1-36加藤耕子(052-841-5054)

興聖寺連句会

岡本　眸

師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先790-0052松山市竹原町1-4-1岡本　眸(0899-45-1154)

高知癒しの連句桜蓼会

山崎　曙

師系・寺田寅彦　連絡先780-0010高知県高岡郡窪川町窪川1145-5山崎　曙(08802-2-2097)会員15名

郡山連句会

堀越ふみ子

連絡先969-1103福島県安達郡本宮町二井田下の原28-124堀越ふみ子

国際連句協会

塚本田天志

連絡先273-0048船橋市丸山2-45-35塚本田天志TEL&FAX(047-438-2380)

小瀬川連句会

永野　薫

連絡先739-0646大竹市栗谷町大栗林739永野　薫(08275-6-0344)

ころも連句会

矢崎　藍

師系・東　明雅　連絡先470-0335豊田市青木町1-71-9由川慶子(0565-46-2236)会員22名

柴　庵

中尾　青宵

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)E:sss@f07.itscom.net

栄連句サロン

間瀬　芙美

師系・矢崎　藍　連絡先471-0066豊田市栄町6-6-10間瀬芙美会員15名

佐久良連句会

井門可奈女

師系・栗田楞堂・富田狸通　連絡先790-8503松山市湊町4-6-6丸三書店内井門可奈女(089-931-8501)会員7名

さくら連句会

中世古正郎

連絡先519-0601伊勢市二見町松下2085中世古正郎(0596-43-3177)会員4名

さくら草連句会

小林しげと

連絡先334-0001鳩ヶ谷市桜町4-4-4-301小林しげと(048-281-8161)

さつき会

中森　順和

連絡先874-0902別府市青山町8-72南雲玉江(0977-26-9407)

里の会

菅谷　有里

師系・清水瓢左　連絡先248-0017鎌倉市佐助1-14-9菅谷有里

清の會

下鉢　清子

連絡先277-0052柏市増尾台2-13-5下鉢清子(04-7172-7549)会員30名

三尺童

丹下　博之

連絡先338-0012さいたま市中央区大戸4-6-3丹下博之(048-832-3727)会員10名

三川連句会

磯部　摂子

連絡先501-6242羽島市竹鼻町錦町35磯部摂子(058-391-2288)会員23名

鹿の会

宮下　太郎

師系・松根東洋城・野村喜舟　連絡先206-0034多摩市鶴牧2-26-1-112宮下太郎(042-374-7002)

滋賀連句友遊クラブ

長谷川美雄

連絡先521-1204滋賀県神崎郡能登川町小川668長谷川美雄(0748-42-1029)

慈眼舎

赤田玖實子

師系・清水瓢左・三好龍肝　連絡先228-0818相模原市上鶴間本町8-3-6赤田玖實子(0427-45-0407)会員7名

重信・木曜会

青野　竜斗

連絡先791-1101松山市久米窪田町971-39青野竜斗(089-970-2846)会員5名

獅子門

伊藤　百雲

師系・各務支考　連絡先503-0026大垣市室村町4-156伊藤百雲(0584-73-0774)会員100名

獅子門又玄社

成瀬　貞子

師系・國島十雨　連絡先501-1159岐阜市西改田松の木157成瀬貞子TEL&FAX(058-239-1762)会員10名

獅子門源氏連句会

船渡　文子

師系・國島十雨　連絡先502-0817岐阜市長良福光2521-12船

笹　貞子

風の道連句会

白井　風人
連絡先214-0005川崎市多摩区寺尾台1-15-9白井風人(044-955-3393)会員2名

河童連句会

矢崎　硯水
師系・宇田零雨　連絡先392-0004諏訪市諏訪2-10-22矢崎硯水(0266-52-0251)会員15名

勝山連句会

井手　光子
師系・松根東洋城・佐伯巨星塔
連絡先790-0878松山市勝山町2-155-1-501井手光子

花　扇　会

宮　　県人
連絡先344-0116埼玉県北葛飾郡庄和町大衾600-4二宮方宮　県人(0487-46-1443)会員5名

桂　の　会

臼杵　游児
連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-22臼杵游児(045-971-3293)会員16名

金石公民館俳諧研究会

松本　若花
連絡先920-0337金沢市金石西4-5-32松本若花(0762-67-1045)

かびれ連句会

大竹多可志
師系・大竹孤悠　連絡先116-0011荒川区西尾久8-30-1-1416大竹多可志(03-3819-1459)

加納句会

小瀬　渺美
師系・各務於菟　連絡先500-8472岐阜市加納清野町14小瀬渺美(058-273-1591)会員5名

兜　の　会

山下七志郎
連絡先923-0938小松市芦田町2-2松下京子(0761-21-3464)会員18名

からむし庵連句会

根津　芙紗
師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先396-0000伊那市山寺区山本町3185根津芙紗(0265-78-4723)会員18名

歌林連句会

坂手　手留
連絡先185-0011国分寺市本多1-11-13小向敏江(042-321-0825)会員20名

歌留蓑連句会

金子　鳴陣
連絡先220-0061横浜市西区久保町48-14金子鳴陣会員18名

川内連句会

小倉　静波
師系・松根東洋城・阿片瓢郎
連絡先791-0311東温市則之内2153-1小倉静波(089-966-2781)会員3名

神田川連句会

岡部桂一郎
連絡先134-0085江戸川区南葛西7-1-6-201松井青堂(03-3680-0053)

神田義仲寺連句会

伊藤　秀峰
師系・斉藤石叟　連絡先101-0047千代田区内神田1-6-6伊藤秀峰(03-3292-0835)

観音寺連句会

野口　雅澄
連絡先768-0040観音寺市柞田町油井野口雅澄(0875-25-0979)会員8名

神田分教場連句会

川名　將義
連絡先232-0076横浜市南区永田台48-16川名将義(045-713-1388)

きさらぎ連句会

小池　正博
連絡先594-0041和泉市いぶき野2-20-8小池正博(0725-56-2895)会員10名

其　角　座

土屋　実郎
連絡先257-0024秦野市名古木117-1二上貴夫(0463-82-6315)会員13名

義仲寺横浜戸塚連句会

八木　荘一
連絡先245-0067横浜市戸塚区深谷町671八木荘一(045-851-1655)会員17名

義仲寺連句協会

師系・斉藤石叟　連絡先520-0802大津市馬場1-5-12義仲寺(0775-23-2811)会員15名

岐阜県連句協会

伊藤　百雲
師系・各務支考　連絡先502-0817岐阜市長良福光2521-12船渡文子(058-231-1716)

錦　心　会

渡部　伸居
師系・野村喜舟　連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)会員10名

句華苑吟社

吉本　世紀
連絡先328-0036栃木市室町1-13吉本画廊内吉本世紀(0282-23-3665)

くさくき

磯　　直道
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)会員240名

くさくき川口支部

磯　　直道
師系・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)会員25名

くさくき北九州支部

守口　　薫
師系・宇田零雨　連絡先871-0811福岡県築上郡吉富町大字広津915守口　薫(0979-23-3145)会員25名

くさくき松山支部

寺岡　情雨
師系・宇田零雨　連絡先791-0113松山市白水台4-12-8寺岡情雨(089-923-6028)会員10名

草笛連句会

大西　素之
師系・寺岡情雨　連絡先791-0113松山市白水台4-12-12大西素之(089-923-3993)

郡上みよし野連句会

天野　收一

伊賀連句会

奥田　雅生

師系・清水瓢左・名古則子　連絡先514-0804津市上弁財津興3212奥田雅生(059-226-7533)会員8名

伊勢原連句会

近藤　蕉肝

連絡先259-1141伊勢原市上粕屋1766大津博山(0463-94-3402)会員13名

五十鈴吟社

山口　圭子

師系・清水瓢左・名古則子　連絡先519-0502伊勢市小俣町相合605山口圭子(0596-22-2877)会員3名

いさよひの会

鈴木美智子

連絡先177-0032練馬区谷原5-20-14鈴木美智子(03-3925-5930)会員4名

石手寺連句会

岡本　眸

師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先790-0052松山市竹原町1-4-1岡本　眸(089-945-1154)会員8名

伊豆芭蕉堂連句会

石渡　蒼水

師系・斉藤石叟　連絡先414-0014伊東市弥生町3-2石渡蒼水(0557-37-1831)会員10名

市川俳諧教室

伊藤　貴子

師系・宇田零雨・今泉宇涯　連絡先264-0006千葉市若葉区小倉台1-12-3伊藤貴子(043-233-3555)

一粋会

師系・高藤馬山人・浜本青海

連絡先166-0001杉並区阿佐ヶ谷北5-33-9大城里水(03-3338-1353)会員15名

いなみ連句の会

山本　秀夫

師系・東明雅・二村文人　連絡先932-0211南砺市井波2077-1山本秀夫TEL&FAX(0763-82-0270)会員31名

茨城県連句協会

堀江　信男

連絡先319-1225日立市石名坂町1-31-9根本美茄子(0294-53-6635)

茨の会

近松　寿子

連絡先567-0048茨木市北春日丘2-13-7近松寿子(0726-23-8817)会員25名

岩手県連句協会

小原　啄葉

連絡先020-0132盛岡市西青山2-4-41沼宮内凌子(0197-46-5164)

Web SIG 電脳連句

木原　幹雄

連絡先185-0014国分寺市東恋ヶ窪2-29-3木原幹雄

ＮＨＫ文化センター青山

土屋　実郎

連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員12名

大分県連句協会

中森　順和

連絡先847-0902別府市青山町8-72事務局南雲玉江

桜花学園大学連句研究会

矢崎　藍

連絡先471-0057豊田市大平町七曲12-1比較文化学科424研究室(0565-35-3131)

桶川連句会

福田太ろを

連絡先363-0028桶川市下日出谷西2-6-4福田太ろを(048-787-4477)会員10名

丘の上連句会

中尾　青宵

連絡先206-0031多摩市豊ヶ丘1-40-2-203塙　於玉(042-375-2543)会員15名

奥美濃連句会

水野　隆

連絡先501-4226岐阜県群上郡八幡町新町929おもだか家水野隆(05756-5-3332)会員13名

小郡連句会

河野　玄磨

師系・松根東洋城・阿片瓢郎

連絡先754-0000山口県吉敷郡小郡町津市上河野玄磨(08397-2-0599)会員5名

おたくさ(OTAKSA)の会

鈴木　漠

連絡先650-0045神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木　漠(078-302-2230)会員8名

小野連句会

渡部　伸居

師系・松根東洋城・阿片瓢郎

連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居(089-975-1532)

おぼろ連句会

藤本　純一

師系・鈴木春山洞　連絡先790-0062松山市南江戸5-2-26藤本純一(089-925-8279)会員6名

貝の会

戸田　貝江

師系・阿片瓢郎　連絡先183-0055府中市府中2-31-9戸田貝江(0422-68-6063)会員6名

海市の会

鈴木　漠

連絡先650-0046神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木　漠(078-302-2230)会員4名

解纜

別所真紀子

師系・野村牛耳・林　空花　連絡先166-0003杉並区高円寺南5-23-8服部秋扇(03-3314-0655)

蛙の会

中尾　青宵

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

香川連句会

鎌田　孝義

連絡先763-0013丸亀市城東町1-3-26鎌田孝義会員20名

雅秀会

小川　邦昭

連絡先999-5201山形県最上郡鮭川村京塚3430小川邦昭(0233-55-2401)

風の香連句会

笹　貞子

連絡先996-0051新庄市松本348

全国連句グループ概況

①グループ名　②代表者氏名　③師系
④連絡先（住所・電話番号）⑤会員数

（五十音順）

亜　の　会

前田圭衛子
連絡先655-0004神戸市垂水区学が丘2-1-418-202前田圭衛子(078-786-1868)会員15名

あ あ の 会

市川　千年
師系・野村牛耳　連絡先180-0003武蔵野市吉祥寺南町4-21-25市川千年(0422-79-3048)

会 津 の 会（超結社）

磯　　直道
連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)

青葉連句会

八島美枝子
師系・宇田零雨　連絡先145-0061大田区石川町2-32-8八島美枝子(03-3728-0712)会員9名

茜 連 句 会

陶山　泰子
師系・品川鈴子　連絡先769-1602香川県三豊郡豊浜町姫浜1358-1陶山泰子(0785-52-5131)会員12名

茜（あこね）連句会

竹内　茂翁
連絡先516-0036伊勢市勢多町915-31富田方竹内茂翁(0596-24-7673)会員3名

紫　　陽

藤田　　明
連絡先514-0114津市一身田町285藤田　明(0592-32-6438)会員6名

あした連句会

宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先164-0012中野区本町2-34-4次山和子(03-3374-4808)会員50名

あした日比谷連句会

宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先225-0024横浜市青葉区市ヶ尾1154-2-808宮脇美智子(045-971-7313)会員15名

あしべ俳諧塾

片山多迦夫
師系・清水瓢左・吉岡梅游　連絡先666-0013川西市美園町1-3-406片山多迦夫

梓川連句会

金井　教子
師系・根津芦丈・宮坂静生　連絡先390-1700長野県南安曇郡梓川村杏金井教子(026378-3808)会員25名

天霧連句会

高森　秋義
師系・鈴木春山洞・渡邊陽行
連絡先764-0027香川県仲多度郡多度津町道福寺200-13高森秋義(0877-33-2475)

天の川連句会

本間　泰義
師系・三好龍肝・福田眞久　連絡先952-0206佐渡市畑野甲35-2本間泰義(0259-66-3606)会員10名

天の川連句会東京支部

大谷似智子
師系・三好龍肝・福田眞久　連絡先242-0001大和市下鶴間4266大谷似智子(046-274-3420)会員13名

天の川連句会新宿西塾

芹田　恵子
師系・三好龍肝・福田眞久　連絡先330-0015さいたま市見沼区蓮沼873-17芹田恵子(048-686-6549)会員10名

彩 連 句 会

児玉　俊子
師系・宇田零雨　連絡先330-0052さいたま市浦和区本太5-16-6児玉俊子(048-886-8820)会員10名

鮎可部連句会

久保　俊子
連絡先731-0202広島市安佐北区大林町315久保俊子(082-818-2719)

鮎倉橋島連句会

奥田恵以子
連絡先737-1314広島県安芸郡倉橋町鹿老渡奥田恵以子(0823-54-1296)

鮎須川連句会

藤本　幸子
連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町須川藤本幸子(0823-53-1255)

鮎連句同好会

高橋　昭三
連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)会員35名

あらくさ連句会

連絡先294-0006逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)会員限定

あるふあ会

高津明生子
連絡先241-0833横浜市旭区南本宿町72-14高津明生子

阿 吽 の 会

梅村　光明
連絡先770-0868徳島市福島1-10-16梅村光明(088-652-1989)会員6名

安津濃連句会

湯浅　重好
連絡先514-0823津市半田934-47湯浅重好(059-225-3094)会員3名

飯田連句会

吉池　保男
師系・東　明雅　連絡先395-0806飯田市鼎上山3181-1吉池保男(0265-23-1484)会員10名

全国連句グループ概況

年鑑担当

○編　集

〒108―0073
港区三田二―三―三四―九〇一
今村　苗
（電話・ＦＡＸ　〇三―三四五一―一八六一）

○購入申込・発送

〒157―0071
世田谷区千歳台四―二六―一―一〇五
小川　廣男
（電話　〇三―三四八二―〇二三五）

○会計・送金先

〒363―0028
桶川市下日出谷西二―六―四
福田太ろを
（電話・ＦＡＸ　〇四八―七八七―四四七七）
郵便振替　〇〇二三〇―二―四六二〇七九
加入者名　福田　太郎

○連句協会会員名簿担当

〒223―0052
横浜市港北区綱島東五―二三―四
和田　忠勝
（電話・ＦＡＸ　〇四五―五三一―七一七四）

▣編集後記▣

平成二十年度版連句年鑑をお届けいたします。たくさんの作品をお寄せ下さいました皆様に感謝申し上げます。

ところで編集作業中に気づいたことが幾つかございますので、以下に記します。参考にしていただければ幸いです。

○旧仮名使用と書いてある作品で新仮名の混ざった作品が幾つもありました。

○誤字脱字　送り仮名の間違いも随分ありました。

○短句が長句になっているもの。あるいは字足らず。

○訂正液で消したあとに作者名が書いてないもの、挙句の作者名が記入してないもの。

○作品の形式が抜けているもの。捌き名が無いもの。

○連絡責任者名、および電話・住所が書いてないもの。

お送りくださる前に今一度お確かめ下さい。

○今年の最高気温はさすがに四十度には届かなかったようですが、それでも北京オリンピックに湧いた、熱い夏でした。そして校正に関しては、視力の衰えを真実不便に思ったことでした。

○この平成二十年版には、一一八グループ・二〇九巻が掲載されております。そのうちの一五六巻は「歌仙」で、全体の約七五%でした。あとの二五%は「半歌仙」「短歌行」「百韻」など二一形式により巻かれております。新しく考案された形式もありました。

○編集においては常に浅学を痛感しております。ルビに助けられることもありますが、無用のルビの多いことも気になりました。また字足らずの付け句も多く見受けられました。提出前にもう一度ご確認ください。

○巻頭の評論・エッセイご執筆の永田英理、小池正博、近藤蕉肝先生に厚くお礼申し上げます。

（白根順子）

平成二十年九月二十日　印刷
平成二十年九月二十五日　発行
平成二十年版　連句年鑑

定価　二、五〇〇円

編集人代表　今村　苗
宮下方

発行所　〒206-0034 多摩市鶴牧二ノ二六ノ一ノ一二三
連句協会
電　話〇四二―三七四―七〇〇二

印刷所　〒114-0003 東京都北区豊島四ノ二ノ四
株式会社　朝陽会
電　話〇三―三九一三―五五二八
FAX〇三―三九一三―五五三〇